
欲望者

木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

欲望者

【Nコード】

N86840

【作者名】

木

【あらすじ】

森黒正人は学校で連日に渡り行われるいじめに苦しんでいた。ある日、そのいじめに耐えられなくなった森黒は住んでいるマンションから飛び降り自殺を計る。だがしかし、森黒は目を覚ました。傷一つない状態でマンション前の歩道に倒れていた。

「何で死ななかつたか、知りたくないかい？」

困惑する森黒の前に現れる謎の男。森黒は自分の身に何が起きたのかを知るため、男に導かれるまま欲望の世界へと足を踏み入れて行く。

twitterにて制作状況つぶやいております
<http://twitter.com/WOOTrad>

壁 ?

夜。七時三十七分。絶える事のない街の明かりで夜空が明るく照らされ、その輝きとは対照的な、落ち着いた暗闇に点々と街灯の光が揺れる住宅街の一角。その暗闇を切り裂くように、救急車のランプが辺りを赤く染め、耳障りなサイレンが鳴り響く。瞬く間に、闇夜に隠れていた建物達が姿を現し、血染めの巨人が如くそびえ立つ。その巨人達に怯えるように、救急車は金切り声を上げ続ける。そんな騒々しい光と音に釣られたのか、まるで街灯に群がる虫たちのように、どこからともなく、そろそろと野次馬が集まってくる。このマンションに、こんなにたくさんの方が住んでいるのか。見たことのある顔はほとんどいない。小学生から老人まで。母親の腕の中で、眠そうに目を擦っている赤ん坊までいる。

「何があつたの？」

「誰かが倒れてたんだって」

「どうして？」

「自殺みたい」

「飛び降りた所を見た人がいたらしい」

「なんでまた自殺なんて」

「かわいそうに」

「何かあつたんだろうか」

聞こえるはずのない奴らの会話が、目線や表情だけで伝わってくる。すぐ近くでは、救急車でやってきた隊員達が、僕を助けようと必死に作業をしているというのに、大してそんな気もないくせに、心配や同情、そんな当たり障りのない、どうでもいい会話ばかり。いかにも善人ぶっているが、本当の所は、何が起きて、どんな経緯でこんなことが起こったのかを知りたいだけなのだ。どんな小さな事も見落とさないようにと、キラキラ輝いた好奇の目が夜空の星よりも鮮やかな光を放ち、全ての音を聞き逃さぬようにと、限界まで

緊張して尖った耳が三日月のようだ。なんて気持ちの悪い夜空だろう。目を逸らしたくても、体が言うことを聞かないため、この奇妙な夜空が広がる暗闇を、ただただ見つめることしか出来ない。見世物小屋に入れられた珍獣になった気分だ。見ている側の奴らにしてみれば、良い退屈しのぎになっているのだろう。そして得た情報を元に、次の日の話のネタにするのだ。

「昨日うちの近所で事件があつてね！」

「え！？ なになに？」

「夜だつただけで、道に高校生が倒れててさ。しかも自殺らしいよ」

「それ知ってる！ この近くだつたんだ！」

「そうそう！ それでね……」

こんな会話で話に花が咲くはずだ。

所詮、野次馬は野次馬。僕のことを心から心配している人間なんていない。それに、こんな興味本位で集まってきた、どこの誰かもわからない奴らに心配して欲しいとも思わない。心配してもらふ必要はない。

僕は、死んでいないから。

世間一般で、「いじめ」という言葉がいつから普通に使われてきたのかは知らないけれど、僕にとって、それが日常の一部となつたのは、高校一年の中頃だつたと思う。それは異質なものを排除しようとする、人間の本能的な行動なのかもしれない。そして、それが集団の統一された意思になつた時、いじめが始まる。僕は学校で浮いていた。

昔はかなり真面目な人間だつた。自分の出来る事を、出来る範囲で一生懸命こなししてきたし、言われた事はそれなりにやってきた。ただ、それが悪かつたのか、親と教師から自分のレベルよりずっと高い高校を目指すように言われた。

可能性が低いだけで不可能ではない。

努力次第で可能性はいくらでも上がる。

君なら出来る。

お前なら出来る。

豚もおだてりや木に登ると言うが、僕は木どころか、断崖絶壁に登ることになった。でも、出来ると思っていたし、それが正しい道だと信じていた。何の疑いもなかった。今思えば、あの時の自分は真面目だったのではなく、単にしっかりとした意思や考えがなかったから、示された道をそのまま歩んでいく事で、安心感を得ようとしていたのだと思う。あんなに勉強をしたのは後にも先にもそれきりだ。一日の生活の中で、何をしても、どんな時でも、常に勉強が後を引く。勉強をしていないと不安になるぐらいに。それでもやはり勉強が嫌になることがあった。諦めようと何度も思った。でも、周囲の人間が抱く僕への期待が、予想以上に膨らんでいて、誰にも気持ち打ち明けることが出来ず、気付けば後戻りが出来ない時期に差し掛かっていた。もう道は一つしか残されていない。必死にもがいて、必死に努力して、必死に我慢して。

結果、ギリギリ合格。運が良かった。この出来事で僕は一生分の運を使ってしまったのではないかと、今でも思っている。それでも合格は合格。素直に嬉しかった。皆も喜んでくれていたが、そんなのはどうでもよかった。褒められるのはいい気分だったけれど、それよりも達成感と開放感で、何かが一気に抜け落ち、体全体が軽く温かいものに包まれているような気分だった。あの苦しかった時間が報われたのだと。

しかし、喜びも束の間、実際に高校生活が始まると、色々と歪みが出てきた。ギリギリとは言え、入学出来たのだから、授業にもついて行けると安心していただけだが、一秒一秒があつと言う間に過ぎてゆくように、何を学んでいるのかすら理解できないうちに授業が進んで行く。基本は予習済みという前提で、全てにおいて広く深く掘り下げて行く。結局、圧倒的な学力の違いについて行けず、中間

で既に落ちるところまで落ちてしまった。そんな僕を見て、入学して間もない頃は、お互いにぎこちなさは残るものの、親睦を深めようと積極的にコミュニケーションを取っていたクラスメイト達も、一人、また一人と話をしてくれなくなっていた。僕は、どうでもいい存在、むしろ邪魔な存在としてこの学校に取り残されていたのだった。

レベル圏外の中学から這い上がってきた優秀生。不可能を可能にした努力家。入学前からそんな二つ名で呼ばれていた有名人の正体は、学校のレベルには程遠い、奇跡の凡人だったのだ。頭の出来が良く、成績の優秀な人間からしてみれば、さぞかし不快な思いだっただろう。僕がこの学校で成績をつけられればつけられるほど、テストで最低点を叩き出せば叩き出すほど、学校のレベルを落として行くことになるのだ。僕に降りかかる嘲笑や罵倒は必然だった。

僕が学校でいじめを受けている事を両親は知らない。僕が高校に入学してからは、二人とも朝早くに仕事へ出かけ、夜遅くに帰ってくる。高い授業料を払うために、毎日残業をして働いている。だから、お互いにほとんど顔を合わせることがないし、話をする時間もない。もしその時間があったとしても、あの二人は真剣に話を聞いてくれないだろうし、僕自身、話そうとも思わない。自分のことで精一杯のあの二人は、僕の心配などしている余裕はないだろう。鬱陶しそうに僕の話の話を聞く二人の顔が目に見えかぶ。

そんな二人だが、僕が救急車で運ばれたという知らせを受けた時には、血相を変えて病院にすっ飛んできた。落ち着かない様子で医者や警察の話の聞き、事件の概要に驚き、自分の息子が何故こんな事になったのかと動揺し、僕の体を心配する素振りも見せていた。僕はそんな姿を見ても、心の中では「余計なことをして。面倒くさい奴だ」と感じているのだろうと思っていた。それが僕の親だ。そんな親なのだ。

こんな状況が嫌で、辛くて、悲しくて、耐えられなくなったから、昨日住んでいるマンションの屋上から飛び降りた。全てを終わらせ

るために。全てから開放されるために。

でも死ねなかった。

マンションは七階建てで、高さは十分。下はクッションになるような物は何一つ無い、灰色のコンクリートが敷き詰められた歩道。例え、一命を取り留めたとしても、確実に大怪我だ。なのに、僕はかすり傷一つ無く、気絶して地面に横たわっていた所を発見されたそう。第一発見者は同じマンションに住む、嗜好きのおばさんだった。倒れている僕を見て、死んでいるものだど勘違いし、大慌てで救急車と警察に連絡を入れ、マンション中の人間を呼び出したそう。 よりにもよって、あの人に発見されるとは。嘘か本当か、僕がマンションの屋上から飛び降りた場面を見たときまで言っているそう。他にも余計なことを言っていそうな気がする。

病院に到着してすぐに、警察から何故こんなことが起こったのか、詳しい状況を聞かれた。僕は「星を眺めようと屋上に行ったら、足を踏み外してしまった」と嘘をついた。かなり無理のある言い訳だったが、すっかり冷静さを欠いていたその時の僕には、それが精一杯だった。それに、真相を話したところで何も解決しないだろうし、もっと面倒なことになる気がしたから。この場は適当に流して、また機会を窺った方が、現実的だと思った。その後、幾つか質問はされたが、特に突っ込んだ内容のものはなく、警察は意外とすんなり帰っていった。

そうして僕は、検査で一日入院したものの、すぐに退院し、いつもの日常に舞い戻ってきた。僕の大嫌いな日常に。

カーテンの隙間から差し込む朝日が、住み慣れた部屋を満たす。寝ぼけ眼で見るその光景が、いつもと変わらない、一日の始まりを告げていた。

憂鬱な気分で部屋を出ると、当たり前のように両親はおらず、リビングには静寂が広がっていた。あの二人が僕に付き添っていたのは病院に運び込まれた日だけで、検査の日も、退院した日も、今日も、仕事に出かけている。そんな予想通りの状況に、少し安心して自分のいた。もう親子という関係も消えてしまっているのかもしれない。

自分で用意したトーストを食べ終え、学校へ行くため制服に着替える。制服に袖を通すたび、気分が悪くなっていくのも毎度のことだ。決して慣れることのない感覚。不安と不快が胸の奥からじわじわと体中を侵食してゆく。学校へ行くことを強制する人間がいないのだから、そこまでして行かなくても良いのかもしれないが、その所為で、あの二人に学校から連絡が行ってしまったら、また面倒なことになる。学校へは行くしかないのだ。

家を出て玄関の鍵を掛けていると、廊下の一番奥にあるエレベーターから人が降りてきた。僕の第一発見者、噂好きの隣人だった。

「あら！ もう退院したの！？ 大丈夫！？」

この狭い廊下で歩くゴシップ誌に見つかってしまったては、逃れる術がない。駆け寄ってきたおばさんの勢いは、まるで怒り狂った猪のようで、僕が一步引かなければ、もう少しで激突するところだった。

「それにしても、大変なことにならなくて良かったわねえ。おばさん、もう死んじゃったのかと思って焦っちゃったわよ。恥ずかしいわ。ご近所中に叫び声上げちゃったんだもの。杉本さん家の奥さんなんか震えが止まらなくなっちゃってね。あの人以外に繊細なのね。こういう場面に遭遇したことないのかしら？ でも発見が早くてなによりね。救急隊の人からも迅速な対応に感謝しますって言われちゃったわ。しかもあの後、刑事さん達からも色々質問されて大変だったのよ。そんなに詳しい状況を知ってる訳じゃないでしょ？ 答えられない事がいっぱいあって困っちゃってねえ。あ、全然気にしなくていいのよ。あなたの所為じゃないし、おばさんは平気だから

まあ、あなたが無事だったことが一番なんだけどね。ご両親は大丈夫？ 今日も朝早くからお仕事なんですよ？ 若いのに大変ねえ。家の夫にも見習って欲しいわ。残業をして帰ってくる訳でもないのに偉そうにして、休みの日は一日中ごろごろしてるんだから。本当に爪の垢でも煎じて飲ませてやって欲しいもんだわ」

おばさんは僕の返答など求めていないようで、一人ですつと喋り続けている。人間の形をした生き物であれば、話し相手は誰でもいいみたいだ。

熱が入り始め、止まる気配など微塵も感じさせない話を聞き流しながら、自分の腕時計を盗み見るように確認すると、バスの時間が迫っていた。そろそろ、どうにかしないと遅れてしまう。

「あら！ ごめんなさいね、一人で喋っちゃって。いやねえ、私っでいつもこうなのよ。学校に遅れちゃうわよね。気をつけていってらっしゃい。もう屋上にいったら駄目よ。管理人さんが刑事さんに怒られたみたいだから。まあ、ちゃんとしてないあの人が悪いと言えば悪いんだけどね。全く、しっかりして欲しいものだわ。この間なんかも……」

話が脱線してさらに広がりそうだ。これ以上付き合っていたら、本当に遅刻してしまう。

軽く会釈をして、纏わり着く言葉達を振り払うようにエレベーターに駆け込んだ。僕を呼び止める声は聞こえなかったから、もしかしたら僕がいなくなったのに気付かず、しばらく誰もいない廊下で独り言を言っているのかもしれない。そんなにお喋りがしたいのなら、僕のような高校生を相手にするのではなく、他のご近所さんとしてほしいものだ。まあ、この後実際にそうなるんだろうけど。

マンションを出てバス停を目指し歩いている途中、三日前に自分が倒れていた場所が目に入った。立入禁止を示す黄色いテープが張り巡らされ、その周りを取り囲むように野次馬が群がっていた場所も、警察が現場検証をした後の、白いチョークがうつすら残っているくらいで、今では普通の歩道に姿を戻している。あの時の騒ぎが

嘘のような静けさ。しかし、近づいてみると、少し窪んだコンクリートが、あの夜の出来事を克明に記録していた。

何故だろう。あの夜意識を取り戻してから、今日までずっと、死ねなかつた原因を考え続けている。どう考えても、死に至る高さから飛び降りた。でも、現実にはコンクリートが窪んだだけで、血の一滴すら残されていなかった。かすり傷一つなかったのだから、当たり前なのだけれど、普通に考えると、それは当たり前ではないことだ。

僕同様、他の人間も揃って首を傾げていた。医者は「奇跡だとしても言いようがない」と匙を投げ、現場検証を行った警察も「とにかく怪我がなくてなによりですね」と、何もわかっていない状況ははぐらかすように、話を切り上げていた。ただ、確実に何かがあった。自分自身でもわからない何かが。

たぶん、いくら考えても答えはでないのだろう。そんなことは十分にわかっていたけれど、移動時間や休み時間、帰宅してから寝るまでの間、常に一人きりの僕に与えられる、有り余るほどの時間が思考を止めさせてはくれなかった。ただ、考えに没頭していた分、いつもより時間が進むのが早く感じられたから、それはそれで良かったのかもしれない。

そうして今日も時間は流れ、気づけば救いのチャイムが学校中に鳴り響いていた。

帰りのホームルームが終わり、遊びに街へ向かう者、部活動で部室へ向かう者、教室に残ってお喋りを始める者、各生徒が自由な時間を過ごす中、一刻も早くこの空間から抜け出したい僕は、教科書を鞆に詰め込み、一直線に教室の出口を目指した。

「おい！ 森黒！」

聞いただけで目眩がする、大嫌いな声が耳に侵入してくる。

「そんな急いで帰ることないだろ。久しぶりに来たんだからちよっ

と付き合えよ。休んでた分の練習しないと体が鈍るぜ」

ゆっくりと歩み寄ってきたそいつは、僕の肩に手を回し、押し掛かりながら話しかけてくる。その声が鼓膜を突くだけで、不快感が全身を包み、同時にこれからやってくる時間を乗り切るため、体全体の感覚が鈍って行くのがわかる。そんな僕の雰囲気を感じ取ったのか、そいつはニヤリと笑い、肩に回していた手に力を込めて、体全体を押さえつけるように僕を引きずって行く。目的地はいつもの場所だ。時々頭に当たる「山下」と書かれたネームプレートがさらに不快感を増加させた。

この学校には生徒の溜まり場所がある。たぶん、どこの学校にもあるはずの、教師に見つからずに何かを行うことが出来る場所だ。この学校では、校舎東側の一番端、敷地を囲うコンクリートの塀と校舎が最も接近し狭くなっている場所。教師に見つかった場合にすぐ逃げ出せるように、グラウンドへの退路が確保できる、一番端の焼却炉付近がそうだ。当然、そこに溜まる生徒は、そんな生徒ばかりで、山下もこの場所を愛用している。今日も引きずられてきたのはこの場所だった。ここに集まる奴らが何をやっているのか、全て知っている訳じゃないけれど、地面に落ちているタバコの吸殻や、投げ捨てられているジュースの缶やペットボトルを見ると大体想像がつく。それに、高校生が学校で、教師に隠れてやることなんてこんなものだろう。一応、教師達もこの場所に注意を払っているみたいだが、文字通り注意を払うだけ、何の対策も講じていないのが現状だ。基本的にやる気がないのだと思う。最近は生徒の親も過激な連中が多いから、下手に取り締まるより、見て見ぬふりを貫いた方が、学校側としても都合がいいのかもしれない。

そんなこんなで、この場所は無法地帯となっていて、山下にとっては好条件の場所なのだ。

元空手部で、他の生徒達からも少し怖がられている山下は、この場所をスパリングで汗を流す場所に使っている。サンドバッグは僕

だ。この場所を使う時間も、毎回放課後すぐと決まっただけで、クラスメイトであれば、山下が僕と一緒に教室を出て行くだけで、これからどこで、何が行われているのか、すぐに理解できる。他のクラスの子でも知っている奴がいるくらいだ。だから、よっぽどの間抜けか、事情を知らない奴以外は、誰もこの時間、この場所に近づくことはない。校内で知らないのは教師だけ。のはずだが、もしかしたらこの事さえ、教師達は見ても見ぬふりをしているのかもしれない。

「急に休むもんだから心配したよっ！」

到着するとすぐに、右の拳が下腹部目掛けて飛んできた。久しぶりで油断していた僕はその拳を防ぐことが出来ず、山下の憎たらしい右手の感触が、鋭く腹に伝わってくる。

「昨日、一昨日と俺がどれだけ暇だった事か。やっぱりお前がいないとダメだわ！」

皮肉を言いながら次々と殴りかかってくる山下は、二日間のうっぷんを一気に晴らす勢いで、全く防御が間に合わず、何度も腹に痛みが走る。リズムを取るように、連続して当て、間隔を空けてから再び拳が飛んでくる。余程楽しいのか、徐々にスピードが上がり、山下の表情も晴れ晴れとしてきている。そりゃ楽しいだろう。普通のサンドバッグは、一々攻撃に反応して呻き声を上げたり、よろめいたりはしないのだから。何度も何度も、激しく押し寄せる攻撃をひたすらに耐え続ける。これが山下の言う、練習だ。

「なんだ、もう始めてたのかよ。俺らがくるまで少し我慢しろよな」呼びかけられて集中が途切れたのか、山下は攻撃をやめて一息つく。なんとも清々しい顔をしている山下は、傍から見るとスポーツをしている爽やか高校生に見えるんだろう。ただ無抵抗の人間をいたぶって楽しんでるだけだというのに。

「お前らが遅いからだろ。何してたんだよ？」

「菊池がモタモタしてっからだよ」

「なんだよ！ 浅野だってクラスの子に捕まってグズグズしてた

「じゃねえか！」

「うるせえな。あいつ彼女面してしつこいんだ。しょうがねえだろ」
山下とつるんでいる浅野と菊池だ。つるんでいると言うよりは、強いものに従うことで自分も強くなったと勘違いをしている、役立たずの子分といった感じだ。

「それより山下！ あれ持ってきたぜ！」

「マジで！？ 本当に持ってきたのかよ！」

不満げな顔をしていた菊池が、突然思い出したように鞆を漁りだすと、山下も浅野も、子供がプレゼントを貰うときのような、輝いた眼差しで菊池の鞆に集中する。菊池が鞆から取り出したのは、真っ黒な革で作られた手袋だった。

「すげえ、本当に持ってたんだな。お前の？」

「違つよ、うちの親父の。なんかそつち系の物集めるの趣味みたいだよ」

「うわ、菊池の親父危ねえ」

山下は笑いながらその手袋を受け取ると、そのまま両手にはめる。良く見ると、指の第三関節部分に当たる所と手の甲の部分が区切られていて、少し盛り上がっているように見える。

「壊したら親父マジギレするから、気をつけるよ」

「わかつてるよ」

手袋を両手にはめ終えて、何度か空突きをした後、山下は勝ち誇った顔で僕の正面に仁王立ちした。

「それじゃあ森黒。これから特別練習を始める。今、俺が着けたのはちょっと変わったグローブだ。ほら、よく漫画とかで不良が着けてるやつあるだろ？ 拳を握り締めると、中に入ってる砂鉄が固まって打撃力がアップするやつ。あれを菊池が持つて言うから、どんな威力なのか試そうつてことになつてさ。お前の練習にもなつて一石二鳥つてことで、持ってきてもらったんだよ。おいおい、そんな不安そうな顔するなよ。始めは優しくしてやるから安心しろつて。んじゃ……」

僕に防御の時間を与えるように、ゆつくりと時間をかけて山下が構える。何が練習だ。ただそのグローブを試してみただけじゃないか。山下にとって僕はサンドバッグでありながら、実験用のモルモットでもあるみたいだ。腹が立ったが、この後に繰り出される山下の拳が、どれだけ威力を持つているか、初めて受けることではない。体が自然と防御の姿勢を取る。山下がいつも狙ってくるのは下腹部だ。今回も確実にそこを狙ってくるだろう。両腕を隙間なく揃え、盾のように下腹部前に構える。

山下は僕が防御の体勢を整え終えたことを確認すると、その構えた両腕目掛けて、迷うことなく、一直線に打ち込んできた。狙い澄ました一発が腕に当たり、その勢いに押され、揃えた両腕に隙間ができ、山下の拳を腕で挟むような形になってしまった。しかし、山下の拳の勢いは衰えることなく、そのまま腕の隙間を貫いて、僕の下腹部に侵入してくる。そのまま、下腹部で山下の拳を受けることになったが、それよりも山下の拳を受けた腕に激痛が走る。一瞬痺れたかと思うと、今までにない鈍くて重い痛みが腕全体を支配する。痛い。痛すぎる。衝撃的な痛みでその場にうずくまる。

「すげえ！ 本気じゃないのにかんりの手応えあったぞ！」

「うわ、痛そう。菊池の親父さんこんなの集めて何したいんだよ」

「これ、コンクリートとか壊せるんじゃないの？ もう親父に逆らえねえ」

痛みに耐えている僕を気にする様子もなく、三人はグローブの威力に興奮し、驚いている。

「よし、次は直接腹にいつてみようか」

痛みで立ち上がれずにいる僕を、菊池と浅野が無理矢理ひっぱり上げ、そのまま両腕を封じる。二人に押さえつけられた僕は、完全に防御が出来ない姿勢になった。押さえつけた上で、腹にもう一度同じ事をするつもりだ。先ほどの痛みから考えて、それが直接腹にくるとなると、絶望的な苦痛が襲ってくるのは間違いない。逃げたい。嫌だ。いつもは諦めて心の内にしまいこんでいる感情が、今回

ばかりは抑えることが出来ない。菊池と浅野を振り払おうと、無我夢中で体を左右に揺さぶった。

「なんだよ、珍しく抵抗するな。一回でやめてやるからそんなに暴れんなよ」

ゆつくりと構えに入る山下。なんとか逃れようともがいても菊池と浅野が力いっぱい押さえてくる。それでも抜け出そうともがく。

嫌だ！ 嫌だ！

必死に抵抗をする僕を、構えながらじっと見ていた山下が、突然構えを解く。

「……お前、なんで今頃そんなに抵抗するんだよ。死にたいんじゃないのか？」

山下の思いがけない一言。一瞬にして体が固まった。

「聞いたぜ。お前マンションから飛び降り自殺しようとして救急車で運ばれたんだろ？ どうせ途中で怖くなって、ぶっ倒れたんだろうけど。それでも死のうとしたんだろ？」

今日、周りの生徒から特別な視線を感じなかった所為か、僕が飛び降り自殺をしたということは学校で広まっていなと思うっていた。救急車で運ばれて入院したらしいけど、興味が無いからどうでもいい。その程度の噂話になっっているんだらうと安心していた。だが山下は知っている。なら、間違いなく菊池と浅野も知っているだらう。この様子だと、既に全校生徒に広まっているのかもしれない。さすが、この学校の生徒は情報が早い。

「勝手に死なれると困るんだよな。俺等が疑われるじゃん。俺達が暴力を振るったのが原因なんじゃないのか。って。おかしいだろ？ お前を強くするために、防御の練習をしただけなのに。なんでそれが暴力になるんだよ。親切でやってんだから、むしろ最高の友達じゃないか？ まあ、別に死にたいなら死んでもいいけどな」

三人がゲラゲラと笑い出す。

そうだ、僕は死のうとしていた。死にたかった。なのに何故こんなところで、痛いのが嫌だからと言って抵抗しているんだ。何故必

死にもがいているんだ。そう思うと全身から力が抜けた。もうどうでもいい。いつものように、早くこの時間が過ぎ去るのを待っていればいい。

抵抗をやめた僕を見て満足そうな山下は、再度構え、今度こそ下腹部目掛けて勢い良く拳を突き出した。

「おらっ！」

山下が僕の腹を捉えようとした瞬間、どこかで何かが強く光る。雷が光ったような感覚だったが、空は晴れている。山下は動きを止め、菊池と浅野も、僕の両腕を放して辺りを見回している。

「シャッターチャンス！」

声が出た方を見ると、背後にあった塀の上に、一人の男がインスタントカメラを持って座っていた。学校の敷地をぐるっと囲み、外から教室が見えないように、高く作られた塀。ジャンプしても届きそうのないその塀に、男は悠々と座り込んでこちらを眺めていた。

「おっと、邪魔しちゃったかな？ ごめんごめん。さあ、続きをどうぞ。」

男は見たことのないやつだった。カフェでゆったりとコーヒーを飲んでいそうな、ハンチング帽をかぶった、眼鏡がお洒落な男。確実にこの学校の人間ではない。

「今のフラッシュはお前か！？ 何してんだよ！？」

山下が大慌てで叫ぶ。かなり動揺していたのか、声が裏返って、少し間の抜けた声だった。

「何って写真を撮ってるんだよ。僕の趣味なんでね。今回のテーマは思春期の過ち、かな？」

男は人懐っこい笑顔で穏やかに話す。全く嫌味のない話し方が、逆に山下を馬鹿にしているようにも見える。山下もそこに苛立ちを覚えたようで、さらに声を張り上げる。

「そのカメラよこせよ！」

「なに怒ってるの？ このカメラに都合の悪いものでも写ってるのかな？」

「いいから、さっさとよこせ！」

校舎を隔てた向こう側のグラウンドにまで響きそうな、普段では考えられない大声で山下が叫ぶと、男の顔から笑顔が消え、真面目な表情に移り変わっていた。その移り変わりの一瞬、ほんの一瞬ではあったが、男の表情から凍りつくように冷たくて、恐ろしいものを感じた気がした。

「全く、うるさいな。そんなに大声出さなくても、この距離ならちやんと聞こえるよ。ん？ ああ、君が騒ぐから向こうから誰か走ってくるじゃないか。あの格好はこの学校の先生かな？」

塀の上に立ち上がった男は遠くを見ながら、グラウンドの方角を指差した。やはり山下の声がグラウンドに届いていたようで、気になった教師がこちらに向かってきているらしい。グラウンドを使っている部活の顧問だろうか。

「くそっ！ 行くぞ！」

山下は男を睨み付けながら、逃げるようにその場を立ち去った。菊池と浅野も、それに続いて走り去る。その後姿が校舎の角を曲がり、見えなくなった所で振り返ってみると、塀の上に男の姿はなかった。

「おい。何かあったのかー？」

校舎の向こうから教師の声が聞こえてきた。このままじゃ僕も色々と疑いをかけられてしまう。急いで落ちている鞆を拾い、あの三人と同じように、早足でこの場所から離れた。

下校時間になってからしばらく経つ校門前は、帰宅する生徒の数も落ち着き、人影もまばらで、グラウンドで練習に励む生徒の声や、吹奏楽部の音が響く、少し寂しい雰囲気的空間になっていた。ここを通り過ぎれば解放される。今日も色々あったけれど、とりあえずなんとかあった。安堵感から少し涙が出そうになった。山下に殴られた部分もまだ痛む。最後にグローブで殴られた腕には痣が出来ていて、さすると鈍い痛みが広がる。

「そりゃ、あんな防御じゃダメージを受けて当然だよ。素手での殴り合いなら、攻撃を受けるんじゃないかと、流すようにしないと」

急に背後から聞き慣れない声が出て振り向くと、さっきまで扉の上に腰を下ろし、その後姿を消していた男が、僕の腕を覗き込むようにしながらついてきていた。至近距離なのに、全く気付かなかった。

「森黒正人君、だよな？」

男はまた、人懐っこい笑顔で話しかけてくる。僕の名前を知っているから知り合いかとも思ったが、記憶の中にこんな男はいない。たまに校門付近で、塾や家庭教師の勧誘をしている人がいるが、それともまた違う気がする。関わってはいけない。理由はわからないが、そう思った。無視して歩き出そうとすると、男は慌てて追いかけてくる。

「ちょ、ちよつと待ってよ。少し話をするぐらい良いじゃない。僕は怪しい者じゃあないし、別に取って食おうってわけじゃないからさ」

無視無視。自分で怪しくないと言う奴のほとんどは、百パーセント怪しい奴だ。それでなくても、さっき扉の上でいきなり写真を撮り、音もなく消え失せていたんだから、尚更だ。バスに乗ってしまえば追ってこないだろう。スクールバスはもう終わっているから、校門前のバス停ではなく、そこから少し歩いた所の駅を経由するバス停に行くしかない。走った方がいいかもしれない。もうすぐ校門を抜ける。そこで一気に走り出そう。

「何で死ななかつたか、知りたくないかい？」

校門を抜け、駆け出そうと足に力を入れた所で、男の声に反応してしまい立ち止まる。見ると男は少し嫌味な笑顔を浮かべていた。

「ずっと考えてたんだろ？ あの時、飛び降りたのに死ななかつた理由」

壁？

「森黒正人、十七歳。私立幡ノ橋高等学校二年五組、出席番号二十番。好きな食べ物は何バーグ。嫌いな食べ物はグリーンピース。性格は温厚で、努力家。誰にでも分け隔てなく接し、優しさと責任感の強さを併せ持つ。現在はいじめの影響から覇気がなく常に暗い。出身中学の学力レベルは低く、幡ノ橋高校への進学は不可能と言われていたが、猛勉強の末、見事合格。しかし、学校にうまく馴染めず、いじめの影響もあって、三日前にマンションの屋上から飛び降りる。即死と思われたが、奇跡の生還を遂げる」

学校で出会った、僕の死ななかつた理由を知っていると云う謎の男。ハンチング帽に眼鏡、ジーンズに紺のジャケットを羽織った、見た目はオシャレなインテリ風。そんな得体の知れない男は、ポケットから折りたたまれた紙を取り出すと、丁寧に広げてすらすると僕のプロフィールらしきものを読み上げ始めた。どこで入手した情報なのか、簡単ではあるが、間違いなく僕の中学からの経歴だった。やっぱり、ついて来たのは失敗だったかもしれない。どう考えても怪しい。

「ん？ どうしたんだい？ ああ、そうか。僕もグリーンピースは嫌いだよ。あの噛んだ時の食感が嫌だよね」

男は歩くペースを少し遅くしてゆく僕に気付き、何を勘違いしたのか的外れなことを言い始める。そんな事は聞いていないし、聞きたいのはそこじゃない。やっぱり帰ろう。このままじゃどこに連れて行かれるのかわからない。変な事に巻き込まれるのはごめんだ。

「冗談だよ。そんな怖い顔しないで。まずは自己紹介からすべきだね。僕は　　そうだな。皆からはブローカーって呼ばれてるから、君もそう呼んでくれて構わないよ。まあ、ペンネームみたいなものだよ。いや、今の子はペンネームって使わないか。芸名みたいなも

のって方がわかりやすいかな？ まあ、大体そんな感じと想ってくれればそれでいいよ。職業は情報を売ってお金をもらってる、情報屋ってやつかな」

男はまた、人懐っこい笑顔で話し始める。

ブローカー。

情報屋。

自ら「怪しい奴です」と言っているようにしか聞こえない。一体どこまでが嘘でどこまでが本当なのか。情報屋を自分の職業とはつきり言い切る人間など、漫画の中しか見たことがない。さらに名前がブローカー。ふざけているにしても、少しやり過ぎではないだろうか。

正体不明。目的不明。行き先も不明。

「ちゃんとした職業と胸を張って言えるものじゃあないけど、これが意外と儲かるんだよ。知ってるかい？ 二十一世紀の社会は情報化社会とか言われてるけど、実際はその情報が溢れ過ぎていて、目的のものに辿り着けない人が大勢いるんだよ。人間の方が技術に追いついていないのさ。そんな人達の為に、より有益で、より確実性のある情報を探し出して提供するの、僕のビジネスさ。呼称に関しては色々考えてみたんだけど、やっぱり情報屋が一番しっくりくるんだよね。それに、この方がなんかカッコイイだろ？」

男は歩きながら楽しそうに話す。話をしてくる分には一向に構わないが、少し声大きい気がする。聞いているこっちが恥ずかしくなるような内容なのに、そんなことを気にすることもなく、近くを歩く人達にも聞こえるような音量で話し続ける。男を不思議そうに眺めながら通り過ぎてゆく人が後を立たない。

「ずっと考えてたんだろ？ あの時、飛び降りたのに死ななかった理由。僕についてきたら教えてあげるよ。どうする？」

あの時、男が言った言葉に乗せられ、結局ついて来てしまった。

学校を出て街まで出てきたが、男は話を続けながらも歩みを止めることなく、そのまま街の中心部を通り抜け、今は街外れの道を歩き続けている。建設途中のビルが並ぶ街の端を越えると、古びた家屋が密集する住宅街が続く。その隙間を埋めるように空き地や入り組んだ汚い路地が張り巡らされ、迷路のようになっていた。男はその迷路を迷うことなく、軽快な足取りで突き進む。僕の横を併走しているはずなのに、何故か男に引つ張り回されるような感覚で、はぐれないようについて行くのがやっとだった。

迷路の住宅街を抜けると、今度は寂れた商店街に出た。薄汚れた赤と白のアーチが目を引く。ルナル通りと書かれている錆び付いた看板をくぐり、本通りに入ると、そこには世界からこの場所だけすっぽりとくり抜かれたような、薄暗い一本道が待ち構えていた。両脇に並ぶ店舗はどこもシャッターを閉めていて、廃墟の一步手前といった感じだ。小奇麗に整った街の中心部からは想像できない、閑散とした景色が広がっている。もちろん、この商店街を歩いている人などいる訳もなく、猫が一匹横切ったのを見たただけだ。決して一人で歩きたいとは思わない、陰気で不気味なゴーストタウンを、男は相変わらず堂々と突き進んで行く。後ろから見る周りの風景と男の姿は、あまりにも不釣り合いで馴染まない。この男がここを歩くこと自体が、大きな間違いであるような感覚に陥ってしまう。それでも男は、まるで自分のために作られた道だと言わんばかりに、奥へ奥へと歩き続ける。このままこの商店街も通り過ぎるのだろうか。本当にどこまで行くのだろうか。

「はい、ご苦労様。さあさあ、中にどうぞ」

商店街の一番端にある建物の前で立ち止まった男は、その店の入り口横にある、地下へと続く階段を下りていく。二人の人間がギリギリすれ違ふことができる、細くて急な階段。鈍い光の蛍光灯が二、三個灯っているだけで、ゴミやホコリが彼方此方に溜まっている。足元に気を付けながら階段を下りると。重々しく、分厚い、両開きの扉が設置されていた。見た目通り、かなりの重量がある扉を両手

で引き開けると、段差の低いステージがある、開けた空間が僕を迎え入れた。

「そこらへんにある椅子に座ってよ。今、飲み物持って来るから」
男は言うと、奥の部屋に入って行った。辺りを見回し、乱雑に置かれた丸椅子の一つに腰掛けると、ホコリが宙を舞う。男が入っていった奥の部屋以外は何年も使われていないようで、どこもかしこもホコリだらけ。入り口の扉を開けて正面に見えたステージを囲むように、テーブルや椅子がいくつも配置され、奥の部屋へと続く扉の横にはバーカウンターがある。そのバーカウンターの背後には、壁一面に木製の棚が設置され、本来であれば色取り取りの酒瓶が並ぶはずの場所に、ホコリと紙くずだけが並んでいる。天井には、様々な形をした照明がいくつもぶら下がっていて、中央にはミラーボールまである。ただ実際についているのは小さなスポットライトだけなので、ここも薄暗い。

「ここ、元々はライブハウスなんだ。商店街の衰退と共に潰れたみたいだけど、使いまわしの難しい内装だから、ずっと買い手がつかなくて完全に放置状態さ。まあ、商店街自体が死んでしまっているし、この時代にこんな寂れた立地でライブハウスをやるうなんて物好きも、さすがにいないみたいだね。ただその条件が僕にとってはドストライク。予想通りで理想通り。隠れ家的で冒険心をくすぐられるだろ？」

男が右手にミネラルウォーターとジュースのペットボトル、左腕にノートパソコンを抱えながら、奥の部屋から戻って来た。

「はい、オレンジの百パーセント」

僕の好きなオレンジジュースだ。しかも百パーセント。果汁の低いオレンジジュースは添加物の味が気になるから、飲むなら絶対に百パーセントと決めている。でもこの男に、そんな個人的で、他人からしたら驚くほどにどうでもいい、僕のこだわりを伝えた記憶はない。

男はミネラルウォーターを一口飲むと、椅子と小さな丸テーブル

を手續り寄せて、僕と向き合うようにして、目の前に座る。

「改めまして、ようこそ森黒正人君！ 歓迎するよ。僕、堅苦しいの苦手だから、お互いフランクな感じでいこうね。僕の事は、ブローカーって呼び捨てで全然構わないからさ。さて、じゃあ本題に入るうか。君が死ななかつた理由、その原因だね。面倒くさい証拠の提示や説明なんてのは無しにして、まず結論から言うと、君自身が持つ特殊な力、SF映画にでも出てきそうな不思議な力が、君を守つたのさ。君の体を包むようにある力が発生した。だから怪我がなかつたのに、落ちた場所のコンクリートは窪んでいたのさ。簡単だろ？」

「……」

「信じられないって顔だね。まあ、信じる信じないは君の勝手だ。僕はただ情報を提供するだけだからね」

そう簡単に信じられる訳がない。そんな力を持つていないことは、自分自身が良くわかっている。僕が聞きたいのはもつと現実的な話だ。

「正直、僕も実際にその現場を見た訳じゃないし、確証はないよ。でも、まとめた情報と現場の状況から考えるに、それしかないんだよね。それに臭うんだよ、君からも。欲望者の臭いが」

「……ヨクボウ……シャ……？」

「そう。欲望に者と書いて、欲望者。なんだ、普通に喋れるんじゃない」

無意識の内に言葉を発していた。欲望者。聞いたことのない言葉だ。

「僕が勝手にそう呼んでるだけなんだけどね。己の欲望が、何らかの特殊な力となって現れる人間、欲望者。ちなみに僕もそうだよ」
自分が欲望者ということが当然で、むしろ欲望者という存在自体が当たり前であり、知らない僕の方が異常なんじゃないかと思えるような、そんな口ぶりだった。

「僕が自分の力に気づいたのは、三年ぐらい前だったかな。僕も全

うな社会人として働いていた時期があつてね。そんなある日に、なんとなくいつもと違う感覚に襲われたんだ。それはもう、会社に向かう電車の中から始まっていた。なんの前触れもなく、なんの原因もなく。ただただ、変な違和感だけが頭にこびり付いて離れない。集中すれば人の話し声が良く聞こえるし、遠くの物でも良く見える。こんなことは今までになかった。でもこれは勘違いかもしれない。本当はこれが普通で、疲れの所為で神経質になっていただけなのかもしれない。あの頃いた会社は年中忙しくてね。だから、気になつて病院で検査してもらつたんだ。僕としては、体の方に異常はないので、ストレスや過労が原因の幻覚症状か何かでしょう。つて回答を想像してただけで、結果は視力と聴力の数値が倍ぐらいに跳ね上がっていたんだ。医者に再検査を薦められたよ。測定ミスの可能性があるからつてさ。でも、僕はその時点で確証があつたんだ。出所不明の、言葉では表現できない確固たる自信が。絶対にこれは何かある。どうせ何度検査しても、病院じゃ何もわからないと思つたから、病院での再検査を断つて、自分で調べることにしたんだ。視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚。所謂、五感と呼ばれる感覚全てを、ありとあらゆる側面から分析して、実験と評価を繰り返し、そのことだけに時間を費やしてみたんだ。話の流れから、もうわかつてると思つけど、僕は、意識して集中した時だけ、普段より五感が鋭くなる事がわかつたんだ。もちろん五感全てではないよ。その内の一つだけ。遠くを見ようと思えば視力が、臭いを嗅ぎ分けようと思えば嗅覚が。そんな具合に、望んだ感覚が向上するのさ。さらに、勘も同じように鋭くなるみたいで、相手のちよつとした仕草とか、発言のニュアンスなんかで、何でもわかるようになったさ。第六感つてやつだと思つけど、その感覚も向上するみたいなんだ。それで僕も君と同じように考えたんだ。何故こんなことになつたのか。何故こんな力がついたのか。考えて考えて、考え抜いた時、この能力は自分が最も求めていたものだって気付いたんだ。僕の欲望。たくさんの事を知りたい。たくさんの情報を得たい。その欲望

が満たされる能力だってね。欲望者ってネーミングはそこから取ったんだ」

男は自慢げだったが、どんなに頑張っても信じることの出来ない内容だった。今時の小学生だってもっと現実的な物の考え方をするはずだ。こんな妄想じみた話など、信じる奴の方がどうかしている。どうやら僕は、悪質な詐欺師に捕まってしまったようだ。

「これも信じる信じないは君次第さ。欲望者を見分ける方法はないし、研究している専門家なんてのもいない。あくまで自称でしかないからね。ただ欲望者は意外に有名だよ。特に君は……」

男はずっと閉じた状態で机に置いていたノートパソコンを、おもむろに開いて僕にディスプレイを見せる。画面には見たことのないサイトが表示されていた。サイト名と思われる snippet と書かれた画像が、一番上にでかかど貼り付けられている。

「ちよつと下にいったところの、ランキングを見てみなよ」

何のサイトかわからずに、言われるがままスクロールバーを移動させると、サイト中央辺りにランキングが表示されていた。そのランキングには一位から順に、何かのタイトルのような文章が表示されていた。

1位 『S市K区の少年M。自殺を謀るも無傷の生還。新たな欲望者か!?!』

2位 『S市の少年奇跡の生還。欲望者の可能性も』

3位 『屋上から飛び降り自殺。無傷の少年を保護』

そこまで見て手を止めた。その先を見るのが怖くなった。

「すごいだろ? スネッチって言って、僕が作ったサイトなんだ。会員制のニュース投稿サイト。会員が記者になって自由にニュースを投稿すると、それを読んだ閲覧者がそのニュースを評価するんだ。そして、その閲覧数と評価数でランキングをつけて、ランキング上位者はサイトのトップに記事が掲載されるってシステムさ。最初は

単なる暇つぶし程度で作ったサイトなんだけど、欲望者のネタを投稿したら評判が良くてね。似たようなサイトや掲示板がたくさんある中で、欲望者の情報が充実するのはうちぐらいだからね。それに、とにかくウチの記者達は優秀でね。君に関するニュースが初めて投稿されてから、その話題で持ちきり。たった数日でかなり調べられてるよ。試しに一位の記事を読んでごらんよ」

恐る恐る、一位の記事の全文を表示する。

『S市K区の少年M。自殺を謀るも無傷の生還。新たな欲望者か！』

『六日午後七時頃、警察に「倒れている少年がいる」との通報があり、S市内に住む高校生の少年M（十七）が保護された。少年に怪我はなく、命に別状はない。現場のマンション屋上の扉が開いていた事と、ドアノブに少年の指紋が残っていた事から、警察の捜査は事故、又は自殺として進められている。少年本人は自殺を否定しているが、目撃者がいる事と、少年が、通っている有名私立学校でいじめを受けている事から、自殺の可能性が高いと考えられている。現場となったマンションは高さ約二十メートル、七階建ての一般的な建物で、その屋上から飛び降りた事になるが、少年は無傷のまま保護されている。少年が倒れていた付近のコンクリートが不自然に窪んでいることから、少年が欲望者としての力を覚醒させた可能性があるとみられている。少年の能力については不明な部分が多く、現在も調査が進められている』

僕が巻き起こしたあの夜の出来事、僕が事情聴取で嘘を付いた事、僕がいじめにあっている事、その他諸々。そのほとんどが、簡単に記事となってまとめられていた。これを読めば、どこの誰であつても、この出来事の背景と経過を大雑把ではあるが読み取ることが出来る。

ランキング二位以降にあるその他の記事も、一位の記事程詳細ではないが、ほとんどが同じ内容だった。そしてどの記事も、最後に必ず『少年が欲望者の可能性がある』『現在も調査中』と締めくくられていた。

「僕もこの記事で君の事を知ったんだよ。七階から飛び降りたのに無傷なんだから、相当な力を持った欲望者だとは思っていたけど、実際に会って合点がいったよ。君、明らかにネガティブだもんね」

ネットで自分の情報が公にされ、ショックを受けている僕とは対照的に、ブローカーはミネラルウォーターを飲みながら楽しそうに話す。

「欲望者には二つのタイプがあるんだ。これも僕が勝手に呼んでるだけなんだけど、ポジティブとネガティブの二つ。ポジティブは積極的な欲望。何かを強く求めたり、極めようとする欲望。僕のような力がそうだね。ネガティブは消極的な欲望。何かから逃げようとしたり、否定しようとする欲望。この二種類で分けられる。ポジティブは、力のある程度自由にコントロールできて、欲望者自身がすぐ自分の力に気付くんだけど、力としては強くない。反対にネガティブは、力をコントロール出来ないと言って良いと思う。出来なくはないのかもしれないけど、かなり難しいんじゃないかな？原因となる欲望自体が、すごく不安定なものだからね。しかも、ネガティブの欲望者は大体、どこかが麻痺してるから、力が覚醒した事に気付かないんだよ。現実逃避したり、意図的に感覚を鈍らせたりつてね。だから、君みたいに他人から言われて初めて自覚するのが大半なもんだから、見つかりにくいんだよね。でもその代わりに、力はポジティブなんて足元にも及ばないくらい強いものになるんだ。ただ……」

ブローカーは机のノートパソコンを閉じると、腕組みをして難しそうに顔をする。

「君の力の元になる欲望が、なんともはつきりしないんだよね。死ぬためにマンションの屋上から飛び降りたんだろ？なのに自分を

守る力が目覚めて死ねなかった。完全に矛盾してるよ」

もし、欲望者という存在が本当に実在して、僕がその欲望者となり自殺に失敗したのであれば、確かに矛盾している。僕は死にたかった。この世界から消えてなくなりたかった。欲望者なのであれば、この欲望を実現するための力が作用して、確実に僕は死ねるはずだ。「そこで、君に一つ取引を提案しようと思うんだけど……」

ブローカーはジーンズのポケットからインスタントカメラを取り出す。見覚えのあるインスタントカメラだった。

「そう。これは、あの時の森黒君達が写っているカメラさ。あの三人が君を殴りつけようとしている瞬間がバッチリ収められている。このカメラを君に譲るよ。なんなら僕が証人となってこのカメラを持って訴えに出たって良い。その代わりに、僕に君の力を調査する権利をくれないかな？ 要は、しばらくの間、君の力がどんなものでどんな欲望が元になっているのが判明するまで、付きまとうって事。もちろんプライバシーは尊重するよ。君にだって見られたくない事や踏み入れたくない部分はあるだろ？ その辺りはしっかりと線引きするからさ。どうかな？ 悪くない話だと思うけど」

あまりにも急な話だった。欲望者という空想話で忘れるところだったが、ずつと気になってはいた。男がどういった目的で、山下達が僕をサンドバックにしていじめている現場を写真に収めたのか。そして、何故そのカメラをネタにして山下を挑発していたのか。それは、僕との交渉を有利にするための材料であり、演出だったのだ。山下の反応を思い返してみれば、このカメラが十分な効果を発揮する事はわかりきっている。しかし、突然の提案に色々な考えが頭を巡る。この写真があれば学校側の連中はなんとかなるかもしれない。一般社会的に親としての役目を負わされているあの二人に知られることなく、最低でも山下達は黙らせることが出来るかもしれない。

だが、それだけで良いのだろうか。こんな状況になった根本的な部分は何だった？ この写真でそこは解決するのか？ それに、この写真で本当に山下達がいじめをやめるだろうか。もっとエスカレ

トして、僕が何も言えなくなるぐらいの、酷いことになるんじゃないだろうか。それ以前に、このカメラに本当にいじめの現場が写っているかどうかも疑わしい。まだ僕はブローカーと名乗るこの男の事を理解したわけではない。僕を騙すつもりで、全く何も写っていないカメラを持っている可能性だってある。

僕が悩み続けていると、どこかで携帯電話の着信音が鳴る。奥のバーカウンターで着信ランプが光っているのが見えた。男は不愉快そうに立ち上がると、携帯の元へと向かう。着信音はすぐに鳴り止んだ。長さからすると電話ではなくメールなんだろう。男は携帯の画面をしばらく見つめると、操作をすることもなく、携帯を閉じ、ポケットにしまった。

「そんなすぐに答えは出せないか。当然といえば当然だね。君と僕は今日初めて会ったばかりだし、欲望者についても知ったばかりだもんね。わかったよ。じゃあ二、三日、時間をあげるよ。じっくり考えた上で決断すると良いさ。僕もこれから出掛けなきゃいけないから、今日はここまで。お疲れ様。帰り道はわかるかい？」

半ば追い出されるような形で、元ライブハウス、現ブローカーと名乗る男の住処を後にする。男も一緒になって出てきたが、何も言わずに廃墟のような商店街の闇に消えて行った。

たったの数時間、薄暗い部屋で見知らぬ男と二人きりでいただけなのに、信じ難い話を幾つも聞かされた所為で、疲労が体を支配していた。とにかく、早く帰ろう。ここは、学校とは別の意味で、一秒でもいたくない場所だ。この場所にたどり着いた時の記憶を呼び起こし、曲がり角を一つ一つ確認しながら、学校近くのバス停留所まで戻った。

家に着いたのは、夜の七時過ぎだった。普段乗ることのない、スリッパの社会人が隙間なく埋め尽くされたバスに揺られ、近くのス

ーパーで冷めた弁当を買って帰宅した。玄関を開けても、人影はなく、暗闇に僕の足音と扉が閉まる音だけが寂しげに響く。電気を付けると、カーテンのしまっていない窓が夜の街を映し出し、誰も読んでいない、綺麗に折り畳まれた新聞がテーブルの隅に置かれ、キッチンには僕が朝食で使った食器がそのままの状態に残されていた。朝から全く変わらない居間が蛍光灯に照らされる。

電子レンジに買ってきた弁当を放り込み、温めている間に着替えを済ませる。この、制服を着替える瞬間が、僕にとって一日の終わりだ。一番心が休まる瞬間と言っても良いかもしれない。温め終わった弁当と冷蔵庫にあったオレンジジュースを持って自分の部屋へ行き、パソコンでインターネットをしながら食事を取る。行儀の良い食事だけれど、誰もいない広すぎる居間で食事をする、なんとなく不安になってしまう。気持ちが悪くなる。テレビをつけても良いのだけれど、流行のバラエティなんかは性に合わない。反対にインターネットだと自分の好きな情報だけを選びすぎて見る事ができる分、暇つぶしには最適だ。それでも流し見する程度でほとんど見てはいない。いつもながら、自分が何をしたいのか、本当にわからなくなってくる。

食べ終えた弁当のパックを横にずらして、特に見る気のないウェブページを次から次へと切り替えていると、あの謎の男から見せられた、ウェブサイトの事が頭に浮かんだ。スネッチ、だったか。もしかしたら、あのウェブページも本当は存在しないもので、男が僕を騙すために作ったデータなんじゃないか。急にそんなことを思いつき、検索ページに「snitch」と入力し、確定ボタンを押す。検索結果が表示されたページには、僕の期待を裏切るように、一番上にしっかりとスネッチのリンク先が掲載されていた。やはり僕の事は不特定多数の人間が見るインターネット上に、本人の許可なく、いとも簡単に公開されていたのだ。青い文字でリンクされているsnitchの文字をクリックし、ページを表示すると、いまだにランキングの一位から三位は僕の記事だった。男に見せられた時

は気付かなかったが、記事にはコメントも付けられるようになっていて、一位の記事に対するコメント数が五桁を超えていた。この利用者は、よっぽど僕の事が知りたいようだ。

悪い気分にはかならないページを眺めていてもしょうがない。検索ページに戻ろうとした時、『管理人のブログ』という項目が目を引きいた。管理人。すなわち、あの男のことだ。怖いもの見たさというものか、男がどんな事を書いているのかが気になり、ブログへと進む。ブログはなんの装飾もない、すっきりとしたデザインで、本文も、画像を一切使わずに文字だけで書かれていた。最新の記事は今日の午後六時頃に更新されている。タイトルは『見てるかな?』だった。嫌な予感しかしないが、全文を表示する。

『皆さんこんばんは。管理人のブローカーです。今日はなんと、現在話題沸騰中！一躍超有名人となった、あの少年M君に突撃してきました！プライバシーに関わる事なので、詳細は一切伏せさせて頂きますが、可能性は十分!? 今後の展開に期待しましょう!』

ここで本文は終わっていたが、スクロールバーはその下にもまだページがあることを示していた。下に移動すると、最後に短くこう書かれていた。

『追伸：良い返事を期待しています』

僕が家でこのページを見る事は、お見通しだったようだ。この追伸は明らかに僕に向けられている。サイトの会員が最も注目している人物に、管理人自らが直接接触したとなると、盛り上がりがない訳がない。記事に対する異常なまでのコメント数は、これが原因のようだ。男はこの事も考えた上で僕に会いに来たのだろうか? とにかく、これで僕のことを嗅ぎ回る人間が増えることになる。

本格的に気分が悪くなってきた。もう寝よう。残っていたオレンジジュースを飲み干して、パソコンの電源を落とす。そのままベッドに潜り込み、部屋の電気を消した。

目を閉じると、瞼の裏側に、スネッチの記事や山下達が次々に現れては消えてゆく。その度に何度も寝返りを打ったり、目を開けてみたりと、しばらく眠れなかったが、やはり疲れていたのだろう、その記憶も途中で途切れ、気付いた時には、部屋に朝日が差し込んでいた。

壁？

六時間目の授業『日本史／世界史』。

昔から好きな科目ではなかったが、最近、僕の嫌いなものリストに見事登録された。クラスの担任が受け持つ教科で、ホームルームや個人面談で、全く役に立たない歴史うんちくを交えて話をしてくるのが、鬱陶しいという所もあるが、それとは別に、過去の人物や出来事を学ぶ意味が理解できないからだ。過去から学べと言う人がよくいるが、そもそも過去と現在では状況が違う。社会の体制、技術、価値観、全てにおいて同じものなどないはずだ。それに過去の出来事を知ったところで、人間は飽きもせず他国を略し、戦争を引き起こす。国内では、国民を苦しめ、一部の権力者達が甘い汁を吸って生きている。では、そこから学ぶ事とは一体何なのだろう。その知識はどんなところで力を発揮し、社会の役にたっているのだろう。僕には、ただ事実をそのまま知識として蓄積する行為にしか思えない。昔の人物をクローズアップするのも同じだ。どんなに頑張った所で、僕はその人物になることはできないし、その人物と同じ人生を歩むことは不可能だ。この人はこんなことをして、こんな素晴らしい結果を出しました　そう言われて僕はどうすればいいのだろう。尊敬して、崇拜したらいいのか。その人のように立派な人間になれるよう、情熱を燃やせばいいのだろうか。学ぶと言うよりは、テストのために暗記すると言ったほうが適切な気がする。

そして、この科目に対する違和感を最も強く感じるのは、人が死ぬ事件や戦争が題材の時だ。

教師は言う。

「第二次世界大戦とはドイツ、イタリア、日本などの枢軸国側とアメリカやソ連、イギリス、フランスなどの連合国側が対立し、多くの犠牲者を出し、世界中に広まった戦争です」

この授業が生徒達にもたらす結果はこうだ。

「テストでは枢軸国と連合国、それぞれの加盟国が出るかもしれないから覚えなきゃ。もしかしたら、簡単に説明をしなきゃいけないような、文章問題で出題されるかも知れない。ノートを丸暗記した方がいいかな」

この戦争で犠牲になり、教科書には数字でしか記載されない、死んでいった人々の痛みや苦しみ、悲しみはどうでもいいのだろうか。抵抗する事も出来ず、助けを求める事も出来ず、力に屈して人生を終えることしか出来なかった、弱い人間達の事は注目しないのか。

教師の関心は、授業の進み具合と校内での評価。生徒の関心は、出題の傾向と単語の暗記。この自己中心的授業が、いじめが起きていても見て見ぬふり、止める事も助ける事もせず、時には自らもいじめに加担するクラスの奴らと被ってしまう。相手の事はどうでもいい。自分の外的、または内的状況が良くなるのであれば、誰かが犠牲になっても関心を示さない。劣悪で、高慢で、思いやりの欠片もない。そして、授業で取り扱う事件の加害者は、そのままいじめの主犯である人物、即ち、僕にとっては山下と重なる。この授業中は、いつもこんなことばかり考えてしまう。

ちなみに、その加害者である当の本人、山下は、朝からずっと僕を睨み付け、不快な視線を送り続けている。朝のホームルーム前に話しかけてくることも無く、休み時間に僕を連れ出すことも無く、僕に穴が空いてしまうんじゃないかと思えるぐらい、ひたすらにガンを飛ばし続けている。確実に、僕に対して汚い感情を抱いているにも関わらず、一切手を出してこない。これでは放課後にどんなことが待ち受けているやら。

「よし。そろそろチャイム鳴るな。今日はここまで。この部分はテストで取り上げる確立が高いから、しっかり復習しろよ。じゃあこ

のままホームルームやってしまおうか」

担任はどうでもいい連絡事項を言い終えると、チャイムと同時にホームルームを切り上げ、早々と教室を出て行った。生徒達の相手をしている暇など無いとでも言いたげな、見事なまでに迅速な行動だった。

担任が教室から姿を消すと、僕にガンを飛ばし続けていた山下は誰よりも早く立ち上がり、何も言わずに僕の肩を掴むと勢いそのままに僕を引っ張り上げた。突然の強襲に、僕は成す術なく、廊下の突き当りまで連れ出される事となった。

「昨日はふざけた事してくれたな。お前あのカメラ持ってんだろ？ さっさと出せよ」

山下は声を荒げぬように必死で自分を抑え、ゆっくりと、確実に僕を脅す。何かを警戒しているのか、全体的に落ち着かず、目が泳いでいる。

「何やってんだよ。カメラを渡せば今回の事は許してやる。早くしろよ」

少し強い口調になり、イライラし始めるが、残念なことに僕はカメラを持っていない。山下達が僕をいじめている現場の決定的瞬間を収めた、コンビニで売っている安物のインスタントカメラ。それは元々僕の持ち物ではなく、ブローカーと名乗る詐欺師風の男が勝手に持ち込み、その男が勝手にシャッターを押して撮影したのだ。それに昨日カメラと引き換えの取引を持ちかけられたが、受けるかどうかは保留状態のまま、カメラはまだ男が所持している。早く出せと言われても無理な話だ。

「なんだ、持ってねえのかよ！ じゃあ、あの調子こいたメガネ野郎が持ってんだな。あいつから奪い取って来いよ」

今度は取って来い、か。でも、僕はあの男との連絡手段を持ち合わせていない。携帯電話は学校に持ってこないことにしているし、持っていたとしても、男の電話番号やメールアドレス、一切の連絡

先を知らない。例のライブハウスにいるという確証もない。向こうから接触してこない限り、出会うのは難しい。

「いいな。明日までに絶対持って来いよ。もし、持って来なかったり、また変な真似してみる。今度は確実にお前の腹にぶ……………」

急に話が聞こえなくなった。と言うより、驚きのあまり、山下の話に集中することが出来なくなった。何でここにいるんだ？ どうやって入って来た？

「おい！ 聞いてんのか！？ 何見てんだ……………」

山下も振り返り、予想出来る訳も無い状況に硬直する。

そこにはいるはずのない人物が立っていた。

ブローカーだ。

「やつ！ 二人とも元気かい？ 相変わらず仲が良いね」

昨日とは打って変わったスーツ姿。紺の上下に、上品なグレーのネクタイをしっかりと締め、手にはビジネスバッグが重々しくぶら下がっている。どこからどう見ても、一般の社会人だ。

「お、お前！ 昨日写真撮ってた奴だな！ なんでこの学校にいるんだよ！」

「なんでって。そりゃ、用事があるからに決まってるだろ。入館証をもらえる正当な理由と手段でここにいるんだから、君にとやかく言われる筋合いはないね」

「用事だ！？ 用事って、何の用事だよ！」

「それも君には関係ないね。答える義務はないし、答える必要性も感じない。君こそ、森黒君と二人で何をやってるんだい？」

「うるせえ！ お前には関係な……………」

山下は言いかけて何かに気付いたのか、話すのをやめて僕をじっと睨み付ける。

その通り。関係なくはない、むしろ大有りだ。たぶんこの視線は

「さつき言った通り、お前がカメラを奪え」という無言のメッセー
ジだろう。偶然にも所持者本人が目の前にいるのだから、自分で言
えばいいのに。

「まあ、なんとなくわかるけどね。君が森黒君に言い寄っていたの
は、こいつのことだろ？」

ブローカーはバッグから例のカメラを取り出す。山下の目の色が
変わる。

「気持ちはわからないでもないよ。君にしてみたら、このカメラに
色々とまずいものが入ってるんだものね。でもこのカメラは僕の物
だから、森黒君にせがむのは間違いさ」

「ふざけんな！ 昨日俺が言っても、お前はカメラを渡さなかつた
じゃねえか！」

「昨日は昨日。過去に囚われるのは良くないよ？ 今この一瞬を大
切にしなきゃ」

「てめえ！ 馬鹿にしてんのかよ！ だったら今すぐそのカメラよ
こせよ！」

「え？ あ、うん。いいよ」

「……………は？」

『狐につままれる』だとか『鳩が豆鉄砲を食らう』なんて表現を、
実生活で使ったことがなかったけれど、今、正に山下の顔がそれに
当てはまるものだった。たぶん僕も同じような顔をしていただろう。
今日もブローカーは訳のわからないことを言っているからだ。山下
の要求をあっさり承諾してしまった。僕との取引はどうなったん
だ。

「いや、だからいいよって。条件付だけど。森黒君にも取引を持ち
かけたから、お望みなら君にも提案してあげるよ」

「……………条件って何だよ」

「そうだな。君の能力を見せてもらおうかな？ 君、元空手部なん
だろ？ その腕前を見せてもらおうじゃないか。ああ！ 丁度良い
！ なんなら森黒君と君が対決して、勝った方にカメラを進呈する

つてのはどうだい？ うん、ナイスアイデアだ」

ブローカーはとんでもないことを言い始めた。僕と山下が空手で対決するなんて、どこが丁度いいのだろう。その対決は僕が負けるに決まっている。それは対決でもなんでもなく、いつも山下が行っているいじめに、賞品がついただけだ。圧倒的に山下に有利な取引だ。いや、これは取引と言えるのかどうかさえ疑問に思える。山下にカメラを渡すためのこじ付けじゃないか。

「なに、森黒君。不安に思うことはないさ。要は勝てば良いだけの話だろ？ 君達の関係に決着を付ける良い機会じゃないか」

「はあ？ 俺に勝つって？ 誰が？」

「もちろん、森黒君だよ」

「……………ふざけるな」

僕が山下に勝つ、という部分が癪に障ったのか、山下は今までにない、静かな怒りを滲ませる。

「こいつが俺に勝つなんて無理に決まってるんだろ！ 俺に歯向かう事も出来ない、力もない、頭も悪い、クズみたいな奴だぞ！」

「そうだね。そこに関しては僕も否定は出来ないよ。でも、君も森黒君の全てを知っている訳じゃないだろ？ 可能性は十分にあるさ。何事もやってみないと結果はわからないからね」

「いいぜ。そこまで言うならやってやるうじゃねえか！ 俺の本気をお前らに見せ付けてやる！」

「よし！ 決まりだね！ じゃあ、早速今日やってしまおうか！

場所と時間は決まり次第、二人の携帯にメールを入れるから、それまでに準備しておいてね。準備不足で負けたなんて、格好の悪い言い訳は聞きたくないよ」

「うるせえな！ お前はいつも一言余計なんだよ！」

山下はそう吐き捨てると、怒りを露にしながら、ドスドスと足音を立てて教室に戻っていった。

「ってことだから。頑張ってるね、森黒君。僕は君に期待してるから。それじゃ、後でね」

ブローカーは満足そうに、無責任な言葉を残して立ち去っていった。結局、僕は話の進行を止めることが出来ず、僕の意味が尊重されないまま、山下と対決をする事になってしまった。それも今日、この後に。話の流れからすると、対決の方法は空手、もしくはそれに匹敵する何かだ。僕の勝ち目なんて、万に一つでもない。ブローカーは何故あんな大見得を切ったのだろうか。欲望者の力があるからか。しかし、この力はコントロールが出来ない。と言うか、いまだにそんな力が自分にあるのかすらわからない。なんせ、その力が発揮されたのは、僕が自殺を謀ったあの夜のみ。今となっては確認しようがないし、その力についても、周りの人間がおもしろおかしく騒ぎ立てているだけなのだから。ブローカーでさえ、その力を実際に目にした事は無い。なのにあの絶対的な自信。その根拠の無い自信は、ブローカーの力から来るものなのだろうか。欲望者ブローカーが持つ、感覚全てが向上するという力。本当にそんな力があるのだろうか。僕には何一つわからない。ブローカーの提案の意図する所も、僕自身の事も、あの夜の事も、欲望者の事も。一つだけわかるのは、僕がこれから山下にボコボコにされるとい、逃れることの出来ない現実だけだ。

嫌気と不安が体中に広がり、眩暈と吐き気が襲ってくる。とにかく一度家に帰って気持ちを落ち着けよう。落ち着いて情報を整理すれば、もしかしたら、対決を回避する名案が浮かぶかもしれない。学校という、僕にとって最悪な環境にいつまでも残っているのは、良い事など起きるはずもない。そう思い、吐き気を必死で我慢しながら、おぼつかない足取りで廊下を進み、玄関へと向かう。僕の一日はまだ終わらない。

午後五時過ぎ。昨日より早めの帰宅だったが、昨日が特別であっただけで、いつも通りの帰宅時間だ。夕日は沈みかけ、眩しいくらいのおレンジ色が部屋に差し込んでくる。着替えは済ませたが、今日に限っては、気分が晴れることは無かった。僕の一日はまだ終わ

っていない。この後待ち受けている、最低最悪なイベントをどうやって回避するか、どのようにしたら回避できるか、そればかりをずっと考え続けている。名案が浮かぶ気配は、まだ無い。やはり頭の悪い僕がいくら思考を巡らせた所で、良い考えが浮かぶことなど有り得ないのだ。力もなければ、頭も悪い。山下の言う通りじゃないか。

携帯が鳴る。買ってから久しく鳴ることのなかった、僕の携帯電話。緊急連絡用として持たされたが、助けを求めるとき頼れる人間がいない僕には、友達のいない僕には、無用の長物であった。役に立たない、重量しか感じられない、鉄の塊。たまにくるメールは、間違いメール、チエーンメール、悪質サイトの偽装メール、後ほどこちらアドレスを入手したのか、クラスメイトからの誹謗中傷メール。それらが年に三十件ほど届くだけだ。その携帯電話が無機質な電子音と光を放ちながら、鳴っている。手に取ると、サブ画面にメールの着信を現すアイコンが表示されていた。もう連絡が来てしまった。早すぎる。まだ何もない考えは浮かんでいないのに。

携帯を開き、メール画面を表示させると、新着メールが先頭にきている。タイトルは「本日の詳細、要確認」だった。送信者は登録されていないため、アドレスがそのまま表示されている。しかし、そんなものがなくても誰が送ってきているかは、わかりきっている。それにしても、僕のアドレスはどうやって知ったのだろう。

本文を表示させると、短い文章と、どこかのウェブサイトのリンクが貼り付けられていた。

「午後七時までにリンク先の場所に集合。遅刻厳禁。各々準備は怠らぬよう。健闘を祈る」

それだけ。ほとんど業務連絡だ。

次にリンク先のページに移動してみると、目的地に印の着いた地図が開かれる。携帯に付いているGPS機能を利用したナビサイト

だった。目的地は街の中心部から少し離れた場所を示している。家からだと、バスと徒歩、一時間半ぐらいで着くような場所だ。

場所と時間を確認したところで、少し考える。もし、このまま行かなかつたらどうなるだろう。僕は痛めつけられることなく、カメラは山下の手元に。ブローカーとの取引はなかったことになるだろう。もしかしたら、行かない。と言う選択肢が一番良い方法なのかもしれない。これさえ過ぎてしまえば、後はいつものように、山下のいじめを少し我慢すればいいだけの話ではないか。この後、怒り狂った山下の猛攻でボコボコにされるか、それともいつもの悪戯程度のいじめを我慢するか。どちらかを選べといわれたら、そんなもの、悩むまでもない。

少し気分が軽くなった。そうだ。行かなければいいのだ。こんな簡単なこと、どうしてすぐに思いつかなかったのだろう。

そうしていると、またもや携帯電話が光り始める。またメールの着信だ。珍しい事もあるものだ。一日に、それも続けざまにメールが届くなんて。特に気にすることも無く、新着メールを開くと、先程の連絡メールと同じアドレスだった。タイトルは無題。

「一応、忠告しておくけど、集合場所に来ないなんてことは許されないからね。これは君が拒否しなかった、つまり承諾した取引だ。もし来なければ、君のご両親に、いじめの事実、あの夜の出来事、全てを報告するからそのつもりで。勝負に勝てば君にとって有利になるんだから、頑張つてね。それじゃあ待つてるよ、森黒君」

思わず後ろを振り返る。当然の如く、後ろには誰もいない。しかし、背中には、確かにブローカーの影を感じる。僕の思考、行動、全てを見通す情報屋。もう選択の余地はなくなった。行くしかない。行って早めにギブアップして帰ってこよう。もうカメラなど、どうでもいい。もみ消したければ、もみ消せば良い。いじめたければ、いじめれば良い。僕はどうせ、すぐ死ぬのだ。

外出用のジャンパーを掴んで、部屋と居間の電気を消し、家を出る。携帯でナビサイトを表示したまま、目的地へと向かう。一刻も早く、今日と言つ一日を終わらせるために。

壁？

「なんだ、意外に几帳面だね森黒君は。まだ十五分前だよ？」

自分で計算していた時間より早く着いてしまった。僕の家から街へ向かうバスに乗車する客は朝ほどではなく、停留所にも停まらない事が数回。場所もナビのお陰で迷うことなく、すんなりと到着した。そこはこの街にしては珍しい、幅の広い道路を正面にして、周囲に広い空き地がある、三階建ての廃ビルだった。たぶん駐車場にでもするつもりだっただろう。建物には不釣り合いなくらいに、かなりのスペースを取っている。昨日も目にした、街外れの風景と変わりはなかったが、他の廃ビルには、周りにここまでの空間はなかった。存在自体が忘れ去られたかのように、ポツンとその廃ビルが佇んでいる。少し不気味な雰囲気さえ感じさせる。触れてはいけなような不思議な空気が漂う。

入り口前にはブローカーが、学校で会った時と同じ、スーツ姿で椅子を用意して座っていた。

「彼も、あと少しで到着すると思うから。先に中に入ってるかい？
電気通ってないから、これ持つてってね。使うのは一番上の部屋だから」

ブローカーに促されるまま、キャンプ用の大きな電気ランプを受け取り中に入る。廃ビルに入るとすぐ正面に階段と、奥に二つ部屋が見える。階段を上りながら、一つ目の部屋を覗いてみると、オフィスで使われるような仕事机や、会議室に置かれる長机などが、部屋の隅に綺麗に集められていた。階段も特にゴミ等が落ちている様子も無く、比較的綺麗な内装だ。そのまま二階を通り過ぎ、三階に上がると、すぐに扉が現れ、開けるとフロアを丸々一つ使った、大きな部屋になっていた。部屋には何も無く、窓が三つあるだけの、コンクリートに囲まれた寂しげな空間だった。

適当な場所に懐中電灯を置き、窓から外を眺めていると、間もな

くして階段を上る二つの足音が近づいてきた。扉を開けたのは山下だった。その後ろに続いてブローカーも部屋に入ってくる。

「よし。これで揃ったね。それじゃあ、まず対決方法とルールを決めようか」

「何言ってるんだよ。お前は俺の空手が見たいんだろ？　なら空手でいいじゃねえか」

「うーん。それもそうだね。じゃあルールは？」

「フルコンタクトだな。どちらかがギブアップするか、戦闘不能になるまで。一本とか技有りの判定はなしだ」

「そう。ちなみにフルコンタクトって何？」

「素手で戦って、顔面への攻撃と反則行為を禁止したスタイルだよ。知らねえのかよ」

「悪いね。インドアな人間なもんで、そういう野蛮なものには興味が無いんだ」

「野蛮じゃねえよ。ちゃんとしたスポーツだ」

「ああ、ごめんごめん。そう、気を悪くしないでよ。じゃあそれで行こうか。森黒君もいいね？」

「良いも悪いも無い。僕は端から戦う気などないし、すぐにギブアップして帰るつもりだ。さっさと始めてもらえればそれでいい。」

「OK。じゃあどうぞ。君達の好きなタイミングで始めてよ」

「なっ……好きなタイミングって……開始の合図とかないのかよ」「僕は審判じゃないから。案内役であり、情報屋であり、観客さ。」

「そんな面倒なことはしないし、やりたくないね」

「ふん！　わかったよ！」

話が終わると、ブローカーは部屋の隅に座り込み、山下は部屋の中心部に進み、こちらを睨み付ける。

「何やってんだよ！　お前も早く準備しろよ！」

「準備って何だ？　僕にどうしろと言うのだ。」

「鈍臭い奴だな！　いいから俺の正面に立てよ！」

言われた通りに山下の正面に、向かい合わせになるような形で立

つと、山下は僕との距離を少し開けてから、構えに入る。足を開き、少し腰を落とした状態で、両手をしっかりと握り締める。いよいよだ。いきなりギブアップでもいいのだが、それだと山下が逆上しかねない。何発か我慢してからにしよう。僕も合わせて防御の体制に入る。

「いつもは手加減してるが、今日はなしだ。いくぞ！」

山下が一気に間合いを詰め、僕の懐に入ってくる。この感じはいつもの下腹部を狙った右の拳だ。

「受けるんじゃないと、流すようにしないと……」

不意に昨日のブローカーの言葉を思い出す。受けるのではなく、流す。ならば、当たる前に体を後ろに引いて、拳の軌道から逃れれば良いのだろう。そう考えている内に、予想通りの右拳が飛んできた。すぐに体が反応し、後ずさるように体を引き、山下の拳をかわす。そのまま、山下との距離をとるためさらに下がる。

かわしてしまった！

何をやってているんだ僕は！

何発か食らってギブアップのもりが、ブローカーの言葉を思い出した所為で、今までやったこともない回避をしてしまった。山下は驚いているのか、空を切った右腕を戻すことなく、そのままの体制で目を丸くしながらこちらを見ている。

「へえ……よく避けたな。お前も本気ってことか。良かったよ。これで心置きなくやれるな！」

言いながら、再度間合いを詰める山下。何が心置きなくだ。始める前に手加減はしないと言ったじゃないか。普段もさほど手加減をしていないくせに、よく言う。

近づいてきた山下は、またしても同じように下腹部目掛けて右拳を放つ。今度は避けない。最小限のダメージで、最大限のリアクシ

ヨン。これを繰り返せば奴も満足するはずだ。そうすればギブアップも容易い。両手で山下の拳を包み込むようにして、勢いを殺し、下腹部まで導く。それを受けて、大げさに倒れれば完璧だ。両手を下腹部前に出し、山下の拳を迎え入れる準備をした途端、山下は右拳を引つ込め、代わりに左足が僕の太もも目掛けて飛び出した。山下の左足は見事に僕のももを捕らえ、鈍い痛みが走ると共に、思いがけない方向からの攻撃に、体制を崩し倒れ込む。

「フエイントには慣れてないみたいだな。ほら立てよ！ まだ終わってねえぞ！」

足がジンジン痛む。でもこれでいい。ダメージはあるが、山下が手応えを感じている。後二発。二発我慢すれば十分だろう。痛む足を押さえながら、立ち上がり山下に向き直る。

立ち上がり、山下が視界に入った時には、既に僕の両肩は捕らえられていた。山下はそのまま僕の体を引き寄せ、右の膝で思い切り僕の腹を打つ。

「かはっ……！」

気分が悪いときは別の、外部からの強い衝撃による嘔吐感。何度も何度も、山下は執拗に僕の腹に膝を打ち付ける。たまらず僕が山下を振り払おうと手を出すと、山下は勢い良く僕を突き飛ばす。自分を支えることが出来なくなっていた僕は、よろよろと壁にぶち当たり、その場に座り込んだ。苦しい。

「なんだよ。あいつがあんなに自信たつぶりだったから、何かあるのかと思ってたけど、いつもの役立たずじゃねえか。お前の力つてのは何なんだよ！」

山下が怒鳴り散らす。僕を睨んだ後、続けてブローカーを睨みつける。ブローカーは表情一つ変えず、傍観者に徹している。自分を観客と言っていた手前、この勝負を止めに入る気はないようだ。山下はさらに怒りを加速させ、僕の服を引っ張り、無理矢理立ち上げらせる。

「何とか言えよ！ 力があるんなら見せてみるよ！ ええ！？ 俺

を倒すんだろ!？」

山下はすっかり怒りに思考を支配されている。もうこうなつては
どうする事も出来ない。ギブアップするなら今だ。

「……ギ……ギブアツ……」

「何だと!？」

言い終える暇も無く、山下が更なる追撃。渾身の力を込めた右ストリートが僕の腹に突き刺さる。僕はその勢い良く放たれた拳と部屋の壁に挟まれる。一瞬気が遠くなり、平衡感覚を失う。しかし、それが殴られた衝撃から来るものではない事をすぐに理解する。支えを失った僕の体は後ろへと投げ出される。後ろ? 違う、外だ。

「えっ……」

僕の背中を支えていたビルの壁が突如として崩れ、壁を構成していたコンクリートの破片や細い鉄骨と共に、僕の体が外へと飛び出す。目の前にいた山下が上へと遠ざかつてゆく。いや、僕が下へと落ちていく。なんだだろう。なんだか覚えのある感覚だ。そうか、あの夜だ。あの時、マンションの屋上から飛び降りたときの感覚と同じだ。気持ちいいとも気持ち悪いとも言えない浮遊感。僕はもうじき地面に叩き付けられる。かつてないほどの衝撃と苦痛が僕を襲うだろう。山下の攻撃など蚊に刺されたぐらいにしか感じられないほどの。その痛みに耐えられるかな? いや、耐えることはない。そのまま死ぬことが出来れば上出来だ。ここで終えることが出来るのなら、それもそれで良い。つまらない人生だった。本当に僕はつまらないまま終わるのだ。お似合いだ。

そろそろ、地面に打ち付けられて息絶えた頃かな? 目の前は真っ暗だけど、人間は死んでもまだ意識は続くものなのか。それにしても痛みはないし、まだ浮遊感が続いている。どうなっているんだ? 目が開く。見えたのは、壁の穴からこちらを見下ろしている山下の驚いた顔と嬉しそうなブローカーの顔、夜空に輝く月と星。

生きている。

視線を他の場所へと移す。足元には廃ビルの窓が見える。何で下

に窓がある？ 右には空き地が広がり、左には道路が見える。不思議なことにもどちらも、高さが変な位置にある。僕の背中から遠いところに見える。何だ？ 振り返ってみる。地面が見えた。足元にビルの窓、振り返ると地面。

僕は浮いている。高さにして、丁度廃ビルの二階に相当する。ワイヤーで吊るされている訳でもなく、透明な高台の上に乗っている訳でもない。僕は今、何も無い空間に浮遊している。

「うわあああああああああああああ」

混乱。パニック。恐怖。無意識に叫んでいた。何か大きな音が聞こえる。僕の声ではない何か大きな音。わからない。何だ？ 僕は何だ？ 何が起きているんだ？ 僕はどうなってしまうんだ？

目が覚める。また気を失っていたようだった。天井にミラーボールとたくさんの照明が見える。ホコリっぽくて少し臭い、健康に決して良いとは言えない空気が充満している部屋だ。前にも来た事がある気がする。思い出せない。

「お目覚めかな？ 気分はどうだい？」

これも聞いたことのある声だ。誰だっけ？

「目が虚ろだね。おい。聞いているかい？」

目の前にメガネをかけた男が写る。ああ、なんだ。ブローカーか。と言うことは、ここはブローカーの住処。ホコリだらけの元ライブハウスだ。

体を起こす。寝違えたのか、首が少し痛い。何でここで寝ているんだっけ？

「いやいや、あの後大騒ぎだったよ。間一髪の所で脱出した方がいいもの、山下君だっけ？ あの子はパニックで泣き出すわ、近隣の住民がそろそろ集まってくるわ、パトカー、消防車、救急車、もう次から次へと面倒臭い事ばかりだったよ。まあ、当然逃げてきたんだけど」

ブローカーは楽しそうにしている。僕は何の話をしているのかさっぱりだった。僕が関わっているようだけど、何があったのだろう。「あれ？もしかしたら覚えてない？じゃあ説明しようか」ブローカーは立ち上がり、ニュース投稿サイト、スネッチを見せた時と同じノートパソコンを持ってくる。

「どこから説明しようか……君が山下君と空手で対決したつてのは覚えてる？そう。じゃあその対決の最中からだね。実はあの廃ビルの部屋には僕がカメラを仕掛けていてね。何かと証拠は必要だろ？その時の映像があるから、まずそれを見ようか」

ブローカーはパソコンを開き、保存してある動画ファイルを再生する。開かれた動画には何も無い、誰もいない部屋が天井隅からの視点で映し出される。

「ちよつと飛ばすよ」

シークバーを真ん中あたりに移動させると、今まで誰もいなかった部屋に突然三人の人影が現れる。ブローカー、山下、そして僕だ。画面左側に僕と山下。右上あたりにブローカーがいる。僕は壁の近くに座り込み、その僕に向かって山下が何か叫んでいるように見える。

「このあたりまでは覚えてるだろ？問題はこの後さ。良く見ててごらん」

山下が僕を引っ張り上げ、壁に押し付ける。何か叫んだ後、僕の腹部に見るからに痛そうなパンチを入れる。僕の体が山下と壁に挟まれ、跳ね上がる。すると、衝撃で僕の背中にあつた壁が一気に崩れ落ち、僕の体が、突然出来た穴に吸い込まれるようにして消えてゆく。僕は画面から完全に消える。穴を覗き込んだまま山下は動かない。僕と山下のことを、胡坐をかいて傍観していたブローカーが、急に立ち上がり、山下と同じように穴から下を覗き込む。しばらく、一時停止を押したかのように、画面は動かない。二人が穴を覗き込んだまま、十秒ほど経った時だった。ブローカーは山下の腰に手を回し、抱えるようにして、部屋の出口に向かって走り出す。ブロー

カーが部屋を出て、再び誰もいなくなる。間もなく、一瞬にして画面が大きく揺れ、映像が途切れる。動画はそこで再生を終了した。「早すぎてわからなかったかな。僕が部屋を出た所からスロー再生してみようか」

もう一度部屋が映し出される。丁度、ブローカーが扉に辿り着いた所だ。スロー設定で再生ボタンを押す。

「君が落ちていった穴がある壁を良く見てるんだよ」

言われるがままに、壁に出来た穴に注目する。一秒、二秒、三秒。何も起きない。四秒、五秒、六秒。画面が揺れる。穴は？ 変化なし。七秒、八秒。さらに画面が揺れる。穴に変化が起きる。

穴の下部分からコンクリートが崩れ始めたのだ。ひびが至る所に広がり、結合状態を保てなくなったコンクリートがバラバラに、離れ離れになって行く。崩壊はさらに進み、床から壁、どんどんと画面から消えてゆく。同時に揺れも酷くなり、もう部屋がどんな状況になっているかすらわからないほどの振動になっていく。映像は途切れ、画面は砂漠に。動画が終了する。

「なんとなく状況はわかったかな？ やっぱり覚えてない？」

「なんとなくも何も、一切わからない。そして、記憶にもない。」

「やっぱり覚えてないか。錯乱状態だったからしょうがないね。あの廃ビルは倒壊したのさ。見るも無残に、跡形もなく、瓦礫の山さ。なんでかって？ そりゃ、君がやったんだよ。君が押し潰したのさ。押し潰したって表現はちょっと違うかもしれないけど、とにかくそんな感じ。あれが君の欲望者としての力だね」

僕の力。欲望者の力。建物を崩壊させるような力。

「いや、しかし実際に見てみると凄まじいね、君の力は。視覚では全く感知できないんだもの。でも、なんかこう、押される感じ？ 圧力を感じるって言うか、すごく重い空気の塊が押し寄せてくるみたい。うまく言えないけど、そんな力を感じたよ。君浮いてたんだよ？ まるで魔法使いさ。何も空中で静止して、びくともしない。んで、君が叫びだした時に、嫌な予感がしたんだ。寒気、悪

寒、とにかくヤバイ。山下君にもなにかあつたら困るから、急いで彼をつれて、二階の踊り場にあつた窓から外に飛び出したよ。ちょうど一階の出っ歯てる部屋の屋根があつたから、そこを伝つてそのままビルから離れて無事だったんだけどね。いや、あの判断が一秒でも遅かつたら危なかつたね。君の力が一気に広がつて、ビルを圧迫し、耐えられなくなったビルがガラガラ、ガツシヤン。建物が崩れ落ちる場面に初めて出くわしたけど、やっぱり迫力があるね。街外れで夜だった事もあって、その轟音が辺り中に鳴り響いてたよ。倒壊が治まつてしばらくしてから君を探したら、気持ちよさそうに寝てたよ、君。ご覧の通り怪我一つなくね」

おぼろげな記憶が蘇る。そう言えば、方向感覚と言つて、平衡感覚がいつもと違う、不思議な風景を見たよな気がする。その後、何が何だかわからなくなり、大きな音だけが耳に響いていた記憶がある。もしかして、あの音はビルが崩れている時の音だったのか。「君の力が発揮されている所が写っていないのが残念だね。でも嘘じゃないよ。僕がこの目でしっかりと確認しているし、山下君も見ているからね。それより一番大変だったのはその後さ。今度は山下君がパニックを起こしてさ。もう酷い有様だったよ。こっちが落ち着かせようとしてるのに、全く話を聞こうともしない。拳句、泣き叫びながら走つてどこかに行つてしまったよ。今頃どうしているのやら。案外、根性のない奴だったね。まあ、もう会うこともないだろうから、どうでもいいけどね」

僕は、僕の欲望者という力は、建物一つを破壊した。はつきりとした記憶はない、確固たる実感もない。でも、映像がしっかりと残っている。証人もいる。僕は、欲望者なのだ。

しばらく困惑する僕を眺めていたブローカーは、何かを思い出したよつで急に立ち上がると、奥のカウンターから僕の上着を持つてくる。

「ところで、時間は大丈夫かい？　そろそろ帰らないと、家に着く前に日付が変わっちゃうよ？」

部屋の壁に掛けられている時計は、間もなく午後十時を回ろうとしていた。とつくに終バスの時間は過ぎていく。帰る手段を失ってしまった。ここから家まで歩くとなると、日付が変わるところの話ではなくなってしまう。

「僕が送ってあげるよ。送るって言っても、タクシー代を出してあげるってただけだけど。ああ、遠慮はいらないよ。僕にも大人としての責任があるからね。未成年をこんな時間まで連れ回しておいて、用事が終わったからほっぽり出すような、常識外れなことはいないさ。それに君の力もみせてもらったし。これぐらいはお安い御用だね」

この男に借りを作りたくはないが、さすがにこの時間は遅すぎる。もしかしたら、家である二人が騒いでいるかもしれない。急いで帰らないと、後で何を言われるか。渋々、と言うのはタクシー代を出してもらおう立場としてよろしくないが、それでもやはりこの表現が今の気分としてはぴったりだ。ブローカーの好意に甘えることしよう。重い腰を上げ、寝違えた首を気にしながら上着を受け取り外に出ると、既にタクシーが待ち構えていた。もし僕が申し出を断っていたらどうしていたのだろう。いや、それも計算済みか。

「何もないと思うけど、一応気をつけて帰ってね。それじゃ、運転手さんよろしく！」

タクシーは僕から行き先を聞くことなく走り出す。タクシーが走り出したのを確認したブローカーは見送りのも早々に、自分の住処に潜っていった。もう僕に用はないみたいだ。

タクシーは商店街を抜け、街の中心部を走り続ける。真夜中が近いと言うのに、街ではたくさんの人が交差点を行き交い、ビル上のネオンがけたたましく点滅している。この時間の街を見るのは初めてだ。毎朝、苦しそうな顔で歩いているサラリーマンも、不機嫌そうに化粧を直すOLも、皆一様に笑い合いながら、おぼつかない足取りで練り歩いている。悩みの欠片も感じさせない、陽気な雰囲気だ。僕もあんな風に笑ったら、少しは楽になれるだろうか？　しば

らく笑ったことがない。高校に入ってから、おもしろい事や楽しい事、笑顔が自然とこぼれるような事は、何一つなかった。毎日に絶望し、時間が過ぎ行くのを待っているだけ。そして、その苦しみを解決する唯一の方法も失ってしまった。二度も同じ場面、死に至るような高さから落ちると言う状況に陥りながら、僕は生きている。もう僕は死ぬことすら許されない。自ら死を選ぶことが出来ない体になってしまった。このまま寿命を迎えるまで、苦しみ続けなければいけないのだ。あまりにも、残酷だ。

街を通り抜け、マンションが建ち並ぶ居住区域に差し掛かる。どの建物も高級感がなく、薄汚れている。その中の一つ、全く同じ外観の七階建てが五棟、綺麗な平行線を描いている場所へとタクシーは進んでいく。一番端にある五棟目の階段入り口前で停車すると、後部座席の扉が開く。メーターが止まり、表示された代金を見て大事なことを忘れていることに気がついた。

ブローカーからタクシー代をもらっていない。

あの男、タクシー代を出すと言っておきながら、僕にお金を渡す前にタクシーを出発させていた。財布には今日の帰りに使うはずだった電車賃しか入っていない。タクシー代など払えるわけがない。

「代金は前払いで頂いておりますので、ご安心ください。それでは足元にお気をつけて。お忘れ物のないように」

タクシーは、白色の蛍光灯で照らされた入り口で僕を降ろすと、来た道をなぞるように街へと走り去っていった。僕の背後には、街灯と廊下の灯りでぼんやりと闇に浮かぶ、見慣れた建築物が揺らめいている。この時間であれば確実に帰宅しているであろう、あの二人はどうしているだろうか。緊急連絡用であるはずの携帯には着信がない。まだ帰ってきていないのであれば、それでいい。階段で四階まで昇り、四二九号室を目指す。鍵を開けて中を覗くと、リビングは真っ暗だった。胸を撫で下ろし、玄関の電気を点けると、いつもは見ることもない革靴とハイヒールが、綺麗に並んでいた。

帰ってきていた。

僕が家を出ている事に気付いていない。

物音を立てないように部屋に入り、そのままベッドへ倒れこむ。

考えるのはやめよう。考えたって何にもならない。疲れた。体中が痛む。

壁？

「……なのでプリントを忘れた者は明日までに必ず提出するように。後、山下なんだが、どうやら難しい病気にかかったみたいでしばらくお休みするそうだ。ご両親から連絡があつて、ゆっくりと休んで治療をすれば完治する病気だから、しばらくはそつとしておいて欲しいとの事だ。皆、心配かもしれないが、山下のために連絡は控えてやってくれ。連絡事項は以上だ。一時間目は化学か。遅れずに移動しろよ」

山下が学校を休んだ。遅刻や早退をすることはあつても、担任にしっかりと連絡を入れて、朝から学校を休んだのは初めてだった。担任は難しい病気としか言わなかった。山下の両親から詳細を聞かされていないのか、聞いているがクラスメイトに話す事ができないのか。どちらにしても、昨日の夜、廃ビルでの出来事が原因なのは間違いないだろう。原因を知っている分、なんだか複雑な気分だ。変な罪悪感が込み上げてきて、クラスの奴らの何気ない視線が、僕を責め立てるようなものに思えてきてしまう。クラスの奴らが廃ビルでの事を知っている訳がないから、僕の被害妄想なんだろうけど。最近、考えすぎなところがある。なるべく考え込まないようにしよう。その方が、いくらか気分がマシになるはずだ。

その日はとても平和な一日だった。山下がいないだけで、こんなに何も起きないなんて思いもよらなかった。皆の中で、僕は存在しない人間として扱われ、誰一人として関わってくる事はなかったし、目立っていたいじめに合うこともなかった。浅野と菊池も僕の前に姿を現さなかった。放課後になるまで、僕はずっと一人で僕だけの時間を過ごしていた。HR終わりですぐに教室を出ても、僕を呼び止める人間はいない。いつもの場所に連れて行かれ、理不尽な暴力を受ける事もない。僕は真直ぐに家に向かう。本当にとっても平和な一日

だった。校門でブローカーに会うまでは。

「やつほー森黒君！ 体の調子はどうだい？ 昨日はいいだけ殴られてたから、松葉杖でも突いてるんじゃないかと思っただけど、案外丈夫なんだね」

「……」

「いやだな、冗談だよ。そんな嫌な顔しないでよ。せつかく面白い情報仕入れてきたんだからさ。どう？ 聞きたい？」

校門前で待ち受けていた、紺のベストにカーゴパンツを穿いたメガネのハンチング帽は、人懐っこい笑顔を浮かべながら、馴れ馴れしく呼びかけてくる。ここでの立ち話を避けるため、知らない人を装いながら、ブローカの前を通り過ぎる。出来ればこのまま帰りたい。

しかし、ブローカーはそんな僕にはお構いなし、自分で「聞きたい？」と言っておきながら、反応を待たずに、僕の進路を遮り、勝手に一人で話し始める

「山下君についてちょっと調べてみたんだ。なに、ちょっと暇な時間があったもんだからさ。僕、好奇心の塊だから、一旦気になり始めると、調べ尽くさないと気が済まないんだよね。それで、調べて行く内に、なんで山下君が君をいじめ始めたのかがわかったんだよ。これがまたおもしろくてね」

ブローカーはベストのポケットから茶色の手帳を取り出し、ぱらぱらとめくり始め、びっしりと書き込みのあるページで指を止めた。

「まず彼の家族構成ね。両親と彼の三人家族。一人っ子なんだね。道理でわがままなはずだ。父親は某有名企業のお偉いさん。母親は元フライトアテンダント。まあ、君のこの学校はこんなのばかりだから、別段珍しくもないね。父親は学生時代から優秀な成績を修め、苦勞することなく今の会社で出世コース。入社一年目で今の奥さん、山下君の母親だね、に出会い二年後に結婚。なかなか羨ましい人生だね。ん？ ああ、なんで父親の経歴ばかりなのかって事かい？ 彼と父親の関係が重要だからさ。ご覧の通り、父親は成

績優秀、順風満帆。自分の思い通りの道を進んできた偉大な父親は、自分の子供にも同じような、それ以上のものを期待したんだ。でも残念ながら、山下君は父親程の才を持っていなかった。中学ではどれだけ勉強しても成績は伸びなかったみたいだね。そのことに父親は不満を持っていったようで、かなりのプレッシャーを与えていたみたいなんだ。そのプレッシャーを受けて、努力して努力して、一生懸命やった結果、君と同じ幡ノ橋高校に合格したんだって。これで父親も少し満足したみたいだね。やればできるじゃないか、みたいな感じ？ そんなんで少し落ち着いたと思った矢先に登場したのが森黒君だった。レベル圏外の中学から這い上がってきた優秀生。不可能を可能にした努力人。一瞬にして話題を搔つ攫つた君の存在を知った彼の父親は、若干、機嫌を損ねたらしいよ。それでも世の中には、たまにそんな急成長をする奴がいるもんだ。って無理矢理納得してみたい。でもその後の君の急降下っぷりを知った父親は、遂に怒り爆発。山下君をかなりの勢いでしかりつけたらしいよ。低俗な凡人がまぐれで入れるような学校に、お前はあんなに苦労して入ったのか！ なのためにお前に金をかけたと思ってるんだ！ そんな事を延々言われたんだってさ。空手部も、彼がやつと見つけた唯一熱中できるものだったのに、入部して数ヶ月も経たない内に強制退部させられて、家で厳しい家庭教師をつけられる始末なんとも残念な結果だね」

ブローカーは手帳の書き込みを指でなぞりながら一気に話し終えると、手帳を閉じ、さらに話し続ける。

「そんな訳で、父親に叱られた山下君は、行き場のない怒りや不満を君にぶつけてたって事みたいだね。それになんだか君と境遇が似てるよね。自分自身を見ているようで嫌だったんじゃないのかな？

自分の子供を信用せずに相対的な評価しか下せない父親と、責任転嫁で八つ当たりをするその息子。正にこの親にしてこの子ありだね。全く滑稽な親子だよ。でも僕、この手の人間は嫌いじゃないんだよ。プライドだけで生きているような人間は、最高に扱いやすい

からね。そう考えると、少しかわいそうな事しちゃったかな。まさかあんなになるまでメンタルが弱いなんて思いもしなかったよ」

ブローカーは何か知っているような口ぶりだった。実際、知っているのだろう。山下親子がどんな事になっているのか。

「どうだい？ なかなかおもしろいだろ？ 昼ドラにでもしたら人気でるんじゃないかな。ある一家が転落して行く姿を描く、ドロドロの三十分ドラマ。いやいや、これはなかなかの題材だね」

不快だった。他人の不幸を喜び、不謹慎な例え話をするブローカー。その表情は、実に満足気で、輝きに満ちている。心から楽しんでいる人間にしか出来ない、そんな表情だ。

「なんだよ。何か言いたそうな顔だね。どうせ不謹慎だとかデリカシーがないか思ってるんだろ。別にどう感じようがどうでもいいけどさ。なら君はどうなんだい？ 学校から出てきた君は、晴れ晴れとしてたけど？」

そんなことはない。とは言えなかった。ブローカーに遭遇するほんの数秒前まで、僕は平和な一日に満足していた。山下がいない一日がこんなにも良いものなんだと噛み締めていたのだ。他人の不幸がもたらした、己の幸福に喜びを感じていたという点では、ブローカーとなんら変わらない。

「まあ、本当にどうでもいい事だね。人間なんて皆そんなもんさ。気にする必要はないと思うよ。そうそう、後もう一つ君に伝えることがあったんだよ」

今度はカーゴパンツのポケットを漁り始めるブローカー。そこから出てきたのは、安っぽいオレンジが鮮やかなインスタントカメラだった。

「覚えてるだろ？ 取引の品であり、勝者への品だったこのカメラ。結局勝負はあやふやなまま終わっちゃったから、君との取引が優先されるけど、どうする？」

どうするも何も、今更な発言だ。最初取引の話をしていたのは僕なのに、山下が関わってきた途端、僕を後回しにして山下へ話を

持ちかけ、拳句の果てには本人が了承していないにも関わらず、勝手に対決の段取りまで進めていたくせに。よくそんな事が言えるものだ。

「君をいじめていた大本がああの状態だから必要ないとは思っただけだ。まだ君の返答を聞いてなかったから、一応ね。僕はどっちでもいいんだけど……って、あれ？ 向こうから猛ダツシュしてくる二人組、君の友達かい？」

振り返ると確かに二つの人影がこちらに向かって走ってきている。あの制服には見覚えがある。あの顔にも。先に到着した男子生徒は、息を切らしながらも怒りを露にした。

「やっぱりお前らグルだったんだな！ 山下に何しやがった!？」

「ん？ 悪いね少年。どこかでお会いしましたか？」

「お前、あの時塀に座ってた奴だろ！ 怪しいと思っただらやっぱり森黒の味方だったんだな！」

「……ああ！ 森黒君を取り押さえていた一人か。ごめんごめん。君みたいなサブキャラを覚えてられるほど僕の脳みそには余裕がなくてね。ちなみに、森黒君の味方つても少し違うね。強いて言うなら………なんだろう？ 微妙な立場だからうまい表現がみつからないな。君はどう思う？」

「知らねえよ！ それぐらい自分で考えろ！」

「おい、もうやめようぜ浅野。もう関わらない方が……」

気付かなかったのか、または気にしていないのか。ブローカーのサブキャラ発言に全くツツコミを入れない浅野。頭に血が上って興奮しているようで、全く会話が成り立っていない。それとは対照的に、今すぐここから離れようと提案する菊池。何に怯えているのか、オドオドした様子で目が泳いでいる。

「はあ。君達、なんのために来たんだい？ 用がないなら遠慮してもらえないかな。僕は森黒君と大事な話をしているんだ。それとも

君達も山下君のようにになりたいかい？」

「……っ！」

ブローカーの言葉に凍りつく二人。その言葉は、隣にいた僕でさえ背筋が凍る、恐怖そのものだった。

「……あ……浅野……」

「くそ！ この……」

ブローカーから僕へと視線を移した浅野は、苛立ちや憎しみを込めた声で、はつきりと、言った。

「……バケモノ……！」

浅野と菊池は逃げるように走り去り、校舎へと吸い込まれていった。

「あははは。見事な雑魚っぷりだね。現代において彼らのような鉄板キヤラは非常に貴重だ。絶滅危惧種に指定して保護してあげたいぐらいだよ」

ブローカーは楽しそうだった。あんなに恐ろしいオーラを放っていたのに、まるで軽い悪戯が成功して喜んでいる子供のようだった。でも、僕はそんなブローカーより、浅野の言った言葉が気になった。

「……バケモノ」

バケモノ。僕を真直ぐ見て言っていた。

「あれ？ もしかして気付いてない？ 相変わらず鈍いね君は。今日の朝からずっと、周りから変な視線を感じなかったかい？」

周囲からの変な視線。クラスメイトからの、僕を責め立てるような視線。

「学校中に噂が広まっているみたいだよ。バケモノ。森黒正人はバケモノだってさ。誰が広めたんだか、高校生にしては陳腐で幼稚な表現だね。それにその噂をすぐに信じてしまうこの生徒達も愚か極まらないね」

僕はバケモノ。

コンクリートの建物を壊し、飛び降りても死ぬことはない。

バケモノ。人間ではない、何か。

「なんだよ、テンション低いな。ひょっとして傷ついてる？ 気に

することないじゃないか。所詮、自分一人じゃ生きていく事もできない、微弱な生物が立てる物音に過ぎないんだから。一々そんなことで傷ついていたら、時間とエネルギーを無駄にしてしまうよ？ あんなやつらの所為でそれが無駄になるなんて、僕は耐えられないね」

珍しく慰めるように話すブローカーだったが、今の僕には全く聞こえない。聞こえてはいたけれど、それこそ、ただの音としか認識できなかった。

気のせいだと思っていた、考えすぎだと思っていた、いつもと違う雰囲気、いつもと違う視線。全てに理由があった。全てに原因が存在していた。気のせいではなかったのだ。皆、影で僕のことをバケモノと呼び、ある者は憎み、ある者は恐れ、そして誰もが僕との関わりを拒んでいたのだ。私立幡ノ橋高等学校二年五組、出席番号二十二番。森黒正人は存在しない生徒から、存在してはいけないもの、この世にあつてはいけないものになっていた。バケモノ、だ。

どこまで詳細に、どこまで本当のことが噂されているか知らないが、一日も経たない内に、僕が不思議な力を持っている、もしくはそれに相当する何かがある、と言うことが広まっている。よく考えれば、僕が自殺を謀り、退院した後の学校でもそうだったではないか。なんで気付かなかったのだろう。全く馬鹿だ。どうしようもない。度し難い阿呆だ、僕は。

手に入れたのは平穩ではなく、本当の孤独。

失ったのは敵ではなく、自分の存在。

これからは体に刻まれる傷が減るだけで、結局の所、何も変わらない。僕の日常は、大嫌いな日常のままなのだ。

「僕が何を言ったところで、君自身の問題だからね。まあ、参考程度にしといてくれればいいよ。とりあえず君に伝えたいことはこれだけ。カメラの取引もまだ答えが出せないみたいだから、また今度しようか。僕はいつでも、あのライブハウスで待ってるからね。だから、僕としては非常に残念だけれど、君の密着取材もしばらく

保留にさせてもらうよ。約束だ。契約は守って当然、つてのが僕の信条だから。君が取引の返答をしない限り、僕もしつこく付きまとうようなことはしない。ただ、知り合いとして、偶然街で出会ったりした時ぐらいは話かけても良いよね？ よし。じゃあ僕はこのへんで」

ブローカーは僕に背を向けて歩き出す。沈みかけた夕日で照らされ、輪郭がぼやけたビルの群れ。そこに紛れるように、ブローカーの後姿も夕日の逆光でくすんで行く。少しずつ、少しずつ遠くなるブローカーを、僕は呆然と立ち尽くし、見つめるしかなかった。

僕の視線に気付いたのか、ブローカーは急に振り返り、遠くから呼びかけてくる。

「ごめん！ 後一つ、聞いても良いかな!？」

今度は僕の様子を窺うように、少し間を空ける。

「君さ、本当に死にたいのかい？」

本音？

「……により本日午後六時を持ちまして、市内各所にて検問及び消毒ポイントの運営を開始致します。これは感染者の早期発見と感染拡大の防止を目的とした措置であり、今後、事態の沈静化が確定するまで無期限での運営となります。市民の皆様には、ご不便、ご迷惑をお掛け致しますが、重ねてご協力をお願い申し上げます。詳しい設置場所につきましては、既に各ご家庭にお送りしております資料や、各所にてお知らせ済みではございますが、ここで改めてご説明させて頂きます。まずは主要幹線道路の市境付近に各ポイントを設置し……」

たまたまネットのニュースサイトで目にした、市長の緊急会見の記事に興味を覚え、しばらく使っていなかった居間にあるテレビの電源を入れた。とりあえずチャンネルを一通り回してみたが、どの画面も同じ絵で、そこには神妙な面持ちで、用意された原稿を読む市長の姿が映し出されていた。どこかのホテルを使っているのか、高級感の溢れる会場で、広い室内にたくさんの報道陣が集まっている。市長の座っている席の横には大きなモニターが設置されていて、その反対側には市の職員と思われる人間がサポートのために待機している。座っているのが二人、その横の画面端にも三人の影が見える。市長は表情を曇らせつつ、横にあるモニターに映し出されている地図を使いながら、手元にある原稿を読み続けている。市長が動くたびにカメラのフラッシュが焚かれ、合いの手のようにシャッター音が鳴り響く。この緊急会見は午後七時から始まったようで、各テレビ局はゴールデンタイムの人気バラエティ番組やドラマ放送を急遽取り止め、特番を組み現場からの生中継でこの模様を伝えている。画面右上に表示されている「LIVE」の文字だけが楽しそうにくるくる回っている。今、この市限定で起きている大事件を目前にしている、市の対策とその協力を呼びかける会見だった。

失声ウイルス。

そう名づけられた新型ウイルスがこの街を襲っている。最初にその名を聞いた時には、単純で安易なネーミングから単なる俗称だとばかり思っていたが、ニュースや新聞、医者、専門家の間でも使われている正式名称だ。その存在が始めて発見され世に伝えられてから、今までに感染者が五名も出ている謎のウイルスで、その名が示す通りの特性を持ち合わせている。初期症状には、咳、痰、喉の痛み、かすれ声などがあり普通の風邪と見分けがつかない。しかし、その症状を単なる風邪と思い込み、放置もしくは間違った対処法を施してしまうと、症状が悪化しこのウイルス最大の特徴が感染者を襲うことになる。

声が出なくなるのだ。

ウイルスがゆっくりと確実に感染者の細胞を蝕み、人体で声を出す役割を担っている声帯が破壊される。昨日まで普通に喋っていた人が、次の日には口から何の音も発することが出来なくなるといふ。今までの感染者は全員、病院での検査の結果、声帯が完全に破壊されているのが確認されている。謎の多いウイルスで解析に時間が掛かっているらしく、感染経路どころか正体すらほとんど掴めていないと報じられている。よって当然の如く治療法や特効薬も今の所は存在しない。感染したが最後、声を失う覚悟をしなくてはならない。この正体不明のウイルスが猛威を振るい始めたのに対して市も危機感を感じたのか、非常事態宣言を発表して対策を講じ始めた。それが市長の言う消毒ポイントの設置と検問開始のようだった。そして、その対策開始に伴って今回の会見を行っているというのが事のあらましだ。

ただ、市の対策に対して世間の反応は冷ややかなようだ。

このウイルスに感染した患者が初めて発見されたのが、およそ一ヶ月前になる。その後一週間もしない内に二人目の感染者が発見さ

れ、その後も三人目、四人目と続けざまに発見されるも、市は何の対策も打ち出すことなく現在で五名もの感染者を出すに至った。慌てた市が今になってこの対策を始めたものの、遅すぎた対策として大いに批判を浴びている。

一部の局では市の対策や今回の会見に対して視聴者からの意見を募集していて、番組宛に怒りのメールやファックスがどんどん届いているようだった。アナウンサーがその一部を紹介して、コメントーターや専門家と意見を交わしている。

市民の怒りが膨れ上がっているのも当然だ。と言うのも、三人目の感染者が報告された時には、既に市民の間で失声ウィルスの存在がまことしやかに囁かれていたのだ。噂話、メール、インターネット等々、現代社会で情報を共有する術は多数存在し、そのどれもが個人レベルで簡単に使いこなすことが出来る。さらに、悪い話というものは尾ひれを付けながら加速度を増して広まるものだ。ウィルスの特性、感染者の末路、対策がないという事実、真実と虚偽が入り混じりながら交錯し、生き物のように一人歩きする情報がほぼ全市民の耳に行き届いていた。そんな折に、緊急事態宣言と共にウィルスの存在が公表された。心のどこかで、都市伝説や作り話だと思いついていた、そうであって欲しいと願っていたものが、実在の物として正式に認められたのだ。誰もがその恐ろしいウイルスに恐怖した。一部では細菌兵器によるテロ攻撃の実験ではないかという物騒な噂まで飛び交い、市内を緩やかな混乱が包むようになっていた。

対策がないのならば、感染しないようにすればいい。

追い詰められた市民達は拳ってマスクを買いあさり、街中は口元を布で覆った白い集団が行き交う異様な光景に様変わりしていた。さらには、マスクの需要が急激に増えたため一時的に市内のありとあらゆる店からマスクの在庫が消えてなくなるという事態まで起き、県外の販売店にまで買い求める客が押し寄せることがあったらしい。「……以上が設置ポイントとなっております。次に、このウイルス

の特徴や感染した場合の症状、予防法に関してご説明させて頂きま
す。まず、このウイルスは今までに発見例のない新種のものであり、
感染経路などは現在調査を……」

相変わらず曇った表情で、手元の原稿を読み続ける市長。もう市
民には知れ渡っている情報を、あたかも自分たちが最初にこの情報
を公表し始めたかのような言い回しで、同じことを何度も繰り返し
読み上げる。

そして、最後に対策が遅くなってしまったことに対する謝罪文を
読み上げ、深々と頭を下げた所で会見は終了した。記者達から質問
を受けるつもりはないらしく、市長と市職員達はカメラのフラッシ
ュと記者達の声で騒がしくなる会場から、逃げるように退室して行
く。その騒然とする会場をバツクに、カメラはスタジオへと切り替
わりアナウンサーが番組を進行する。

全く反省の色が見られない。それが見終わった後の印象だった。
この会見を行った市の意図としては、市民に謝罪をしたうえで注意
を呼びかけたという既成事実を作る為だけに行ったようなものと思
える。このウイルスや市の対策に関して、ほとんど気にも留めてい
なかった僕がそう感じるのだから、関心を持っている市民や、まし
て被害者に見ればとんでもなくふざけた放送だっただろう。番
組でもコメンテーターが苦言を呈している。

スカスカな内容も去ることながら、謝罪文を呼んでいた時の市長
の態度は酷いものだった。死んだ魚のような目で、だらだらと面倒
臭そうに印刷された原稿を読み上げる。たぶん、その謝罪文も誰か
に書いてもらったものだろう。罪悪感だとか誠意といったものは一
切感じられない。謝罪と呼ぶには程遠い、最低最悪な内容だった。
今頃番組宛に送られてくる怒りの量が上積みされていることだろう。

ただ、僕には関係のないことだ。いくら市が対策を講じた所で、
いくら市民が騒ぎ立てた所で、僕の日常には何の影響もない。変わ
りようがない。話をするような友達などいないし、僕の両親として
社会に組み込まれているあの二人とも、ここ一年ほどまともに話を

したことがない。僕がこのウイルスに感染して声を失っても、僕を含め誰も困ることはないし心配する人間などいない。下手をすればそのウイルスよりもたちの悪い存在として全校生徒から認識されている僕だ。いつそのこと、ウイルスに感染して隔離してもらった方が、僕自身にとっても、僕の周りにいる人間にとっても、好都合なのかもしれない。失声ウイルスなど、本当にどうでもいいことだ。明日も大嫌いな学校だ。考えるだけで気持ちが不安定になり、吐き気が襲ってくる。

ちよっかいをかけられたり殴られたりする直接的ないじめがなく なって少し楽になったと思っていたけれど、そうやっていじめられていた時期の方がまだ良かったかもしれない。居場所がないのに、そこに居続けなければいけないというのは本当に辛い。それでも行かなくてはいけない。逃げることの出来ない僕は、死ぬことの出来ない僕には、それしか方法がないのだから。

失声ウイルスの存在が認識されるようになってから、その脅威がもたらす影響は様々な場所に広がってきている。建物の入り口には例外なく消毒用のエタノールが設置され、公園や公共施設からはゴミ箱が消えた。外を出歩く人の数も激減し、テーマパークやレジャ―施設は大打撃を受けているようだ。地下鉄の駅では人数を増やしているのか、普段あまり目にしない清掃員の姿を良く見るようになった気がする。

そんな中、僕の通う私立幡ノ橋高校もその影響を強く受けている。市街地の光景と同じで、口元を白い布で覆い隠した人間が校内を埋め尽くしている。生徒にマスク着用の強制はなかったのだが、教員は全員マスク着用を義務付けられていた。保護者への説明用にプリントまで配布される始末である。

「幡ノ橋高等学校では衛生管理の徹底に伴い、教員全てにマスクの着用と入室時の消毒を義務付けております。生徒へのマスク着用は

自由とさせていただきますが、各ご家庭でのご協力をお願いいたします」　だそうだ。

一般的に販売店で売られているマスクの機能としては、咳をした時に周りにその咳が飛散しないようにするのが目的なので、健康な人間がマスクをしているのは少し方向がずれている気がする。むしろ、私は他人にうつる可能性のある菌を持っています　と宣言しているようなものではないだろうか。

それにもかかわらず、この学校の人間、ひいてはこの街の人間ときたら。

「ウイルスが蔓延しているというのにマスクをしないなんて有り得ない」

「マスクをしていない奴は一体何を考えているんだ」

「もし感染したら責任を取ってくれるんだろうな」

そんな独りよがりな考えに支配され、マスクを着けて外出しなければウイルスそのものとして扱われてしまうような雰囲気になってしまっている。

その結果、ニュース等では「この市に住んでいる人間のマスク着用率ほぼ百パーセント」という、それを公表したところで一体何の足しになるのか、全く訳のわからない分析結果が話題となっている。しかし、それはこの街を包む異常な空気を最も的確に現している表現でもある。この街は今、何から何までおかしくなっているのだ。

結局、この街の雰囲気と同調しておかしくなっている我が校の生徒達も、自身はもちろん、他人においてもマスク着用を絶対条件としている。授業中であろうと、休み時間であろうと、ウイルスの被害者、または加害者になりたくないという気持ちから、全ての人間が常にマスクを身に着けている。僕としてはこの考え方に賛同したくはないのだが、学校全体がこの状況なのでマスクを常に着用することにしている。逆らったところで良いことはない。

お陰で、教師と生徒はお互いに声が聞き取りづらく、授業中に何度も質問を聞き返すような場面が頻繁に起こり、共にイライラして

しまつような授業風景だ。昼食の時間はマスクをはずさなければ食事ができないので、全員が自分の机で一言も喋らずに、黙々と食事を取ると言う有様だ。このウィルスが発見されるまでは、仲の良い者同士が集まって、楽しく笑い合いながら食事をしていたのに。今ではまるで、刑務所での食事風景のようだ。

そんな殺伐とした校内に、少しだけ良いニュースが舞い込んだのは二週間前のことだった。

我が校で、主に一年生の国語を担当している、水津野先生に赤ちゃんができていたのだ。

水津野先生はどんな時でも穏やかで優しく、授業もわかり易いと評判の人気教師だ。この学校の教師たちの中ではまともな部類の間であることに間違いない。僕が一年生の時は、僕の成績について心配し、勉強の仕方や文章を読み取るためのポイントなど、真剣に話をしてくれたこともあった。あの時のことは今でも覚えている。初めて頼れる先生に出会うことができ、嬉しくて涙が出そうになった。

その水津野先生は、ここ最近体調不良でずっと休んでいた。性格の悪い我が校の生徒達も、この時ばかりは口を揃えて、心配だ、不安だ、と気持ちのこもった口調でお互いに話し合っていた。先生の休みが続くにつれて、生徒達の心配も膨れ上がり、遂には悪い方向の噂が広まるようになっていた。この学校の生徒達は、どうしてこうも、なんでもかんでも噂話として広めたがるのか。でも、この話に限っては僕も奴らと同じ心境だった。見るからに儂げな先生が何日も学校を休むとなると、何かあったのではないかと考えてしまうのが普通だ。

しかし、真相は赤ちゃんを身ごもったという、なんとも喜ばしい出来事だったのだ。もともと体力がなく妊娠で弱っていた上に、初めての経験で緊張と不安からずっと体の具合が良くなかったようだ。学校側もそんな先生を気遣って無理に授業をさせることはなく、自習の時間にしたり、特別講師を招いての授業に変更したりと、水津

野先生が抜けた穴を、あの手この手でなんとか埋めていた。

僕自身は、水津野先生が結婚し、さらには赤ちゃんができていたという知らせを聞いたときは、なんだか微妙な気持ちになったが、それでも、久しぶりに学校へ来た水津野先生が幸せそうに笑っていたから、悪い気分にはならなかった。

そして、今日から水津野先生は産休に入るため、臨時教師が来ることになっている。うちのクラスを担当している国語教師が水津野先生の代わりとして一年生を担当し、臨時教師がその隙間を埋める形となる。普通ならその臨時教師が水津野先生の代わりに一年生を担当することになると思うのだが、うちの学校は何を考えているのか、さっぱりわからない。ただ、クラスの奴らはその臨時教師に興味津々で、授業が始まる前からあることないこと、色々な噂が教室を飛び交っている。

「背の高いイケメン教師って聞いたよ」

「正統派の若手って話だったけど」

「セクシーな女教師がいいな」

「定年ギリギリのおじいちゃんだったりして」

このクラスの連中は臨時教師に対して、教師としてのスキルよりも、どんなキャラクターでどんな容姿なのかという部分にのみ期待をしているようだ。

教室の扉が開く音がした。騒がしかった教室が一瞬にして静まり返り、皆が開いた扉に注目する。スローモーションのようにゆっくりとスライドする扉。時間の流れ自体が遅くなっているのではないかと錯覚を起こしてしまいそうになるくらい、扉は音も立てずに動いている。演出家でもいるのか、素晴らしい焦らしのテクニクにより臨時教師の姿はまだ見え、クラスメイトの緊張感と期待は最高潮だ。静かな教室に心臓の鼓動が鳴り響く。

そして、すぐに期待は落胆へと変わる。

入ってきたのは、皆の予想を裏切るうす汚れた男性だった。細身

の体にくすんだ茶色のスーツを纏い、白髪混じりでボサボサの髪、丸眼鏡がいかにも国語教師風で印象的だが、音もなく歩くその姿からは存在感というものが感じられない。年齢は四十代ぐらいだろうか。教師全員に着用が義務付けられているマスクが、異常なまでに似合っている。見るからに弱々しくて頼りにならないような風貌で、こここの生徒達から馬鹿にされるようなことになっても仕方がないな、というのが第一印象だった。

この教師が入ってくる前とは、違った意味での静寂が教室を包む。皆、どうリアクションしていいのか悩んでいるのだろう。周りを見渡すと、クラスメイト全員が凍りついて固まったまま、やってきた臨時教師を見つめていた。中には開いた口が塞がっていないやつまでいた。

教師は教壇に立つと、今にも消えてしまいそうな声で自己紹介を始めた。

「おはようございます。本日から皆さんの国語を担当します、田本茂といいます。水津野先生が復帰されるまでの非常勤なので、皆さんと共に学ぶ期間は短くなると思いますが、よろしく願います。ではさっそくですが授業を始めたいと思います。教科書の……」

マスクを着けている分、声が聞き取り辛いと言つのもあるが、元々の声量がないからか教室が驚くほどの静寂に包まれているにも関わらず、聞き取るのがやっとのか細い声だった。このクラスで初めての授業だから緊張しているのかもしれないが、それにしても声が小さすぎる。

授業を始めてもその声の小ささは変わることなく、生徒に背中を見せ、黒板に向かってチョークを走らせている時はほとんど聞こえない。字を読み上げながら書いているみたいなので、辛うじて理解できる程度だ。授業を受ける身としては堪ったものではない。これでは授業がわかりやすいとか、説明が下手だとか、そう言う評価以前の問題だ。授業自体も、生徒に質問をして答えさせるなんて場面は一切なく、淡々と作品を読み進め、黒板に重要な文を書き出して

はその文の解説とポイントをノートに取らせ、その説明が終わるとまたひたすらに文を読み進める。教師が勝手に授業を進め、生徒がそれについて行くような授業スタイルだ。良くいえば堅実、悪く言えば退屈な授業。事前に予習をして完璧な状態で授業に臨み、その先を学びに来ているここの生徒達にしてみれば、受ける価値のない授業なんだろう。時間が経ち、授業が進むに連れて、どんどん教室の空気が悪くなって行くのが伝わってくる。

しびれを切らした一人の生徒が、突然立ち上がり田本にいらだちをぶつける。

「先生！ 声が小さくて聞こえません！ もう少しはつきり喋ってください！」

「ああ、すみません。ただ、僕は元々あまり声が出ない体質なので我慢してください。マスクも義務なので外すわけにもいきませんので。もし聞こえないのであれば言って頂ければ、もう一度同じことを言います。なので、僕の授業中は、皆さん静かにして下さい」

それだけ言うと、田本はまた同じ調子で黒板にチョークを走らせる。

文句を言った生徒は大げさに音を立てながら席に座る。口では言えない不満を音として表現しているようだが、田本はそんなことなど気にしていないようで、振り向きもせず黒板に向かっている。

これで、クラスの奴らは完全に田本を見限っただろう。

「こいつには何を言っても無駄だ」

「こいつは自分よりも頭の悪い教師だ」

「こんな奴から学ぶことなど、一欠片もない」

たぶん、こんな所だ。

可哀想に。この学校の生徒達を敵に回すということがどう言うことになるのか、田本は今後、身を持って体験することになるのだ。

田本の教師生活も、長くは持たないだろう。

その日は、そのまま田本が一人で授業を行い、時間いっぱいまで教科書を読み進めた。チャイムが鳴り、田本が教室から出ていくと、

不満やら怒りやら、至る所からクラスメイトの愚痴が聞こえてくる。初日でこいつらにここまで怒りを与えるとは、田本も中々のくせ者だ。僕にとっては、これぐらいの授業内容の方がわかりやすいのだが。他の奴らは、やはり満足がいかないようだった。

どんなことになるのか、先が思いやられる。

本音？

水津野先生が産休に入り、それと同時に田本と言う教師が臨時で僕のクラスの国語を担当し始めてから、一週間が経った。案の定と言つか、予想通りと言つか、生徒達からの田本に対する嫌がらせが始まっていた。

授業中、田本の話を書くものは誰一人としていなく、机の下で携帯をいじったり、漫画本を読んだり、携帯ゲーム機で遊んだりする者がほとんどになってきた。少し真面目な奴は、そういった勉強以外のことはしないまでも、別の教科の教科書を堂々と机に広げ、自習をする時間としている。しっかりと授業を受けている者はいない。田本もそれに気づいているはずだが、注意をしようとしめない。どこかで携帯電話の着信音が鳴っても、机に鏡を置いて化粧をしている生徒を見ても、授業を止めることなくひたすらに教科書を読み進める。

そして、そんな崩壊した授業を行う田本に対して、続々と保護者からクレームが届いているらしい。

「うちの子が授業に集中できないと言っている」

「内容がスカス力で受ける価値のない授業を進めるのはどういったことなのか」

「授業中に携帯が鳴っても注意しないなんて」

「うちの子の学力を落とすつもりか」

生徒自身が放棄している授業なのに、田本の所為で滅茶苦茶になっっているという、責任転嫁された意見がほとんどらしい。そういったクレームが起きるように仕向けているのは、他ならぬこの学校の生徒達だと言っのに。生徒達は田本をこの学校から追い出そうと、ありとあらゆる手を尽くしているのだ。休み時間に聴こえてきた話によると、今度はセクハラ被害というシチュエーションで騒ぎが起きるようになっているようだ。

本当にこの学校の生徒達は、気に入らないものに対する攻撃力が群を抜いている。一致団結とは、このことを言うのだろう。

しかし、この田本追出し計画は中止を余儀なくされることとなる。一週間に渡り執り行われてきた、生徒達による数々の嫌がらせも、田本を追い出すことよりも優先される、深刻な問題によってかき消される。

失声ウィルスの感染者が発見されたのだ。

被害者は同じ学年にいる生徒の母親だった。その母親の証言から感染したと思われる場所にこの学校が挙げられたようで、検査を行っていた病院からすぐに学校へ連絡が入り、事実が発覚した。その日は平日で、通常通りに教員や生徒達が登校していた。連絡が来たのは昼過ぎ。昼休み中だった校内に緊急放送が流れ、生徒達は、保健所が消毒と検査を終えるまで、校内に拘束されることになった。

病院から報告を受けてから間もない内に、保健所と連携を取っている警察がやってきて、見事な手際で学校の敷地にぐるっと隙間なく関係者以外立入禁止のテープを張り、情報を嗅ぎつけた報道陣がそれに沿うように何百人と詰め掛けた。学校は内も外も一時大混乱となった。生徒達は一度体育館に集められ、順番に検査と消毒を施された。それら全てが終わり、感染の疑いがないことを証明された生徒から帰宅の許可が降りる。外には報道陣と野次馬が集まっており、校門から生徒が自力で帰宅するのは難しいと判断され、急遽、消毒済みのバスが手配された。警察や保健所の職員が誘導する中、生徒を乗せたバスが人ごみを掻き分けて学校を後にするという、壮絶な場面が校門前で繰り広げられた。消毒済みバスはスクールバスと同じ順路を辿り、全ての生徒を送るために何度も同じ経路を往復する。僕がそのバスに乗り込んだときも満員状態で発車した。車内には不安と恐怖が入り混じった嫌な空気が充満していて、生徒達はいつも下車している停留所に到着すると、その空気を背負いな

がら疲れきった表情で降りて行く。僕が家についた時には午後八時を回っていた。

次の日は保健所が学校中をくまなく消毒するため休みになった。そして、今日は感染経路調査のため午前授業となっている。ただ授業は行わず、全校集会と担任からウイルス予防法などが書かれたプリントを配られただけで、昼前に生徒は帰された。

校門前には朝からずっと報道陣が群がっている。教員や警察が目を光らせて警備をしているが、報道陣も負けじと監視の目が行き届かない場所で生徒達に接触を謀っていて、申し出を断りきれない生徒や目立ちたがりの奴が、至る所で報道陣の餌食となっていた。僕にも、しつこく質問をしてくるマイクを持ったレポーターがついてきたが、無視を決め込むことでなんとか諦めてくれた。

安心して、学校から少し離れたいつものバス停を目指していると後ろから声を掛けられた。さっきのレポーターが諦めずにまたやって来たのかと思い、少し歩くスピードを上げる。するとそいつも慌てて走ってくる。なんてしつこいんだ。

「ねえ！ ちょっと待ってよ！ 森黒君！ 僕だよ！ 僕！」
妙に聞き覚えのある声だ。テレビのレポーターなんだから、どこかで耳にしているんだろう。本当にしつこい奴だ。もう全力疾走で逃げるしかない。

「何で死ななかつたのか、知りたくないかい!?」
駆け出そうとしていた足から、空気が抜けるように力が引いてゆく。なんだ？ 前にも同じような声で、同じようなことを言われた気がする。デジャブだ。となると、この声の主は一人しかいない。立ち止まって振り返ると、声の主も息を切らしながら速度を緩め、歩み寄ってくる。

「やっと止まってくれたね。全く、人の話ぐらいちゃんと聞いてくれよ。さっきからずっと名乗ってるのに。あと少して僕は自分の名前を十回も叫ぶ所だったんだよ？ 何が楽しくて公道で自分の名前

を十回も連呼しなきゃいけないのさ」

ぶつぶつ言いながら近づいて来たのは、やっぱりブローカーだった。いつものようにメガネにハンチング帽を被ったオシャレ詐欺師がそこにいた。僕を追いかけていた所為か、少し疲れているように見える。

「久しぶりだね。元気してた？ たまたま通り掛かったら、森黒君がすごいスピードでマイクを持った連中から逃げてたもんだから、何かあったのかと思って追いかけてきたんだよ。もしかして、僕のことその連中と勘違いしてなかったかい？」

凶星だ。でも、正直そのレポーターの方がいくらかました。山下との件では色々と力を貸してもらった部分もあったが、それでもブローカーとはあまり関わりたいと思わない。足を止めずに、そのまま走って良ければ良かったと、今更ながら後悔してしまう。

「それで、マイクの軍団にしつこく聞かれてたのはやっぱりあのことかい？ あの……なんちゃらウイルスだっけ？ 大変だね、感染者が出たんだろ？ それを嗅ぎつけてきた連中につきまとわれてたんだね。だから僕はマスクミが嫌いだよ。あいつら視聴率のためなら何でもするからね」

ブローカーにしては情報量の少ない発言だった。てっきり失声ウイルスについても、僕の学校から出た感染者についても、完璧に調べ上げていて、そのことをネタに話し掛けてくるものだと思っていたのに。ウイルスに対して興味が無いのか、名前すら覚えていないようだ。

そういえば、ブローカーはマスクをしていない。誰もがウイルスに怯え、被害者や加害者になりたくない一心でマスクを着用しているのに、余裕の表情だ。

「何？ 僕の顔になんか付いてる？」

本人には周りと違うという意識がないようだ。ブローカーなら当然か。それでも、マスクもせずに街中を歩けば、周囲からものすごく不快な視線を浴びるはずだ。それすら気付いていないのだろうか。

「ああ、マスクをしてないってことかい？ くっだらなねえ。マスクってのは人に菌をうつさないためにするものだろ？ 菌を持っていない人間が着けたって意味ないじゃないか。それに、もし万が一、マスクだけでウイルスが完全に防げるんだったら、医者や薬なんていらないうね。さつきからすれ違う人がみんな僕を変な顔で見えていったけど、僕からしてみれば、確かな情報も確認せずにマスクミヤ周囲の状況に流されて、これ見よがしに、当たり前のようにマスクをしている奴らの方が、よっぽどおかしいんじゃないかと思うね」

その口調からは、強がりや意地といったものは全く感じられなかった。ブローカーは心の底から、本気でそう思っているようだ。マスクの概念については、僕も同じような考えを持っているから共感できるのだが、軽蔑の視線を送るこの街の人間に対して、逆に憤りを感じ、自分の姿勢を貫こうとするあたりは、やはりブローカーなんだなと実感させられる。

この男は、僕が今までに出会ってきた人間とは、まるで違うのだ。自分で見て、自分で聞いて、自分で感じて。その情報を元に自分で判断して、自分で行動する。誰かに委ねるのではなく、誰かに流されるのではなく、ただ自分のみを信じて進んで行く。これだけ聞くと、とても立派で尊敬に値する人間なのだが、残念なことにブローカーの場合、その進み方が極端に自己中心的なのだ。

「それにさあ……………いや、これはいいかな。ごめん、今は忘れてよ。そんなことより、君に会ったら聞いてみようと思ってたことがあるんだよ。えっと……………ちょっと待ってね」

急に話題を変えたブローカーは、ゴソゴソとジーンズのポケットから携帯電話を取り出し、難しい顔をしながら画面を覗き込んで何かを調べ始める。最初に何を言いかけたのが気になるが、話す気がないみたいだし、それよりも何をし始めるのが気になってきた。また変なものを見せられるんじゃないだろうか。

「あつたあつた。これこれ。この記事んだけどさ……………」

差し出された携帯電話の画面に表示されていたのは、あの忌まわしきサイト。僕の情報を本人の承諾なしに勝手に公開し、その情報をおもしろおかしく楽しむ奴らが集まる吹き溜まり、スネッチだった。山下との一件があつて以来、見ないようにしていたのに。

「この記事さ、最近の援助交際の実情についてまとめてるんだけど、その援助交際をしている女子高生の中に欲望者がいるんじゃないかって書かれてるんだよね。この記者の調べによると、援助交際をしている最近の女子高生の一部には、何人も固定客と関係を持っていて、一回の援助金がそこらのとは比べ物にならないくらい高額を請求する子がいるんだって。それに、これはちよつと失礼な話なんだけど、当の女子高生本人は、その額とは全くと言つて良いほど釣り合わない容姿らしいんだ。記者自身も噂で聞いた程度で、実際にそういった子と接触してないから、本当の所はまだわからないんだけど、でもそういった子達の間ではかなり有名な話みたいなんだ。皆、男が何を考えてそんな奴に高額を支払ってるのか、訳わかんないってさ。それで、君の学校にもそういった噂だとか、実際にやつてそうな子はいないかなと思つてね」

「……………」

「ん？ どうした……ああ！ そうか！ ごめんごめん。僕もわかつているはずなのにね。いや、本当に申し訳ない。謝るよ。この通り。そうだよ、君、友達いないんだもんね。そんなこと聞かれてもわからないか」

絶対にわざとだ。これまで散々僕のことを調べ尽くしておきながら、今日の、今この時になつてたまたまその事実を忘れていたなんて、あるはずがない。僕の好みや行動パターンまで熟知しているであろうブローカーなら、なおさら有り得ないことだ。それに、そういった噂やうちの生徒の個人情報についても、ブローカーの方が詳しいはずだ。詳細に調べ上げられるはずなのだ。なのに、わざわざ僕に質問をしてくるなんて、わざととしか考えようがない。そうやって僕をからかうのが楽しいのだろう。

「自分で調べるしかないかあ。何かしらの情報は持つてるんじゃないかと思つて、ちよつと期待してたんだけどなあ。まあ、しようがないね。もし、このことに関して何か見たり聞いたりしたら教えてくれると嬉しいな。いつものように、あのライブハウスで待つてるからさ。もちろん、それ以外で僕の力が必要な時は、どんどん頼ってくれていいからね。君の力を調査する権利と引き換えだけど。じやあ、僕はさつそく情報を仕入れに行つてくるよ。それじゃ！」

それだけ言うと、ブローカーは足早に僕の前から去つていった。結局、ブローカーは何がしたかったのか、よくわからない。あいつが僕に接触してくる時は、必ず目的があつた。でも今回は、なんだかまとまりに欠ける会話で終わってしまった。本当に、ただ立ち寄つた先で僕を見かけて追いかけてきただけのようにも思える。とりあえず、僕には何の害もないから良しとしよう。それに、いつまでも制服姿でうろついていたら、またマイクを持ったレポーターに追い掛け回されてしまう。ここ数日は駅やバス停で待ち伏せている報道陣もいるみたいだし。早めに帰つて、家に籠つたほうが安全だ。

本音？

保健所による学校の消毒と調査が終了し、今日から通常通りの授業が再開した。学校内や生徒達、教職員全てに至るまで徹底的に調査が行われたみたいだが、特に異常は見当たらず、感染経路も不明のままだったようだ。校門前にはいまだに報道陣や新聞記者が張り付いていて、落ち着きを取り戻すことのできない学校は、不安や恐れが渦巻く、いつにも増して嫌な空気になっている。

しかし、問題なしと判断された以上、学校はその役割を果たさなくてはならないし、生徒達も勉学に励まなくてはならない。学校を休む生徒はほとんどいなかった。ウイルスがどこに潜んでいるかわからない状況では、家にいようが学校にいようが同じことだ。それならば、高いお金を払っている分、学校は始めてもらわなければいけないし、子供にも学校に行ってもらわなければならぬ、というのが保護者の考えだろう。そういったプレッシャーが、学校全体を覆っているように思える。なんとも気持ちが悪くて、居心地の良くない、最悪な雰囲気だ。

でも、僕にとってはこんな状況が日常茶飯事なので、慣れるのに然程時間はかからなかった。隣の席に座っている奴が不安な気持ちでいっぱいになっていても、教科書を読み上げる教師がイライラしていようとも、僕には一切関係ない。僕はこの学校では存在しない存在してはいけないものなのだから。誰も僕との関わりは望んでいない。僕はただ、時間が過ぎ行くのを、静かに黙って決められた場所まで待ち続けるだけなのだ。

学校の締めくくり、最後のHRが終わる。今日も一日、嫌な時間が平和に過ぎ去って行った。本来であれば、この時から教室は騒がしくなり、各生徒が自由な時間を過ごし始め、その空間が嫌いな僕は真っ先に教室を飛び出すのだが、今日からそれは全くの逆になる。

生徒は皆、テキパキと帰り支度を始め、我先にと教室を後にする。僕もその流れに乗って教室を出ようとしたが、廊下に出ていた人のクラスだけではなく、学校中のクラス全てで同じことが起きていたようで、玄関で生徒達による大渋滞が引き起こされているみたいだった。その人ごみに揉まれるのは気が引けるので、少し自分の机で本を読んで時間を潰してから帰ることにした。

しばらくして、廊下と玄関では生徒の帰宅ラッシュが止み、やっと落ち着いて帰ることができる状態になった。教室にも僕以外は誰も残っていない。読んでいた本を閉じて鞆にしまい、教室を出ようと扉に手をかけた瞬間、勝手に扉が開き廊下から誰かが入ってきた。見たことのない女子生徒だった。ロングの黒髪でいかにも金持ちのお嬢様といった雰囲気を漂わせている。制服は共通なので他の生徒と同じ物だが、制服以外の鞆や腕時計なんかが見るからに高そうな物だ。着用しているマスクもぴったりと口周りにフィットする、一般の販売店では手に入りにくい物を使っている。この学校で僕が最も苦手としているタイプの人間だ。

急に開いた扉にびっくりして立ち止まっていると、入って来た女子生徒が話しかけてくる。

「まだ私以外に残っている人がいたのね。あなた、このクラスの人よね？ ちょっと聞きたいんだけど、このクラスに森黒って男子いるでしょ？ そいつの見た目の特徴を教えてくださいんだけど」
その女子生徒は話をしながら、ゆっくりと僕のネームプレートを確認する。そこには森黒と真っ黒な掘り込みが刻まれた白のプラスチックプレートがぶら下がっている。

「……なんだ。あなたがその森黒なのね。探す手間が省けてちょうどいいわ。ちょっと顔貸してもらえる？」

こんな見ず知らずの女子が僕に何の用だろう。どうせ、いじめの類なんだろう。よくある手口の一つだ。女子達が作っている小さなグループの中で、ある勝負を行い、負けた人間が罰ゲームとして僕

に話しかけるといふやつだ。僕に話しかけてくると時のネタとしては、いじめられている僕のことを心配するような口調で近寄ってきたり、好意があり、友好関係を築こうとして話しかけてきたり、といった具合だ。もちろん、全ての場合において、最後には僕を笑いものにしてその罰ゲームは終了する。罰ゲームとは名ばかりの、単なるいじめ。本人達にしてみれば、僕に話しかけるといふ時点で、最大級の罰にあたるのだろう。

そういつた女子生徒達からのいじめの中で一番酷かったのは、僕が落としたものを拾って届けに行く、という設定のものだった。

「あの……これ、落としましたよ……」

そう言われて振り返って見ると、その女子が差し出していたのは、成人向けの雑誌だった。そして、その雑誌を強引に押し付け、僕が手にした瞬間に、陰に隠れて覗いていた残りの女子が登場し大声で喚き散らす。

「うわっ!? あんたそんなもの学校に持ってきてんの!？」

「あり得ない!」

「最低!」

「私達の事もそう言う目でいつも見てるんでしょ!？」

「キモっ!」

廊下中に響き渡る、耳が痛くなるような奇声。胸がむかむかする、わざとらしさ百パーセントの演技。どこをとっても最低最悪な仕打ち。しかし、女子達の狙いは僕を罵倒するだけではない。本当の目的はその次の展開にある。

「どうしたんだ一体! 何を騒いでるんだ!」

廊下の騒がしさに気づき、近くにいた教師が駆け寄ってくる。教師は女子達の様子を窺った後に、騒ぎの中心にいた僕の方へと視線を移す。当然、僕が手にしているものを目にし、勝手な想像力を働かせて、偽りの正義感と腐った使命感で状況を解釈し、判断を下す。「君、ちよつと来なさい」

こうして、女子達が企てた作戦は、見事大成功を収める。僕はその教師に職員室まで連れて行かれることになり、女子達は一様に満面の笑みを浮かべ、僕が連行される姿を見て満足するのだ。その後、僕はその教師から無実の罪で説教を食らう羽目になった。しかも、翌日にはそのことが学校中に広まっており、ひそひそ声で僕の悪口を言う奴ばかりになっていた。女子のいじめというやつは、男子のそれより遥かに周到で陰湿なものだと改めて認識した、最悪の出来事だった。

「さつきから何考えてるのよ？ 噂通り、変な人ね」

呆れ顔でそう言い放つ女子生徒。噂通りと言ったところからすると、僕については、周りで囁かれているネガティブな噂しか聞いていないのだろう。この学校で僕に関する情報など、そういったものしか存在しないのだから無理もない。

「とにかく、少し話があるからついて来て」

女子生徒は不機嫌そうに歩き出す。

考えても始まらないか。例え、待ち受けているのがいじめだったとしても、そうではない別の何かだったとしても、逆らわないのが一番だ。意地を張って逆らっても、僕にプラスになるようなことは絶対がない。ここはおとなしく、素直に指示を受け入れるのが最善だと、今までの経験が物語る。僕は黙って女子生徒の後を追うことにした。

彼女に導かれてやってきたのは、学校から歩いて十分程度のところにある、小洒落たファストフード店だった。レンガ造りのような外壁に品の良い緑色の看板が掲げられ、その下にはテラスが広がっており、年月を経て程よい色合いになった木製の机や椅子が並べられている。看板には「La maison de la brique」と書かれていたが、意味は元より読み方さえわからなかった。いかにも女性が好みそうな雰囲気のお店だ。実際、店内の席に座って

いるのは女性しかいない。男であり、こんなおしゃれな店に一度も入ったことのない僕にとつては、かなりハードルの高い試練だ。

彼女は慣れた足取りでテラスを通り過ぎ、店内の注文カウンターまで進んで行く。僕は慌てて彼女の後を追う。白のエプロンに看板と同じ色である緑の前掛けをした店員が笑顔で出迎えてくれる。彼女は既にカウンターでメニューに目を走らせていた。僕は彼女の少し後ろでカウンター上に表示されているメニュー一覧を何となしに眺める。

そのメニューを見て自分の目を疑った。本当にここはファストフード店なのだろうか。値段のレベルが違いすぎる。僕の知っているファストフード店と言えば、安い、早い、味はそこそこ、の三拍子が揃っているところばかりなのに、この店にはその三拍子が見当たらない。どうして一番安いハンバーガーでも五百円近くするんだ。飲み物とサイドメニューを付けたら、僕の昼と夜の食費を足しても足りない額になってしまう。

彼女はその値段を物ともせず、自分の好きなものを次々に選んでゆく。最終的に彼女の前に差し出されたのは、ハンバーガー、カフェエラテのMサイズ、フライドポテトのSサイズ、チーズケーキの合計四品。彼女はそれらがのったトレーを手に、店内一番奥の席に陣取った。財布に、今日の夜スーパで弁当を買ったためのお金しか入っていない僕は、何も注文せず彼女と同じ席に向かい合う形で腰掛ける。

「何も頼まないの？ 別にいいけど」

彼女は着けていたマスクを外すと、トレーにのっている包み紙を広げ、出来立てのハンバーガーをほおぼり始める。メニューの写真より少し小さいそのハンバーガーには、たっぷり野菜が挟まれていて、収まりきらないレタスとトマトが顔を覗かせている。その大きさをみると、やはり値段設定がおかしいんじゃないかと思ってしまうのは僕だけなんだろうか。

彼女は僕の視線を気にすることなく、そのハンバーガーを口いっ

ばい広げ、どんどんと食べ進めてゆく。仮にも異性がいる目の前で、こんなにも大胆な食事をするとは、この子はそれが当たり前の人間なんだろうか。たぶん、僕を異性ともみなしていないだけなんだろうけど。

あつと言つ間にハンバーガーとフライドポテトをたいらげた彼女は、カフェラテを一口飲んだ後、マスクを元の位置に戻し、フオークでチーズケーキを切り分けながらやつと話をし始めた。

「私は寺尾つて言うの。寺尾藍。あなたと同じ学年で一組。あ、別に覚えなくていいから。覚えられて親しげにされても迷惑だし、私があなたに話しかけたのはそう言った意味合いじゃないから。今限り、少し協力してもらいたいことがあつて。だから、あなたをいじめるつもりはないけれど、かと言つて知り合いになるつもりもないわ。噂のバケモノと関係があるなんて思われたら嫌だから。そこだけは理解しておいて」

バケモノ。

そう言われているのは知っている。それが学校中に広まっていることも。でも、それでも、面と向かつてはつきりと言われるのは胸が締め付けられるようだ。

「あなた、うちの生徒の保護者から失声ウィルスの感染者が出たのは知ってるでしょ？」

知っているも何も、その所為でここしばらく学校は混乱状態にあるのだから、嫌でもその事実が耳に入ってくる。うちの生徒で知らない奴がいたら見てみたいものだ。

「あれ、私の母親なの」

「……………!!」

突然の告白に驚いて、座っていた椅子を押し倒しながら立ち上がり、彼女から距離をとっている自分がいた。倒れた椅子の音が響き渡り、店内中の視線がこちらに集まってくる。

「……………当然の反応よね。バケモノにまで恐れられるなんて、貴重な経験だわ。まあ、あなたがどう思おうがどうでもいいけど。でも、

ここまでついて来たんだから、最後まで話は聞きなさい」

寺尾は皮肉を言いながらも、真剣な眼差しで僕を叱りつける。同い年のはずなのに、なんだか目上の人から説教を食らっている気分だ。

ただ、それも仕方のないことではある。無意識でそうしたにしても、立ち上がって寺尾から距離をとったということは、彼女もウイルスに感染していて自分もうつされるんじゃないかと、どこかで思っていることの証明になる。運悪く母親がウイルスに感染してしまっただけで、彼女は何も悪いことをしていない。そういった偏見で物事を判断するのは、自分が一番嫌っていることなのに。

僕が椅子を倒したことで、店内にいる人間と店員の全てがこちらに注目し、固唾を呑んで状況を見守っていた。申し訳ない気持ちを全面に放ちながら、椅子を戻し、また寺尾と向かい合うように座り直す。

「バケモノのくせに器が小さいのね。まあいいわ。それであなたに協力して欲しいのは、証拠を見つけ出して、犯人を警察に突き出す手伝いをして欲しいの」

「……」

証拠？

犯人？

ミステリードラマのことだろうか。話が突飛過ぎて、なんのことが全くわからない。

「絶対におかしいのよ。お母さんは感染がわかる二日前に、家でかかりつけの先生から健康診断を受けたばかりなのよ。お母さんだけじゃなく、家族全員が。その時はなんの異常もなかったわ。もし家の中にウイルスがあったのなら、私やお父さんも感染しているはずだし、その後のお母さんの行動を思い返してみても、感染するような場所には行っていないの。だから考えられるとしたら一つしかないのよ。それしか有得ないわ」

段々と話に熱が入り始める寺尾。チーズケーキのことなどすっか

り忘れてしまっているようで、手にフォークを握り締めながら話続ける。

「お母さんは、ウイルスが発症する前日に田本と会ってるのよ。臨時教師で来た、国語の田本。PTAの代表として田本の話聞きに学校へ行ってるのよ。犯人はあいつしかいないわ！」

彼女は自信満々に、はつきりと田本の名を告げた。まるで名探偵が容疑者全員の目の前で真犯人を暴いたかのように。

でもそれは、どうなんだろう。田本も、学校に保健所の職員が来た時、検査を受けているはずだ。もし、田本が原因で寺尾の母親がウイルスに感染したのならば、検査を受けた時に田本が引つかかるはずだ。それに、もし本当に田本が原因なのであれば、とつくの昔に、寺尾の母親より長い時間を共有している生徒や教師達から感染者が出てはいるはずだ。田本が犯人だという話の方が信じられない。

これは八つ当たりじゃないか？ 田本に対する攻撃は、一旦停止していると思っていたが、こんなところで継続されていたのか。

「だって、お母さんは健康診断を受けてからウイルスが発症するまでの間で、唯一出掛けた場所が学校なのよ。行き帰りだってタクシーを使ってるから、地下鉄とかバスで感染したなんてことはないわ。その学校へ出掛けた目的はあいつに会うことだったんだから、犯人はあいつに決まってる。だから、今、私に必要なのは田本が犯人であると言う決定的な証拠なの。でもそれを見つけるには人手が足りないし、そんなことを平気でやってのける田本から、身を守るための護衛も必要なの。あなた、バケモノって呼ばれてくるくらいなんだから、私を守るぐらいの力はあるんでしょ？ だから、あなたは私と一緒に田本の身辺調査をするのよ。決行は明日の放課後から。まずは田本がお母さんと会った時のことを詳しく調べた後に、あいつの自宅を見つけるわ。その後のことはそれから考えるから、あなたは私の護衛としてついて来て。わかった？」

これが用件の全てだったようで、話し終わった寺尾は残っていたチーズケーキを勢いよく完食した。まるで、僕にこの話を断らせな

いよう、発言する隙を与えないために無理矢理集中して食べている
みたいだった。そして、使い終わった食器をトレーごと返却カウ
ンターへと持って行き、そのまま「じゃあ、よろしく」とだけ言い残
し、彼女は帰っていった。

断るタイミングを逃し、流されるままになってしまった。これで、
僕は明日からくだらない探偵ごっこに付き合わなければいけない。
どうしていつも自分の意見が言えないのだろう。もっとしつかりと
はっきりと、自分の意見が言えたのなら、もう少しマシな人間にな
れるのだろうけれど。もうこうなってしまうてはどうしようもない。
適当に付き合っていれば、いずれ僕が役立たずの能無しだというこ
とに気づき、おのずと解放されるだろう。いじめにくらべれば、こ
れぐらいのことを我慢するのは簡単だ。今更断るのも面倒だし。し
ようがない。

気づけば、寺尾がいなくなり、何も注文していない男が一人席を
独占しているという、店からしてみればこの上なく迷惑な客になっ
てしまっていた。邪魔者はさっさと退散しなければ。

鞆を持ち、こそこそと出口へ向かう。「ありがとうございました」
という店員の声に、申し訳なさが再び蘇る。

本音？

翌日。今日も最後のHR終わり、廊下と玄関の大渋滞が繰り広げられている。昨日あれだけの列ができたというのに、僕のように教室で少し時間を潰してから帰るといふ発想になる者は一人もいないようで、怯えきった生徒達が目に見えない恐怖から逃れたい一心で、誰よりも早く学校を出ようとひしめき合っている。既に、僕以外の生徒はすし詰め状態の廊下へと飛び出して行き、教室は静かで落ち着いた空間になっていた。本を読むには最適だ。

何ページか読み進んだところで、その静寂を打ち消すように、勢いよく教室の扉が開く。廊下の人ごみに耐えられなくなった生徒が逃げ込んできたのかと思ひ視線を扉に向けると、不満げな顔で教室に入ってくる生徒が目についた。

「昨日といい、今日といい！ 何なのよ全く！ 皆、何考えてるのかしら!？」

威勢の良い愚痴と共に教室へ入ってきたのは寺尾藍だった。宣告通り、田本の調査をするため、僕を連れ出しにやってきた。やっぱり本気だったのか。

「ちゃんとしたわね。早速始めるわよ。まずは学年主任の高岡先生のところに行って話を聞いわ。ほら、ついて来なさい。職員室方面の廊下は人がいないから」

まだ、十ページも読んでいないのに。仕方なく本を鞆にしまい、寺尾の引率で廊下の人ごみを掻き分けて職員室へと向かう。面倒くさい、放課後探偵ごっここの始まりだ。

寺尾の言う通り、渋滞になっていたのは教室前だけで、すぐに人だかりは消えてあっさり職員室に到着した。職員室ではほとんど教師が出払っていた。恐らく渋滞している玄関や廊下で生徒達が怪我をしないように、監視員として各所に配置されているのだろう。

「高岡先生は職員室にいるってうちの担任が言ってたから、いるはずなんだけど……」

職員室の入り口前で半開きの扉に上半身だけ進入させ、中を覗き込みながらきよるきよるする寺尾。そんな、泥棒のように覗き込まないで、堂々と入ってから探せばいいのに。これじゃあ、やましい事を考えている挙動不審な生徒にしか見えない。

「変ね、いないわ。どこ行ったのかしら？」

「何やってんだ、お前ら？」

急に後ろから呼びかけられた。寺尾はその声に驚き過ぎて、上半身を戻す時に思い切り頭を扉に打ちつけてしまい、廊下に寺尾の呻き声と物凄い音が響く。痛そうだ。

「おいおい、大丈夫か？」

「だ……大丈夫です。って高岡先生、どこ行ってたんですか？ 先生のこと探してたんですけど」

「そうなのか。悪い悪い、ちょっとトイレにな。どうしたんだ？」

「ちょっとお聞きしたいことがあったので」

「そうか。じゃあ先生の机で話そうか」

高岡の提案で職員室に入る。学年主任というだけあって、高岡の机は職員室の奥、各教師の机を見渡せる広いスペースを使った場所に配置されていた。職員室のこんなところまで入ったのは初めてだ。「立って話すのも疲れるだろ」と高岡がパイプ椅子を用意してくれた。二人で並ぶようにしてパイプ椅子に腰掛ける。

「なんだか意外な組み合わせだな。お前達クラスは別だろ？」

「ええ……それより、お聞きしていいですか？」

「ああ。何が聞きたいんだ？」

「以前、うちの母が田本先生とお話をするために学校へ来たと思うんですが、その時のことについて何かご存知でしたら教えていただこうと思って……」

「ああ……そのことか。うん。まあ、俺の知っていることを教えることはできるんだが……その、なんだ。もしかして、先生達のこと、

疑ってるのか？」

「いえ、そう言う訳じゃないんです。この状況じゃ、どこでウィルスに感染してもおかしくないですし、調査の結果も異常はなかったみたいですから。ただ、母のために自分がしてあげられることってこれくらいしか思いつかなくて……。自分なりに母の足取りを追って、色々調べてみようって思ったんです。そうすれば、自分でも納得がいくし、周りの人達にも安心してもらえるかなって。だから……」

昨日の勢いは何処へやら。あんなに田本が犯人だと決めつけて力説していたのに、急にしおらしくなって優等生を演じ始めた。「女は皆、女優だ」なんて誰かが言っていたような気がするが、本当にその通りだと感心してしまった。

「そうか。そう言うことなら協力しよう」

高岡は自分の頭の中からその時の記憶を引っ張り出すかのように、腕組みをして難しい顔になる。少しの間があって、高岡が話し始める。

「あの時は確か、PTAの代表として田本先生を尋ねられていたんだよな。隣の生徒指導室で、しばらく話をしてみたんだけど、突然すごい物音がしてな。その後、お前のお母さんが職員室に入ってきて、何も言わずに隣の校長室に入ってしまったのを覚えてるな」

「すごい物音って、何かあったんですか？」

「いや、実際大したことじゃないんだ。田本先生に聞いたら、お前のお母さんが教室を出る際にペン立てに引っかかって落としてしまったって言ってたから、何があったって訳じゃないと思うぞ。怒っているような様子もなかったしな。それから校長先生と十分ぐらい話をして、すぐに帰られたから、その後については先生もわからないな」

「そうですか、お母さんは田本先生とどれくらい話をしていたんですか？」

「うーん。はつきりと覚えてないから何とも言えんが、三十分って

とこだったかなあ」

「田本先生とは何を話していたかは、ご存知ですか？」

「それもわからんな。校長先生も田本先生も何も言つてなかったし。それに、もし知っていたとしてもお前らには教えられないと思うぞ」

「校長先生にお話を聞くことはできないんですか？ そのこと以外で、どんな些細なことでも私たちに教えていただけることがあれば、聞いておきたいんですけど」

「残念ながら校長先生はちょうど出掛けてるんだよ。色々やらなければいけないことが多くてな。しばらくは会えないと思うぞ」

「そうですか……使っていた教室は、職員室を出てすぐ右手にある生徒指導室ですよな？」

「ああ。その日は応接室が使えなくなつてな。しょうがなくそこで我慢してもらつたんだ」

「その指導室を見せてもらうことは出来ますか？」

「それは構わんが、何もないぞ？」

「それでもいいんです。お願いします」

「よし、じゃあちよつと待っていてくれ。今、鍵を取ってくるから」

高岡は立ち上がり、職員室から繋がっている、生徒立入禁止のコービー室に入つていった。生徒指導室は、今現在誰も使っていないよつで、鍵をかけているらしい。各教室の鍵はあの部屋に保管してあるのかと、何気なしに考えて待っていると、鍵を手にした高岡が戻つて来た。

「じゃあ行くか」

高岡の後を追うように、職員室を出て生徒指導室へと向かう。生徒指導室は寺尾の言う通り、職員室を出てすぐのところにあつた。こんな近くにあるのなら、ペン立ての落ちた音が職員室に響いたというのも頷ける。

高岡が鍵を開け、生徒指導室の扉が開く。クラスで使われているような教室とは違い、準備室程度の広さしかない指導室には、中央に机が一つと椅子が二つ置かれていて、向かい合つて座れるように

設置されている。教室入って左の壁際にはグレーの本棚があり、ハードカバーの書物が綺麗に並べられている。本当に何も無い、殺風景な教室は少し肌寒かった。

まず高岡が教室に入り、続いて寺尾と僕も中に入る。寺尾は教室を一通り見回した後、片方の席に腰掛ける。

「高岡先生、お母さんがどっちに座ってたかなんて、わからないですよね」

「さすがに、そこまではわからんな。実際に見たわけじゃないから「そうですよ……」。ちょっと、あなた、そっちに座ってみてよ」

僕に空いている席へ座るように命令する寺尾。逆らうつもりのない僕は、素直に従い、寺尾の座っていない対面側の席に座る。

席に着くと寺尾は何も言わず、しばらく真剣な顔つきで僕を眺めてくる。何かに気付き、考え事をしているようにも見える。

「……意外と近いわね」
何も、考えていなかったようだ。

「もうそろそろいいか？ 実は、あんまりここは使わないように言われててな」

「え？ 何故ですか？」

「俺も理由はよくわからんのだが、保健所から言われてるんだよ。もう一度調査をするかもしれないから、普段使わない教室は極力開放しないで下さいってな」

「……わかりました」

寺尾はまだ満足のいかない様子だったが、諦めて椅子から立ち上がり、名残惜しそうにしながらも指導室から廊下へと出る。全員が教室を出たところで、高岡が鍵を閉めた。

「他には何かあるか？」

「いえ、もう大丈夫です。お忙しい中、ありがとうございました」

「ああ。また何かあったら聞いてくれ。それと、お母さんのことは残念だったが、あまり思いつめるなよ。声は出なくなったかもしれないが、まだお母さんは生きているんだからな」

「はい。ありがとございます。失礼します」

高岡に礼を言い指導室前で別れる。寺尾は今までの情報を頭の中で整理しているのか、黙ったまま廊下をゆっくりと歩き始める。次にどうするのか聞いていない僕も、とりあえず同じ速度でついて行くことにした。

色々と当時の話を聞いてみたものの、有力な情報は得られなかった。やはり田本が原因ではない気がする。高岡の話しても、生徒指導室で二人が話していた時間は三十分程で長くない。校長とも二人で話をしていたと言う点では、容疑者が増えてしまったのではないだろうか。それより何より、高岡からこのことを聞き出す際に、僕と一緒にいる必要はなかったんじゃないか。

「やっぱり、田本とお母さんが二人つきりで話をしていて時間があつたんだわ。これであいつが犯人である可能性が高くなってきたわね」

考えがまとまって話し始めたかと思うと、とんでもないことを言い始めた。こいつはちゃんと話を聞いていたのだろうか。もう、田本を犯人に仕立て上げたいという気持ちだけが先走っていて、冷静に物事を判断することが出来なくなっているんじゃないだろうか。どう考えても高岡の話から、その結論には結びつかないと思うのだけれど。

「具体的な情報は少なかったけど、しょうがないわね。今度校長を問い詰めればいいわ。じゃあ次ね。田本の自宅を探すわ。こっちはもう住所がわかってるから、とにかくそこに行きましょう。何よ、その顔は。別に悪いことしてないんだから良いじゃない。たまたまクラスの子があいつの家を知っていたから、教えてもらっただけよ。それもかなり前の話よ。こんな形で役に立つとは思わなかったけどね」

かなり前とはいった頃のことだろうか。田本がこの学校にやってきて、まだ一週間とちょっとが経過したただけなのに。これも女子達が行っていた田本いじめの一つに使われる予定だったのだろうか。住所

まで調べ上げていたとは。単なるストーカーじゃないか。

「さあ、ぐずぐずしてないで行くわよ！ あいつが帰る前に調査を終わらせないといけないんだから！」

本音？

学校からバスで地下鉄の駅まで七分、地下鉄を途中で乗り換え三十分、さらにバスに乗って二十五分、そこから徒歩で十五分。総移動時間、約一時間半。嫌になるほどの乗換えと時間をかけて、ようやく辿り着いた。そこは背の高い建物はせいぜい三階建てで、後は一軒家だとかアパートが連なる住宅街。近くにはコンビニもなく、道路も狭い街外れ。以前、ブローカーに連れられて行った廃墟一歩手前の商店街とまではいかないものの、それに近い寂しさが漂う。田本の家は、その一角にある、見るからに古いアパートだった。錆び付いてこげ茶色になった鉄製の階段が飛び出している、二階建てのぼろアパート。各部屋の扉も薄汚れていて、グレーに近いクリーム色になっている。扉の数からすると上と下にそれぞれ四部屋、合計八部屋から構成されている建物のようだ。

「ここね。汚いアパート。らしいと言えばらしいけど。えーっと……田本の部屋は二階の奥から二番目、二〇三号室か」

なんの躊躇いもなく自然な足取りで階段を昇り始める寺尾。手には田本の自宅住所と電話番号が書いてある、花柄のかわいらしいシステム手帳が握り締められている。なんともファンシーな名探偵だ。いや、これは俗に言う、迷う方の探偵か。

しかし、今更考えるのは遅いかもしれないが、自宅を突き止めて何をするつもりだろうか。田本が帰ってくる前に調査を終わらせると言っていたが、まさか部屋に侵入するつもりじゃあないだろうか。それは住所を勝手に調べ上げることよりもしつかりとした、不法侵入という犯罪だ。僕はこの歳で犯罪者になりたくはない。そんなこと、出来ないというのはわかってはいるが、なんだかすつきりしない気分だ。

「あつたわ。表札も田本だから、間違いなさそうね」

確認を終えた寺尾は、辺りを見回す。見回したところここはた

だのアパート二階、各部屋の玄関を繋ぐ共用廊下だ。何かがある訳がない。床は至る所に小さなヒビが入っている薄汚れたコンクリートで、経費節約のためなのか、僕のマンションの廊下より幅が狭い。もし、こんな狭い廊下に何か置いてあれば、通行が不可能になり他の入居者から苦情がきてしまう。

「さてと……」

扉の前にしゃがみこむ寺尾。何をするのかと思い後ろから様子を窺っている、扉の横に設けられている新聞受けのカバーを指で強引に押しつけ、部屋の中を覗き始めた。よく中が見えないのか、体をくねらせたり、さらに屈みこんで視線の位置を変えたりと、せわしなく動いている。誰かに見られたら確実に怪しまれてしまう。一切の言い逃れが通用しない、如何わしさが溢れ出る女子高生だ。そして、それに付き合わされている僕は、何をしている訳ではないけれど、傍から見ればこの怪しい女子高生をサポートするために、周りを監視する役目を担っている男子高生、になるのだろう。

「よく見えないわ。とりあえず、帰ってきてないことは確かね」

そりゃそうだ。田本が学校にいることを確認した上でこちらに向けて出発したのだから。家にいてもらっては困る。と言うか、いたらおかし。時空を超える超能力や秘密兵器を使うか、学校にいたのは実は替え玉で、僕らが来るのを待ち伏せていた、なんてことでもなければ不可能だ。それに、万が一田本が帰ってきていたら、こんな大胆に新聞受けから中を覗いているのだから、早々に気付かれてアウトだろう。

寺尾は「よいしょ」と言いながら立ち上がると、今度はドアノブに手をかける。嫌な予感がする。予感と言うか、ドアノブを握った時点でその先の行動は一つしかない。もし仮に、ここに僕以外の人間が十人いたら、十人が全員同じ答えを出すだろう。そして、寺尾はその答え通りの行動を起こす。

ガチャガチャガチャガチャ

右回しから左回しへ、何度も何度もドアノブを回転させる。金属

同士がぶつかり、静かな住宅街全域に届いてしまっんじゃないかと思えるくらい、騒々しい音が鳴り響く。少し苛立つてきたのか、回すだけでは飽き足らず、引いたり押ししたり、扉全体を前後左右に激しく揺さぶり始める。どう考えてもやりすぎだろう。

「鍵は閉まってるわね」

当たり前だ。例え、ほとんど人影のないこんな住宅街であっても、この時代このご時世に、自宅の鍵をかけずに外出するなんて常識外れもいいとこだ。

「えーっと……」

学生鞆を漁り始める。今度は何だ。頼むから、これ以上おかしいことはしないでもらいたい。鍵はかかっているし、田本が失声ウィルスに感染しているという事を証明する手がかりなど、どこにも見当たらない。諦めてさっさと帰らなければ、本当にここの住民の誰かに気づかれてしまう。

だが、寺尾は諦める気など全くないようで、鞆を床に置いて奥底を探し続けている。

「確かここに……あ！ 違う違う！ お財布に入れたんだ！」

独り言を言いながら、鞆の奥底にしまつてあつたと思われる、ラメが入った横長の黒い財布を取り出す。

まさか、そんなことはないはずだ。さすがにそれは無理だ。いくら金持ちのお嬢様だからと言って、そんなことまで出来るはずがない。出来てはいけない。

そんな、僕の願いにも似た予想は一瞬にして覆される。

「あつた」

鍵。辞書の形を模したキーホルダーが取り付けられている、銀色に輝くギザギザ模様。寺尾は迷うことなく、その鍵を田本の家の子に差し込む。

カチャリ

乾いた音が鳴る。寺尾の乱暴な揺さぶりに、頑としてその姿勢を崩さなかった古びたクリーム色の扉は、一瞬の内に、何の抵抗もな

く、呆気なく解錠した。

「さて。これからが本番よ。絶対に証拠を見つけてやるわ」

もう駄目だ。これは本当に救いようがない。どう言う手段を使つたかは知らないけれど、現代社会に生きる女子高生と言う生き物は、他人の家の鍵を入手するということを平然と、いとも簡単にやってのけるのか。この日本と言う国の教育はどうなっているのだろうか。この犯罪行為に何の後ろめたさも感じない人間に育ってしまったこの女子高生は、どんな環境の中で、この行為は全く悪いことではないという判断が下せるような人間になってしまったのだろうか。驚きの後、遅れて恐怖が込み上げてきた。

「何！？ 何か文句あんの！？ 私だつてこれがいけない事だつてのはわかっているわよ！ でも、これぐらいじゃないとあいつの正体には近づけないわ！ 私は何としても、あいつがウイルスを広めている証拠を見つけ出さなきゃいけないのよ！ 嫌ならあなたはここで待ってて！ 見張りでもしてなさい！」

真剣な顔で怒る寺尾。勘違いをしているにしても、彼女は彼女なりに必死なようだった。意図的ではないにしろ、自分の母親が、学校やその周辺の人間に迷惑をかけたという事実。そして、その母親もウイルスによって声が出なくなるという運命を決定付けられているということ。嘆き、悲しみ、苦しみ、もがき。僕には知る由もないが、それなりに辛い思いをしてきたのだろう。

でも、その結果、そのストレスを発散するため一番気に入らない人間にその矛先を向けると言うのは、責任逃れだ。わがままで、自分勝手だ。彼女はその感情で冷静さを欠き、犯罪に手を染めようとしている。正気に戻った時に、自分の取った行動の愚かさを、まざまざと思い知ることになる。当然、その場に居合わせた僕には、何故止めてやらなかったという他人からの言葉が投げ掛けられる。共謀者として同罪になり、僕自身にも責任が問われることになる。そんなのは嫌だ。僕は何もしていないし、田本が犯人なんてこれっぽちも考えていない。錯乱した彼女に巻き込まれて、警察に補導さ

れるなんてまっぴらだ。死ぬことの出来ない体になつてしまつた今、僕にはこの世で生きていくことしか残されていないんだ。その生きていく時間の中で、学校の外でも他人から忌み嫌われることになるなんて耐えられない。ここで彼女の行動を黙認してしまえば、それは現実味を帯びてくる。止めなければ、やめさせなければいけない。「あれ！もしかして君達、幡ノ橋の生徒かな？」

意を決し、彼女の愚行を止めようとしていた時、階段を昇りながら話しかけてくる男が現れた。寺尾も扉を半分まで開け、片足を侵入させていたが、動きを止め、声が出た方に注目している。

男はスーツ姿で、脱いだ上着を手にかけており、露になつたワイシャツにブルーのネクタイが鮮やかだった。寺尾のように片手には皮製の黒い手帳が握られていて、肩からは、何を入れたらそんなに膨れ上がるのか、見るからに重そうなビジネス用シヨルダーバッグをぶら下げている。短髪でがたいが良く、見た感じは二十代後半と叫ぶところだ。

何者だろうか。もし、この男が警察の人間なら、かなりまずいことになる。

「その制服はそうだよな？ よかつた、田本先生はご在宅かな？」

「いえ、先生はまだ学校です。私達も今来たばかりなので」

「そうか、残念だ。君たちはここで何を？」

「私達は田本先生に頼まれて、帰りがけに先生の自宅へ物を届けに来ただけです」

「そう。生徒に自宅の鍵を預けるなんて、よっぽど君達は信頼されているんだね」

「……ご用件は何でしょうか？ 私達はもう用事を済ませたので、出来れば早く帰りたいんですけど」

「ああ、そうか。いや、僕は田本先生に用事があつただけだから。いないなら改めさせてもらつよ」

「そうですか」

寺尾は扉を閉めて鍵をかける。また、カチャリという乾いた音が

鳴る。流石の寺尾も、この場面を誰かに見られては諦めるしかないようだ。それでも、怪しまれないようにとっさの機転でそれらしい理由を見繕う寺尾。この女優は演技もさることながら、どんな場合においても臨機応変に対応できる能力があるみたいだ。羨ましい限りだ。

「それじゃあ、失礼します。行きましょ」

逃げるように、足早に男の横をすり抜けアパートを後にする。男は僕らを呼び止めることはなく、手帳に何やら書き込みをしていた。とりあえず、教師の自宅の鍵を生徒が持っているという、かなり怪しげな状況にも深くつつこみをいれてこないところからすると、あの男が警察の人間という線は薄いだろう。そして、あの男の登場によって彼女を止めることができた。僕の抱えていた不安は、不思議と、とんとん拍子に解決していった。まあ、僕は何もしていないが。

寺尾は何も言わずに黙って歩き続ける。調査を邪魔されたことだ、だいぶ腹が立っているようで、歩き方が乱暴になっている。これらの事も考えていないみたいで、とりあえず来た道をなぞりながら足を進めている。考えていないのではなく、怒りが強すぎて考えられないんだらう。背中から黒いオーラが見えるようだ。

「おーい！ ちょっと待ってよ！」

しばらく歩いてみると、先程の男が後ろから追いかけてきた。寺尾はコンクリートの地面を壊しかねない乱暴な歩みを止め、不機嫌そうに振り返る。

「悪いね、僕も手ぶらじゃあ帰れないもんだから、君達に少し質問していいかな？」

ここで寺尾の怒りが頂点に達した。眼光は狼のように鋭くなり、髪の毛が逆立って、口から牙が生えてきたようにさえ見えた。怒りのメーターがあったのなら、限界値を振り切って飛び出していることだろう。

「何なんですかあなたは！ 名乗りもしないで、失礼じゃありませんか！？ 私達はお使いを頼まれただけです！ あなたにお話するようなことは何もありません！」

「ご……ごめん。そんなに怒らないでくれよ。僕も焦ってたもんだから。君達に不快な思いをさせてしまったのなら、謝るよ」

「それなら、もう私達に関わらないで下さい！」

「頼むよ！ 僕は、決して怪しいものじゃないんだ！ ほら！」

男は懐から名刺を取り出し、僕達に提示する。名刺には「フリージャーナリスト 伊浦 一」と書かれていた。

「フリージャーナリストってことは……記者の方ですか？」

「そうそう。今、噂の失声ウイルスについて調べててねえ」

「それなら、尚更お話しすることはありません！ 失礼します！」

「違うんだ！ 聞きたいのは、田本先生についてなんだよ！」

「えっ……？」

報道関係者の取材と言うだけで、拒否反応を起こすのは寺尾も同じだったようだが、伊浦と名乗る男は田本個人について話を聞きたいと言い出した。田本というキーワードに反応して、寺尾も困惑する。

「……何で先生について聞きたいんですか？」

「うん。君達は失声ウイルスが初めて確認された時のことを知っているかい？ およそ二ヶ月前に隣の西区で女性が感染したのが初めてだった。その女性は四十七歳の主婦で、今までに大きな病気にかかった経験もなく健康そのものだったんだ。でもね、今だからわかる、奇妙な事実があるんだ。その女性には高校三年生の息子がいて、感染前日に三者面談で学校に行ってるんだ。そして、その翌日、突然声が出なくなり病院で検査を行ったところ、声帯の細胞がぼろぼろに破壊されていて、新種のウイルスなんじゃないかって話が囁かれるようになったんだ。そこで初めて失声ウイルスの存在が認知されるようになった。どうだろう。なんだかこの感染者の状況と、今回の感染者の状況が、妙に似ていると思わないかい？ どちらも感

感染者は生徒の母親、感染が疑われた場所は学校、だ。しかも、最初の学校と今回の学校、どちらにも関係しているのが田本先生なんだ。その女性の息子が通っていた高校に国語教師として当時在職していたんだよ。田本先生が感染者に直接接触していたかどうかはわからないけれど、なんか引つかかってね。それで君達に田本先生がどんな人なのか聞きたくてさ」

「それ、本当ですか!？」

再び大声になる寺尾。しかし、先程とはまるで様子が違う。なんだが、少し楽しそうだ。勢いに圧倒された伊浦がたじろいでいる。

「あ……ああ。当時、実際にその学校で取材をしたから、確かだよ」

「どこの学校ですか!？」

「えっ……に……西校だけど……」

「西校ですね!？　ありがとうございます！　行くわよ！　ほら、急いで!」

「えっ……ちょ、ちょっと！　話を聞かせてよ！　おい!」

急に態度を変えると、水を得た魚のように勢いよく駆け出す寺尾。伊浦の声は耳に届いていないようだ。呼び止める伊浦を一人残し、寺尾を追いかける。意外と足が速い。少しずつ距離が開いてゆく。どこに行くんだよ。これじゃあ追いつけない。

行き先も告げずに走り出した寺尾は足を止める気配がなかった。果てしなく続く追いかっこになるのかと、心身ともに絶望しかけた時、視界にコンビ二の看板が飛び込んできた。寺尾はスピードそのままに、走行コースである歩道から外れてコンビ二へと向かう。結局、コンビ二を発見するまで全力疾走だった。辿り着いた時には僕はほとんど走れずに歩くしかなくなっていた。先に到着していた寺尾はコンビ二前の駐車場で携帯を耳にあて、誰かに電話をしていた。まだ電話は繋がっていないようで、寺尾は真剣な表情で相手が応答するのを待っている。疲労しきった僕がようやく寺尾の近くに辿り着いた時に電話が繋がったようで、繋がるや否や、怒涛の勢い

で話し始める。

「もしもし、ゆみ！？ 私！ ええ、久しぶりね。ごめんね突然。ゆみって西校よね？ 田本って教師知ってる？ 本当！？ うん。うん、そう。その田本って西校で見つかったウィルス感染者となんか関係ある！？ え！？ そのまんまの意味よ。うん。うん。……… 本当！？ 本当なのね！？ わかった！ うん、ありがとう！ じゃあ、またね！」

西校に通っている友達に電話をしていたようだが、聞きたいことだけ聞いて一方的に電話を切ってしまった。やけに興奮しているように見えるのは、気のせいだろうか。

「有力情報よ！ これを餌にして揺さぶりをかければ、あいつも堪らず全てを告白して罪を認めるでしょうよ！ 善は急げ！ 学校に戻るわ！ 何やってんのよ！ 駆け足駆け足！」

もう走れない。勘弁してくれ。

本音？

疲労困憊の体を引きずりながら、あの嫌になる乗換えと時間をかけて、同じ道順を辿り学校へ舞い戻って来た。時計は既に午後七時を回っており、辺りは薄暗い紺色で覆われ、街灯とビルの灯りだけが煌々と光を放っている。特にこの時間の学校は一際薄暗い。ウィルスの所為もあって生徒達は一人残らず帰宅しているし、教師達もウィルスが潜んでいるかもしれない場所にいたくはないのか、ほとんどの教室は電気が消えていて、誰も残っていないように思える。

「見て！ 職員室の灯りがまだ点いてる！」

闇夜にポツンと一つ浮かぶ、微かなオレンジの光。その場所は間違いない職員室だ。誰かがまだ残っている。なんで今日に限って残っている教師がいるんだ。早く帰っていてくれれば、寺尾も諦めてくれたというのに。その残っている教師が田本ではないことを祈るしかない。

「さあ、いよいよ決着ね。田本の今にも死にそうな顔を絶望で染め上げてやるわ！」

気合もやる気も十分。完全に悪役の台詞だった。勘違いで田本を犯人と決め付けているのだから、はまり役と言えはまり役だ。もう何を言っても聞き入れてくれそうにない。こうなったら勝手にやっつけてくれ。そして、後になって恥ずかしい思いをしたらいいさ。僕はその証人となる。彼女の愚行の全てを見届けてやる。

校内に入り、一直線に職員室を目指す。二階に上がり、廊下の先に見える職員室へと続く扉へ向けて、何故か二人とも足音を立てないように忍び足で進む。だんだんと近づいてくる職員室のか細い明かりを見ていると、心なしか少し緊張してくる。寺尾の表情も進むにつれてこわばってゆくのがわかる。

職員室前に到着。中から物音や話し声は聞こえてこない。しかし、一箇所だけ明かりが灯っている。明るさからすると、天井の蛍光灯

ではなく、机に設置している、卓上ライトのようなものだろう。誰かが残っているのは間違いない。後はその誰かが、誰なのかということだ。寺尾は、残っているのは田本だと信じきっている。こんな夜に、誰も残っていないような学校に、臨時教師でしかない田本が残っている可能性は限りなく低い。学校側も臨時教師にそこまで任せるとは思えない。僕自身が、残っているのが田本であつて欲しくないと願っているのもあるが、その願望を除いても、田本ではなく別の教師、それこそ学年主任の高岡が残っていることのほうが自然で、十分に考えられることだ。

心の準備が整つたのか、寺尾は僕が横にしていることを確認するかのようにこちらを見ると、軽く頷いた。頷かれても困る。それは何を意味しているんだ。

ゆっくりと扉に手をかけ、少し時間を空けてから一気に扉を開く。

本当に、今日は次から次へと、物事が面倒臭い方向にしか進まない。
い。

最悪だ。

そこにいたのは、田本だった。

職員室入って左手の窓側、規則的に並ぶ教師達の机の並びから、飛び出すように外れて一つ設置されている古めかしいグレーの机に座り、卓上ライトの灯りだけでパソコンの画面を食い入るように覗き込んでいる田本の姿があつた。相も変わらず、口に着けているマスクが似合っている。

「おや？ こんな時間にどうしましたか？ とつくに生徒の皆さんは帰宅していたと思いましたが」

「田本先生にお話があつて戻ってきました」

「お話……ですか。しかし、もうこんな時間ですし、僕もそろそろ出ようと思つていたところですので、お話は明日にしませんか？」

「いいえ！ 今すぐじゃないと駄目です！」

口調に怒りを滲ませながら、田本の近くへと歩み寄る寺尾。僕もその後を追う。寺尾と田本による一騎打ちの始まりだ。

「……しゅうがありませんね。何でしょうか？」

「失礼だとは思いましたが、先生について少し調べさせてもらいました。先生は、この学校に赴任される前は西校にいらっしやっただうですね？」

「ええ、そうです」

「その西校で、失声ウィルスの第一感染者が発見されたのはご存知ですよ？」

「はい。僕が在職中の出来事でしたので」

「結論から言わせて頂きます。先生、ウィルスを広めているのはあなたなんじゃないですか？」

「……」

「西校の感染者も生徒の母親だと聞きました。そして、今回感染したのは私の母親です。どちらの場合を見ても、あなたが関わっています。感染の二日前まで健康そのものだった母が、あなたと会った次の日に発症したんです。この事実から考えると、あなたがウィルスを撒き散らしているとしたか思えないんですよ！」

話をしている間に、色々なものが込み上げてきたのだろう。最後には廊下の奥にまで響き渡る大声になっていた。そんな寺尾を表情一つ変えずに見つめていた田本は、寺尾の話が止まったところで、睨めっこをしていたパソコンを鞆にしまい、上着を着て立ち上がる。「何かと思えばそのことです。確かに、僕が以前いた西校でウィルスの第一感染者が発見されたのは事実です。そして今回はあなたのお母様が運悪く感染してしまいました。どちらの場合も、僕という共通点がありますね。しかし、だからと言って、それだけで僕がウィルスを運んでいると言うことにはなりませんよ。事実、僕は二回も保健所の検査を受けています。その二回とも、感染の疑いなしと判断されています。これはどう説明するんですか？」

「それは……きっとあなたはウィルスを持ちながらも、それに対抗

できる何らかの手段があるか、もしくはウイルスに対する特別な免疫を持っているか……」

「それこそ、あり得ない話ですね。失声ウイルスは新たに発見された、前例のないウイルスですよ？ 僕は普通の人間ですから、この短期間でウイルスの免疫が構成されることはまず不可能ですし、国ですら特效薬を作り出せないというのに、たかが非常勤の教師ごときがそんなノーベル賞もの手段を持っている訳ないでしょう」

「で……でも！」

「それに、西校とこの幡ノ橋高校以外でも感染者は出ています。その事実が、この街全体にウイルスが潜んでいるということを証明しているじゃないですか。あなたはお母様がウイルスに感染したことで気が動転しているんです。少し落ち着いて下さい。誰かに責任を押し付けたくなる気持ちもわからなくはないですが、少しばかりやりすぎではありませんか？」

田本の完勝だった。まあ、戦う前から結果の見えていたことだ。

田本の言っていることに間違いはないし、嘘を言っているとも思えない。やっぱり寺尾の勘違いだ。こんな生徒の相手までしないといけない田本に、少し同情してしまう。教師というのは本当に面倒臭い仕事だ。こんな面倒臭い生徒ばかりだから、この学校の教師は皆やる気を出さずに、僕に対するいじめなんかも見て見ぬ振りなんだろう。

「もう帰りましょう。このことは誰にも言いませんし、僕自身も気にしてませんので安心して下さい。じゃあ、僕は施錠の点検をしなくてはいけないので、先に出てもらえますか？」

田本は職員室の扉を開き、僕達に帰宅を促した。

こうしてみると、恥はかいたけれど一日で訳のわからない迷探偵は鳴りを潜めることになる。スピード解決でよかったじゃないか。明日からはまた、いつも通りの生活が待っているだけだ。さあ、もう用事は済んだ。さっさと帰って、こんなくだらない探偵ごっこは

終わりにしよう。

「……そうですね。では、こちらで調査は継続させてもらいます」「何故ですか？ 今、僕が話したことが真実です。これ以上調べたって何の意味もありませんよ？」

「……私、西校に友達がいるんです」「……」

「その友達が教えてくれました。第一感染者である女性は、感染の前日に三者面談で学校を訪れ、自分の息子の担任教師と激しい言い合いをしたそうです。かなりヒステリックな方だったようで、最後には暴れだし、異変に気づいた他の先生方が止めに入ったんです。その時、誤ってその女性を突き飛ばし、怪我をさせてしまった教師がいたみたいなんです。知ってますか？」

「……ええ」

「それで、だいぶもめたみたいなんです。ウイルスのことで結局うやむやになったそうなんです。でも、事情がどうあれ保護者に手を上げてしまったのは問題ですから、その教師は学校を去りました。被害者である女性もウイルスのことで入院したまま。生徒も登校拒否が続いているそうです」

「……そうですね。それは、悲しいことですな」

「ええ、全くです。それで、実は私の父親、医療関係の仕事をしているので、その感染者である女性がどの病院に入院しているか調べることが出来るんです。本来であれば個人情報なのでそんなことは一切出来ないのですが、私の母親もウイルスに感染していますから、情報共有のためとでも言えばなんとかなると思います。そうすれば、その女性からも話が聞けると思いますし、うまく行けば、その息子さんからも色々と話が聞けると思うんです。たぶん、それで表には出ていない、隠された事実を知ることができるんじゃないかなと思います」

冷静に、言葉を一つ一つ確かめるように話す寺尾。先程までの怒りは静まり返り、田本を説き伏せるように真直ぐに視線を送ってい

る。これが、寺尾の言っていた揺さぶりなんだろう。落ち着いた声で話す寺尾を、田本は黙って見つめ続けている。急に職員室中の空気が張り詰める。

「話はそれだけです。それじゃあ、私達は帰ります」

寺尾が僕の方を見て「帰るわよ」と目で合図を送る。それに合わせるよう二人で職員室から出ようと動き始めたとき、田本が職員室の扉を閉める。

「そうですか……」

田本は授業の時よりもさらに小さな声で呟きながら、僕らに背を向けた状態で、扉に何かをしている。田本が何をしているのか、気づいたときには力チャリという音が耳に届いてきていた。

「ちょっと！ 何してるんですか!?!」

「え？ ああ、鍵をかけたんですよ。施錠の点検をすと言いませんでしたか？」

「まだ私達がいるでしょ!?!」

「ええ。だから閉めたんですよ」

「なっ……!!」

振り返り、こちらに向き直った田本の目は笑っていた。悪寒が走るほどの、気持ちの悪い視線だった。笑えるような会話などなかったはずだ。何がそんなにおもしろい。

「困るんだよ、余計なことされると。そう言う、ねちっこくてウザイところは母親にそっくりだな、おまえ」

「な………なんですって!?!」

「ああ、うるさいうるさい。言い方までそっくりだよ。やめてくれ、思い出しまうじゃねえか。胸糞悪い」

急に態度が変わった、と言うより、これはもはや別人だ。ついさつきまで、こんなふてぶてしくて、いやらしい男はここにいなかったはずだ。誰だ、こいつは。

「おまえらも運がなかったな。余計な詮索をせずに、黙って引っ込んでいればよかったものを。今後、こんなことが出来ないように、

おまえらにも黙ってもらうことにするよ」

「ど……どう言うことよ……」

「わかんねえのか？ 頭の悪いガキだなあ。おまえも母親の後を追わせてやるつつてんだよ」

「……やっぱり、あんたがウイルスを！」

「ウイルス？ はっ、ウイルスだつて？」

気でも狂ったのか、いきなり高笑いを始める田本。その声は、本当に田本が笑っているかどうかさえ疑ってしまう、今までに聞いたことのない甲高い声だった。完全に常軌を逸している。何故ウイルスという言葉に反応してこんなことになるんだ。

「おまえらも含めて、この国の連中は本当におめでたいなあ！ ウイルスだつて？ お笑いだ」

「何なのよ、一体！？」

「……お前らさあ、本当にウイルスなんてあると思つてんの？」

「……えっ？」

「感染経路は不明、対抗する薬も治療法もない。そりゃあ、そうだよな。存在しないものがどうやって感染したかなんてわかんねえだろうし、存在しないものには対抗しようがねえからなあ」

「存在しないって……」

「そうだよ。ウイルスなんて始めからなかったんだ。でも、次から次へと同じ症状の人間が発見されるのに、原因が一切わからない。焦った国は新種のウイルスを勝手に作り上げ、そのウイルスに全てを擦り付けたんだ。未知のつて枕詞を付けりゃあ、なにもわかっていない現状を正当化できるからなあ」

「じゃあ……何で声が……」

「答えは簡単だ。俺がウイルスではない方法でそいつらの声を奪つてやったからだよ」

「そんな！ そんな非現実的なこと出来るわけないじゃない！」

「出来るんだよ。俺も最初は驚いたがな。ウイルスに感染したことになってるやつは全員、俺がやったんだよ。おもしろいもんだぜ

？ 相手に触れたまま黙れって念じれば、次の日にはそいつの声が出なくなってるんだからなあ」

確かに、失声ウィルスなどこの世には存在しないもので、国がその事実を隠しているという話が本当なのであれば、被害者が六名も出ているのに、一切何もわかっていないという状況にも説明が付くでもそれならば、こいつは、田本はもしかして……。

「西校の時も同じだったよ。あのガキ、頭が悪いくせに勘だけは良くてよ。自分の母親が声を失ったのはお前の所為だって殴りかかってきたんだよ。俺もその時はまだ半信半疑だったから、お仕置きの意味も含めて、そいつに同じことをしてやったんだよ。思いつきり首を絞めながら念じたんだ。黙れ黙れ黙れってな。そしたらどうだ、最初は抵抗してぎゃあぎゃあ騒いでたやつが、段々と擦れ声になっていったよ。終いには口から空気の音しかしなくなったよ。自分でも声が出なくなったことに気づいたら、呆然としてたな。たぶん、それでおかしくなったんじゃないかな、あいつ。楽しかったなあ。満たされた気分だった。でもそれじゃあ、俺がやったってばればれだろ？ 親子揃って俺と関わった途端に声が出なくなったんだ。さすがにそれは疑われる。だから、無差別に他の人間にも同じ事をして、そういう病気だつてことになるように仕向けたんだよ。こんなにうまくいくとは思わなかったがなあ。ただ、その時は楽しくなかったよ。必死だったってのもあったが、やっぱり抵抗する人間が徐々に声を失っていくってこういうシチュエーションじゃないと興奮しないんだよ」

田本は笑いながら話す。こいつ、狂っている。

「じゃあ、あんたはお母さんの首を絞めたのね！」

「ああ？ 本当に頭の悪いガキだな。そんなことしたら、声を奪う前に騒ぎになって捕まっちゃうだろ。首を絞めたのは西校の糞ガキん時だけだ。首なんか絞めなくなつて出来るんだよ。要は相手に触れてさえいれればいいんだ。お前の母親の場合は、一瞬手に触れただけで出来たよ。指導室を出る時にちょうどよくペン立てを落として

くれたからな。一緒に拾っている時に少し手に触れて、その瞬間に全ての憎しみを込めて念じたのさ。結果はご覧の通りってわけだ」

「そんな……そんなこと……」

「理解しようとしなくてもいいさ。これから自分の体で体験するんだからなあ。本当に今日はラッキーだ。また、あの充実感を味わえる。お前らにお礼を言いたいぐらいだよ」

「いや！ 来ないで！」

ゆっくりと近づいてくる田本に対して、寺尾は近くにあったものを手当たり次第に投げつけながら田本との距離を取ろうと必死に逃げ回る。

「おいおい、あんまり散らかすなよ。片付けるのが面倒臭いんだから。それに、シャーペンとか投げられると結構痛いんだぜ？ 知らないだろ？ 授業中に生徒から物を投げつけられる教師の痛みや気持ちなんて」

「うるさい！ 来るな！」

「往生際が悪いな。お前もこの坊主みたいに諦めておとなしくしろよ」

「いやよ！ そんなっ……！」

近づく田本から逃れようと必死に距離を取っていた寺尾の足がもつれ、近くの机に乗っていた物をばら撒きながら転んでしまう。

「ああ、そんなに焦るから転ぶんだよ。さてどうする？ 後ろは壁だし、ここは職員室の一番奥。逃げ場はないなあ」

「いや……」

「自分の声にお別れを言いな。もう二度と聞くことがないんだからなあ」

「いや！ 助けて！」

壁際に追い詰められた寺尾に手を伸ばす田本。

何だ。この光景はどこかで見たことがある気がする。

あそこでうずくまって助けを求めているのは、誰だ？

あれは、僕？

「お願い！ 助けて！！」

「ははは！ あそこの坊主に助けを求めてんのか？ さつきから一歩も動かずに、棒立ちしているあいつにか？ あんな見るからに頼りなくて、非力で、諦めの良い奴がお前を助けるわけないだろうが！ 現実を見る！ お前は余計なことに首を突っ込んで、自分の声を失うんだ！ そして、その声は二度と戻ることはない！ 母親と共に絶望の中で生きていくしかないんだよ！ 最高だなあ！」

「助けて！ 助けて！！」

「おっと、言い忘れてたが、このことを誰かにばらしたら、それを聞いた奴も同じ目に会うからな。まあ、声を失った糞ガキのお前らが、こんな現実離れたことを誰かに話しても、声が出なくなつて錯乱しているから変なことを言っている、ぐらいにしか思われないと思うけどなあ。じゃあな、声が出なくなつても元気でやれ……っ！！」

無意識だった。

無意識の内に僕は駆け出し、田本に体当たりをかましていた。薄っぺらい紙のような田本の体は勢いよく吹っ飛び、壁に激突し、ぼる雑巾のように寺尾の真横に崩れ落ちる。

「逃げて！」

久しぶりに叫んだ所為か、突然の仕事に対応できていない僕の声帯が震え、かなり擦れた声になっていた。それでも寺尾にはしっかりと届いたみたいだ。うずくまっていた寺尾は這い蹲るようにして職員室の扉まで逃げる。

「うっ……くそっ！」

倒れていた田本が動き始める。早くしろ！ 早く逃げてくれ！

「だめ！ 鍵が……」

「くっくっく。そうだよ、逃げられはしないさ。坊主、お前の勇氣は認めてやるが、無駄なあがきだったな。ここでおとなしく待って

嫌だ！

来るな！ 嫌だ！

来るな！

「うおっ！！」

田本の呻き声と、たくさんのものがぶつかり合いながら床の上を引きずられるような、凄まじい音が聞こえた。

むせ返りながら起き上がると、職員室は大地震が起きた後のような、ひどい有様になっていた。机や椅子がひっくり返り、引き出しに入っていた書類や文房具が至る所に飛び散っていた。よく見ると、その惨劇は僕を中心として扇状に広がっている。さっきまで僕の目の前にあつた机や椅子も、首を締め付けていた田本も姿を消し、何もない空間だけが残っていた。少し先を見てみると、消えたと思っていた机や椅子は何かには押されたように追いやられ、田本もその中に紛れて倒れていた。

まただ。

またやってしまった。

欲望者の力。

バケモノの力。

僕は、学校もあの廃ビルのように壊してしまうのか。

僕は、僕は……。

しばらく田本は起き上がらなかった。僕も動くことが出来ない。動いてしまったら、またあの力が出てきて、今度こそ学校を壊してしまう気がした。これ以上、僕はバケモノになりたくない。あんなことは、もう二度と起こしたくない。

どれだけの時間が流れただろうか。職員室は静まり返り、田本の机にある卓上ランプだけが灯っている。僕は逃げる事も忘れ、何も考えられずにそこでぼうつと座っていることしか出来なかった。職員室の時だけが止まっているように思えた。

「何だよ、何なんだよおまえ！」

倒れていた田本が叫ぶ。眼鏡にはヒビが入り、スーツもぼろぼろだ。

「畜生！ それなら！」

また田本が近づいてくる。今度は押し倒さずに、力を入れないで僕の首に片手を当てる。

「そうさ！ 触れてさえいれば良いんだ！ 触れてさえいれば！」

このままじゃ僕の声が奪われる。でも、拒めばまたあの力が……。もう、駄目だ。

「黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ！」

僕の声は失われた。もう僕は話すことが出来ない。誰かに自分の気持ちを伝えることも出来ない。おもしろいことがあっても、大声で笑うことも出来ない。僕の音は永遠に戻ることはないんだ。

「やった……やったぞ！ はははは！ やったぞ！」

「やめろ！ 何をしてるんだ！」

男が二人、荒れ果てた職員室に飛び込んできた。体格の良い男とベテランの風情が漂う男。二人とも紺と薄い青の二色が基調となっている、おそろいの服を着ていた。警察官だ。

二人の警官は入って来るなり、体格の良い方が田本を僕から引き剥がし、うつ伏せの状態を取り押さえる。もう一人のベテラン風は僕を田本から遠ざけて、激しい口調で問いかけてくる。

「君！ 大丈夫か！？ おい！」

「……」

「おい！ 聞こえてるのか！？ 返事をしなさい！」

「……だ……大丈夫です」

「良かった、怪我はないか？」

警官の勢いに圧倒され、自然と話をしていた。

声が出ない。僕の声は失われていない。

「……おい……何だよ。何で喋れるんだよ！ 俺は確かにやったぞ！ ちゃんと念じた！ ちゃんと触った！ どうしてだよ！」

「黙れ！ おとなしくしろ！」

「黙れだど！？ 俺に言ってるのか！？ 俺に黙れだどて！？」

「おとなしくしろと言っている！」

激しく抵抗する田本を、がっちりと押さえつける警官。田本は僕が普通に喋っていることで、かなり困惑しているようだ。あの体格差で勝てるわけがないのに、警官を振り払おうと必死にもがいている。

そうしているうちに、窓の外に続々と赤い光が集まり始めていた。光の数から考えると、少なくとも四台以上のパトカーが集結しているようだ。同時に、そのパトカーでやってきたと思われる警官が一人、二人と職員室に到着する。最終的には、田本に四人、僕に三人の警官がつくことになった。田本は屈強な警官四人に拘束され、パトカーに連行されていった。連行されている間中、ずっと叫び続けていたが、何を叫んでいたかは聞き取ることが出来なかった。

終わった。何だか夢を見ていたような気分で、さっきまでのことがはっきりと思い出せない。まだ、首には田本に絞められた時の感覚が残っているけれど、声はすっかりと出るし、学校を壊さずに済んだ。やっと、長かった一日が終わる。

本音？

人生で初めての警察署。ただし事情聴取を受けるのは二回目だ。

前回は拍子抜けするくらい、すんなりと開放してもらえたが、今回はそうもいかない。なんといっても事件の被害者だ。僕は警察署の個室で、スーツ姿の警官二人から事件の始まりから終わりまで、事細かに詳しく質問をされた。職員室の扉を空けたのは誰か、相手に体当たりをしたのはどのような向きで、どの部分にどれぐらいの速度で当たったのか、相手はどの手でどの部分を絞めてきたのかとか、覚えているわけがないようなことばかりだった。

質問以外で聞かされたことは、寺尾に関することだった。寺尾は職員室を脱出した後、学校近くにある交番まで走って助けを求めに行っていたそうだ。泣きじやくりながら「友達が学校で襲われている」と叫び声を上げていたらしい。その女子高生の取り乱しように、ただ事ではないと察した交番勤務の警官が、応援を要請した後に学校へ駆けつけてくれたのだった。

意外だった。寺尾が僕のために助けを求めて走ってくれていたこともそうだが、僕のことを友達と言ったことが。必死だったため、日常的に使っている言葉の中で、最も相手に伝わりやすい言葉が自然と出たからだとは思うが、それでも僕を友達と現していたのだ。同級生でもなく、同じ学校の生徒でもなく、友達と言ってくれた。なんだか変な気分だ。

事情聴取が終わり、解放されたのは夜十時を過ぎてからのことだった。唯一、前回と同じだったのは、僕の両親ということになっていくあの二人が、警察の連絡を受けてすっ飛んできたことだった。前回事、事件の概要に驚き、何故自分の子供がこんなことに巻き込まれたのかと困惑し、僕の体を心配する素振りを見せていた。

もついい加減にしてくれ。そんなもの、本心でないことぐらいわかっている。その二人を目にするだけでイライラが募る。帰りの車

でも、あれこれと事情を聞かれたが、疲れていたし面倒だったので、ずっと黙っていた。どうせ、あんたらに話したところで何もしてくれないだろう。そんなに事件の話が聞きたいのなら、もう一度警察に行つて警官にでも聞いてもらった方が早いし、僕としてもその方が楽でいい。親みたいな顔をするのはやめてもらいたい。家についてからも「ちゃんと話をしよう」と言われたが、無視して部屋にこもった。

ちゃんとしてなんだよ。高校に入つてから、一度もちゃんと話を聞いてくれたことなんてなかったくせに。怒りを抑えるようにベッドに倒れこむ。すぐに意識は途切れた。

目が覚めると朝になっていた。時間はいつも起きている七時前。部屋の中は静かだ。居間からも物音は聞こえてこない。トイレに行くついでに家の状況を確認すると、玄関には僕の靴だけが綺麗に揃えられていて、居間には誰もおらず、食卓にラップで蓋をされたお惣菜のパックが三つ並べられていた。近くにはインスタント味噌汁の小袋とレンジで温めるタイプのごはんも用意されている。

トイレを済ませてから、パンを二枚オープントースターに放り込む。焼きあがるまでに少し時間があるので、着替えることにした。今日は世間一般的に言う平日だが、着替えるのは制服ではなく私服だ。本日学校は休み。昨夜、職員室で起きた事件のことを考えると、当然の結果だ。教師達もこんな時に授業などやっていられないだろう。

居間に戻り、焼きあがったパンを皿にのせ、冷蔵庫からオレンジジュースとバターを取り出し、それら全てを抱えて部屋の机に配置する。パソコンの電源を入れて、インターネットを見ながらバターをのせたトーストに噛り付く。今日は昨日の出来事がニュースになっているかどうかを調べるため、新聞社のホームページやニュースサイトを巡ることにした。

やはり、どこかのページにもトップページに記事が掲載されている。

失声ウイルスの感染者を出した学校で、今度は教師による生徒への暴行が発覚したのだ。話題性は十分だし記事としても非常に書きやすい内容だろう。マスクミが食いつかない訳がない。学校の騒がしさも、しばらく落ち着くことはないだろう。またレポーターや記者達から逃げ回る登下校が続くことになる。

二枚目のトーストを食べ終えたところでドアホンが鳴った。こんな朝早くに、一体誰だろう。居間にあるモニターを確認すると、スーツを着た男が二人、玄関前でインターホンを睨みつけながら立っていた。ものすごく威圧感のある二人組みだ。最初は居留守を使おうと何もせずにモニターを監視していたら、もう一度ドアホンが鳴る。二人とも真剣な表情だ。なんだか応答しなければいけないような気がして、恐る恐る受話器を取り、耳に当てる。

「朝早くにすみません。警察の者ですが、昨晚お話しした現場検証の件でお迎えに来ました。正人君はいらっしゃいますか？」

すっかり忘れていた。そういえば昨日、警察署を出る前に現場検証の立会いに協力して欲しいと言われていたのだった。玄関にいる二人は警察官で、僕を迎えに来たみたいだ。慌てて玄関の扉を開ける。

「君が正人君かい？ 朝早くにすまないね。話は聞いてると思うけど、現場検証に立ち会ってもらえるかな？ ご両親はお仕事だろ？ お二人には昨晚の内に話をしてるし、朝は仕事で家にいないと聞いているよ。外に車を待たせてある。僕らは先に乗って待っているから、準備が出来次第下りてきてくれ」

警官はそれだけ言うと、廊下奥のエレベーターに乗り込んでいった。

現場検証への立会い。あの二人もそのことを聞かされていたようだ。それでも、あの二人は仕事を優先したのだ。自分の子供が事件に巻き込まれ、その事件の被害者になっているのに。その事件の現場検証に朝から駆り出されるのがわかっているのに、だ。

それでいい。それでこそ、あの二人だ。僕とあの二人の関係性は、

これが正常なのだ。何も間違ったことはないし、それについて何も思うことはない。これで、いいんだ。

準備が整い次第と警官は言っていたが、特に準備をすることが見当たらなかった。着替えも朝食も済ませてしまった。残っているのは後片付けぐらいだ。部屋にあった食器を流しに置き、上着を羽織る。一応携帯電話も持って行くことにした。鳴らないことはわかっているが、ただ何となく持って行こうと思った。単なる気まぐれだ。家を出て、玄関にしっかりと鍵をかける。エレベーターで一階に下りると、入り口前に黒の乗用車が停まっていた。パトカーがいるものだと思っていたが、普通の車だった。一人は運転席に乗り込んでいて、僕に話しかけてきた方の男は車の近くでタバコを噴かしていた。

「おお、早かったね。じゃあ早速で悪いが、学校に向かうんで後ろに乗ってくれ。何、そんなに時間はかからないさ。君から聞いた話を現場で再現しながら確認するだけだから」

後部座席に乗り込むと、話しかけてきた男も助手席に乗り込む。運転手の男が搭載されている無線でどこかに連絡を入れた後、車は学校へ向けてゆっくりと進み始めた。

休みだというのに学校前は賑わいを見せていた。中継車、テレビカメラ、照明、マイク、レポーター。ウィルス感染者発見の一報が入った時と同じぐらいの報道陣が校門前に詰め掛けていて、彼らを規制する警察官と睨めっこを繰り返していた。僕が乗った車はその群れを掻き分けながら校内へと侵入する。後部座席にはスモークが張られていたが、そのスモークも役に立たないんじゃないかと思えるぐらい、けたたましいフラッシュの嵐が車に浴びせられた。なんだか、犯罪者になった気分だ。

迎えに来てくれた警官二人に案内されて、職員室へと向かう。職員室は昨日のままだった。文房具やノート、書類などが当たり一面に散らかっていて、職員室一番奥の壁際から何か強い力で押された

かのように、机や椅子はひっくり返って歪んでいた。昨日は薄暗くてよくわからなかったが、その押す力が発生したと思われる場所の床が少し窪んで、ひびが入っているのに気が付いた。僕の住んでいるマンションにも同じような窪みがある。やっぱり、これは僕がやったんだろう。あの力で。

職員室では何人も警察関係者がせわしなく行き交っていた。制服姿やスーツ姿の警官、テレビでしか見たことのない青い作業着を着た鑑識らしき人も忙しそうにしている。その中で、居心地悪そうに周りを眺めていた人物が僕に気づき近寄ってくる。

寺尾藍だ。彼女も現場検証の立会いで呼ばれていたようだ。確かに、彼女もこの事件の被害者だ。この場においてもおかしくはない。

「無事……だったのね。声は出るって聞いたけど、本当？ 家のお母さんは次の日に声が出なくなっただけ……」

「……………大丈夫」

「本当に……声、出るのね」

寺尾はそのまま黙って俯いてしまった。寺尾が何を考え、何を思っているのかはわからないが、なんだか切なくて悲しい表情だった。

現場検証は、事情聴取の場所を職員室に変えただけの、質問や確認が全く同じ内容のもだった。誰がどの位置に立っていて、僕はそこからどのような動きで田本に体当たりをしたのか。田本はその後どのような動きで寺尾を追いかけ、そこからどうしたのか。正直ほとんど覚えていなかった。あれだけ衝撃的なことだったのに、今では他人事のようで、警察の質問にも覚えていないとしか答えられなかった。寺尾も同じくはつきりと覚えていないみたいで、曖昧な返事で答えていた。

二時間ほど現場検証に立会ったが、一番多くの質問を受けたのが机や椅子が吹き飛んで壊れていること、壁際の床が窪んでいることの原因だった。この事件で一番不自然で疑問が残るのはここだろう。しかし、本当のことなど言えるはずがない。言ったところで誰も信じてはくれないだろうし、逆に変な目で見られることはわかっている。

る。それこそ、わかりませんとか覚えていません、で通すしかなかった。説明なんてできない。僕自身がよくわかっていないんだから、どうしようもない。

現場検証での僕たちの役目が終了し、警官がまた家まで送ってくれると言ってくれた。しかし、寺尾が「私達、用事があるので帰りは自力で帰らせて下さい」と言い出した。僕に用事はないし、寺尾とそんな話をした覚えはない。でも、深刻そうな顔で話す寺尾を見て、断ることが出来なかった。警察官もそんな彼女を見て「報道陣がいるから、せめて近くの駅までは送らせてもらおうよ」と出来るだけ寺尾の意思を尊重する案を提示してくれていた。寺尾もそれで納得したようだ。

今度は寺尾と二人で車の後部座席に乗り込む。少し人数は減っているが、いまだに校門前には報道陣が群がっている。その報道陣の壁を貫いて、僕らに乗せた車は近くの駅へと走り出す。たぶん、向かう駅はショッピングモールと公園と地下鉄の駅が一緒になっている複合施設だろう。学校からはあそこが一番近い。付近はいつも混み合っているから、着くまでにかなり時間がかかると思っていたが、平日の昼前ということもあって、学校から離れると道路はがら空き。あつと言つ間に到着した。車を降りると、送ってくれた警官が今後についての話しをしてくれた。

「また、お話を聞くために署へ来てもらうかもしれないので、ご協力をお願いします。その時は連絡を入れますので。では帰り道、気をつけて」

お礼を言い、扉を閉めると車はまた学校に向かって走っていった。降りてもらったのは公園にあるバス乗り場だった。隣にはショッピングモールが広がっている。地下鉄の駅はショッピングモールの背にして、公園を通り抜けた先にある。僕の家はバス一本で帰れるので地下鉄を使う必要はないのだが、寺尾は地下鉄を使わなければならぬようので、寺尾と僕は地下鉄の入り口に向けて公園内を歩き始める。

「悪いわね、付き合わせちゃって」

寺尾が素っ気なく言う。悪びれている様子はない。

「……何で、あの時私を助けたの？」

真剣な眼差しで問いかけてくる。その瞳からは、疑問と不安が滲み出ていた。

何で、と言われて素直に答えることはできなかった。あの時僕は、田本に襲われ怯えている寺尾に昔の自分を見た。周囲からのプレッシャー、山下を始めとする生徒達からのいじめ、助けてくれない大人たち、逃げ道もなく、迫り来る影に怯えるしかなかった自分の姿が重なって見えた。助けを求めている自分がそこについて、それを間近で見ている自分がいる。今なら僕が僕を助けることが出来る。逃げ道を見失い、恐怖で足が竦んでいる僕に、逃げ道を作ってやれる。そう思った時には、足が勝手に動き出し、全力で田本にぶつかっていた。僕は僕を助けたかった。ただ、それだけ。寺尾を助けようなどと思った訳ではない。結果的にそうなったただけなのだ。そんなこと、言えるはずがない。

「……よく……覚えていない」

これが精一杯だった。

「そう……まあ、いいわ。バケモノに助けられるなんて貴重な経験ね。とりあえず、お礼を言わせてもらうわ。ありがとう」

お礼を言われた。他人から「ありがとう」なんて言われるのは、いつぶりだろう。罪悪感がこみ上げる。ありがとうだなんて言わないでくれ。僕にはお礼を言われる資格なんてない。僕は自分自身のためにやったんだ。自分のことしか考えていなかったんだ。

「日本を発つ前にこれだけは直接言っておこうと思ってね。あんな場所じゃあ、ろくに話も出来ないから」

寺尾は柔らかくて優しい表情で話す。寺尾のこんな顔を見るのは初めてだった。僕にお礼を言ったことで、自分の中でも何か区切りがついたのかもしれない。しかし、日本を発つ、とはどう言う意味だろう。

「私も良く知らないんだけど、海外にウィルスの研究で成果を上げている先生がいるみたいで、お父さんがその先生に今回の話をしたらしいの。そうしたら、その先生からすぐに連絡があつて、お母さんのことを診てもらえることになったのよ。それで、ついでだから家族全員診てもらおうつてことになつて。それにね、私、まだ田本の言つていたことが信用できないの。だって、そんなことができるなら、あいつは超能力者つてことになるでしょ？ あんなやつがそんな不思議な力を持つてるなんて思えないし、実際、あなたは声が出てるんだから。でも、完全に否定も出来ない。田本の自信に満ちたあの表情は、嘘を言つているようには見えなかつたから。だから、白黒つけるために検査を受けてこようと思つたの。もしかしたら、一年や二年、かかつてしまふかもしれないけど、何もしないよりははるかに何倍もまし！」

柔らかく優しい顔が、決意に満ちた表情へと変わる。希望に満ち溢れているようにさえ見えた。しかし、僕にはわかる。僕は知つている。確実にあれは、田本の力だ。ウィルスなどではない。僕が声を失わなかつた原因は不明のままだが、今までの被害者は全員田本にやられたんだ。欲望者の力だ。

「ところで、警察の人も聞いてたけど、あの職員室はあなたがやったの？ なんかすごいことになつてたけど……」

嫌な質問をしてきた寺尾をどうやってかわそうか必死で考えていると、後ろから大勢の人間が走つてくる音が聞こえた。

「あれだ！ いたぞ！」

振り返ると、カメラを抱えた人間やマイクを持った人間が総勢で十五人ほど、間近に迫つてきていた。車の後をつけられたんだ。校門前でハイエナのように舌なめずりをしていたマスコミの一部が、僕らを見つけて走り寄つてくる。

「君たちだよね！？ 事件の被害者！」

「田本容疑者は国語を担当していたようでしたが、どのような授業を！？」

「事件当時、職員室では何があつたんですか!？」

「今の気持ちを教えてください!」

「田本容疑者に伝えたいことはありますか!？」

「失声ウィルスも関係していると聞きましたか!？」

カメラのフラッシュが何度も光り、天から降り注ぐ無数の矢のよ
うに、四方八方から次々と質問が僕らに突き刺さる。完全に取り囲
まれた。

「ちょっと! やめ……やめてください!」

「学校側から何か説明はありましたか!？」

「二人はどういった関係ですか!？」

「ご両親は何とおっしゃってましたか!？」

「失声ウィルスに続いて今回の事件ですが、学校の様子はどうす
か!？」

寺尾の声は質問の嵐の中に掻き消されていった。どんどんと彼ら
は近づいてくる。僕らが不快な表情を見せようと、苦痛を訴えよう
と、まるで気にしていない。何も考えていない。事件の被害者であ
る僕らのことなど、何一つ。

いい加減にしろ!

やめてくれ!

来るな!

「はい! ストップストップ!」

突如として聞こえてきた大声に、皆驚いて動きが止まる。妙な静
けさが一瞬訪れたかと思うと、大声の主が僕らを取り囲む報道陣を
押し退けながら中心に侵入してくる。

「はい、お邪魔します。ちょっとごめんなさいね。あ、ごめんな
さい。足踏んじやった。大丈夫?」

固まって動かなかつたマスコミ連中が、取材を邪魔されたことと、
おどけた口調に対して一斉に批判を始める。

「何なのよあんた!」

「邪魔するな！」

「さっさと消える！」

「どこの人間だ、お前！」

感情をむき出しにした、乱暴な言葉遣いだ。これがこいつらの正体なのか。特ダネのため、取材のためなら、障害を全力で排除しようとする。手段を選ばず、犠牲を気にせず、利益だけを追い求める。そんなやつらなんだ。

「まあまあ、そんな熱り立たないで。まずは名刺交換から。私、情報屋をやっております、ブローカーと申します。どうぞ宜しく！」
明るい口調と共に、その場にいる全員に手際よく名刺を配るその姿は、紛れもなく、眼鏡にハンチング帽をかぶった、見たことのある男だった。

ブローカー。

自称、情報屋。

ブローカーは何を考えているのか、僕と寺尾にも名刺を配る。名刺には「情報屋 ブローカー」とだけ記載されていた。なんともお粗末な名刺で、小学生が遊びで作った会員証みたいな出来栄えだった。

しかし、その名刺を見たマスコミは全員顔から血の気が引いたように青ざめて、俯きながら逃げるように退散して行った。どうしたんだ。ブローカーの名刺にそんな絶望的なことが書いてあるようには思えない。

「やっといなくなったね。はあ、すっきりした！」

両腕を上突き出し、伸びをしながら気持ちよさそうに話すブローカー。寺尾はその姿をみて明らかに怪しんでいた。無理もない。僕も最初はそうだった。今でもそうだ。

「また会ったね、森黒君。君は本当に話題に事欠かないねえ。呪いかなんか施されてるんじゃないの？」

呪いか。それが本当なら、ブローカーに出会ってしまうことも、呪いの一種だろう。

「ねえ……誰、この人？」

寺尾がブローカーに聞こえないよう、僕に耳打ちをする。誰と言われても、なんて説明すればいいのか。

「さつきも言ったじゃないか。情報屋のブローカーです」

「……」

聞こえていたらしい。まあ、どんなに小さな声で話しても、ブローカーなら聞き逃すことはないだろう。それが、こいつの力なんだから。

「君は……森黒君のガールフレンドってことでいいのかな？」

「違います」

即答だった。それも機械的で無機質な口調で。

「違うの？　なんだ。森黒君にも春がやってきたのかと思って、お祝いしてあげようと思ったのに。雪解けはまだ先かあ」

「何か御用ですか？　何も無いなら帰らせてもらいたいんですが」

「ああ、どうぞ。僕は森黒君に会いにきたただだから。君には何の用もない」

「……そうですか、それじゃあ失礼します」

寺尾はむすつとして歩き出す。また怒っているようだ。田本のマンションで井浦に取った態度とまるで同じだ。

「それじゃ、私先に帰るから。こっちに戻ってきたら結果を教えるわ。それで、納得がいかなければまた調査を始めるから手伝いなさいよ。宜しくね、クロ」

そう言っつて、寺尾は地下鉄の入り口に向けて歩いていった。歩き方が乱暴だ。どうしようもない。

「………君、いつの間にペットになつたんだい？」

最初はブローカーが何のことに對してその言葉を発したのかわからなかった。また、いつものように訳のわからない、とっさの思いつきかと呆れていたが、寺尾の最後に残した言葉を思い出して気付

く。ブローカーに指摘されなければ気付かなかったかもしれない。クロ。

寺尾はそう言っていた。森黒の黒から取って、クロなのか。確かに響きだけで考えるとペットの名前のように聞こえる。実際、ペットのようない扱いを受けていたから、強ち間違いとも言えない。

「良かったじゃないか。良いご主人様で。このまま本当にペットとしてついて行けば、なに不自由のない生活が送れるんじゃない？」
相変わらず、人を馬鹿にするようなことしか言わない男だ。僕は別に生活に困ってはいないし、ペットになるつもりもない。寺尾だつて「バケモノがペットだなんて、冗談じゃない」と怒り出すに決まっている。

「いいじゃないか。似た物同士、仲良くやんなよ」

「……どこが」

どこが、似た物同士だ。180度どころか540度違う。違いすぎて一回転半もしてしまった。方や医療関係の仕事をしている父を持つ金持ちのお嬢様で、方や毎日残業をしないと学費が払えないのに、無理をしてレベルの高い学校へと自分の子供を進学させた、無責任な人間を親としなければならぬ凡人だ。雲泥の差。月とすっぽん。例える言葉ならいくらでも出てくる。それぐらい、明らかに違う。似ているところなど、一ミクロンも存在しない。

「似ているよ。まあ、性格とか環境とか生活レベルって話じゃなくってさ。少なくとも、君たちの学校に置けるポジションは同じだろ？」

同じ学年の生徒、という意味だろうか。ならば、それも違う。僕はバケモノ。この世に存在してはいけない空想上の物体だ。寺尾は普通の女子生徒として周りから受け入れられているのだから、同じはずがない。

「君の鈍さも筋金入りだね。この場合、鈍いというより頭が悪いって言ったほうがいいのかな。よく考えてご覧よ。あの娘は母親が失声ウイルスに感染した。しかも、感染したのは学校じゃないかと疑

われた。そうなった時、君の学校の生徒達はどんなことを考えると思う？ どんな行動に出ると思う？ 君は、それを今までに嫌と言うほど味わってきたはずじゃないか」

僕がいじめを受けるようになった時のことを思い出しながら、少し考える。僕が皆の期待を裏切り成績を落としていった時、あの生徒達は邪魔な僕を排除しようとした。ありとあらゆる方法で僕を追い詰め、その行為を楽しむようであつた。

だとすると、寺尾も……。

「やつと理解したかい？ そう、あの娘もいじめられてるんだよ。呼び名は、そのまま“ウイルス”らしいよ。君のバケモノに負けず劣らず、センスのない呼び方だね。あそこの生徒達らしいよ。仲の良かった友達はもちろんのこと、生徒と言う生徒があんな娘に近寄らなくなってるってさ。だから、あの娘も君に協力を求めたんだろ？

誰も助けてくれないし、誰も心配してくれないんだから自分と同じ境遇にいる人間ならまだ可能性がある。そう思ったんじゃないかな。全く、無知つてのは恐ろしいね。失声ウイルスなんて言う、ありもしないものに踊らされて、誰かを傷つけたりしちゃうんだから。普段と変わらない様子で話すブローカーだったが、僕としては驚くべき内容だった。寺尾がいじめられているという部分ではない。ウイルスと呼ばれ、友達を失ったという部分でもない。ブローカーは失声ウイルスを「ありもしない」と言ったのだ。驚きのあまり、しばらくブローカーから目が離せなかった。何故、そのことを知っているんだ。

「あれ？ 僕がウイルスの正体について何も知らないとも思ってたのかい？ 馬鹿にしてもらっちゃ困るなあ。これでも、情報で飯を食ってるんだ。それぐらい知ってる当然だろ？ まあ、僕自身、あいつの力とか人間性に全く興味が無かったから、それほど調べてはいなかったんだけどね。それでも、失声ウイルスなんてものは国が作ったでっち上げで、その現象を起こしていたのは田本茂と言う欲望者であり、その力は人の声帯を破壊することが出来るってこと

「ぐらいは知ってたさ」

ブローカーは全てを知っていた。知っていたからマスクもしていないかったのだ。じゃあ、何故そのことを教えてくれなかったんだ。いつもなら、聞きたくもない情報を無理矢理教えてくるのに、どうしてこんな重要なことを言わなかったんだ。

「なんだよ。僕が事実を知っていたのに、君にそのことを教えなかったから怒ってるのかい？ そりゃあ、わがままだよ。だって、君は一度もそのことについて僕に聞かなかったじゃないか。僕も、これは君には話すようなことじゃないと思ったから話さなかっただけさ。非難される覚えはないね。自分の欲しい物が都合よく手に入ると思ってるなら、大間違いだよ。欲しい物を手に入れたいなら、努力しなきゃ。自分の体を使って探し回らなきゃ、求めている物は手に入らないよ？」

説得力のある言葉だった。ブローカー以外の人間がこんなことを言っても、信じる気にはならないが、僕はブローカーが自分の足で情報を集めていることを知っている。実際に見たことはないが、それでも嘘でないことはわかる。そうでなければ、僕の経歴や好き嫌いという細かい情報まで知り得ることは出来ないはずだ。ブローカーに言われて納得するのはいい気分ではないが、全く持って正論だ。「まあ、それでも危機に直面している君を無視して、ヒントの一つも話さなかった僕も少し大人気なかったかな。じゃあ、代わりに、と言っちゃあなんだけど、逮捕されてからの田本について教えてあげようか？」

僕に侘びを入れていているような口ぶりだったが、恐らくこの話が見たいだけなのだろう。山下との対決があった次の日に、校門前であったブローカーと同じ雰囲気だった。予想通り、ブローカーは茶色の手帳を取り出すと、数枚めくって書き込みのあるページを見開きにする。そして、僕が返答する前に話を始めていた。

「あの夜、職員室で駆けつけた警官に取り押さえられ、そのままパトカーに乗せられて警察署で取調べを受けることになった田本は、

移動の最中もずっと、うわ言のようにぼそぼそと何かを口走っていたみたいだね。小声すぎて、隣に座っていた警官ですら何を言っているのかわからなかったらしいよ。それでその後、取調べに入った途端、一言も喋らなくなっただってさ。留置所に入っている今でも全く声を発さないみたいで、警察では失声ウイルスに感染したんじゃないかって大騒ぎしてるみたいだよ。たぶん君に力が通用しなかったのがショックだったんじゃないかな。あれだけ人の声を奪って喜びを感じていたのに、今では自分の声を自分で奪ってるんだよ。お笑いだね」

田本を馬鹿にして「はは」と鼻で笑うブローカー。こいつが誰かを蔑む時の顔はとても満足気だった。その満足気の色がさらに輝きをましたのはその後だった。

「それよりも僕は、君が声を失わなかったことの方に興味が尽きないよ！ 田本の力は本物だったんだよ？ 最初の被害者である母親とその息子、そして君の学校からでた被害者には明らかな敵意を持って力を使っていたけど、その他の犠牲者は、たまたま田本と同じ地下鉄に乗っていたっただけで被害にあっただ。自分が疑われるのを恐れた田本が、ウイルスという病気の所為にしてしまうために無差別に襲った人々なんだよ。そこには敵意なんてものは存在していなかった。少しぐらいの悪意はあったかもしれないけど。それでも、力はしっかりと作用して、襲われた人々は声を失っただ。なのに、君は無事だった。どうしてだろう？ 君にはかなりの怒りや憎しみを抱いていたと思うんだけど……」

そんなことは僕にもわからない。あの時、思い切り首を絞められ、僕を呪うかのように叫んでいた田本の姿が脳裏に浮かぶ。その後、僕の手で吹き飛ばされた田本は、再度力を使うため、僕の首を絞めはせずに憎しみだけを込めて念じたはずだ。その時点で僕は自分の声を諦めていたんだ。田本だって僕の手を奪ったと確信していたはずだ。でも、僕は駆けつけた警官にはつきりと返事をしてきた。

田本の力がなくなっただでも言うのか？ そんなことがあり得る

のだろうか。それとも、僕の力が田本の力を防いだのだろうか。もしそうなら、いよいよバケモノという呼び名が板についてくる。

「今まで、欲望者の力については表面上の特性にしか興味がなかったけど、今回の件で詳しく調べてみようかなって思ったよ。君の力についてもますます興味が出てきた。どうだろう、僕に君の力を調べる許可はまだ下りないのかな？」

下りるわけないだろ。僕のプライベートに至るまで散々調べ上げておいて、まだ僕のことを調べ尽くそうというのか。僕はそこまでお前を信用しちゃいない。たぶん、その許可は一生下りることはない。

「まあ、気が変わったらいつでも言っつてよ。首を長くして待ち望んでるからさ。それじゃあ、僕もこの辺で。またね！」

ブローカーは手を振りながら笑顔で歩いて行った。さっきまで黒い話をしていたブローカーからは想像もできない、爽やかな笑顔だった。

子供達の楽しそうに遊ぶ声が響く昼下がりの公園。一人取り残された僕も特に目的がある訳ではないのでバス停へと向かう。帰ろう。連日の騒ぎで疲れてしまった。早く帰って疲れを癒さないと、すぐに警察から連絡が入り、再度の事情聴取がないとも限らない。

家に着き、玄関で靴を脱いでいると携帯電話が鳴った。携帯が鳴るといふ僕にとっては不自然な現象に、嫌な予感しかしなかったが、とりあえずポケットから取り出して確認をする。メールの着信だった。

一体誰からだろう。考えられるのは、迷惑メール、チェーンメール、クラスメイトからの悪戯メール、後は……ブローカー。受信箱を開くと一番上に最新の着信メールが表示されている。件名は無題でメールアドレスは知らないものだ。恐る恐るメールを開く。

「寺尾藍」

メールの本文にはそれだけしか書かれていなかった。玄関で靴を

脱ぎかけたまま、しばらく携帯の画面を見つめる。

「本物？」

メールの返信などほとんどしたことがなかったが、確認のために返すことにした。これが、悪戯の可能性も十分にある。この三日間、僕と寺尾が一緒に行動しているところを、クラスメイトに限らず他の生徒達もどこかで見ているはずだ。それを見たやつらが冷やかして送ってきているのかもしれない。でも、本物の寺尾だったら、返信がないことに怒り出すかもしれない。どちらなのか、はっきりさせる必要がある。

すぐに返事が返ってくる。

「何を訳のわからないことを言ってるの。当たり前でしょ？ 私の護衛という大事な役目があるのに、その護衛対象の連絡先も知らないなんて、意味ないじゃない。もう少し自覚を持って欲しいわ」

文面から怒りが滲み出ている。寺尾だ。護衛という言葉を使っているところから見ても、間違いないだろう。

「ごめん」

返す言葉が見つからず、とりあえず謝ることにした。護衛を承諾したつもりもないし、寺尾にメールアドレスを教えたくつもりもないが、なんとなく申し訳ない気持ちになった。

数秒もしないうちに、さらなる返信が届く。速いな。

「本来であれば、こんなことを女の子の方からさせるなんて、男として恥ずかしいことなのよ。今回は特別に許してあげるから、ちゃんと登録しておきなさいよ。それじゃ」

こうして僕の携帯電話に、高校に入ってから初めて他人の情報が登録されることになった。寺尾藍と名前入力欄に入れ、メールアドレスを登録する。登録を終えてから、メール受信箱を表示してみると、英数字の表記しかなかった一覧に、浮かび上がるように漢字が表記される。寺尾藍、が三つ並んでいる。

首輪を着けられたみたいだ。

妙な感覚を覚えつつも、携帯電話を閉じる。そのメールを最後に、僕の携帯電話はまた静まり返る。このアドレスに僕からメールを送ることがあるのか疑問に思いながら、居間に上がりテレビをつける。この時間はどの局もワイドショーをやっている、これまたどこの局も失声ウイルスの特集を組んでいた。

「またしても、ウイルスの感染者が報告されました！ しかも、今回の感染者は昨日逮捕された、元高校教諭、田本容疑者であることが判明しました。田本容疑者は昨晩から留置所に拘束されており、取調べの時点から一言も話していないということです。現在、警察では精密検査を行っており、より詳しい検査結果を待っているとのことです」

また、学校が騒がしくなりそうだ。

正義？

人の興味や関心と言うものは、個人差はあれど、皆同様に熱しやすく冷めやすいものだ。芸能人のスキャンダルや芸人の一発ギャグなんかが良い例で、初めのうちは新鮮な情報に皆が注目してもてはやし、さらなる情報を求めてどんどんエスカレートして行くが、ある程度の所まで行き着くと、変化のない情報に飽きていつしか忘れ去られてしまう。特に昨今ではその飽きがものすごい速さでやってきているような気がする。つい一週間前まで街中の至る所で流れていた流行の音楽も、しばらくもすればどこに行っても耳に入っていない。一躍時の人となり毎日のようにテレビへ出演し、多数の雑誌の表紙を飾った有名人も二、三ヶ月もすれば新たに登場した有名人に取って代わられている。

人は常に新しいものを求めている、その欲望は過激度を増してきているのだ。

田本が起こした一連の事件も、世間にとっては新しく興味を引く出来事だったようで、事件から一週間が経った今でも、ワイドショーで特集が組まれているほどだった。確かに、六人目のウイルス感染者が発見された学校から、数日も経たない内に暴行事件を起こした教師が逮捕されたら、注目を集めるのは至極当然の話ではある。さらには、その逮捕された教師もウイルスに感染している疑いがあるときているのだ。人の興味を刺激する出来事が次々に起きている。マスコミにとって、こんなにおいしい話はそうないだろう。この学校は彼らにとってネタの宝庫となっているのだ。需要と供給がよいバランスを保っていると言ってもいいぐらいだ。

事件が起きた翌日に比べると校門前に群がるマスコミの数も少なくなっただけだが、常時二、三組が待機しているのが日常風景になりつつある。警察も捜査を終えてからは、学校に警察官を配備しなくなってしまう。警察がいる間、取材を自粛していたマスコミも

それを機に過激な行動を起こし始めた。許可もないのに校内へ侵入し撮影を始める者や、授業風景を撮影するため盗撮まがいの行動を起こす者、下校途中の生徒を捕まえて現金を渡し、他生徒の情報や電話番号を聞きだして直接取材を試みようとする者まで現れた。当然保護者からの苦情が殺到し、学校側もあれこれと対策に追われている毎日だ。一体いつまでこの混乱が続くのだろう。

「……ちょっと、ちゃんと聞いてます？」

「……」

「だから、何も難しいことは聞いてないじゃないですか。あの時、職員室でどんなことがあったのかを教えてくださいればいいんですよ。先輩には迷惑を掛けませんから。ねえ、お願いしますよ」

今、こうやって後をついてきて、しつこく話しかけてくることが何よりも迷惑だ。迷惑を掛けないだなんて、どの口がそんなことを言っているんだ。

「ほら、話してしまった方が逆にすっきりすることもあるじゃないですか。ね？ お願いします！ 一生のお願い！」

こいつが僕に纏わりつくようになったのは、昨日のことだった。あの事件の後、学校は警察の現場検証やら保護者や近隣住民への説明会があり、しばらく休みに入っていた。休み明けから通常通りに学校は再開され、その日、朝一番で全校集会が行われた。今までの経緯やこれからについて、校長が疲れきった様子で話していたのが印象的だった。

そして、休み明けの授業二日目、それが昨日だ。こいつはその日の放課後突然現れた。恒例となった下校時間に起きる、玄関前生徒大渋滞を避けるため、僕は一人教室に残り本を読んでいた。廊下が落ち着き始め、そろそろ帰ろうかと思っていた時、教室の扉が勢良く開放され、見たことのない女子生徒が教室に入ってきた。その女子生徒は開口一番「あなた、森黒先輩ですよね！」と元気良く訪ねてきた。いきなりの訪問者に驚き呆気に取られていると、彼女

は僕のネームプレートを見ると僕の代わりに大きく頷き、人差し指を立てて僕を指差しながらさらに大きな声で宣言したのだった。

「私はあなたに、独占取材を申し込みます！」

それが今も僕の後ろをつき歩き、しつこく質問をぶつけてくる東海林夏子だった。私立幡ノ橋高等学校一年一組、出席番号十二番。パーマのかかったショートヘアで、顔立ちがはっきりとしているボーイッシュな女子だ。今日も、昨日と同じように僕の教室へ乗り込んできて、次から次へと質問を浴びせてきた。お陰で静かに読書をすることもできないので、まだ混雑している廊下へと逃げ込み、東海林の魔の手から逃れようとしたが、一度は撒いたものの校門を出た辺りで再び捕まってしまった。仕方なく、無視しながらいつもの学校から少し離れたバス停を目指して歩き続ける。

「先輩も強情ですね。でも、明日からまたお休みですから、今日と言う今日は話を聞かせてもらいますからね。じゃあ、とりあえず私が今までに集めた情報を読み上げるんで、何か間違いや訂正する部分があったら教えてください」

東海林は学生鞆から携帯電話を少し大きくしたぐらいのモバイルPCを取り出し起動すると、保存してあったファイルを開き、そこに記入してあると思われる文章を読み上げ始めた。

「まだまとめていないんで箇条書きでしかないんですけど、いいですよね？」

「まとめていない以前に、読み上げること自体良いとは言っていない。」

「まず、当日田本容疑者と先輩が接触したのが夜七時ごろ。田本容疑者が一人プリント作りで職員室に居残りをしていたところ、一度学校を出ている先輩が戻って来た。その時、寺尾先輩も一緒に来たね。学校には生徒は先輩達以外残っておらず、教職員達も田本容疑者を残して全員帰宅していた。その後、職員室を訪れた寺尾先輩と先輩が田本容疑者と接触。三人の間でなんらかの言い合いがあっ

た。その約一時間後、泣きじゃくる寺尾先輩が学校近くの交番に助けを求め、午後八時十二分、田本容疑者が現場に駆けつけた警察官に取り押さえられ逮捕されます。逮捕された田本容疑者は取調べが始まってからは一言も喋らなくなり、事態は一向に進展しないまま、田本容疑者にはウィルス感染の疑いが掛けられている。合ってますよね？」

東海林の言っていることは、ほとんどがニュース番組や新聞で報道されているような事件の概要だった。私が集めた情報と言ってはいたが、これぐらいは事件に興味のないやつ意外なら、誰でも知っているレベルの情報だ。こんなこと、今更確認されても困る。

バス停に到着したが、バスが来るまでにはまだ時間があつた。東海林を無視するために停留所に設置されているベンチに腰かけ鞆にしまつてあつた本を取り出し読み始める。すると東海林も僕の隣に座り、同じ調子で話し続ける。

「ここで気になる点がいくつかあります。森黒先輩と寺尾先輩の関係。何故先輩は一度学校を出ているのにわざわざ戻ってきたのか。接触してから逮捕されるまでの一時間の間に何が起きていたのか。田本容疑者が先輩を襲った動機。そして、何故職員室が不自然なままに荒らされていたのか、というところなんですよ。報道などではあまり触れられていませんが、この職員室が不自然に荒らされていたというところに、私は何かを感じるんです。昨日の昼休みに片付け終わった職員室を見てきたんですけど、床に残っていた傷が、広範囲に渡っているのが確認できました。あの細くて頼りない田本が暴れたとしても、あそこまで荒らされるとは考えにくいじゃないですか。寺尾先輩は女性ですし、失礼ですが先輩にもそこまでの筋力があるとは思えません。そうになると、先輩達や田本以外の、別の何かがあつたと思えてくるんですよ。それがわからないんです」

東海林と出会ってから初めて嫌な感じを覚えた。単なる好奇心旺盛な後輩だと思っていたけれど、気にしている所が一番触れて欲しくない部分だ。まだバスはこない。

「教えて下さい！先輩は私が気になっていることの答えを知っているんですね！？」

知っている。知っているが教える事は出来ない。教えたところで何の意味も無い。この事件はもう終わっているんだ。

東海林は自分の問い掛けにまったく反応を示さない僕を見て、眉をひそめて難しい顔になる。腕組みをし、何やら思考を巡らせているようだ。どうやって僕を攻略しようか、あれこれ作戦を練っているのだろう。残念だがいくら作戦を練ったところで、僕の考えは変わらない。

「じゃあ、質問を変えましょう。まず寺尾先輩との関係を教えてください。先輩達はクラスが別だし、出身中学も違う。友達どころか知り合いですらなかったはずなのに、何故あの時一緒にいたんですか？」

ここでようやくバスが到着した。急いで読んでいた本を鞆にしまい。駆け足でバスに乗り込む。東海林も追いかけては来なかった。しかし、閉まりかける扉の隙間を縫うように、東海林の声が僕の耳へと侵入してくる。

「私、諦めませんから！休み明けの放課後、また先輩のところにいきますからね！」

正義？

学校が通常通りに再開してから、たった二日で週末がやってきた。土曜と日曜、全国的に休みとして決められている日だ。事件の所為で平日も休みとなっていた学校も、この休日を無視することは出来ない。たぶん、事件で潰された授業時間は冬休みや春休みの日程を削ることで賄われることになるんだろう。休む日数はそれでも変わりはないのだが、損をしている気分になってしまふ。特に僕は、現場検証に立ち会ったり、警察署に出向いたりと出歩いているから尚更だ。今からそんなことを考えても仕方が無いのだが、暇な時間と言つのはどうしても余計なことを考えてしまいがちだ。目的も無く、ただただ河川敷を歩いている今なら、尚のこと余計な考えが押し寄せてくる。

天気は快晴。気持ちの良い昼下がりで、公園としての機能を持つこの幡ノ川はたくさんの家族連れやスポーツを楽しむ人達で賑わいを見せている。ただ、たくさんの人がいるからと言って窮屈な感じはしない。車道六車線分はある広くて長い川と、同じぐらいの土地を使って開発された河川敷にしてみれば、まだまだ少ないほうだ。だから僕もゆつたりと散歩が出来る。目的も、行く宛ても無い散歩を。

少し足が疲れてきた。よく考えたら、昼過ぎに家を出てきてから今までずっと歩き続けている。たぶん一時間ぐらい歩いたんじゃないだろうか。座って休めそうな場所を探し、沿線道路から河川敷へと下りるために設置された大階段に腰掛ける。日の光を受けて、眩しいくらいに輝く大きな川と、その周りで思い思いの時間を過ごす人達が一望できる場所だった。近くには大きな看板が設置されていて、幡ノ川の由来や歴史が綴られている。休んでいるだけで何もすることがないので、特に興味は無かったが看板の内容を読んでみることにした。

看板には、幡ノ川の成り立ちや水源とする山などの解説から始まり、開発の経過、一番古く残っている記録のことなどが記載されている。今のような公園が作られたのは二年前のことで、現在でも細かな工事が進められているそう。

続いて書かれている名前の由来は意外なものだった。この地域は古くから機織職人が多く住んでいた土地であり、その職人達が生活で使う水をこの川で賄っていたことが現在で残っている一番古い記録で、衣類の洗濯や水浴び等、多くの人々がこの川を生活の一部として使用していたそう。そして年に一度、職人達が川へ感謝の気持ちを込めて祭りを開いた。色とりどりの織物を橋から垂らし、川岸に食べ物や飲み物を持ち込み、皆で宴を開いていた。そうすることで日々の生活に感謝し、自分達の仕事の成果を川へ報告するということをしてきたようだ。このことから、いつしかこの川は機織を支える川という意味で文字が時代と共に変化し、幡ノ川と呼ばれるようになったそう。現在でもこの祭りは地域の風物詩として根付いており、夏になると川をまたぐ幡ノ橋に色鮮やかな織物が多く掲げられている。

今まで何も考えることなく、そこにあるのが当然のものとして気にも留めていなかった川にはたくさんの歴史があり、たくさんの方の足跡が残っていた。毎年夏に行われている祭りも、出店で設けるためにどこかの商店街が企画しているものなんだと思っていたが、すっかりとした歴史的背景が存在していた。

新しい発見だった。いかに自分が無知で、周りのことに目を向けていなかったのかが理解できた。看板を読み終えて川に目を戻してみると、先程とは違った姿の川が流れていた。何年にも渡り多くの人々の生活を支え、今尚その輝きを失わない、威厳と風格で構成された偉大なる川が穏やかに流れていた。その大きさに飲み込まれるような感覚を覚え、同時に自分の小ささを痛感した。家にいるのが嫌になり、逃げ出してきた僕なんか比べるに値しないほど、この川は大きく堂々としている。僕は本当に、小さい人間だ。

「……」
家を飛び出してきた原因を思い出してしまった。

本来、僕にとって土日というのは一週間の中で一番安らげる二日間のはずだった。

昼過ぎに目覚め、いつものように居間へ朝食を用意するために出て行くと、ソファで新聞を広げる音とキッチンで包丁がまな板を叩く音が聞こえてきた。まだ寝ぼけているのかと、もう一度良く見てみたが僕は寝ぼけてなどいなかった。あの二人が家にいたのだ。土曜日だろうが日曜日だろうが、昼夜を問わずに働き続けているはずのあの二人が、居間でくつろいでいた。

「昼過ぎまで寝ているなんてたるんでるぞ」
新聞越しに声が聞こえる。

「せっかく朝ごはん用意したのに、昼ごはんになっちゃったじゃない」

テーブルには湯気の見えないご飯と味噌汁、焼いた鮭が一切れ、納豆のパックが用意されている。

頭に血が上って行くような感覚があった。実際にそうになっていたかもしれない。すぐに部屋へと戻り着替えを済ませ、そのまま何も言わずに家を飛び出した。

どうしてあいつらがいるんだ。今日も仕事に行って家にいないと思っていたのに。それになんだあの言い草は。たるんでる？ せっかく用意した？ 誰がそんなこと頼んだんだ。お前らに何がわかるって言うんだ。

そうやって僕はあの二人がいる家から逃げ出してきた。同じ空間を共有するのが嫌で、同じ時間を過ごすのが嫌で、とにかくその場から逃げ出すことしか思いつかなかった。途中、近くにあるファストフード店で食事を済ませて、行く当ても無く歩き続けた結果、今に至る。子供みたいな奴だ、と自分でも思う。感情に任せて行動を

起こす。自分の嫌なことからは徹底的に逃げる。この川を見ていると、そんな僕の小ささが際立って目に見えてしまうようだ。

もつまとともに川を見ることが出来なくなってしまうた。足の疲れも少し取れたし、ずっとここにいてもどうしようもない。だからと言つてどこか行く宛があるかと言えば、そうでもない。また、目的も無く、時間を消費するためだけに歩き出す。

川に背を向けて歩いてしていると、寂しげな住宅街に差し掛かる。知らぬ間に街外れまで来てしまっていた。新築の家と古い家屋が入り乱れるように建ち並び、使われていないビルなんかも目立つ。この区域はまだ開発途中のようで、統一感のない景観に、まるで異世界へと迷い込んだような気分になる。

しばらく歩いていると妙なことに気がついた。なんとなくこの場所を知っているような気がする。この都市は中心部から少し離れるとどこもこんな感じで、似ている景色を見たことがあるだけなのかもしれないが、街外れを訪れることなど滅多にない。今までにこんな風景を見たことがあるのは数回だ。頭の中で、その時のことを思い出してみる。

瞬間的に記憶が蘇り、携帯電話を取り出す。画面を開き、メールの受信ボックスから目当てのメールを表示させ、そのメールと自分の記憶を頼りに目的地を目指す。間違いない。ここはあの時の場所だ。

歩き続けること約十分。目的地に到着した。狭い道路を正面にして、やけに広いスペースを確保している空き地だった。携帯で表示しているナビサイトは間違いなくこの場所を示している。僕の記憶でも見覚えのある場所だ。忘れるわけが無い。忘れることなどできない。

ここは、僕と山下が対決をした場所。そして、僕があので全てを破壊した場所。ブローカーが指定してきた廃ビルがあった場所だ。

あれからどれぐらい経ったのかはつきりと覚えていないが、崩壊した廃ビルの痕跡は無く、ぼろぼろになったコンクリートも曲がった鉄骨も綺麗さっぱりなくなっていた。代わりに管理地と書かれた立て看板が設置されていて、あの出来事の影響が形となって現れていた。

「先輩！」

看板の前で立ち尽くしていると、後ろから背中を思い切り叩かれた。服の上からではあったが、鈍い痛みが背中に広がってゆく。だが、その痛みよりも聞き覚えのある声のほうが僕を嫌な気分へと陥れた。最近ではブローカーに次いで会いたくない人物が、満面の笑みを浮かべながら近くに立っている。ロールアップジーンズに真っ白なスニーカー。小さめのショルダーバッグを肩から斜めに掛け、グレーで薄手のパーカーに黒のジャケットを重ね着している、私服姿の東海林夏子だった。

「こんなところで何してるんですか！？ 先輩の家ってこの辺でしたっけ？」

道を歩いていたら偶然目の前に大好物が落ちていたというような喜びに満ちた表情をしている。手にはしっかりとモバイルPCが握り締められていた。またくだらない噂話でも収集していたのだろう。休みだと言っのにご苦労なことだ。

「あれ？ ちょっと待ってくださいね。確かここって……」

握り締めていたモバイルPCを素早く開き、眼球を左右に忙しく動かしながら、何かを探し始めた。まるで何かに取り憑かれたかのように、両手に納まるぐらいの小さな画面に夢中で嚙り付いている。数秒の後、一通り調べ終えたのか、今度はモバイルPCから視線をはずすと、僕をまじまじと見つめながら考え事をするように首を傾げている。嫌な予感がする。

東海林はその状態のまま、視線だけがしばらく僕とモバイルPCの間を行ったり着たりしていたが、何かを決心するようにモバイルPCの画面を勢い良く閉じる。

「繋がりました。今、私の頭の中でバラバラだった破片達がぴつたりと結合し、一つの線としてはつきりと事件の概要を物語り始めています」

「何だか聞いているこっちが恥ずかしくなるようなことを話し始めた。なんだか全身が痒くなってくる。」

「先輩。あなたはこの事件に関わっていますね？ およそ三ヶ月前の夜、この場所で起きた原因不明の廃ビル倒壊事故に！」

東海林は初めて僕の前に姿を現した時と同じように、人差し指で僕を指し示しながら高らかに宣言し、目の前に繰り出されたその細くて白い人差し指は僕の体を見事に貫いた。もちろん、実際に貫いたわけではない。僕の感じていた嫌な予感が、的中してしまっただめに、そんな気がしたのだ。東海林が何故この場所に姿を現したのか。そして、モバイルPCと睨めっこの拳句、どんな考えを頭の中で働かせたのか。東海林の様子からして、僕の頭で考えられる最も悪いパターンが答えになるのだろうか。

「残念でしたね、先輩。犯人や関係者が現場に舞い戻ると言う、犯罪心理学を心得ている私から逃げることは出来ないんですよ！」

羨ましいぐらいに得意げだった。たまたま家を飛び出して散歩をしていた僕と出会い、たまたまその出会った場所があこの事件の現場だっただけなのに。しかも、彼女の犯罪心理学によれば、犯人や関係者は事件から三ヶ月経たないと現場に現れないらしい。東海林の滅茶苦茶な持論も大いに気になるところだったが、それよりもあの山下との対決からもう三ヶ月も経つということに、感慨深い気持ちになり、話し続ける東海林を尻目に空き地となった廃ビル跡を眺める。

「こんなに早く事件の裏付けが取れるなんて、やっぱり私の勘は間違っていないかったんだ！ 地道な調査が実を結び、真実を解き明かす！ 全く持って理想的！」

東海林は独り言を言いながら興奮している。偶然の産物でしかない僕との遭遇を、自分の実力が導き出したことだと勘違いしている

ようだった。彼女は色々な意味で幸せ者なのだろう。

「それでは、この廃ビル倒壊事件と先輩との関わりを紐解いてご覧に入れましょう。まず私は田本との事件について先輩が何も話してくれないので、先輩のことを知るために今までの経歴やら友人関係を洗ってみることにしました。以前から有名人だった先輩の情報はカテゴリ分けしてファイルにまとめてあったので、それを元に先輩についての噂を色々と聞き込みしてみたんです。何だか信用性に欠ける噂話ばかりでしたよ、『あいつはバケモノだ』とか、『森黒は不死身で相手の精神をおかしくする超能力がある』だとか。ほとんどが面白半分です。ち上げられた作り話でした。たぶん、先輩が起こした自殺未遂からこんな噂が広まったんだと思います。私も先輩がマンションから飛び降りて無傷だったという話を知った時は驚きましたから。でも、この自殺未遂の件だけでここまで現実離れた噂が広まるのはおかしいなと思っただけです。火の無い所に煙は立ちませんからね。なので、自殺未遂の後に何かあったはずだと思っ取材を続けたんです。そうしたら、捜査線上に先輩をいじめている主犯格の山下という人物が浮かび上がってきました。先輩と同じ学年で同じクラス、元空手部である山下先輩のことですね。確か山下先輩のお父様は超大手企業の重役で、お母様は元フライトアテンダントだったはずですよ。まあ、それはどうでもいいんですけど。とにかく、今度はその山下先輩についても調べました。先輩の自殺未遂事件の後、一番先輩に関わっていたのは山下先輩みだけでしたから。今現在、山下先輩は病気で休学しているんですね。詳しい原因はわかりませんが、鬱病のような状態になっているって話ですよ。それで、山下先輩について調べていた時に、私はある事実に気がつきました。山下先輩が休学を始めた時期と、先輩がバケモノと呼ばれ始めた時期がほぼ同時なんです！これは絶対に繋がっていると思っただけ、この時期に不可解な事件や噂話がなかったかどうか改めて調べ直しました。そこでこの廃ビル倒壊事件を見つけたんですよ。しかも、この事件が起きた日にこの近辺で山下先輩らしき人物

を見かけたという証言も得られました。繋がりを確信した私は、実際に現場を見てみようと思ひ立ち、今日ここに来たら先輩がいたんです」

彼女の取材は異常と言うに相応しい熱の入れようだった。僕と出会ったのは偶然だったが、彼女がこの現場を訪れる決心をするまでに至った道筋は、本格的な調査によるものだったのだ。もしかしたら、欲望者の存在についても、僕がその欲望者であるということもある程度の情報を手に入れているのかもしれない。そうなってしまっているのならば、東海林のことだ、そのことについてもじっくり聞き出そうとするに違いない。田本との事件も欲望者と関連付けて考えるだろう。

「ここまでが先輩と廃ビル倒壊事件とを関連付けるに至った概要です。では次に廃ビル倒壊の際に先輩がどのように関わったのかを推理して見せましょう」

いよいよ本題だ。東海林がどんなことを言い出すのか、頭の中で考えられるパターンをいくつか出し、それに対してどうやって反応したらいいのかをシミュレーションする。

「私の推理はこうです。先輩、あなたは山下先輩の行き過ぎた悪戯に巻き込まれたんじゃないですか？」

「……？」

せっかく用意していたシミュレーションが、何の役にも立たなかった。全く予想もしなかった方向から、剛速球が飛んできた気分だ。しかも、ものすごい外れ。

どんなに熱心な取材を行おうと、どんなにたくさんの情報を集めようと、それらをまとめ上げて解釈する人間が偏った考えを持っていれば、真実は姿を現さない。所詮、高校一年生の浅知恵なのだ。

「先輩は何故ここにあった廃ビルが倒壊したか、ご存知ですか？」

私の調べによると、この廃ビルはコスト削減を理由に不正な設計のまま建てられたため、恐ろしく耐震性の低いビルとして出来上がったしまったみたいなんです。それが完成直後になって明るみになり、

取り壊しの資金もない依頼主がそのまま行方をくらませて、誰も手をつけないまま放置されていた建物なんです。山下先輩もこのことを知っていたんじゃないでしょうか。先輩をびびらせるにはもってこいの物件だと目をつけたんじゃないかと思います。そして山下先輩はあの夜、先輩に悪戯を仕掛けようと廃ビルに呼びつけたんです。たぶん、肝試的なことをやらせようとしたんじゃないですか？

日常的にいじめを受けていた先輩は逆らうこともできずに、言われるがままこの廃ビルへとやってきた。建物に入るように脅された先輩は何も知らないまま、建物へと入ってゆく。それを確認した山下先輩は建物を揺らすようなことをしたはずです。問題はここからです。山下先輩はちよつと建物を揺らそうとしただけなのに、建物の揺れは治まらずまるで積み木が崩れ落ちるように、いとも簡単にビルが崩壊していった。先輩がその崩壊に巻き込まれて死んでしまったと思つた山下先輩は正気を失い、病気になつてしまつたんです。そして、崩れ落ちるビルの轟音は近隣住民を呼び集め、一夜にしてその噂は町中に広まりました。こう考えると、先輩に対する現実離れた噂も説明がつかず。うちの学校にはこの地域から登校している生徒もいるんです。その生徒がこのことを学校で話し始め、やがて山下先輩を付近で見かけたという尾ひれがついて、その時先輩をビルに呼び出していたことを知る生徒が情報を付け加え、学校中に噂が広まつた。でも、崩壊したビルに巻き込まれたと思われていた先輩が、翌日平気な顔をして登校して来た。驚いた生徒達の頭の中では自殺未遂とビル崩壊の話が合わさつて、結果このようなどんでもない噂話が囁かれるようになったんでしょう。真実を知つてしまえば、なんてことはないんですけどね」

東海林の顔は学校の生徒達に対して「呆れてものも言えない」と言いたげだった。僕はその気持ちをそっくりそのまま東海林に向けていた。突っ込み所があり過ぎて何から指摘していいものかわからない。まず、いくら耐震性が低い建物だからといって男子高生一人の力で、仮にも完成していた建物が崩れるはずがない。そんな建物

は建設途中で崩壊するはずだ。さらに噂の広まり方に関する推理も無理がありすぎる。これは推理ではなく東海林のとんでもない妄想ではない。

「どうです？　ぐうの音も出ないって感じですね」

してやったり、と言った笑顔で探るように話す東海林。確かにその通りだ。フォローのしようがない。

「さあ、もう観念してください。このまま先輩が話さなくても、いずれ私が地道な取材によって真実を解き明かしてしまうんです。結果が同じなのであれば早いほうがお互いのためじゃないですか。話してくれませんか？　田本との事件のこと」

空では太陽が沈み始めようとしていた。これからどうしようか。今帰ってもまだあの二人が起きているから家には戻れない。夜までどこかで時間を潰すしかないが、だからと言ってやはり行く当ても目的も無い。夕食を何にするかも決めなければいけないから、とりあえず街に戻る道を辿ろう。あの川を渡って、休日で賑わう騒がしい街に。

「えっ？　ちよっと！　先輩、待つてくださいいよ！　先輩！！」

追いかけてくる東海林をいないものとして、街に向けて歩き出すとポケットで携帯電話が震えているのに気がついた。メールの着信だ。開いてみると、差出人が登録の無いアドレスのためアルファベツトと数字が羅列している。しかし、そのアドレスは見たことのあるものだ。たぶんブローカーだろう。本文を開くと、表示されている文章がブローカーの声で脳内再生される。

「やあ！　元気かい？　もし今暇を持って余しているなら、僕のライブハウスまで来てもらえるかな？　ちよっと聞きたいことがあるからさ。ほんの五分ぐらいもらえればいいよ」

正義？

幡ノ橋を渡り街中へと入ると、今までの道から九十度曲がるような方向へと進路を変え、ブローカーが待つ元ライブハウスを目指した。何も考えることなく、そのまま徒歩で向かっていたが思っていた以上に時間が掛かった。

前回行った時は、街に隣接している学校からだだったのでそんなに時間は掛からなかった。でも今回はあの廃ビル跡から向かっている。よくよく考えてみると、実質的な距離は学校から向かった時の二倍ぐらいの距離だ。街中に着いた時点でそのことに気が付いたが、それでも大したことはないだろうと歩き続け、考えが甘かったことに後悔した。あの不気味な商店街に着く頃には、休ませていた足に再び疲労が蓄積され、歩くたびに足全体が重く感じられるまでになっていた。

「どこに向かっているんですか？　ここって街外れの中でも一番何もない所じゃないですか。しかもこの商店街、完全に死んでますよ。ゴーストタウンってやつですね」

勝手についてきている東海林がつまらなそうに話す。あの廃ビル跡から疲れる様子も見せず、コバンザメのようにぴったりと張り付いて僕の後を追いかけてきている。こいつはどこまでついてくるんだろう。引き離そうにも疲れた足が言うことを聞いてくれず、走る事も出来ない。それに、僕と同じ距離を歩いているのに、涼しい顔をしている様子から考えると、走ったところで引き離すことは出来ないのかもしれない。東海林自身が諦めない限りはこの追いかけては続けられるだろう。出会ってしまった偶然を呪うしかない。そうこうしている内に商店街の端にある例の場所が見えてきた。

ここを訪れるのはまだ二回目だが、妙に鮮明な記憶の所為で迷うことなく辿り着いてしまった。目の前には、一体何の店だったのか面影すら残っていない店舗入り口と、見ているだけで息苦しくなる狭

い階段が口を広げている。相変わらず階段の電球は数個しか灯っておらず、先の見えない薄暗さが住み着いている人間がどんな者なのかを現しているようだ。

「目的地はここですか？ ぱつと見は他と変わらない空き店舗ですけど。先輩にとっては特別な場所みたいですね」

暗闇で覆われた階段の下を覗き込みながら興味深そうに話す東海林を、そろそろ本当に追い払わなければと思い考えを巡らせる。

ストレートに帰ってくれと突き放そうか。でも今になってそんなことを言ってしまうば、逆に東海林の興味を煽ってしまいかねないじゃあどうする。適当に嘘をついて誤魔化そうか。ここは親が管理している物件だから別荘的な感覚でたまに利用している部屋みたいなものだ。知り合いが改装工事をしているから休みの日はその手伝いをしている。廃墟巡りが趣味で、今日はネットで発見したこの商店街を探索することにした。

駄目だ。どれも真実味に欠ける。少しでも突っ込まれたら、その嘘を貫き通せる自信がない。

東海林の後姿を見ながら一人頭を悩ませていると、階段を覗き込んでいた東海林が一瞬「ひゃっ」と甲高い声を上げたかと思うと、階段から逃げるように後ずさっているのが見えた。何があったのかと階段の方に視線を移すと、まるで幽霊のように音も無くゆっくりと暗闇からフェードインしてくる人影があった。ブローカーのお出ました。

「やあ、森黒君！ そろそろ来る頃だと思ったよ」

お決まりの人懐っこい笑顔で話すブローカー。眼鏡の奥にある瞳は無邪気そのものだ。でも、今日はいつもと様子が違う気がする。全体的なバランスが悪いと言うか、何かがおかしいと言うか、妙な違和感があるような気がしてならない。違和感の原因を探ろうと、ブローカーをじっくりと観察する。男の全身を真剣に眺めるのは気持ちのいいものではないが、このモヤモヤした微妙な疑問を抱えながら話を進める方がもっと気持ちが悪い。ブローカーも真剣な眼差

しの僕を見て少し困り顔だが、そこは勘弁してもらおう。

「な……何か、今日の森黒君は一味違うね。ところで、その君の後ろにへばり付いている子は誰だい？ 今度こそガールフレンドかな？」

ブローカーの違和感を探ることに集中しすぎていて気がつかなかったが、階段付近にいたはずの東海林が、いつの間にか僕の背中ofすぐそばで隠れるようにしながらブローカーを睨んでいた。

「先輩、この人絶対怪しいですよ。私の怪しい人センサーがすごい反応します」

東海林は汚らしい物を見て嫌悪感を露にするように、生温い視線をブローカーに送っていた。ほとんど隠れることが出来ていないのに、僕を盾にしながらブローカーの挙動を監視している。自分の方が、この状況では一番怪しいということには気付いていないようだ。ブローカーも呆れてしまったのか、ため息をつくとそれ以降東海林について一切触れることなく僕に向かって話し始めた。

「まあいいや。僕も時間がないから、さっさと用件を済ませようか。メールにも書いたけど、聞きたいことがあってね。この写真見られるかな」

差し出されたのは上半身が映し出されている二枚の写真で、写っているのはどちらもおじさんと呼んで差し支えない見た目の男性だった。一人は紺のスーツ姿で白い歯を見せながらいかにも良い人風の笑顔を見せ付けている。もう一人はワイシャツに白衣のようなものを羽織っているように見える。白髪交じりの整っていない頭で目の下にくまがあり血色が悪い。スーツ姿の男性とは正反対に不機嫌そうな表情で、難しそうな性格の男性という印象だ。

「ここ最近でこの二人のどちらか、もしくは二人同時にでもいいんだけど、君に会いに来たりとか、連絡を取ってきたなんてことはなかったかい？」

どちらも見たことが無い。親戚や親類にもこんな人間はいないし、田本との事件以来、見知らぬ人間から声をかけられたこともない。

僕の後ろでいまだに隠れている人物を除けば、ここ最近で僕に関わるうと近づいてきた人間は誰一人としていなかったのは確かだ。

「その様子じゃあ、この二人のことは知らないみたいだね。わかつたよ、ありがとう。聞いたかったのはこれだけなんだ。それじゃあ、僕は用事があるから行くね」

「ちよつと待つて下さい!!」

写真を上着の内ポケットにしまおうとしたブローカーを呼びとめ、強引に二枚の写真を取り上げる東海林。勝手に写真を取られたブローカーの表情が、以前浅野や菊池に見せた時のような、冷徹で冷酷なものに変わっていき、その表情を見た僕の体から血の気が引いていくのがはつきりとわかつた。東海林はそれに気付いていないのか、やけにじつくりと写真を眺めている。業を煮やしたブローカーが一歩踏み出したとき、東海林が感嘆の声を上げる。

「やつぱり!! 間違いないですよ! この白衣の人は誰か知りませんが、こつちのスーツの男性、希望党の早乙女竜人国会議員ですよ! なんでこんな写真持つてるんですか!? むしろ、なんでこの写真を先輩に見せたんですか!? 先輩とどんな関係があるんですか!?!」

写真をブローカーへと突き出し、問い詰めるように話す東海林に、ブローカーは変わらず冷たい表情で向かつている。

「君には関係ないだろ。写真返してもらえるかな」

「いいえ! ここまで来た以上、関係ないとは言わせません! 私には真実を追い求める使命があるんです! さあ、答えて下さい! この写真は何なんですか!? あなたは一体何者なんですか!?!」

「……はあ。わかつたよ」

表情から冷たさが消え、いつものブローカーに戻っていた。どうしんたんだ。あのブローカーがあっさり他人の意見を聞き入れるなんて。

ブローカーは東海林に近づくと、東海林の手から優しく写真を抜き取る。東海林は写真を取り上げられても騒ぐことはなかつた。完

全にブローカーを説き伏せたと勝ち誇った表情でブローカーの言葉を待っている。

「それじゃあね、森黒君。また何かあったら連絡するよ」

「ちよ……ちよっと！ まだ答えを聞いてないんですけど！」

「ん？ ああ。さっきのわかつたって言うのはそう言う意味じゃないよ。君がどうしようもない勘違いをしている痛い子だと言うことがわかった、って意味さ。何も君に全てを伝えるのを承諾したってことじゃないよ」

「なっ！？ 騙したんですね！！」

「人聞きの悪いことを言うなあ、君は。騙してなんかいないさ。君が勝手に勘違いをしたんだろ？ 変な言いがかりはよしてくれよ」

「勘違いでも、言いがかりでもありません！ あなたは私を完璧に騙しました！ やはり、あなたからは悪の臭いがプンプンします！

あなたは裁かれるべきです！」

「そうだね、わかつたよ」

「またそうやって！ いいでしょう。そう言うことなら私にも考えがあります。決めました。私は正義の名の下にあなたの悪事を公にし、真実の姿を世に知らしめ、法の力にてあなたの存在ごと断罪して見せます！」

ブローカーの言っていたことは間違いじゃなかったようだ。痛すぎる発言だ。思春期真っ只中である僕達、高校生の中には時たま突拍子も無い現実逃避の末に、ここではないどこかの世界を持ち出して、その世界の住民となってしまう者がいる。この子もその類の間だったようだ。

「ふうん。正義ねえ。じゃあ君は、自分が、自分の考えこそが正義だと、そう思っているのかい？」

「いいえ、違います。私個人の思想や理念ではなく、真実こそが正義だと言っているんです。そして、その真実を追い求めることこそが、正義の名に最も相応しい行為なんです！ ジャーナリストとしての私の使命もそこにあるんですよ！」

東海林の発言を聞いたブローカーが突然、商店街の端まで響きそうな大声で笑い始めた。お腹を抱え目からは涙を流しながら、大きな声で笑っている。ブローカーがこんなに笑うのは初めてだ。誰かを蔑み、罵るように笑っていたことはあったが、心の底から純粹に大笑していることはなかった。目の前にいるのがブローカーだということすら忘れてしまいそうだ。

「な……何がおかしいんですか!？」

「いやいや、素晴らしいご高説だよ。僕も見習わなくちゃいけないな」

「ちよつと! あなた、私のこと馬鹿にしてるでしょ!?! 失礼ですよ! 謝って下さい!」

「君、一つ覚えておくといいよ。正義ってのはね、君の言うようなものじゃないんだ。誰しもが統一した概念として持ち得ているものじゃなくて、それぞれの人間がそれぞれの解釈で、それぞれの価値観で認識しているものなのさ。だから自分の考える正義ってやつを他人に押し付けるのはナンセンスだし、僕はそういった人間が大嫌いだよ。虫唾が走るね」

「私は謝ってくださいと言っているんですよ! あなたから説教される覚えはありません!」

「はあ。聞く耳持たず、か。なんだか気が削がれちゃったから、僕はもう行くよ。また、おもしろい話が出来たら聞かせて欲しいね」

ブローカーはそう言うと、今度こそ商店街の薄暗い通りを街中へと向けて歩き始めた。馬鹿にされた上に、最後の言葉も完全に無視された東海林は悔しさを滲ませて、遠くなるブローカーの背中目掛けてもう一度吐き捨てるように叫ぶ。

「私はやると言ったらやりますからね! 絶対にあなたの正体と悪事を明らかにして見せますから! もう謝ったって許しませんからね!」

その声にブローカーは振り向きもせず、後ろ手で手を振っていただけだった。

僕はその背中を見ながら違和感の正体に気が付く。
今日のブローカーはハンチング帽を被っていなかった。

正義？

東海林とブローカーが最悪の初対面を迎えたあの日から三日が経った。あの土曜日にもいつも通りでないことが起きすぎてしまった所為か、今日までの三日間は驚くほど何も無く、実に平穏な毎日だった。日曜日はいつものようにあの二人が休日出勤で一日中家を空けていたし、土日明けの月曜日からも、一人で過ごす学校での時間と下校時の大渋滞、それを避けるための時間潰しである読書、帰宅してから就寝までのインターネット、何一つ変わらない決まりきったタイムスケジュールで一日が流れていった。そして、そのスケジュールが実現できた大きな要因はこの三日間、東海林が一切僕の前に姿を現さなかったからだ。「独占取材を申し込みます」と宣言された次の日から、本当にしつこく付き纏っていたのに、ぱたりと音沙汰がなくなってしまった。まあ、取材の申し込みを快諾したつもりもないのに、人のプライベートな領域に土足で堂々と踏み込んでいた東海林から解放されたのだ。悪い気分ではない。僕のことよりも、もっと興味のある何かに引かれたんだろう。今頃、その取材で別の誰かにつきまとうているのかもしれない。その誰かさんには申し訳ないが、このままずっとこうであって欲しいと思うばかりだ。

生徒の波が落ち着いた校門前は今日も静かだった。ウィルス騒動の所為で各部活動も再開の見通しが立っていないため、どの部室からも練習中の音が聞こえてこない。校庭で走り込みをする陸上部の砂埃を上げながら乾いた土の上を走る音も、剣道場からのピシヤリと気の引き締まるような鋭い音も、音楽室から漏れてくる吹奏楽部の下手糞な不協和音も、およそ学校の放課後らしい音はどこにも落ちていかなかった。あるのはただ静寂のみだ。

一般的な観点から考えると、こんな状況の学校は異常なのだろう。でも僕はこの静寂を割りときに入っていた。居場所のない学校で、この静寂だけが僕を受け入れ居場所を作ってくれているように思え

るからだ。僕の呼吸の音、心臓が打つ鼓動の音、動くたびに聞こえる筋肉が収縮する音、静かでなければ聞こえない僕自身から発せられる音を聞くたびに自分がここにしっかりと存在しているのが確認できて安心するのかもしれない。それに元々、一人でいる時間に音楽を聴くような習慣もない。静かな空間にいること自体が僕にとって自然なことだからという部分もあるのだろう。

しかし、僕の平穏な生活もここまでだった。急に体がずしりと重くなり、体が後ろに引つ張られる。重心が急に後ろへずれたため、倒れないように腰を低くして踏ん張るようにする。何かと思えば後ろを振り返ると、僕の両肩からは腕がぶら下がっており、その先にはこの高校で女子生徒が身につけている制服のスカートがひらりと揺れていた。

「……先輩。私に……私に力を……」

女子のものとは思えない低く唸るような声が聞こえてきたが、その声が誰の物なのか瞬時に理解できてしまった。この三日間で何が起きたのかは知らないが、ずいぶんとしゃがれた声が変わってしまったものだ。変声期でも迎えたのだろうか。

振り払って歩き出そうとしてみたが、がっちりと僕の肩を掴んだ両腕は強力な接着剤で貼り付けられているのか、剥がれる気配を見せない。それでも無理矢理に前進してみると、半歩前に進むことはできたのだが、僕の背中についている物体が踏ん張っているためまた身動きが出来なくなってしまった。もう一度振り返ってみると、今まで地面に膝をついた状態で僕にぶら下がっていた体が、両足のつま先と僕の肩に密着している腕を基点にして三日月のような滑らかなカーブを描いている。

「……………」

無理な体勢でいる所為か、足と腕が痙攣している。

僕を止めるにしたって、もうちょっと良い方法があるだろうに。

このままでも仕方無いので、一歩下がり彼女の姿勢を緩めてやると、ようやく僕の肩から密着していた腕が滑り落ちた。彼女

はそのまま体ごと地面に崩れ落ち座り込んでしまった。

東海林夏子。また、こいつだ。

「聞いて下さいよ、せんぱーい」

泣きべそをかきながら話し始める。

「あいつの尻尾が全く掴めないんです。素性どころか名前すらわからないんですよ。こんなおかしいことってありますか？ あいつがいた商店街の店舗を管理しているところに直接聞き込みに行ってきたんですけど、何も知らないって言ってます。あそこはずっと空き店舗のまま誰かが借りに来た事もないし、そんな問い合わせを受けた事もないってはっきり言うんですよ。だから私はそこに勝手に住み着いているんじゃないかと思って忠告したんです。それでもその管理人は全く私の話に聞く耳を持ってくれなかったんです。そんなやつがいるんだったら写真なり映像なりに撮って証拠を持ってこいって怒ったんですよ？ せつかくこつちが親切で教えてあげてるって言うのに、面倒臭そうな顔をして早く帰れて私を追い出したんです。もう悔しくて悔しくて。だから今日までずっと放課後になるとあの商店街に行って張り込みをしてたんです。なのにあの男は一度も姿を現さなかったんですよ。あの男はおるか商店街には私以外の人影が見えないんです。階段を下りた先にあつた扉はずっと鍵が掛かりっぱなしだったし、商店街近くに住んでいる人達に聞き込みをしても何の情報も得られなかったし、もう先輩しか頼れる人がいないんです。私一人の力じゃ手の施しようがないんですよ。お願いします！ 私に力を貸してください！」

この三日間、どこに行っていたのかと思えばそんな無駄なことをしていたのか。僕の次はブローカーを標的にしてブローカーまがいのことを行っていたようだ。そんなことをしてもブローカーが捕まらないのは当たり前だ。こんな高校生の小娘に遅れを取るような奴ではない。たぶん東海林が張り込んでいることもお見通しだったはずだ。だからあのライブハウスに戻らなかったんだろう。もしくはあのライブハウスに通じる、僕でも知らない秘密の出入り口がある

のかもしれない。とにかく、東海林がゼロの状態からブローカーの情報を集めることなど不可能なのだ。だからと言って僕も東海林に情報を提供するつもりはない。僕はブローカーを敵にまわしたくない。あいつがどれだけの力を持っているのか、僕は知っている。それに僕が知っているブローカーのことを教えてしまうということは、イコールで僕のあの力についてのヒントを与えてしまうことになる。僕の知っているブローカーに関することは通称と職業と管理しているサイトのことぐらいだ。教えるとなるとそのサイトが一番の有力情報になるだろう。欲望者の情報が日夜飛び交う掲示板、スネッチ。そこには僕の記事も掲載されている。確認してはいるが、田本の記事もあるのではないだろうか。東海林がそれを見てしまつては、やっとなんか離れてくれたのにまた独占取材が始まつてしまつて。そんなことを許すわけにはいかない。東海林が自力でスネッチを見つけてしまった場合は仕方ないことだが、僕自らがその存在を教えて自分の首を絞めるようなことをする必要はないんだ。

「お願いします先輩！ 真実のため、正義のために協力してください！」

「……僕も、よく知らない」

「そんな！ そんなはずはありません！ あんなに仲良く話してたじゃないですか！？ あいつは先輩の名前だつて知っていた！ 先輩はよく知らない相手に名前を教えてしまつんですか！？」

「……」

「先輩！」

その後、共にしばらくの沈黙があつた。僕はこれ以上東海林と話すつもりがなかったからだが、東海林は僕が嘘をついているということを見破つて、なんとか話を聞きだすために真剣な眼差しで見つめ続けていた。これは持久戦の様相だ。

居心地の悪い沈黙がさらに続く。僕は早々に東海林から目を逸らした。東海林はまだ僕を見つめている。この睨み合いから抜け出そうと回れ右をして逃げ出してしまおうとしたが、素早く立ち上がった

た東海林が僕のの前へと回り込み、行く手を遮ったので抜け出せずにいる。いつまでこんなことを続けるつもりだ。

「……全く、先輩の強情さも筋金入りですね。私に見つめられると大抵の人は本当のことを話してくれるんですけど。しょうがないです。強制することはできないので、諦めます。本当はなるべく自分の力だけで解決させたかったんですが、それも言ってられなくなりますね。やっぱりお父さんを頼ってみることにします」

長きに渡る沈黙合戦に終止符が打たれた瞬間だった。僕はなんとか自分の守るべきものを死守することが出来たようだ。後は東海林がスネッチを見つけないように祈るだけだ。

しかし、東海林は最後に父親を頼ってみると言っていた。どう言うことなのかよく意味がわからない。父親を頼るといって、そんな簡単なことで劇的な変化が得られるのだろうか。それほどの力や能力を彼女の父親は持っているのだろうか。

「あ、もしかして先輩ご存知なかったですか？ 私の父親テレビ局でプロデューサーをやっているんです。毎週水曜日のゴールデンタイムに放送している特ダネ発掘調査隊って番組見たことありませんか？ あれを作っているのも私の父親なんですよ。今だと、すごく的中するって噂の霊能力者を集してるんです。それもまた人気があつて視聴率がグングン上がってるんですよ！」

東海林は待つてましたと言つように、明るい表情で話し出す。世間で話題となつていている人気番組を自分の父親が制作しているということが一番の自慢話らしい。彼女は出会つてから最高の輝きを見せている。

「私、お父さんのことをすごく尊敬しているんです。この前言つていた真実こそが正義って理念もお父さんの口癖なんですよ。だって今の時代つて真実が全く公表されない世の中になつていんじゃないですか。もし公表されたとしても色々な力関係で歪んだ状態で発表されているんです。裏ではたくさん悪いことをしている人がいるのに、その事実は何に消えて、その悪いことを隠すためにたくさん

お金が使われたり関係の無い人が犠牲になったりしているんです。そんなのって許せないじゃないですか。私達だって知る権利はあるし、そういうった悪い人達の所為で弱い立場の人が苦しい思いをするのは間違っていると思うんです。だからお父さんはジャーナリストになつたって言っていました。自分に大した力はないけれど、自分が真実を追い求めることでそう言う人達が少しでも救われるのならばやる価値があるって。今でこそテレビ局のプロデューサーをやっています。昔は新聞記者から始めたって言っていました。そこでたくさん経験を積んで、もっと多くの人にたくさんを知ってもらいたいからテレビ業界に移つたらしいです。なのでお父さんは私なんか比べ物にならないほどの知識と経験と人脈を持っているんです。その力添えをもらえばこの件もすんなり解決するはず。極力自分の力でやっていきたくたんですけどね」

東海林の父親については初めて聞くことだったが、その父親が作っているという番組は少し見たことがあった。元お笑い芸人の大物司会者と人気グラビアアイドルが進行するバラエティ番組だ。噂の真相や話題となっていることを若手俳優やお笑い芸人がレポーターに扮して追求して行く番組だったと記憶している。いい意味でも悪い意味でもゴールデンタイムに相応しい番組で、個人的には苦手な番組だ。僕が見た時は確か、街中に突如として現れた狸について紹介していた気がする。この街で一番の大きさを誇る緑豊かな公園に狸が住み着いたようで、目撃情報からその狸を捜索するという内容だった。何がおもしろいのか理解できなくてテレビの電源を切った記憶がある。

「それじゃあ、早速お父さんに連絡をとってみることにします。ありがとうございます」

そう言うつと東海林は足早に僕の前から去っていった。

多忙を極める人気バラエティ番組のプロデューサーが実の娘の話とはいえ、こんなことで動くとは考えにくい。たぶん適当にあしらわれるか完全に無視されるのが関の山だ。そうなると流石の東海林

も諦めてくれるだろう。もし万が一父親が協力的でも僕が関わることはない。どちらに転んでも僕は関係ない。後は勝手にやっってもらえばそれでいい。これでまた平穩が戻ってくる。ブローカーには悪いが、あいつなら僕が心配するまでも無く自分でなんとかするだろうし、これぐらい回避するのは朝飯前だろう。僕は僕でいつも通りの毎日を過ごさせてもらおう。それが僕にとって一番だから。

正義？

今日は朝から落ち着かない雰囲気だ。休み時間が来る度に教室が騒がしくなる。何が原因なのかよくわからないが、皆、揃いも揃って同じ内容の話で盛り上がっているようだ。時間割の中に組み込まれている一番長い休み時間の昼休みになると、今まで我慢して溜めていた分を一気に解き放つ勢いで、クラス中がその話題で持ちきりだ。僕の席の隣では仲良し三人組が目の前に弁当箱を広げたまま食事そっちのけで話に夢中になっている。

「昨日の見た!？」

「見た見た! あれやばかったね!」

「でもホントにあれって実在すんのかな? かなり胡散臭かったけど」

「さあ? 本当なんじゃない?」

「でもさ、珍しく情報募集してたね」

「ちよつと実際に見てこようか!？」

「やだよ、何か怖いし」

当然の如く話に参加できない僕は何の話題なのか皆目見当もつかなかった。しかし、ここの生徒達が目を輝かせて話すことだ。大方ろくでもないことやくだらない噂話だろう。その話題がどんなことなのか興味すらわからない。僕には関係の無いことだ。

「でもあのネーミングセンスはないよねえ」

「あれってどういう意味なの?」

「確か、英語で仲立人って意味だったはずじゃない?」

「何でそんな名前?」

「知らないよ。それこそ本人に聞いてみればいいじゃん」

「聞くなっていつてもどうやって探すのさ?」

「知らない」

「あそこで叫んでみたら? ブローカーさーんって」

「あはは。やだよ恥ずかしい」

登校時に買ってきたコンビニ弁当を鞆から取り出し昼食にしようとしていたが、思わず弁当の蓋を開けていた手が止まる。今隣の席で喋っている三人の会話でブローカーという言葉が出てきた気がする。しかも敬称をつけているところからするとそのブローカーが人物であると認識しているはずだ。どうしてこいつらがブローカーを知っているんだ。同じようなニックネームを使っている人間でもいるのだろうか。そんな奇特な人物などきいたことがない。

「あの番組のことだから来週までに色んな目撃情報とか届くんじやない？」

「たぶんね。また来週も見ないと」

「そう言えば、全然話し反れるんだけどさあ。家のお父さんがやるあの司会者の物まねがウザくてしょうがなくてさあ」

「マジで？ あの特ダネ発掘調査隊って最初にタイトルコールするやつ？」

「そう。中途半端に似てるもんだから本人気に入っちゃってさあ。

頼んでもいないのにずっとやり続けるんだよね」

「うわあ。面倒臭いねそれ」

「でしょ？ しかもね……」

三人の会話はまだ続いていたが僕の耳にはもう何も入ってこなかった。何故こいつらがブローカーの名前を知っていたのか理解できなかった。原因は特ダネ発掘調査隊というテレビ番組。毎週水曜日のゴールデンタイムに放送しているくだらないバラエティ番組が影響しているようだ。そして何故その番組でブローカーのことを取り上げていたのか。それはたぶんその番組を制作しているプロデューサーが関わっているはずだ。そのプロデューサーは自分の娘の話を書いてその話題を取り上げたはずだ。実際にその番組を見ていないからどの程度まで紹介していたのかはわからない。でもそれは明らかに東海林が発端となっている。東海林夏子が父親にブローカーのことで協力を仰ぎ、結果父親が制作している番組で紹介され視聴者から情

報提供を求めたというところだろう。

居ても立ってもいられなくなり、コンビニ弁当を鞆にしまってから教室を出る。目指したのは一年生のクラスが連なる一階の一番端にある教室、一年一組だ。

一階へと続く階段を下りると数ある教室の中でも一際賑わいを見せている教室があった。表示を見てみると太字のブロック体で一年一組と書かれていた。全開になっていいる扉から教室内を覗いてみると教室中央の席に人だかりが出来ている。男女入り混じった集団が一つの席を取り囲み中心にいる人物に質問をぶつけているのが見える。そこからは質問の声に続いて得意げで聞いたことのある声が大きく響いている。

どうやって呼び出そうか扉の前で悩んでいると、流石に怪しまれたのかクラスの何人かが僕の方を訝しげに見ているのに気がついた。その視線を受けて居心地が悪くなり諦めて自分の教室に戻ろうとした時にクラスの注目を集めていた生徒がこちらに気付いて駆け寄ってきた。

「先輩！ そんなところにつつ立つてどうしたんですか？ あ！もしかして昨日の放送見てくれたんですか！？」

東海林が満ち足りた表情をしながら話し始めた。番組が放送された影響で自分が注目されているのが気持ち良いのだろう。僕と東海林が話しているのを他の生徒が不思議そうな顔をして眺めている。

「あの日、家に帰ってから軽い気持ちでお父さんに話しただけなんですけど、妙にお父さんが乗り気であつという間に番組で取り上げてもらえる手はずになったんですよ。しかもお父さんはあの男について知っていたんですよ！ 通称がブローカーってこととあの商店街で情報売り買いしているってことしか教えてもらえなかつたんですけど、業界では有名な男だったみたいです。お父さんの様子からすると、かなり黒い存在みたいですよ。いつもは余裕の表情で取材や番組の構成をしているお父さんが、いつになく真剣だったんで

すから。やっぱり私のセンサーは間違っていないかつたことで
ね！」

得意げな東海林がさらに得意げになって自信満々に経緯を話す。
はつきりとした確信があつたが東海林の話を聞いてそれが現実のも
のであつたことを改めて実感する。

「もう朝から至る所で質問攻めにあつて大変なんですよ。お父さん
からはどういった展開でブローカーなる男に迫っていくのか大体聞
いているんですけど、来週以降も特集を組むんで皆に詳しいことを
話せないのが残念でならないです。お父さんの邪魔をする訳にもい
かないので。それよりも私達はこの男についての情報を募集してい
るので、先輩も気が変わつたら是非情報をお寄せください！ 諸悪
の根源は早く潰してしまわないと皆のためになりませんからね！
番組宛にメールでもいいですし、なんなら私に直接話して頂いても
構いませんので。あ、すみません。皆が呼んでるんでこのぐらいで
それじゃあよろしくお願いします！」

東海林と別れた後教室に戻り午後の授業を普通に過ごしたが、い
つも以上に教師の話が頭に入つてこなかった。放課後になつても一
向に気分が晴れる様子はない。

ブローカーという情報屋があつた寂れた商店街で情報屋をしている
ということが公共の電波を通して全国に広まつた。そして、その男
は裏で悪事を働いているという味付けをされ、社会の敵というよう
な位置づけで紹介されたのだ。マスコミの情報操作に流されやすい
人間が大勢いる我が国で、この番組で紹介されたことが本当に真実
なのか疑問に思う人間がどれだけのだろうか。どれだけの人間が、
このネタ自体が高校一年生である女生徒の勝手な思い込みから始ま
り、その思い込みに便乗した親バカプロデューサーが作り上げた創
作物であるということに気付くのだろうか。恐らくブローカーが管
理人を務めている掲示板スネッチの住民達はこの番組を鵜呑みにす
ることはないだろう。あそこの住民達はブローカーに対して信仰心

のようなものを抱いているはずだ。スネツチという自分達の世界を作り上げ、欲望者についての情報を送り出している神様のような存在になつていゝブローカーを少なからず尊敬の眼差しで見ているはずだ。そのブローカーがテレビで屈辱的な取り上げられ方をしたのだ。スネツチでこの話題が記事になるのは避けられないだろう。そうなると、この話題に関心を示しインターネットで少しでも情報を集めようとする人間が自然とスネツチを訪れることになる。訪れた人間はそこでブローカーの情報よりも先に欲望者について知る事になる。通常ではあり得ない特殊な力を持つバケモノの存在を様々な記事を通して見る事になるのだ。当然、その記事の中には僕のことを書いたものもある。もしその記事を東海林が見てしまったら、もしくはこの学校の生徒が見てしまったら、噂が一気に広まり僕がバケモノと呼ばれるまでに至つた原因が学校中に知れ渡ることになる。そうなつてしまつたら、僕は一体どうなつてしまふんだろうか。もうこの学校にはいられなくなつてしまふんじゃないだろうか。じゃあ僕はどこに行けばいい。僕に家と学校以外で行く宛などない。嫌な考えばかりが頭の中を駆け巡る。気分の晴れないまま誰もいない廊下と玄関を通り過ぎ、校門前に差し掛かつたところで声を掛けられた。

「浮かない顔だね。何か嫌なことでもあつたのかい？」

伏せていた頭を上げると、そこには校門に右肩を当て寄りかかつていゝブローカーが不機嫌そうな顔をして立つていた。

「君はいつも不幸のどん底にゐるような顔をしてゐるね。そんなんじゃあ手に入る幸せすら逃げてつちやうよ？」

いつもの調子で話すブローカーだったが、なんとなく歯切れの悪い様子だつた。少し苛立つてゐるといゝか、落ち着きがないといゝか、あの余裕たつぷりで人のことを馬鹿にする雰囲気は全く感じられない。

「ところでさ、森黒君。前に君を呼び出した時にいたあの女の子、今日は一緒じゃないのかい？　もし呼び出せるなら呼んできて欲し

いんだけど」

嫌な予感しかしない頼まれごとだった。ブローカー、東海林、特ダネ発掘調査隊、黒い存在、諸悪の根源、関連する言葉が脳裏を過ぎる。ブローカーの言うことを素直に聞いて東海林を呼び出しても良い展開になる気がしない。それに僕は東海林の連絡先を知らない。呼び出すことは不可能だ。

「ちょっとあの子に用があったから放課後になる時間を見計らって来てみたんだけど、ずっとここで待ってるのに姿が見えないんだよ。僕が見逃すなんてことはないからまだ校内にいると思うんだけど……」

「先輩！ そいつから離れて！！」

玄関から全速力で駆け寄ってきた東海林が僕とブローカーの間に割って入る。どうしてこいつはいつもタイミングの悪い登場のしかたをするんだろう。

「危ないところでしたね。私が先生に呼ばれて残っていたのが幸いでした。あなた！ また先輩を巻き込もうという腹積もりでしょうが、私がいる限りそんなことはさせませんよ！」

正義のジャーナリスト、東海林夏子の勇敢なる雄たけびだった。東海林が、この雄たけびが場にそぐわないものだということに気付いていないの言うまでもない。ブローカーも呆れた顔をしながら話し出す。

「残念だけど、今日僕が会いに来たのは森黒君じゃなくて君のほうなんだよ。東海林夏子さん」

「えっ！？ 私！？」
「そうさ。世間知らずの勘違い娘に少しお灸をすえてあげようと思っただけ」

東海林はそれを聞くと驚いた顔のまま黙り込んでしまったが、しばらくもしない内に動揺していることを悟られないようにするため、根拠のない自信を浮かべて反論する。

「もう私の名前まで調べているとは、敵ながら天晴れです。でもそ

うやうや自分のペースに巻き込んで話をうやむやにしようとして
いるみたいですが、その手には乗りません。今やあなたは社会の敵で
す。無駄な抵抗はやめて、何故森黒先輩に声を掛けていたのか話な
さい！」

「つくづく君も人の話を聞かない子だね。そのかたくなさは尊敬に
値するよ。まあ、僕もそこは予想してたから、君が話を聞こうと聞
かまいと続けさせてもらうよ。君と君の父親に対する警告だ」

話しながら段々と厳しい顔つきになって行くブローカーに、東海
林もただならぬ気配を感じたのか黙って身構えるように話を聞いて
いる。警告。ブローカーにしては珍しく、攻撃的な発言だ。

「昨日の放送、僕も見させてもらったよ。なかなか良く出来たV T
Rとリサーチ結果だと感心させられたよ。この短期間でよくあれだ
け調べ上げたものだ。君の父親は本当に優秀な人物なんだね。でも、
お遊びはここまでだ。これ以上僕のことを嗅ぎ回るといふのなら僕
にもそれなりの考えがある。これ以上君達のおふざけに付き合っ
たら僕の仕事にも影響が出てくるからね。だから、ここでもう僕
に関わらないと約束するのなら君達親子にいつも通りの平穏な暮ら
しを提供しよう。それができないと言ふのなら君を含め家族全員
に不幸が訪れることになる」

「……それは私達親子に対する脅しと考えてもいいですか？」

「捉え方は君に任せるよ。ただ僕は選択権を与えただけさ。どうす
るかも君達次第。その結果がどうなるかと、それは君達が望んだ未
来だということさ」

沈黙。睨み合っているブローカーと東海林の間を木枯らしが吹き
ぬける。ブローカーは本気だ。東海林が手を引かない限り本気で何
かをしてかすつもりだ。具体的にどういったことをするのかはわか
らないが、東海林が諦めざるを得ないようなこと、それも徹底的に
相手を追い詰めるような最悪な手段を使うはずだ。ブローカーの性
格と現在の怒り具合から考えると間違いないだろう。

「話が抽象的すぎますね。もっとはつきりと仰っていただかないと

わかりません。不幸とはどういうことですか？　あなたは何を
つもりですか？」

「それも君達の態度次第だけど、想像できる一番嫌な状況を思い浮
かべてもらえればいいかな。君達親子が最も恐れていることをさ」

「ちよつと！　それじゃあ答えになっ
ていませよ！　具体的に話
してくださいと言っ
たじゃないですか！」

「と言う訳で、僕が伝えたかったのはそれだけさ。来週
の放送を楽しみにしているよ」

ブローカーはそう言っ
と、呼び止める東海林を無視して立ち去っ
ていった。自由気ままな風のように、どこから来てどこへ行くのか
わからないまま、ブローカーの後姿は小さくなっ
ていった。本当に
掴み所のない男だ。

「自分の正体が暴かれたんで必死ですね。わざわざ私を脅しにきた
のがいい証拠です。しかも、逆に言えばそれだけ私達があいつの核
心に迫ってきているということですから、あともう少しで完膚なき
までにあの悪党を懲らしめられるところに来ているんですよ！　先
輩！　私、俄然燃えてきました！」

ブローカーの脅しとも取れる警告に恐怖心を煽られ、すっかり畏
縮しているものだと思っ
ていたが、反対に東海林の暴走は加速度を
増していた。逆境に立たされるとやる気が出るタイプなんだろう。
打倒ブローカーに向けてさらなる高みを目指しているようだ。

「こうしちゃいられない！　早くお父さんと次の作戦を練らなくち
ゃ！」

もう僕のことすら視界に入っ
ていないようだ。意気込んだ東海林
はブローカーと僕を見つけて全速力で走っ
て来た時と同じ速度で校
門から駆け出していった。

正義？

時計の針が後五分で午後七時ちょうどを示す。今日も家には僕一人だけだ。夕飯で食べたカップラーメンの匂いが微かに残るリビングでテレビを見ながらソファに座っている。珍しくテレビを点けた理由はある番組を見るためだった。特ダネ発掘調査隊。東海林の父親がプロデューサーを務めている番組だ。東海林がブローカーの警告を無視しているのならば、今日の放送ではブローカーについての続報が紹介されるはずだ。警告を受け入れてブローカーのネタを自粛するのか、それとも無視を決め込んでさらなる情報を公にするのか。どのようになるのかを確認するために、特に興味のない一時間のバラエティ番組を見ることにした。

七時になり時報と共に番組がスタートした。画面にはたくさんレギュラー番組を持つ元芸人の大物司会者と最近になって頻繁に雑誌の表紙を飾っている人気グラビアアイドルが笑顔で番組を進行し始める。最初に紹介された話題は今人気急上昇中でライブでしかその姿を見ることが出来ない覆面ロックバンドに突撃取材を敢行するというものだった。僕からしてみればどうでもいい内容だ。今や一番の目玉となっている内容を番組冒頭に持つてくることはしないようだ。いつブローカーの続報が始まるかわからないのなら、とにかく見続けるしかない。時間潰しとして楽しく見るはずのテレビに苦痛を感じながらも、目を離さないよう画面に注目する。この調子で一時間辛抱できるかが不安だ。

番組が始まってから四十五分が経過した。まだブローカーの話題は出てこない。やはり警告に従い放送は取り止めたのだろうか。番組では病気で車椅子生活を余儀なくされた中学生の男の子が車椅子マラソンを完走するまでの経緯を追ったドキュメンタリータッチのVTRが流れている。

番組が始まってからなんとなく流し見していただけたが、番組の構成が掴めてきた。この四十五分間で紹介された話題は、今流れている映像のものを含めると全部で三つ。最初にインパクトのある題材で視聴者を引き付け、次に思わず笑ってしまうような馬鹿げたネタで盛り上げる。最後に感動の実話を取り上げてドラマ仕立ての映像で再現し、視聴者の涙を誘う。よくあるバラエティ番組の構成だ。そのことから考えると、番組はこの感動ドラマを最後にエンディングに向かうものと考えられる。ブローカーの話題など取り上げている時間がない。それとも十分な調査ができなかったために次回へ持ち越しと言うことになるのだろうか。どちらにしる最後まで見ないとわからない。

そんなことを考えている内に、車椅子の少年が疲れきった顔をしながらも感動のゴールを迎えていた。少年を支えた両親と少年本人のコメントが流れ、涙ぐんだ出演者達が映し出される。口々に感動した、と少年を褒めちぎり、少年の努力に賛辞を呈している。大物司会者が綺麗にまとめて最後のコーナーが終了した。ここでCMが入る。

もうここまでできたらブローカーのことは放送されないだろうと見切りをつけてテレビを消そうとしたところでCMが明ける。画面には先程とは違ったスタジオの様子が映し出されていた。話題をプレゼンテーションするレギュラー出演者もゲストもない、照明を落とした薄暗いセットの中に一人だけ、あの大物司会者だけが立っている。バックには緊迫感を煽るような音楽が流れている。

「さて、先週お伝えしたブローカーと名乗る謎の男についてですが、番組終了後から今日に渡るまで、視聴者の皆様からたくさんの情報が毎日のように届けられています。裏社会で人々の弱みを握り、それを糧にして生きていると思われるブローカーなる人物。我々は皆さんから寄せられた情報を一つ一つ検証し、日々この人物の正体に近づいています。ここで番組に寄せられたメールから、ある一部分を紹介させていただきます。市内にお住まいの匿名希望の方から頂

いたメールです」

司会者は手元にプリントアウトされたと思われる一枚の紙を取り出し、目で文字をなぞるようにしながら読み上げ始める。

「先週の放送を見て、次の日、友人とその話題で話をしていると後ろから声をかけられました。その人はとても爽やかで人の良さそうな二十代ぐらいの男性でした。その男性は私達に何の話をしているのかと聞いてきたので、この番組でブローカーという怪しい人物が紹介されていたと教えてあげました。するとその男性は急に冷たくて恐ろしい表情と口調になり、これ以上その話題に首を突っ込むようなら、君達にも不幸が訪れるよ、と言い放ちそのままどこかへ行ってしまいました。その時は恐怖で何がなんだかわかりませんでした。だが、今思うとあれはブローカーだったのかも知れません」

司会者はそこまで読み上げると、手元にある紙から顔を上げ、何かを訴えるような真剣な表情でカメラを見つめる。

「この男が本当にブローカーだったのか、真実はわかりません。ただ、もしこの人物がブローカー本人であったのなら、何の罪もない一般市民にまで魔の手が迫ってきているということになります。このようなことがあっていいのでしょうか？ このような自分勝手な行為が許されていいのでしょうか？ いいえ。許されるわけがありません。例えどのようなことがあっても私達はこのような行為を認めるわけにはいきません。私達は戦います。断固としてこの男を追い詰め、皆さんの安全を守る努力をします、ここに宣言します。」

しかし、我々の力だけでは足りません。皆さんの、この放送をご覧になっているあなたの力が必要です。どうか情報をお寄せください。我々にあなたの力を貸してください。今こそ一丸となって我々の生活を脅かす影に立ち向かう時なのです。皆さんのご協力をお待ちしています。今後もこの番組ではブローカーの存在を追及し、経過などは随時番組内でご紹介していきます。ブローカーに関する情報はファックス、メールにて受け付けております。現在表示されている宛先までお寄せください。ブローカー。もし今この番組を見ている

のならば、今すぐ警察へ出頭しなさい。そして自分の犯してきた罪を償い、迷惑をかけてきた人々に謝罪をしなさい。我々があなたの正体を暴く前に、自ら罪を告白しなさい。あなたに逃げ場はない。どこに隠れ……うと……必ず……」

突然画面が乱れる。画面に次々と灰色の横線が走り、音声も途切れ途切れに雑音が入る。遂には完全に画面が砂嵐で埋め尽くされ、激しい雨のような音がスピーカーから流れるだけになってしまった。突然の出来事にテレビの前で硬直していると、数秒も経たない内に砂嵐がやみ、先程とは違った映像が画面に映し出される。

どこかのマンションにあるゴミ集積所らしい場所に一人の男が身を屈めている場面だった。明るさからして夕方過ぎの六時頃だろうか。音声や音楽などは一切流れていない。画面の男は全く動きを見せないで、すぐにこの映像が動画ではなく画像であるということに気がついた。そして、気付いたときには別の画像が映し出されていた。最初に映し出された画像と場面は同じだったが、屈み込んでいた男がゴミ集積所から離れて走りだしている場面だった。しばらくしてさらに画像が切り替わる。今度は男の姿が完全に消えている。その他の場所には何の変化もない。

何なんだこれは。目の前に映し出されている映像がどういったもので、何を目的として放送されているのか理解できない。

また画面が切り替わる。そこにはゴミ集積所が激しく燃え盛っている画像が映し出された。メラメラという音が聞こえてきそうなくらい、大人の身の丈ほどもある炎が日の落ちかかって暗くなっているマンションを照らし出すように揺らめいている。

マンションの画像はこれで終わりだったが、画面には別の画像が次から次へと映し出されてゆく。山中にある古びたトンネル。大きな公園。飲食店で楽しそうに笑う六人組みの男達。首の長い恐竜のような模型。黒のスーツにサングラスをかけた外国人男性。大きな湖。その他にも色々な画像が映っては切り替わり、その状態が十分ほど続いた。どの画像もどう言うものなのかまったくわからなかつ

だが、一つ共通している部分があった。最初に映し出されたマンシヨンの画像に写っていた男が、全ての画像に写っている。一人で写っている時や、集団の中に紛れて写っている時、ぼやけて写っている場合など様々だが、間違いなく全ての画像にあの男が写り込んでいる。さらに共通している所は、その男が誰なのか全くわからないということだ。テレビではもちろんのこと、日常生活においてこのような男を目にしたことがない。もしかしたら、この放送を見ている他の視聴者はこの男が誰なのか知っているのかもしれない。でも僕にはわからない。この人物は誰なんだ。どうしてこんなにこの男だけが写った画像が放送されているんだ。目的は何なんだ。

僕は状況を理解できないまま放送を眺めていた。何十枚もの画像が映し出された後、急に画面が真っ暗になり八時の時報と共に、特ダネ発掘調査隊の次に予定されていた通常の番組がスタートする。漫画が原作の人気俳優を起用したドラマが始まっていた。

放送事故だったのだろうか。無音状態で意味のわからない画像が延々と映し出される映像がまともな放送だとは思えない。しかも、その映像への入り方が明らかにおかしい。演出だとしても、その意図が掴めない。そうして何もわからないまま放送は終了した。東海林親子がブローカーの警告を無視して放送を行ったことはわかったがそれ以上の謎が残ってしまった。とりあえず、このままテレビを見ていても答えはでてこないだろう。明日も学校があるし、遅くまで起きていたらあの二人が帰ってきてしまう。僕はこの放送について何か騒がれていないか、少しネットで調べてから寝ることにした。

朝日の眩しさと鳴り響く目覚まし時計の音で目が覚める。目覚まし時計を止めるためにベッドから起き上がるが、昨日の夜更かしが祟ってまだ眠気が取れない。それでも今日は平日で学校がある。眠気を押し殺して朝食を食べるために居間へと向かう。いつも通りの静けさに包まれる居間でパンをトースターに放り込んでから、テレビを付ける。

結局、昨日の夜はネットでもこれといった情報は得られなかった。さらには眠気の所為か、昨日見た放送の記憶がおぼろげで、寝ている間に見た夢か壊れたテレビが映し出した乱れた映像だったんじゃないかと思えてしまっていた。その記憶を確かめるためにテレビを付けてみた。テレビは電気が通る独特の低音が鳴った後、ゆっくりと黒い画面に多彩な色が浮かび上がってくる。爽やかな笑顔の女子アナウンサーが透き通るような声で朝のニュースを読み上げていた。とりあえずテレビは壊れていないようだ。

部屋に戻り制服に着替えてから焼きあがったトーストとオレンジジュースを食卓に並べて朝食を取る。家を出るときに消せばいいだろうと思いい、テレビは付けっ放しだ。アナウンサーの声が聞こえてくる。

「次のニュースです。幡ノ橋署は昨夜午後十時ごろ、先月に起きた市内のマンションにあるゴミ集積所から出火し、放火の疑いがあるとして捜査を続けていた事件で、H B B C所属の番組プロデューサー東海林崇志容疑者をなんらかの事情を知っているものとして行方を追っていると発表しました」

口に運び込もうとしていたトーストを皿に戻し、テレビの前へと駆け寄る。画面にはニュースを読み上げるアナウンサーの横に、東海林崇志容疑者とテロップが付いた男の顔写真が映し出されていた。その男の顔は見覚えのある顔だった。見たのはつい最近、昨日の夜のことだ。あの次々に映し出された画像全てに映っていた男。

「この事件は、先月の四日、午後六時ごろ市内にあるマンションのゴミ集積所に残っていた紙類の入ったビニール袋から出火し、マンションの外壁が焼ける等の被害が出た事件で、現場の状況から放火の疑いがあるとして捜査が続けられていました。同署によりまずと、出火前に付近で東海林容疑者らしき人物の姿を目撃したと言う証言から、東海林容疑者に任意同行を求めていましたが、昨夜から連絡が取れず、自宅にも姿はなく行方が掴めていないということです。東海林容疑者はH B B Cで放送中の人気バラエティ番組でプロデュ

ーサーを務めており、自らの番組でもこの事件を取り上げて紹介していました。その他にも番組ではスタッフの捏造と思われるものが多く紹介されており、警察では東海林容疑者が他の事件にも関与している疑いがあるとして、捜査を続けると共に行方のわからなくなつた東海林容疑者とその家族の行方を追っています。次です。先日厚生労働省が発表した新たな国立研究機関の開設に伴い、その事業内容についての説明会が市内の………」

その日を境に、学校で東海林の姿を見る事はなかった。

心？

ここへ来たのは単なる気まぐれだった。家にいても、テレビではおもしろい番組など一つもやっていないし、ネットでも代わり映えのない重複したくだらな話題ばかり。テレビやネットを見る以外にやらなければいけないことはたくさんあるんだろうが、当然の如くやる気は出てこない。だからと言って、そのやらなければいけないことを押し退けてまで、他にやりたいことがある訳でもない。それなのに僕の心は何か満たされることを求めている。自分自身のことだが、本当に面倒な奴だ。これといって趣味のない僕には非常に難しい問題だ。あれやこれやと考えて、思いついたのは一つしかなかった。それでも、ただの気まぐれにしては僕らしくない発想だ。気晴らしに散歩に行こうだなんて、自分で言うのもなんだが珍しいこともあるものだ。

時間は午後九時を回ったところ。そんなに遠くへ行く訳にもいかない。でも、マンションの周りを散歩したっておもしろくも何ともない。こんな街灯すら疎らな、住宅街しかない道を散歩して楽しいのは空き巣や強盗ぐらいだろう。今すぐに行けてすぐ帰って来れる範囲の中から候補を幾つか挙げ、気晴らしになりそうな場所を絞り込む。結果、今歩いている場所、いつも夕食の買い物をしているスーパーがある付近は条件的にもぴったりだった。家からあまり離れていない場所の中でも店やら公園やら住宅以外の何かがある。それに、いつもはスーパーで買い物をするだけだから、どんな道が延びていてどんな店が並んでいるのかまではよく知らない。散歩には打って付けだった。暗い夜道をふらふらと彷徨い、歩き続ける。

この付近を歩き続けてしばらく経ったが、気晴らしをするために来ているのに、僕の心が満たされる様子はなかった。街頭に照らされる寂しげな公園を見ても、暗闇に突然現れる強烈な光を放つコンビニを見ても、僕の家周辺では見られない入り組んだ構造の道路

を見て、期待していたほどの新鮮さは感じられなかった。これと
いって気になるようなものは何もない。あえて気付いたことを上げ
るとすれば、この時間にしてはそこそこ人通りがあるということだ。
一般家庭の大半は、夕食を食べ終えてテレビでも見ながらゆったり
と寛いでいるような時間なのに、社会人、学生、主婦、果てには小
学生の姿まで見える。歩いている途中でJRの駅が見えたからその
所為なのかもしれない。駅があるならもう少し人通りがあってもよ
さそうなものだが、どうやら線路はこの駅で終わっているようだっ
た。今まで遠目から見て倉庫か何かだろうと思っていた建物は、列
車の車庫だった。どちらにしても、僕にとってはあまり嬉しくない
発見だ。人が多い場所と言うのはどうも苦手だ。なるべく人がいな
い場所を選んでふらふらと歩き、狭い道を幾つも通って何度も路地
を曲がっていると、ある場所へと行き着いた。行き着いたと言うよ
りは、自然と足が止まっていたという表現の方が正しい。

そこでしばらく僕の時間は止まっていた。眼球から溢れ出た水分
が頬を伝い、アスファルトの道路に落ちて小さな円を描きながら染
みをつけている。自分の足元で起きているその光景が、まるで映画
のワンシーンのように幻想的に見える。濡れた頬に吹き抜けた風が
当たり、冷たさを感じて我に返るまで自分がこんな状態になってい
ることに気が付かなかった。目の前にいる女性が心配そうに話しか
けてくる姿も、歪んで見える。何がどうなっているのか全く理解で
きていなかった。

「ちょ……ちよつと、大丈夫!？」

紺色に淀んだ空にはどこかで輝き続けている太陽の光を受けた星
達が煌き、その光を真似るような街灯が道路に沿って均等にアスフ
ルトを照らしている。街灯が放つ無機質な光を受けながら、仕事
帰りの人間が囚人のように行進している。皆、一日が終わるとい
う開放感とまたやってくる明日への不安を抱えた複雑な面持ちで帰
べき場所を目指している。そんな複雑な心境の人間は他人のことな
ど気にしている余裕はないのだろう。歩いている人間は、皆一様に

自分のことではいっばいっばいなのだ。営業時間が終了し、閉店してシャッターを降ろしている精肉店の前で、涙を流しながら立ち尽くしている僕と大慌てでなくさめる女性の横を、不可解そうな視線を送る通行人が通り過ぎて行く。

そうやっていつものように他人を観察できているのに、僕は何故か泣いている。涙を流しているという自分が不思議だった。意識と体が別々に離れてしまったような感覚で、何故泣いているのかわからない自分と、実際に泣きじゃくっている自分が、お互いを見つめ合って不思議そうにしている。僕の涙腺を管理しているネジが、いつのまにか一気に抜け落ちて制御が利かなくなつたみたいだ。目からは留まることなく涙が溢れ出てくる。僕の体にある水分の四分の一は流れ出てしまったんじゃないだろうか。自分の意思とは関係なしに涙が流れ出ると言う現象は実際に起こり得ることだったようだ。

こんなことになってしまったのは、目の前にいる女性が歌っていた曲を聴き終わってからだった。歌を聴いて涙を流したのは初めての経験だ。今まで、歌なんてまともに聴いたことがない。どれも同じようなものしかなくて、売れている曲や人気のある曲のどこがいいのか全く理解できなかった。皆、揃いも揃って彼氏や彼女との恋愛について歌ったり、誰かに対する感謝の気持ちや歌ったり、歌詞や対象が違うだけのつまらない歌ばかりだ。最近では歌を聴かせたのか、それともCDに付随する特典を売りたいのか、元々の目的すらあやふやになってきている。それにも関わらず、歌詞に共感できるだとか、聴いた瞬間に鳥肌が立ったとか、こんなに泣ける歌は他にないだとか、誇張された表現の賛辞を送る人間が多い。そんなもの、多くの人間が共感できるように普遍的な内容で作っているのだから当たり前だろう、と思ってしまう。

音楽に対してそんな感想しか抱いていなかった僕が、路上で一人歌っていた女性の歌を聴いて涙を流している。ドラムもベースも、コーラスすら聴こえない、アコースティックギター一本で歌われていたその曲は、多くの人間が通り過ぎてゆく中、僕だけを立ち止ま

らせた。メロディーが特別良かったわけではない。歌詞に強烈なインパクトがあつたわけでもない。僕を立ち止まらせたのは、歌っている女性を含めて全体から感じられる寂しげな雰囲気だつた。孤独、疎外、虚無、絶望。歌詞の中にこんな言葉が使われているわけではないのに、聴いているだけで頭の中に言葉が湧き出してくる。逃げ出したいのにどうすることもできない。苦しいのに助かる手段がわからない。そんな悲痛な気持ちを、必死で叫んでいるように聴こえた。

僕と一緒だ。僕の気持ちが内側からではなく外側から、しかも知らない人の声で聴こえてきたことに驚いて、足を止めて歌に聴き入っていた。そして、曲が終わるころには自然と涙がこぼれてしまっていた。

「と……とりあえず座ろうか。ね？ ほら、こっちに来て」

ギターを持った女性に促されるまま、灰色のシャッター前に二人で並ぶような形で地面に座り込む。コンクリートの地面は僕から体温を奪って行くかのように冷え切っていて、女性が自分で使っていた一人用のレジャーシートを貸してくれた。目の前には口を広げたまま置かれているギターのハードケースと黒くて細い譜面台があり、その向こう側に通行人と太い車道、さらにその向こう側には町の中心部にある街頭やネオンが放つぼんやりとした光が見える。自分が座っている場所が譜面台とギターケースを境にして別の世界として区切られているように思えた。

「少し落ち着いた？ いきなり泣き出すからびっくりしたよ」

女性が肩から下げていたアコースティックギターを外してシャッターに立てかけている。つば付きのニット帽を目深に被っている上に、こちらを向いていないためよく顔は見えないが、とても綺麗な声で穏やかな印象の女性だ。ジーンズに紫で薄手のダウンジャケットを羽織っていて、地味な服装だった。

「君、高校生でしょ？」

「……はい」

「やっぱりね。私、年齢当てるの得意なんだ。何年生？」

「……二年です」

「高二かあ。若いねえ。名前は何て言うの？」

「も……森黒……です」

「へえ。珍しい名前だね。私はね、成澤美香って言うの。今年で二十三。って私もまだ若いか」

ははは、と僕を見ながら照れ臭そうに笑った時、初めて彼女の顔が見えた。なんとなく安心するような不思議な可愛らしさがある顔だった。芸能人と言われてもおかしくない、とても綺麗な人だと思つて少し見惚れてしまった。

「あのさ、良ければいいんだけど、どうして泣いていたのか教えてもらえる？」

「……」

「あ！ 出来ればいいよ！？ 無理に話すことはないから。ただ、ここで歌うようになってから私の歌を聴いて泣いてくれた人、初めてだったから気になっちゃって」

正直なところ、自分でもどうして涙が出てきたのかはつきりと断言できないでいる。何となくの理由はわかっているが、それを言葉で表現しろと言われるのは難しい。靄がかかっていてしっかりと掴むことができないような感じだ。それでも、真剣な眼差しで問いかけてくる目の前の女性に伝えるため、泣いていたときの状況とその時の気持ちを思い出して、自分なりに考えをまとめてみる。

「うまく……言えないけど」

「……けど？」

「なんだか……お姉さんが、寂しそうだった」

「私が？ 寂しそうに見えたの？」

無言で頷いてみせる。彼女は僕の答えを聞いて困惑していた。やっぱりうまく伝わっていないみたいだ。それもそうだ。はつきりとした理由もなく、漠然と寂しそうだったと言われてもわからないのが当たり前だ。僕自身もよく状況を整理できていないのだから仕方

のないことだけれど、もう少し僕の頭が良くて話し上手であれば、もっとわかりやすい言葉と表現で伝えることができたのかもしれない。でも、誰かと会話をするということからしばらくかけ離れてしまっていた僕にとつて、現状ではこれが精一杯だった。本当に自分が情けなくなってくる。

彼女はしばらく考え込んでいたが、不安そうにしている僕を見てすぐ笑顔になり、透き通る様な綺麗な声で話し始める。

「君、おもしろいこと言うね。私が寂しそうかあ。そんなこと言われるのも初めてだな。その言い方だと、私が一人で歌ってたから寂しそうに見えたって訳じゃないんでしょ？」

「……はい」

「ふうん。じゃあ私自身にその寂しさを感じたって訳だね。そっか。でもそれ、強ち間違いないかもね」

「……どう言うことですか？」

「君ぐらいの年齢の子だと、ぎりぎり知らないのかな。私ね、実は六年ぐらい前まで歌手としてテレビに出たり、CD出したりしてたんだ。デビュー曲は結構売れたんだよ？」

六年前だと僕はまだ小学生だ。今でさえまともに音楽を聴いていないのだから、当時の僕は音楽と言言葉にすら興味を持っていなかったはずだ。当然のことながら彼女のことなど知るはずもない。

「……ごめんなさい」

「あ！ 全然いいんだよ！ 謝る必要なんてないから！」

彼女は謝る僕を見て慌てて笑顔になる。なんだか彼女は僕が泣き始めた時から、何かにつけて慌てふためいている気がする。僕が彼女をそうさせているのか、それとも彼女の性格がそうさせているのか、原因はわからない。

「でもね、そう考えると時間が経つのは早くなって思うんだ。前はね、本当に時々だけど、あの頃の私を覚えていてくれる人がいて、話しかけてきてくれたりすることがあったんだ。初めて買ったCDが私のだったり、今でも聴いてるって言ってくれる人がいたんだだけ

ど、最近はもうそんな人達もみかけなくなっちゃった。私が歌つても、皆忙しそうに通り過ぎてくだけ。酔っ払ったおじさんとかはよく立ち止まるんだけどね」

そう言つと、彼女はまた短く笑う。その笑顔はやっぱり寂しそうだった。

「……どうして辞めちゃったんですか？」

「ん？ 歌手をつてこと？」

「……はい」

「うつん。そうだねえ。疲れちゃったからかな？」

「疲れた？」

「そう。疲れちゃった。歌手つてね、歌がうまくても、いい曲を作れても、演奏技術が高くても、だめな人はだめなんだよ。私はその中でも歌もそんなにうまくないし、いい曲を作る訳でもないのに、色んな人のお陰でデビューできた人間だから、結局長く続けることが出来なかったんだ。デビュー出来たのは自分の実力だ、なんて勘違いをしちゃってたからね。でもそれは偽物の実力だつて気付いたんだ。それから、段々歌うのが面倒になってきちゃったのかな。自分の歌を信用できなくて、わかってくれる人達もいなくなつて、何もかもがうまくいかなくなつたからやる気がなくなつちやつたんだろつね。それで、曲を作れなくなつて歌う機会も減つて、そうこつしている内にレコード会社との契約も切れて、事務所の契約も切れて、引退しか道はなくなつた。歌手を続けるなんて選択肢は残つてなかったんだ」

彼女は目の前に広がるネオンの淡い光を見ながら話をしているよつだつたが、彼女の目の前に広がっているのは色取り取りの光ではなく、彼女にしかわからない過去の光景なんだろうなと、横顔を見ながら考える。

「森黒君も何かあつたんじゃないの？ ただ私が寂しそうだったつて理由だけで泣いたりはしないでしょ？ もし話せるんだつたら聞かせて欲しいな」

いつもなら、どんなに優しい口調で言われても、見ず知らずの赤の他人に自分の置かれている状況や気持ちを打ち明けることは決してしない。この質問の裏には何かが隠されているはずだと、被害妄想に陥り絶対に信用しないのに、何故かこの人には話してもいいだろうという気持ちになった。この人なら自分の気持ちを少しは理解してくれるんじゃないか、と思えてしまった。僕の口からは意図せず言葉がこぼれて止まらなくなり、学校のこと、いじめのこと、バケモノという噂のこと、今も会社で仕事をしているであろうあの二人のこと、不満に思っていること全てを打ち明けてしまっていた。彼女は一言も喋らず、真剣に僕を見ながら話を聞いてくれていた。止まらない感情を吐き出すように、僕はしばらく彼女に向かって喋り続けた。

洪水のように訪れた僕の不満と感情が落ち着き、口から溢れ出ていた言葉も尽きた頃、彼女は少しの間を置いてゆっくりと話し始める。

「そっか。森黒君は強いね」

「……強くなかないです」

「いいや、強いよ。私だったらそんなの耐えられないな。すぐに逃げ出して、常に楽な方法ばかり考えちゃうと思う。でも森黒君はちよつとずつだけと戦ってるでしょ？ 今でもしっかり学校に通ってるし、両親を傷つけたり困らせるようなことはしてないじゃない。それって簡単にみえるけど、すつごく難しくて勇気のいることだよ。うん。やっぱり森黒君は強い」

なんだか照れくさかった。誰かに褒められるのは久しぶりだ。でも、やっぱり僕は強くないと思う。学校に通っているのも、あの二人に反抗しないのも、結局は勇気がないからだ。それこそ、そうやって立ち向かうことから逃げているからなんだ。我慢をして立ち向かっていると言えは聞こえはいいが、本当のところはそう言うことだ。それに僕は最も簡単に逃げられる方法をずっと前に試している。住んでいるマンションの屋上から飛び降り、現実から逃げようとし

た。そして死ねない体になってしまった。それから変わらない毎日を過ごしている。立ち向かうこともせず、何かを変えようと動くこともせず、ただ一日一日が平和に終わればいいと諦めているんだ。僕はあの時から何も変わっちゃいない。

「よし！」

急に声を上げて立ち上がった彼女は、シャッターに立てかけていたギターを肩にかけ直し、大きく鳴らし歌い始めた。彼女の透き通るような声が、街の喧騒に溶け込んで行く。しかし、僕の耳には彼女の声だけがはっきりと聴こえていた。寂しくて悲しげな悲鳴とも取れる歌声が、彼女の心の叫びが、僕の叫びが、街中に響く。他人に関心を示さない歩行者に訴えかけるように、六本の弦が震える音と一緒にビルの間へと吸い込まれていった。

心？

美香さんと出会ってから、僕は毎日のようにあの精肉店前へ行くようになった。時間は決まって夜の九時から十一時まで。僕らはお互いにその日にあつた出来事を話し合ったり、美香さんが歌い、僕がその横で街や人を眺めながらじつと聴いていたり、そんな風にして十一時までの二時間を過ごした。毎日毎日、ただそれだけを繰り返した。不思議と飽きることはなかった。お互いに話すことはいつも一緒に、僕の学校の話や美香さんのバイト先の話ばかり。特に変わったことや面白いことは何もない。それでも、僕らは時間になるとシャッター前に集まり、同じ事を繰り返す。例えばそれは、朝起きたら服を着替えたり、お腹がすいたらご飯を食べたり、そう言った日常の一部で、そうすることが当たり前になっていたのかもしれない。

今日も僕は一度家に帰り着替えを済ませ、夕食を食べてからシャッターが閉まったあの精肉店の前に向かう。マンションを出て、いつもバスが学校へと進む方向とは逆の道をしばらく真直ぐ進み、倉庫のようにそびえ立つ電車の車庫を左に見ながら、住宅街と駅周辺に点在する商店のエリアを分かť大きな歩道橋を渡る。この歩道橋は通い始めてから一週間で見つけた。今までスーパー以外には興味がなかったからここの地理に詳しくなかった。そのために、学校帰りに通っていたスーパーまでの道のりも歩道橋を渡れば近いところを、わざわざ住んでいるマンションを通り過ぎて、電車の車庫に沿って迂回するように進んでいて、余計な道を歩いて遠回りをしてしまったのだ。初めて行った時はそれなりに距離があるなと思っていたのはその所為だ。何度も来ているうちにこの歩道橋を発見して意外に短い時間で辿り着けることに気が付いた。最短距離で向かうと、歩いて二十分も掛からない。普段の買い物にもこの歩道橋を使うようになった。

歩道橋の下には当然ながら線路が走っていて、年期の入った線路はサビが目立ち、遠目からは何本もの茶色い線が果てしなく続いているようにしか見えない。夜になるとその色はぼんやりと怪しげに浮かび上がる。視線を上げて向かう先に目をやると、他の建物から頭一つ分飛び出て見えるのがいつも夕食を買うために使っているスーパーだ。無駄にライトアップされた真四角の看板が、自分こそがこのエリアの主役だと言わんばかりに輝いている。利用者は専らこの付近に住んでいる人間で、この時間だと帰りがけのサラリーマンや遅めの夕食支度で来た主婦達が食材を求めて集まっている。歩道橋を渡り終わると、徐々にその風景が見えてくる。スーパーの明かりに誘われるように買い物客が吸い込まれて行き、同時に袋を持った客が吐き出されて行く。その横を通り過ぎて、少し先にある商店通りに差し掛かると、今度は違った目的で集まっている人達が見えてくる。夜でも人通りがあり、行き帰りにも便利で、何よりここら一帯の店全てが協力的という好条件もあってか、この通りには美香さん以外のストリートミュージシャンも多い。ストリートミュージシャンに限らず、ダンサー、絵描き、占い師、大道芸人、お笑いコンビ、他多数。たくさんのパフォーマーがこの一帯を縄張りとし、自らのステージを作り出しては精一杯の自己表現を披露している。

そんな人達をゆっくりと眺めながら歩き、精肉店の前に到着した。まだ美香さんは来ていないようで、他の店の前ではそれぞれ縄張りとしている人間がパフォーマーをマンズをしているのに、精肉店の前だけはぼつかりと空いている。時計を見ると八時五十五分を過ぎたところ。いつもの美香さんならば、既にギターケースを開けてチューニングを始めている頃だ。バイトが長引いているのかもしれない。待っていていれらるだろう。僕は一人でシャッター前に腰を下ろし。横から聴こえてくる歌声に耳を傾ける。

数人に囲まれた男性デュオのハモリとギターの音が聴こえる。爽やかな曲調に合った優しい歌声で、ハモリもしっかりとしている。悪くない。でも、何かが違う。今度は反対側の歌声に集中してみる。

こちらは男性が一人で歌っている。ギターの奏法や発声の仕方が情熱的で激しい歌を歌っている。でも激しいのはそれだけで、ノリは良いのに歌詞が曲に追いついていなかった。支離滅裂。意味不明。何を歌いたいのか理解できない。それでも立ち止まって聴き入っている人達が何人かいる。皆、その男性の歌を聴いて楽しそうだった。僕にしてみれば、どちらを聴いても美香さんの歌を聴いた時のような衝撃は訪れなかった。あの深く刺さってくるような、心からの叫びが感じられない。やっぱり、元はプロとして活動していた美香さんは他の歌い手とは別格なんだ。あの、人を引き付ける魅力は本物なんだと改めて感じた。

それなのに、美香さんの歌を聴いて立ち止まる人はほとんどいない。それが不思議でしようがなかった。僕が美香さんと出会ってから今日までの間、指で数えられるぐらいの人数しか歌を聴いていなかった。その中には本当にしっかりと歌を聴いているのかどうかすら疑わしい人間もいる。しっかりと聴いていたとしても、最後まで聴いていく人は一人もいなかった。いつも僕と美香さんだけが店の前に残り、二人で片づけをして明日も会う約束をして帰るだけだ。どうして皆わからないんだろう。こんなに良い歌を歌っている人が、こんな身近にいるというのに、どうしてあんな薄っぺらくてノリの良さだけで聴かせるような歌に集まるんだろう。美香さんの歌を聴いている時はずっとそのことばかり考えてしまう。美香さんの歌しか聴いたことのない僕が世間知らずなだけかもしれない。音楽の知識など皆無だし、世間ではどう言う音楽が評価されているのか全くわからないのだから、そう言われてもしょうがない。でも僕は美香さんの歌が一番好きだし、一番いい曲だと思っている。それは誰にどんなことを言われようとも変わることがない自信がある。この疑問を一旦考え始めると、どんなに考えても最終的にはこの結論で落ち着いてしまう。まあ、音楽に関わらず、好き嫌いは人それぞれだ。誰も評価しないものであっても、僕が好きならそれでいい。案外、音楽を聴くってことはそう言うことなのかもしれない。

「ごめんごめん。遅くなっちゃった。お店が妙に混んじやってさあ。待った？」

ギターケースを背負った美香さんが、息を切らしながら到着した。今日もニット帽を目深に被り、薄手のダウンジャケットを羽織っている。その地味な服装とは対照的な整った顔立ちと綺麗な声で僕の心は緩やかに温度を上げる。

「そんなに待つてないです」

「よかった。今すぐ準備するね。あ、譜面台立ててもらってもいい？」

美香さんは「ただ聴いてるだけじゃつまないでしょ？」と僕に譜面台の立て方やギターのコードを教えるようになっていた。僕は美香さんの歌さえ聴ければそれで良かったが、僕に教えている時の美香さんが楽しそうだったので、言われるがままに色々教わることにした。今では譜面台を立てるなんて朝飯前。最近では譜面の音譜がどの音を表しているのか、わかるようになっていた。さらには家でインターネットでギターのコード表を探し出してきて、コードを覚えるために勉強をするようになった。学校の勉強はどんなに頑張っても頭に入ってこないのに、コードだけは次々と覚えることができた。その成果を美香さんに披露する度に、美香さんは最高の笑顔で僕を褒めてくれた。それが、とても嬉しかった。ただ、実際に弾けるまでのレベルには達していないので、そこはまだまだ修行中だ。

「ありがとう。あ、そう言えばね、さっきそこで昔お世話になった人とはったり会ってさ。私がデビューするきっかけを作ってくれた人なんだけど。私がまだここで歌ってるって教えたら、後で来てくれるって言うてくれたの。来たら森黒君にも紹介するね」

チューニングをしながら笑顔で話す美香さん。譜面台を立て終えてシャッターに寄りかかって座る僕は、そのお世話になった人という部分が妙に引っかけた。

デビューのきっかけを作ったと言うことは、その業界の人間か、

その業界に影響力がある人間と言うことになる。それはつまり、よくわからないけど、とにかくすごい人だと言うことだ。その人が美香さんのことを覚えていて、ここに聴きに来る。と言うことは、もし、その人が今の美香さんを気に入ら、再デビューしないかと話を持ちかけたなら、もうここで美香さんと会うことは出来なくなる。美香さんの歌を多くの人に聴いてもらえるという点では喜ぶべきことだが、美香さんとの時間がなくなってしまうと考えると素直に喜ぶことが出来ない。まだそうなると決まっていけないのに、不安がどんどん押し寄せてくる。

「どうしたの？ 今日も学校で何かあった？」

俯いていた僕に気付いた美香さんが、不安そうに僕の顔を覗き込んでくる。

「な……何でもありません」

「そう？ ならいいけど。よし！ じゃあ景気づけに一発激しいのいってみようか！」

美香さんは両隣にも負けなくらい大きな声で歌い始めた。ギターが震え、弦一つ一つが奏でる音を繋ぎ合わせるように、美香さんの声が全体を包み込む。

明日の道。美香さんはこの歌のタイトルをそう教えてくれた。辛いことがあっても明日はどうなるかわからない。どうせなら明日が今日より良い日であるように、前を向いて歩いて行こう。そんな気持ちを含めてこの曲を作ったと言っていた。ギターの音が力強く鳴るこの曲は、聴いているだけで活力が湧いてくる。明日も頑張ろうと思えてくる曲だ。どちらかが少しでも暗い気分の時は、必ずこの曲から始めることにしている。美香さんはどうかかわからないが、僕には効果抜群の曲だ。僕は目の前に見える通行人を眺めながら、何の抵抗もなく耳に入ってくる美香さんの歌に集中する。

ラストのサビに入ったところで、僕の左にいる美香さんの向こうに誰かが立っていることに気が付いた。今日は美香さんの歌に惹かれ、立ち止まった人がいたようだ。美香さんの集中を途切れさせた

くないので、その場を動かずにその立ち止まっている人を確認する。上半身はギターで隠れて見えないが、確認できるズボンや靴、足の太さから考えると、男の人のようだ。足のラインがはっきりとわかるタイトなジーンズにオシャレな茶色のブーツを履いている。この人は美香さんの歌を聴いてどう感じているんだろう。僕みたいに感動しているだろうか。それとも、単なる興味本位で聴いているだけなんだろうか。美香さんの曲で良いのはこれだけじゃない。どうか帰らないで最後まで聴いて欲しいと真剣に願った。

歌が終わる。拍手が二つ、僕と立っている男の人が両手を打ち合わせて美香さんに送る。美香さんは軽くお辞儀をして、立っている男の人へと視線を向ける。

「来てくれたんですね！もしかしたら来てくれないんじゃないかと思って、ちよつと不安だったんですよ？」

笑いながら男の人に話しかける美香さん。会話の内容から考えると、どうやらこの男の人がさっき言っていたお世話になった人だったようだ。

「いやいや。まさか本当にここで歌ってるとは思わなかったよ。よくやるねえ、こんなくだららないこと」

「！！」

僕はすぐに立ち上がり、男の顔を確認する。くだらないことだった？なんて失礼なことを言う奴だ。そう思ったから立ち上がった訳ではない。聞き慣れた嫌な声が、美香さんの歌で清々しかった耳に入り込んできたからだ。

「あ、森黒君。この人がさっき言ってた私がお世話になったって言う……」

「いやいや、ご紹介には及ばないよ。ねえ、森黒君？」

ブローカー。

ハンチング帽に眼鏡をかけた男が呆れた顔をして立っていた。

「あれ？ 森黒君とブローカーさんって、もしかして知り合いだったの？」

「まあ、そんなところだね。会うのは久しぶりだけど。元気だったかい？」

僕はしばらく動くことが出来なかった。ブローカーと美香さんの関係性が理解出来ず、どういうことになっているのか考えることから出来なかった。

「森黒君、大丈夫？ やっぱり今日何かあったんじゃないの？」

「……どうして？」

疑問符が頭の中をぐるぐると回って全てを掻き回している。この言葉を発するのがやっとだった。

「なんだい。もしかして森黒君は彼女から何も聞いていないのかい？」

「ええ！？ 私、何か話さなきゃいけないことあったっけ！？」

美香さんの頭にもはてなマークが表示される。そんなことをしても何もわからないのに、お互いがお互いを見つめ合い、はてなマークはどんどん増えてゆく。

「なんだい。森黒君の姿が見えた時には、これはおもしろい展開だなんて思ったのに、単なる偶然かい？ 全く。期待して損したよ。」

それに、森黒君もそうだけど、君も相当天然だね」

「え？ え？」

「だから、僕が関わっているってことは、大体どんなことなのか想像できるだろ？ 少しは頭を使ったらどうだい」

「え！？ じゃあ、森黒君って……」

「み……美香さんは……」

美香さんの言葉が詰まる。ブローカーが何を言おうとしていたのか、理解したようだった。そして、僕の頭の中には言いようのない不安が込み上げてくる。まさか、そんなことがあるだろうか。

「わかったかい？ 森黒君は欲望者さ。君も覚えがあるだろ？ 君達はある意味同じ側の人間なんだよ。いやあ、こんな偶然もあるん

だねえ」

軽く笑って見せるブローカーとは対照的に、今度は美香さんが僕を見て固まってしまった。今まで僕に対して向けたことのない表情をしている。その表情を見た瞬間に、僕はもう美香さんと一緒に、ここで会うことは出来ないんだと悟った。美香さんの顔は、明らかに恐怖で染まっている。美香さんがどうやって欲望者と関わり、またブローカーと関わってきたのかわからないが、この表情だけ僕との関係が終わってしまったことを理解するには十分だった。

「そんな……森黒君も……欲望者？」

「そうだよ。僕が言うんだから間違いないだろ。僕自身、その力をこの目で確認しているからね。なんなら君も見てみるかい？ 映像として残してるから、いつでも見れるよ？」

美香さんはブローカーの言葉に反応しなかった。ただ、僕のことを恐怖と不安が入り混じった表情で見つめ続ける。僕は胸が張り裂けそうだった。目の奥から何かが迫ってきているのを感じた。もう限界だ。

「……さようなら」

その視線から逃げるように、迫ってくる何かを抑えるように、僕の体は駆け出していった。僕の住むマンション目指して全力で。美香さんが何か叫んだような気がしたが、止まるつもりはなかった。もう美香さんとも会うことはないだろう。

僕は、やっと出来た楽しい居場所を失ってしまった。

心？

僕のライフサイクルは元に戻っていた。

朝起きて着替えを済ませ、朝食を食べてから学校へ向かう。誰と話すこともなく、授業が頭に入ってくることもなく、時間だけが止まることなく進んで行く。放課後の教室でしばらく本を読み、バスに乗って帰宅する。買ってきた弁当を食べながらインターネットを流し見して、眠くなったらベッドに入る。面白味の欠片もない、平凡でどうでもいい生活。美香さんと過ごしたあの楽しい二時間は、この一日をどれだけ束ねても再現することが出来ない。僕にとつてあの時間がどれほどの意味を持っていたのか、今になって痛いぐらいによくわかる。でも、あの時間はもうやってこない。僕が欲望者だと知った時の美香さんの顔が今でもはつきりと思い出せる。恐怖に歪み、不安で固められた、この世に存在してはいけないものを見てしまった時のような顔。美香さんがあんな顔をするなんて思ってもいなかった。いつも笑顔で明るく歌う美香さんとのギャップが激しすぎて、あの時の顔が頭にこびり付いて離れない。時間をかけて忘れるしかないんだろう。今は辛くても、美香さんと知り合う前は今と同じ生活だったのだ。そうやって僕は生きてきたんだ。ただちよっと楽しい夢を見させてもらっただけ。神様がほんの少しご褒美をくれただけ。最初から長く続くものではなかったんだ。そうやって諦めなければやっていられないぐらい、僕の気持ちは沈み行くばかりだった。

そんな僕の気分と同調するように、太陽が地平線へとゆっくり身を沈めてゆく。今日も学校が終わる。

帰り道、スーパーで今日の夕飯を買った後、何となくその先にある商店通りに足を向けてみた。今時珍しい古風な商店が軒を連ね、通りには活気が溢れていた。青果店から漂う甘い匂い、鮮魚店から聞こえる張りのある声、花屋から溢れる様々な色。どの店も個人で

切り盛りしている小さな店だ。僕がいつも利用しているスーパーに行けば、ここにあるものが大抵揃ってしまう。あのスーパーを経営している人物も、この通りで買い物をしている近隣住民を取り込もうとして出店したのだろう。しかし、今でもここは生きている。知った顔の人間が集まり、道の途中で輪を作り楽しい会話に花が咲く。その会話を飾るように新鮮な食材や魅力的な商品が購買意欲を掻き立てる。店主は道行く人に声をかけ、言葉巧みにおすすめの品を紹介する。騙すための話術ではなく、自らが買い付けてきた品に自信があるからこそその呼び込み。

「どれも選りすぐりの一級品！」

「俺が見つけた最高の品を見てくれ！」

「こんな良いものは大量生産のスーパーなんかじゃお目にかかれな
いよ！」

「うちだからこそ手に入るお買い得商品だ！」

そんな風に聞こえる。活気という言葉が意味するところは、こう
言う場所のことなんだろうと妙に納得してしまった。

そんな中、一際香ばしい匂いを漂わせる店が一軒。風化してぼろ
ぼろになった赤の背景に白文字の看板。少し曇ったショーケース。
その中でピンクとも赤ともいえない色で鈍くて艶やかな光を放つ食
材。店先からはパン粉が弾け飛ぶ心地よい音と匂いが風に乗って僕
の体に届けられる。その音が聞こえる近くにはコロッケ一個八十円
という表示が見える。

この店が営業しているところを初めて目にした。店の名前を見る
のも初めてだ。

ふるかわ精肉店。

思い出の場所。

失った場所。

精肉店は微妙な忙しさを保っていた。お客が列を作って買い求め
ている訳でもないが、全くないという訳でもない。常時一人から
二人が途絶えることなくやってくるといった感じ。ショーケースの

向こう側にいるのは白の前掛けを着けた頑固そうなおじさんとエプロンに三角巾を被った優しそうなおばさん。老夫婦と呼ぶにはまだ早い、生き生きとした二人だった。楽しそうな表情で仕事をしている。二人以外の人影は見当たらなかった。おじさんが奥で肉を捌いてショーケースに並べ、おばさんは外から見える場所にある四角くて大きなステンレス製の鍋に、次々とまだ白いコロッケを投入してゆく。鍋には熱々の油が満たされていて、白いコロッケはあつと言う間に狐色になって、そのまま店先のトレーの上に積まれてゆく。あの大きさを採算がとれるんだろうかと、こちらが心配になってしまっただけでお腹いっぱいになりそうだ。

おばさんが全てのコロッケを鍋からすくい上げ終わった時、店の奥で電話が鳴った。両手を布巾で拭い、駆け足でおばさんが奥へと消える。店に一人きりとなったおじさんが、肉の陳列をやめて身を起す。ショーケースの下からゆっくりと浮かんできたおじさんの視線は目の前に広がる通りを見回し、いの一番に僕の姿を捕らえた。「おう、坊主！ 一個どうだ！？ 買い食いにはちょうどいいだろ？」

今のところ、特にお腹は空いていないしコロッケにもそこまで興味はなかった。おじさんから見て、僕はそんなに物欲しそうな顔をしていたんだろうか。

「いや……あの……」

「おう！ いらっしやい！ 今日はどうすんだい！？」

僕が返答に困って焦っているうちに、また一人お客がやってきてショーケースを覗き込む。おじさんはその主婦らしいお客と知り合いのようで、どうでもいい世間話をしながら豚バラ肉を慣れた手つきで梱包している。

「おい、坊主！ どうすんだ？ 買うんならさっさとしねえと、折角の揚げたてが冷めちゃうだろ。男ならスパツとしねえか！」

「やだ哲さん。またそうやって」

ビニール袋を受け取った主婦らしき女性が笑いながらおじさんに話す。おじさんは哲さんと呼ばれているらしい。それよりもスパツとすると言うのは、どう言うことなんだろうか。謎の擬音だ。

「いいんだよ。買い食いをしてこそ男つてもんだろ。少ねえ小遣いで親とか教師の目を盗みながら食べるコロツケは格別よ。なあ、坊主？」

僕の場合、自分の夕食を求めてここに来ているから、おじさんの言う男とは別物だ。そんな楽しげなものではない。僕は生活のためにあの二人から支給されたお金で自分の夕食を買いに来ているんだ。親の目も教師の目も盗む必要はない。それに今の時代、買い食いをしたからといって誰かに咎められるのもおかしい話だ。

「おい、どうすんだ？ 食うのか？ 食わねえのか？ 辛気臭え顔してよお。何かあつたのか？ それじゃあまるで、家の美香坊みたいじゃねえか」

「あら、美香ちゃん何かあつたの？」

「それがよお、よく知らねえが大切な友達に酷いことをしたって落ち込んでんのよ。なんだか昔の美香坊を思い出しちゃって、見てらんなくてなあ」

「昔みたいにつて、それ相当じゃない。心配ねえ」

「そうなんだよ。あいつ一旦落ち込むと長いからよお」

「その友達つて、どんな子か聞いたの？」

「年下の男だよ。それ以上は言いたがらねえんだ。まったく。美香坊は真面目すぎんだよ」

「そうねえ。でもそこがあの子の良いところでもあるんだから。今は見守ってあげることしか出来ないわね。よろしく言つといて」

「ああ、悪いな。余計な心配させちまって。毎度さん」

豚バラ肉が入った真っ白なビニール袋をがさがさと鳴らしながら、主婦は駅へと続く道を歩いてゆく。そのビニール袋の音が聞こえるたびに、僕の頭の中では二人の会話で気になった単語が繰り返される。

美香。大切な友達。酷いことをした。落ち込んでいる。年下の男。再びお客がいなくなり、一人となったおじさんの視線は、やはり僕へと向けられる。また、早く買えたの、うじうじするなだの、威勢の良い声でどやされるかと思っただが、おじさんは優しい顔でコロッケを二つ、包み紙で包むとビニール袋に入れて差し出してきた。

「ほれ。持ってけ」

「え……でも……」

「いいんだよ。おっちゃんの奢りだ」

「いや……でも……」

「いいから持ってけ！ 男ならガシつとしろ！」

また謎の擬音。このおじさんなら、例え何度断ったとしても無駄なんだろうなと思ひ、僕はショーケースに近づいて差し出されたビニール袋を受け取った。無理矢理渡されたコロッケの入ったビニール袋を覗き込むと、揚げたてのコロッケはまだ熱を発しており、生暖かい空気が漂ってくる。香ばしい匂いがビニール袋の口から立ち上り、僕の顔をなぞりながら拡散して行く。

「その代わりと言っちゃあ何だが、そのコロッケは喧嘩した奴と食べよ」

「えっ？」

「なあに。どうせおめえも誰かと喧嘩したとかそんなとこなんだろう？ 見りゃあわかる。顔に思いつき寂しいって書いてあるからな」

「いや……そんなんじゃ……」

「うじうじすんな！ 男ならシャキつと謝って来い！」

また怒鳴られた。

「あ……ありがとうございます」

「よし！ 頑張ってこい！ そのコロッケがあればすぐに仲直りよ！ 家のコロッケは魔法のコロッケ！ 冷めても美味いからな！」

豪快に笑うおじさんに会釈をして、僕も駅へと続く道を進み、住んでいるマンションを指す。少し変わった人だったが、おじさんからはコロッケ以外にも何かをもらった気がした。

心？

決心はしたものの、やはりなかなか勇気が出せず、準備が整った状態ですばらく部屋の中をうろろろしていた。

帰ってきてから色々悩んだ結果、美香さんに会って話を聞くためにあの場所へ行くことに決めた。やっぱり僕にはあの場所で過ごす時間が必要だ。そのためには直接会って話を聞かないことには何も始まらない。でも、そう考え出した途端に不安が過ぎる。会った時にまたあの表情を向けられたら、今度こそ泣いてしまいかもしれない。そうになったら本当に二度と美香さんとは会うことが出来なくなってしまう。しかし、話を聞かないと美香さんと欲望者、美香さんとブローカーの関係もわからない。やっぱり話を聞きたい。でも……

僕の思考はこの繰り返しだった。優柔不断。小心者。僕のためにあるような言葉だ。今の僕を動かすには別の何かが必要だった。僕自身の意思ではなく、他人の意思が介入している何か。机の上にある時計は十時四十七分を回る。早く家を出ないと美香さんが帰ってしまう。不安と焦りから、僕の頭には諦めるという選択肢も浮上してくる。明日にしてしまおうか。もう少しゆっくり考えて、作戦を練ってからにした方がいいんじゃないだろうか、とも考える。悪い癖だ。そうやってまた逃げる。次にまわしてしまえば、明日も同じことを考えるに決まっている。でもどうする。僕の決意を確固たる物にするにはどうすればいい。

あれこれ考えている内に時計は十時五十分を過ぎる。今家を出なければ間に合わない。時計を見て焦った僕の目に、帰ってから机の上に置いてそのままにしていたビニール袋が飛び込んできた。夕方に精肉店のおじさんからもらった、コロッケが二つ入ったビニール袋。あれからかなり時間が経っているため、もうコロッケは冷え切っている。

これだ！ もうこれしかない！

僕はビニール袋を無造作に掴み取り、急いで家を出た。薄暗い夜道を、向かってくる通行人を掻き分けるようにして全力で走った。間に合ってくれ。

この時間になると引き上げるパフォーマーも多く、通りには徐々に静寂が戻ってきていた。僕は、まだ残っている数組のミュージシャンやダンサーを尻目に精肉店を目指す。疲れて走れなくなった体を何とか前に進ませて、肩で息をしながら通りを歩き、やっとの思いで精肉店に到着した。

そこに美香さんの姿はなかった。

腕時計を見ると時間は十一時七分。いつもならまだ片づけをしている時間だ。今日は早くに切り上げてしまったんだろうか。昼間も見た精肉店はシャッターで閉ざされ、店の前には冷たいコンクリートの歩道と何もない空間が広がっているだけだった。

遅かった。僕が家でうじうじと悩んでいる間に、美香さんは帰ってしまったんだろう。もしかしたら、僕との一件以来、ここでは歌っていないのかもしれない。どちらにしろ、僕は美香さんと会うタイミングを逃してしまった。情けない。いつもこうだ。何度同じ事を繰り返せば僕は学習するんだろう。自分の頭の悪さと体の疲労で一気に滅入ってしまい、シャッターに背中を預け膝を抱えて座り込む。背中に当たるシャッターも座っているコンクリートも僕から熱を奪ってゆく。僕の心と体は、持っているコロッケのように冷めてしまっていた。

「森……黒君？」

突然の呼びかけに体育座りで伏せていた顔を起こす。そこにはギターケースを背負った美香さんが、いつもの格好で僕を覗き込んでいた。

「美香さん。帰ったんじゃない？」

「ちよっと、忘れ物しちゃって……」

美香さんはそう言うと、精肉店と隣の店舗の隙間に手を伸ばす。そこから出てきたのはいつも使っている一人用のレジャーシートだった。美香さんはレジャーシートを丸めてギターケースに押し込むと、僕の目の前に立って何か言いたそうにしている。僕は緊張から言葉が出てこない。お互いに何も言わず、微妙な空気が流れる。

「……………あのさ！」

「……………あのさ！」

声が被る。どうしよう。この場合は譲ったほうが良いんだろうか。「ごめん。森黒君から先に話して」

美香さんに促されて話をしようとしたが、やっぱり言葉が出てこない。聞きたいことや話したいことは山ほどあるのに、どう切り出しているかわからない。本当に僕はここ一番で弱い。美香さんはなかなか話を始めない僕を見て心配そうにしている。

「……………これ！」

やっと出てきた言葉と一緒に立ち上がり、持っていたビニール袋を美香さんに差し出す。

「何？」

「これ……………この精肉店のおじさんが……………美香さんにとって」

「哲さんが？ 私に？」

美香さんは不思議そうにしながら袋を受け取り、中を確認する。中には冷め切ったコロツケが二つ入っている。

「二つあるけど……………」

「ふ……………二人で食べるって。冷めてもおいしいからって」

さっきから滅茶苦茶だ。文章も内容も、何一つまともに言えていない。日本語として成り立っているかすら疑わしい。いつから僕はこんなに嘘をつく人間になってしまったんだろう。

美香さんは袋の中をもう一度覗いてから、僕を見る。そして、笑い始めた。

「……………どうしたんですか？」

美香さんはまだ笑っている。何がおもしろいのかわからなかった。

しばらくしてから、美香さんは笑いを少しずつ抑えて話し始める。
「ごめんね。哲さんもどこまでわかってるのかな。相変わらず不思議な人。じゃあご好意に甘えて頂こうかな。ほら、森黒君もこっちに座って食べよう」

美香さんはシャッターの前に座ると、袋から一つずつ小分けで梱包されたコロッケを取り出して、僕に差し出す。僕はそのコロッケを受け取って美香さんの隣に座り直す。

「いただきまーす」

美香さんはコロッケの包み紙を半分だけ剥がすと、大きく口を広げて食べ始める。僕も美香さんと同じように包み紙を取り口に運ぶ。コロッケは冷めていたが、おじさんの言う通りでとてもおいしかった。今まで食べたコロッケの中では一番だったかもしれない。余計なものも一切入っていない、ほくほくとしたじゃがいものおいしさがあつかり詰まっている。その中でアクセントとなっているひき肉がじゃがいもの味を邪魔せず、閉じ込められた肉汁が良い味付けとなっている。手作りの優しさが凝縮されていて、冷めているのに暖かさが感じられた。

「やっぱり哲さんのこのコロッケはおいしいな」

美香さんは嬉しそうに最後のコロッケを口に入れる。僕も包み紙を全て取り、一気に口へと押し込んだ。二人でコロッケの味を最後まで堪能する。コロッケの味に集中するのに、静かになった商店通りはちょうど良かった。食べ終えてしばらく道行く人を眺めていたが、美香さんが小さな声で話し始める。

「この前はごめんね。私、森黒君に酷いことしちゃった。あんなことされたら傷つくのは当然だよ。本当にごめんなさい」

「……もう、いいんです」

「私ね、もう森黒君と会えないんじゃないかって諦めてたんだ。ここで歌うのも今日で最後にしようって決めてたの。でも、今日森黒君に会えて本当に良かった。ずっと話したかったから」

美香さんは笑顔だった。僕と会えた事を本当に喜んでくれている

というのが伝わってくる。僕も嬉しくなった。さつきまでは緊張して何を話して良いのかわからなかったが、今ならいつもの感じで話が出来そうだ。僕は一番聞きたいことを聞いてみることにした。

「あの……聞いてもいいですか？」

「いいよ。何？」

「……ブローカーとは、欲望者とはどんな関わりがあったんですか？」

美香さんは少し黙る。笑顔が消えた。

「……そうだよ。一番気になるのはそこだよ。」

「あの……もし嫌だったら話さなくても……」

「ううん、大丈夫。私も、そのことについて森黒君と話すつもりだったから。少し長くなるけど良い？」

「はい。お願いします」

美香さんは少し間を空けて、改まった口調で話し出す。

「……森黒君は欲望者ってどう言うものなのか知ってる？」

「一応は……」

「自分の欲望が特別な力となって現れる人達の総称。それが欲望者」

「……」

「私もね、欲望者だったの」

「……だった？」

「そう。今はその力を持っていない、元欲望者。それが私」

初めて聞くことだった。ブローカーからもそんなことは聞いたことがなかったし、スネッチでも欲望者の力がなくなるといふ記事は見たことがない。欲望者が力を失くすなんて、想像がつかない。

「本当なんですか？」

「私にも本当かどうかかわからない。私の力は目に見えるようなものじゃなかったから。でも、欲望者だった頃の自分と今の自分を比較してみると、やっぱりちよつと違うんだよね」

「……どんな力だったんですか？」

「私のはね、自分の感情を相手に押し付ける力だった。しかも、力

が發揮されるのは歌っている時だけ。私の歌を聴いた人は、その力で私の感情を強制的に共有させられるの。迷惑な話でしょ？」

美香さんは寂しそうに笑った。僕はその力がどう言うものなのかよくわからなかった。相手に感情を押し付ける。つまり美香さんが歌っている時は、それを聴いている人も美香さんと同じ気持ちになるということだろう。でも歌と言うのは、少なからず歌詞やメロディーに作曲者の感情が込められているはずだ。歌を聴いただけで同じような気持ちになるというのは、その力がなくても日常的に起こり得ることなんじゃないだろうか。

「これだけ聞くと人畜無害な能力だと思いかもしれないけど、実際はそうじゃないの。自分の感情とは別の物を押し付けられるって経験した人じゃないとわからないんだけど、ものすごく疲れるんだって。普通の歌手だとよっぽど激しい音楽じゃない限りお客さんが倒れるってことはないんだけど。私のライブではよく倒れる人がいたの。アップテンポな曲はあっても急激に体力を消耗するような激しい曲は歌ってないのに。体力のない人は私の押し付けた感情の負荷に耐えられなくて倒れちゃうんだ。それに、その時の感情が歌に合っているものならまだ自然だし、感情を押し付けられた人達も不思議に思わないんだけど、イライラしてたり少しでも気分が悪かったら、歌や歌詞の内容に関係なくその感情がお客さんに伝わっちゃうんだ。ライブとかイベントでそんな状態なまま歌うのはいけないことなんだけど、私も人間だから。ある時本当にイライラしてて、その気持ちを歌で発散しようとしたら会場で暴れる人が出ちゃって、その日のライブは中止。暴れた人は警察に捕まっちゃった。あの時はまだ自分の力に気付いていなかったから、こんな人も世の中にはいるんだなってちょっと気分が悪かった。でも、今考えると本当に申し訳なくて。当然だよ。私のイライラを強制的に押し付けられて、そのイライラの所為で暴れちゃったんだから。あの人は何も悪くないのに」

美香さんは俯いて短いため息をつく。僕はこう言う時になんて声

をかければいいのか、よくわからない。黙って美香さんの話を聞くしかなかった。

「そうやって色々なことがあったけど、私のライブは口コミで評判になって、回を追うごとにお客さんは増えていったんだ。皆、ライブが終わった後に疲れ切った顔で同じことを言うの。今までにないくらい歌詞に共感できて、聴いている間ずっと涙が出て止まらなかったって。私は舞い上がった。ファンはどんどん増えるし、自分の歌を大絶賛してくれる。もうちょっと頑張れば夢に手が届くって思ってた頃にブローカーさんと出会ったの。その日のライブが終わって、荷物をまとめてライブハウスから出た時、声をかけてきたのがブローカーさん。あの人、その時何て言ったと思う？ 君の欲望叶えてあげようかって言うてきたんだよ。笑っちゃうでしょ？ 最初は変な人だと思って無視してたんだけど、しつこくついてきて色んな話をするの。それもかなり具体的な話。レコード会社はどこでここで、契約年数は売上によってどのくらいとか。今デビューすればこれくらいの売上が見込めるから、予算はこれくらいでこんなプロモーションを展開するだとか。とにかく、その世界にいる人じゃないと話せないような計画をどんどん提案してくるの。そんな話をされたら信じちゃうのも無理ないでしょ？ 特にその時の私はね。すっかりブローカーさんを信用して話を鵜呑みにした私は、彼に全ての任せてデビューを決意したの。ブローカーさんは私に話した通りの計画を実行したわ。あつと言う間に芸能事務所との契約を仲介して、すぐさまレコード会社を押さえて、落ち着く暇もないまま有名プロデューサーの制作指揮の下レコーディングをして、気付けばデビューシングルの発売日だった。ブローカーさんの予想通り、CDはすごい勢いで売れたんだ。発売から一週間もしない内にミリオンセラー。一時はこのCDショップでも品切れが続出して生産が間に合わない状態にまでなったんだよ。その曲で私はその年のレコード大賞の新人賞を貰って、年間売り上げ枚数でも一位を獲得。毎日が忙しかった。テレビにラジオに雑誌の取材。イベントにライブ

にまたレコーディング。目まぐるしく過ぎてゆく日々は秒感覚だったな。忙しくても充実した日々を過ごしている自分に満足してたけど、今ではあの頃の自分が本当に恥ずかしいよ。偽者の歌を歌ってお金を貰うなんて、卑怯者だよな」

「……そんな、卑怯者だなんて」

「卑怯者だよ。結局、私の歌はその力があつたから有名になつたんだもの。そんな力に頼らずに、一生懸命歌っている人はたくさんいるのに、私はそんな人達の活躍する場所を自分の欲望から出てきた卑怯な力で奪い取つたんだよ。しかも、そのことに気付かずに自分には才能があるだなんて思い込んで舞い上がつて。本当に最悪だよ。でもね、神様はちゃんと見てるんだ。悪いことをすれば、その責任を償つために悪いことが返ってくる。私のCDは段々と売れなくなつたんだ」

「どうしてですか？」

「私の力はね、路上とかライブとか、とにかく目の前で、生で歌を聴かないと効果がないの。これどういうことかわかる？」

「……？」

「つまりね。私の力はCDに収録されないの。CDで聴いても相手に感情は伝わらないから、下手糞な歌がスピーカーから流れてくるだけ。それで聴いている人は、ライブではあんなに良い曲だったのにCDで聴いたら全然良く聴こえないのはどうしてなんだろう、って不思議に思うわけ。それは欲望者の力の所為なんだけど、聴いている人はそんなこと知らないじゃない？ だから、あんなに良く聴こえたのはライブで聴いたからであつて、CDを買ってまで聴くような歌手じゃないんだって思う人が増えていったの。そうやってファンは離れていって、出しても出してもCDは売れないし、ライブの集客数も減るし、で後は前に話した通り。事務所もレコード会社もあつさり契約を打ち切つてきた。何にも残らなかつた。歌手としての自分に自信を失くして途方に暮れていた時に、しばらく会っていなかつたブローカーさんが会いに来てくれたの。売れなくなつ

た私に救いの手を差し伸べてくれるのかと最初は期待してたんだけど、そんなんじゃないかった。ブローカーさんは私に欲望者について話しに来たのよ。その時に初めてブローカーさんから欲望者の存在を教えられて、私の力がどんなものなのか教えてもらった。話を聞いて、悲しくて辛くてどうしようもなかった。でも、ああ、そうだったんだ、って納得もした。歌もうまくない、曲作りの才能もない、そんな私がデビュー出来るなんてうまく行き過ぎてる、って心のどこかで思っていたんだらうね。たぶん力を失ったのはその時なんじゃないかな」

「そう……… だつたんですか」

僕は相槌を打った後、言葉が続かなかった。美香さんは俯いて、暗闇で色がはつきりとしなないコンクリートの地面を見つめている。美香さんの歌を初めて聴いたときの、あの悲しくて寂しい感情はこの出来事が原因だつたんだらう。夢を追い続けひたすらに歌い、実現したと思ったら、それは欲望が魅せた幻だつたのだ。その幻に溺れて自分を見失い、さらには他人を巻き込んだことを絶望の淵で宣告された。その事実がどれほど美香さんを苦しめて追い詰めたのか、僕には想像ができない。美香さんも想像を絶する苦しみだつたんだらう。

そう考えると、僕の心にはブローカーへの怒りが込み上げてくる。ブローカーは美香さんにデビューを持ちかけた時点でこの力に気付いていたに違いない。それを知りながらも、美香さんに欲望者のことを隠したまま活動させ、その力を検証し尽くしたところで事実を告げただらう。罪悪感も申し訳なさも一切含まれていない、軽い口調でへらへらしながら話したんだらう。このことだけは容易に想像できる。ブローカーとはそういう男だ。

「でもね、私はこれで良かったって思ってるんだ」

「そんな！ 全然良くないですよ！」

ブローカーへの怒りのあまり、大きな声で美香さんの発言を否定してしまった。美香さんの驚いた表情を見て自分が興奮しているこ

とに気付き、すいませんと小さく謝る。美香さんはすぐに優しい笑顔を作り、話を続ける。

「森黒君は優しいね。でもね、やっぱり私はこれで良かったと思うよ。こんな力がある歌なんて歌とは呼べないと思うし、それで聴いている人達を騙し続けるのも良くないことだよ。ブローカーさんがそのことを教えてくれなかったら、私は今でもその力で誰かを騙していたかもしれない。誰かに自分の気持ちを押し付けて、自己満足を求めて歌っていたかも知れない。だから、ブローカーさんにはすごく感謝してるの。お陰で力もなくなって、自分の歌を歌えるようになったしね」

美香さんの顔にはいつもの明るい笑顔が戻ってきていた。

「……美香さんは強いですね」

「そう？ 私は自分のこと全然強いとは思えないけどね。こうやっていまだに路上で歌ってるのも、歌手に未練があるからだと思うし。まだ引き摺ってるんだよ。はあ。情けないっいたらありやしない」

美香さんはそう言うのと立ち上がり、お尻に付いた砂を手で払ってからシャッターに立て掛けていたギターケースを肩にかける。

「さあ、もう時間も遅いし帰ろっか」

腕時計を見るとすでに日付が変わっていた。一時間近く話をしていたようだ。そろそろ帰らないとあの二人に気付かれたときに何を言われるかわからない。明日も学校がある。美香さんもバイトがあるだろう。

「じゃあね。また明日ここで！」

「ま……待って下さい！」

駅へと続く道を歩き始めようとしていた美香さん呼び止める。

「どうしたの？」

「あの……聞かないんですか？ 僕の……僕の力が何なのか」

「ん？ ああ、そのことか。うん。聞かない。私は森黒君と仲直り出来て森黒君の疑問に答えられたから、それで満足かな。それに今、私の目の前にいるのは欲望者じゃなくて森黒正人君でしょ？」

美香さんは言い終わると、今日一番の笑顔を作りピースサインをしてから歩いていってしまった。

もうすぐやってくる秋を感じさせるように、夜更けの街を流れる風は冷たさを増しているが、僕の周りだけは春の陽気が漂っていた。

心？

高校に入ってから、こんなに放課後が待ち遠しかったことがあっただろうか。嫌な空間が広がる学校から早く抜け出したいというマインナな理由ではなく、行きたい場所があるから早く時間が過ぎないかと言うプラスの意味でそわそわしてしまっていた。授業などいつも以上に頭に入っていない。無視を続けるクラスメイトなんて気にもならない。僕にはシャッターの閉まった精肉店前で素敵な笑顔の美香さんと楽しく会話をする光景しか思い浮かばなかった。

ホームルームが終わると同時に教室を飛び出し、学校を出る。校門前に停まるスクールバスの横を抜けて、少し先にあるバス停を指す。この時間だとバスの本数は少ないが走ればちょうど良いものがある。そのバスに乗るため普段使わない体を必死に動かし、息を切らしながら走る。目的のバス停留所が見えた時には、既にバスが停まっていた。バスを待っていた乗客の最後の一人が乗り込もうとしていた。今にも走り出しそうなバスを引き止めるように両手を大きく動かし、半分まで閉まりかけた扉に体をねじ込んだ。無理矢理乗り込んだ僕を乗せてバスは走り出す。駆け込み乗車をした僕に乗客の目が刺さるが、それも気にならなかった。一番後ろの席に座り、下りる停留所に到着するまで鞆から本を取り出し読み始める。本の内容は少しも理解できなかった。僕の頭は美香さんと過ごす時間の妄想で破裂寸前だ。本を読んでいる振りをしているのも、そうしていないと自然と込み上げる笑顔を隠すことが出来なかったからだ。たぶん、何もせずににやにやししながら座っていると物凄く気持ち悪い高校生に見えるだろう。見ず知らずの人間にどう思われようと構わないが、何となくそこは隠した方がいいんだろうと思った。本で顔を隠しながら、今日の行動をシミュレーションする。今日はスーパーに寄る前に、一度ふるかわ精肉店へ行く予定だ。

ふるかわ精肉店前。今日も威勢の良い声と香ばしい匂いが店先から道路に溢れ出ている。油が乗って引き締まった淡いピンク色の肉がショーケースに並び、その上に狐色の揚げたてコロッケが盛りられている。今日もここは賑やかだ。僕は迷うことなくショーケースへと近づき、コロッケを揚げているおばさんの奥に見える、肉を捌く白い前掛けをした人物に声をかける。

「あ……あの！ すみません！」

「はい、いらっしやい」

反応したのは、コロッケを挟んだままのトングを持ったおばさんだった。自分では大きな声ではつきりと呼びかけたつもりだったが、この店の店主であり、奥のテーブルで一先懸命肉を捌いている哲さんには僕の声は届いていなかったようだ。

「ちよつと、あんた！ お客さんだよ！」

哲さんに視線を送る僕を見て察したのか、おばさんは夢中で肉を捌いている哲さんに声を掛ける。哲さんはなんだよ、と言いながらショーケース越しに僕を見る。目が合った瞬間に哲さんの顔は晴れやかになり、持っていた包丁をテーブルに置いて僕の元へと駆け寄って来た。

「おお！ 昨日の坊主じゃねえか！ どうだったよ！？ え！？
ちゃんと仲直りしたんだろうな！？」

「……はい」

「そうかそうか。そりゃあ何よりだ。やっぱりうちのコロッケは効果抜群だったろう？ 冷めてもうめえんだ。当然だあな」

そう言いながら豪快に笑う哲さんの横で、再びコロッケを揚げ始めたおばさんが呆れた顔をしている。その光景がなんだかおかしくて、僕も少し笑ってしまった。僕が笑ったのを見て、哲さんは満足そうな表情になる。その顔が急に近づいてきて僕の耳元で止まる。

「昨日の事はうちの奴には秘密だからな。男と男の約束だ」

「いや……あの……」

僕が話し出そうとすると、タイミングを計っていたかのように横

から、聞こえてるよという声が割り込んできた。おばさんがコロツケを揚げながら、こちらを見ようともしないで話しかけてきたのだ。「さらに言うと、全部知ってるよ」

「なんだよ！ お前見てたのかよ!？」

「見てなくてもわかるよ。電話が終わって戻ってみたらコロツケは減ってるし、お店の前にいたこの子はいなくなってるし、あんたは妙に機嫌が良いし。何年あんたと一緒だと思ってるんだい。全部お見通しだよ」

「へっ！ だったら一々茶々入れてくるんじゃないやねえよ！ 俺の面目まる潰れじゃねえか！」

「安心しな。元々潰れてんだから、これ以上潰れやしないよ」
「……」

哲さんはそれ以上反論しなかった。どうやら哲さんはおばさんに頭が上がらないらしい。おばさんはおとなしくなった哲さんを尻目に、涼しい顔で新しいコロツケを鍋に放り込んでゆく。あんなに声を張って活き活きとしていた哲さんが、水がもらえなくて萎れてしまった植物のようにな垂れている。なんだかまずい空気だ。どうして良いのかわからないので、とりあえずはここに来た目的を果たしてしまおう。

「あ……あの、昨日のコロツケのお金。払おうと思って……」

財布を取り出しコロツケ二個分のお金を払おうとすると、哲さんが顔を上げる。

「そんなもん、いら……」

「大丈夫だよ」

哲さんの声を遮るようにして、おばさんがまた話し始める。哲さんの体が一瞬、筋が通ったようにピンと伸びたが、またしても頭を深く下げてうな垂れる。さっきよりもうな垂れ方が酷い。

「そんなに気を使うことないんだよ。この人の気まぐれなんていつものことさ。お友達と仲直りできたってことが聞けただけで十分だよ。ほら、財布しまいなさい」

おばさんはにつこりと笑って鍋からコロッケを取り出す。哲さんは何も言わずに萎れていたが、目線だけは僕に向けていて、おばさんと同じようなこと言いたげだった。そんなもん、さっさとしまえと目で訴えていた。

「じ……じゃあ！ あの、今コロッケ下さい」

このまま帰る訳には行かない。踏ん切りの付かなかった僕の背中を押してくれた上に、コロッケまで貰ったんだ。見ず知らずの僕なんかにもそこまでしてくれたのに、報告だけで済ますなんてやっぱり良くない。今、コロッケを買うということ、その恩を返せるわけではないけれど、このまま帰るよりはよっぽど良いと思った。

「はいよ。いくつだい？」

おばさんは包み紙を取り出し、山積みになっているコロッケの一番上の一つを掴むと、手際よく梱包してゆく。すると、うな垂れていた哲さんが急に立ち直り、おばさんのトングを強引に奪ってさらにもう一つコロッケを包み紙に入れる。哲さんはそのまま何も言わずに二つのコロッケをビニール袋に入れ、僕へと差し出してきた。

「ちょっと、あんた！ まだいくつ欲しいか言っていないじゃない！」

「うるせえな。二つでいいんだよ」

「そりゃあんたの勝手な思い込みでしょ！？ そんなことしたらこの子も断れないじゃないの。ごめんねえ。一つでいいなら断っているからね」

「だから、二つでいいんだよ。なあ、坊主？」

本当にこの夫婦は仲が良くてもおもしろい人達だ。日常会話がコントのようでテンポが良い。話に加わっていないのに、聞いているだけでこっちも笑えてきてしまう。他人の会話を聞いてこんな気持ちになるのは久しぶりな気がする。なんとなく安心する。暖かい。

「ほら、おめえが変なこと言うから坊主も笑っちゃってるじゃないか」

「変なのはあんたの方だよ。脳みそまでカラッと揚がってんじゃないのかい？」

「なんだと!? 聞き捨てならねえなそれは!？」

「はいはい。お望みなら何度でも言っておあげるよ」

このままだと止まらなくなりそうだ。聞いている方としてはおもしろい限りだが、これが続けば喧嘩に発展するか、最悪、打ちのめされた哲さんがうな垂れすぎて地面にめり込んでしまつかもしれない。

「あ……あの!」

「はいよ。一つだね。ちょっと待っててね。今、一個避けるから」

「いえ。あの、二つお願いします」

おばさんは少し驚いた表情を見せると、すぐに焦って申し訳なさそうな顔になる。

「無理しなくてもいいんだよ? こんな親父のことなんて無視したっていいんだから」

「いえ。二つ欲しいんです。お願いします」

元々そのつもりだった。今日もこのコロッケを美香さんと二人で食べようと朝からずっと考えていたのだ。昨日のは冷めたものだったが、今日は出掛ける前にレンジで暖めて冷めないうちに持って行くと決めていた。

僕の注文を聞いた哲さんが、ほら見ると得意げにしている。

「そうかい。そう言うことなら仕方がないね」

「だから最初っから言っただらうが。事情も知らねえやつがしゃしゃり出てくんじゃねえよ」

「詳しい話を聞いたわけでもないのに、よく言うよ」

「聞かなくなつてわかんだよ。俺と坊主との深い絆でな」

僕は哲さんと昨日会ったばかりだが、哲さんの中では絆が深まっているらしかった。美香さんも言っていたけれど、不思議な人だ。

「ほらよ、坊主。百六十円な」

僕は財布から丁度の金額を取り出し、哲さんに渡す。哲さんは左手でコロッケの入ったビニール袋を持ったまま、空いている右手で僕からお金を受け取る。哲さんのごつごつした優しい手からビニ-

ル袋を受け取ると、揚げたてのコロッケから漂う心地良い熱と香りが僕を包んだ。

「毎度あり！ また来いよ！」

満面の笑顔を作る哲さん。その横でおばさんも幸せそうに笑っている。僕は背筋を伸ばして踵を揃え、姿勢を正した状態で今出せる最大の音量を口から吐き出した。

「あ……ありがとうございます！」

店先で突然大声を出した高校生に、近くを歩いていた買い物客は目を丸くしてこちらを見ていたが、哲さんとおばさんは嬉しそうに手を振ってくれていた。僕は大胆なことをしてしまったという気分から少し興奮していたが、平静を装いながらビニール袋片手にスーパーへ向けて歩き出した。恥ずかしくなかったと言えば嘘になるが、それでもその時の僕は周りの目など気にならなかった。今日の僕は色んな感覚が麻痺しているみたいだった。

スーパーで夕食の弁当を買って帰宅した。今日はコロッケを食べる予定があるからポリウムは少な目だ。制服を着替えてからすぐに買ってきた弁当をレンジで温め、いつもよりは早めの夕食を済ませる。今日の出発予定時刻は午後十時ぴったり。あつあつのコロッケを食べてもらうために遅めに到着するよう計画した。集まってすぐにコロッケを食べるわけにもいかないし、準備をしてからじゃあコロッケが冷めてしまう。あつあつのコロッケを食べるには美香さんの歌が一区切り付く十時過ぎぐらいで丁度いいだろうと思った。二人でコロッケを食べた後、少し雑談をし、最後は美香さんの歌を聞いて締める。僕にしては気の利いた素晴らしい計画だ、と自画自賛してしまいたいぐらいだ。一つ問題としては出発までの時間をどうやって過ごせばいいのかを考えていなかったことぐらいだろう。

はやる気持ちに身を任せてしまった結果、六時前には弁当を食べ終えてしまい、することがなくなってしまうた。この四時間、どうしようか。全く考えていなかった。とりあえずは使った食器を洗い、

ソファに座って居間のテレビを点けてみたが、この時間はどの局もニュースしかやっていない。何年か前に起きた、他殺か自殺かすらもわかっていない未解決事件を特集しているところや、今日の昼頃に起きた交通事故を報道しているところ、支持者が急激に増えてきている政治家にインタビュウをしているところもある。唯一ニュースではない番組は着ぐるみが歌って踊る子供向けの番組だけだった。これじゃあ時間潰しにはならない。テレビを消して部屋に戻り、パソコンの電源を入れる。やっぱり最終的にはだらだらとインターネツトで時間を潰すしかなかった。時計の針を動かして現実の時間も進むのであれば、どんなに針が重くても全力で回したいほど、長い長い四時間だった。

午後九時五十八分。やっとこの時がやって来た。パソコンの電源を落とし、ジャンパーを羽織って出掛ける準備をする。レンジでは温めが終わったことを知らせる軽快なベルの音が一回、静まり返った家の中に鳴り響く。準備万端。僕はレンジから包み紙に入ったままのコロツケを取り出し、ビニール袋に入れる。哲さんのところで買った時よりも熱くなったコロツケをぶら下げて玄関に行き靴を履く。自然と込み上げる笑顔と喜びを押さえながら、胸を弾ませるように立ち上がり、ドアノブに手を掛け一気に扉を開ける。

さあ、行こう！ 美香さんが待つあの場所に！

扉を開けた瞬間、自分の家から出ただけなのにどこか間違った場所に出してしまったような錯覚に陥った。

そこには思いもよらぬ人物が立っていた。

僕はドアノブを掴んだまま、開いた扉の前に広がる異様な光景に驚き、体が反応しなくなっていた。その光景は異常と言ってもいい。僕の内側から、ここ最近感じることのなかった、忘れていたはずの重苦しくて淀んだ、ドス黒い感情が喜びを覆い侵食して行く。

「何だ。どこかに出掛けるのか？」

そいつはそう言つて、不快な視線を送ってくる。いや、そいつじゃない。そいつらだ。

「一体、今何時だと思つてるんだ！ どこに行くつもりなんだ！？」
「ちよつと声が大きいわよ。まずは中に入りましょ？ ほら、正人も一旦入りなさい」

スーツ姿の二人組み。他人から言わせると、僕の親に当たる人物らしい人間がそこに立っていた。いつもは日付が変わらないと帰つては来ないのに、この時間にこいつらは帰ってきた。偉そうに僕のことを下の名前で呼び、僕の行動に対して理由を求めてくる。

「この前から話をしようと思つていたんだ。丁度いい、早く帰ってきたことだし家族会議だ。こっちに來なさい」

男の方が僕の腕を掴み強引に中へ連れ込もうとする。僕は外靴のまま廊下に乗リ上げ、強引に引つ張られた所為で足がもつれて転んでしまう。

「何をしてるんだ！」

「ちよつと、靴ぐらい脱がせる時間あげなさいよ。怪我したらどうするの。正人も早く靴を脱ぎなさい」

女の方がヒステリックな声を上げて僕の横に付いてしゃがみ込む。手を差し伸べてくるわけでもないが、怪我を心配しているわけでもない。一般的な形式としてそうしているようだった。倒れた人には自分も同じぐらいの高さまで下がって話しかける。善人が取る行動のセオリーに沿っているんだろう。

僕は既に、さっきまでの自分を失っていた。無気力に近い状態で、言われたとおりに靴を脱ぎそいつらの後を追うようにして居間へ入り、食卓に向かい合うようにして座る。男はスーツの上着を脱いで椅子の背もたれに掛けると、ネクタイを緩める。その動作の間中、鼻を突く嫌な臭いがこちらにまで迫ってきて気分が悪くなった。女は女で、椅子に座るとこちらに主張するように苛立ちのこもった大きなため息を、力いっぱい大げさに吐いて見せた。何がしたいんだこいつらは。

「正人。まずは、これからどこに行こうとしていたのか聞かせてもらおうか」

男が話しかけてくる。演技じみた、うざったい言い回しが僕の頭をきつく縛り上げる。

「どうした？ 父さんや母さんに言えないような所に行こうとしてたのか？」

「……買い物」

「そのビニール袋を持ってか？ お前はそれを持って買い物に行こうとしてたのか？」

「……」

「嘘をついたってすぐわかるんだぞ。正直に言いなさい」

僕は沈黙した。本当のことを言ったところでこいつらには何一つ理解できないだろう。わかってももらえるなんて始めから思っちゃんない。どうせ色んな理由をこじつけて僕が悪いという方向に話を持っていってしまうんだ。そう言う奴らだ。

「正人。黙っていたってしょうがないのよ？ ちゃんとお父さんに話なさい」

今度は女の方が話しかけてくる。疲れているのか、目線はテーブルに向いたままで僕を見ようともしない。僕に話しかけているのか、テーブルに話しかけているのか、どちらにしても無意味な行動だ。

「お前、あの事故があっから少しおかしいぞ？ 一体何があったんだ？」

「……別に、何も」

「そんなわけないだろ。あの時のことだって、ちゃんと話してくれなかっただろ。お前が話してくれないと、父さんも母さんもわからないし、助けてやることだってできないんだぞ？」

「……」

「黙ったって何の解決にもならないぞ！ 何とか言ったらどうなんだ！」

男は興奮して大きな声を上げる。目は見開いて息遣いも荒く、ま

るで野蛮な獣のようだ。

何とか言ったらどうなんだ？　そうか。わかったよ。それなら言
つてやるよ。

「……関係ないよ」

僕が言い終わるとほぼ同時に男は立ち上がった。椅子が大きな音
を立てながら床に転がり、その音とは別の破裂するような音がすぐ
近くで聞こえた。僕の目の前に座っていた男の姿も一瞬にして見え
なくなり、僕の視界には誰も座っていないソファとカーテンで蓋を
された窓が写っていた。少ししてから僕の左頬にじわじわと痛みが
広がってくるのがわかった。男は右の手のひらで僕の頬を思い切り
打ったのだ。

「ちよつと！　あなた！」

女が大慌てで男の右腕を掴んでいる。今更その腕を掴んでどうす
るつもりなのか僕にはわからなかった。ことは既に済んでしまつて
いる。僕の左頬は赤く腫れ上がり、時間が経過すると共に痛みが増
してゆく。男は放った右手を納めて、わなわなと小刻みに震えなが
ら僕に向かって怒鳴り始める。

「何だその言い草は！！　父さんや母さんがどれだけ心配している
のか、わかっているのか！？」

頭の中で何かが千切れる音がした。体の底からゆっくりと湧き出
していた熱いものが、急激に水かさを増し、頭のとっぺんまで昇り
詰める。僕は自分自身の制御を失い、感情をぶちまけた。

「誰が助けてつて頼んだんだよ！？　誰が心配しろつて言ったんだ
よ！？　いつつも家にいなくせに！！　いつつも話なんて聞きも
しなくせに！！　こつ言つ時だけ偉そうにして！！　何様だよ！
！」

僕は抑えられなくなった自分に逆らうことなく大声を上げ、その
まま居間を飛び出した。

「正人！！」

女が僕に掴みかかったが、全力でもがいて女を振り払った。僕の

体から放出された女は体制を崩し自分の座っていた椅子と一緒に床へと放り出された。僕は倒れた女のことを確認しないまま、玄関へと向かって外へと駆け出した。

走って。

走って。

走った。

どこにいるかなんてわからなかった。どこにむかっているかなんてわからなかった。ただこの気持ちをなんとかしたくて、この苦しみから解放されたくて、訳もわからないままとにかく走った。

やがて体力が尽きて走れなくなり、僕はその場に立ち止まり前かがみになって足を止めた。心臓が激しく鼓動を鳴らし、全身で呼吸をしているような感覚だ。しばらくはその状態のまま動くことができなかった。呼吸が落ち着いて顔を上げてみると、そこは歩道橋の上だった。スーパ一の帰りに使い、美香さんと会うために使う、長くて大きな架け橋。最近ではすっかり馴染みの場所となった、あの歩道橋だった。人通りはなく中腹辺りで息を切らしている僕を除いては人つ子一人見当たらない。近くにある駅は終点だし、その先は電車の車庫が並んでいるだけだ。道を寸断するこの車庫があるために作られたこの歩道橋を利用する人は昼間でも少ない。もともと広い土地で周辺に住宅が少ない場所だったこの地域は車庫を作るには好条件だったんだろう。不便のないようにと歩道橋を作ったところで、この付近を歩く人間の絶対数が少ないのだから、ここに僕しかいないという状況は珍しくもない光景のはずだ。下を覗くと薄暗い夜の空気に色をつけたような茶色い線路が規則正しく地面に植えつけられている。線路を見ているとそこに吸い込まれてゆくような感覚を覚え、同時にある考えが頭を過ぎる。

ここから飛び降りれば、それで死ぬことはなくても倒れている僕を電車が轢いてくれて死ねるんじゃないのか。

歩道橋の手すりによじ登る。無駄に広く設計された手すりの上は安定感があり、バランスを崩すことなく目の前に広がる開放された景色を望むことが出来た。とても静かだ。僕の体が空気に溶け込んで一つになったような気がする。穏やかでゆったり気持ちのいい感覚。後は本当に溶け込むようにこの空気の中に飛び込んで行けば良いただけだ。なにも難しいことはない。簡単なことだ。

目を閉じる。

行こう。

重心を前方へとずらし、足元に広がる闇に飛び込もうと思った時、僕の意識を逸らす聞きなれた心地良い音が耳に入り込んできた。今感じている心地良さとは別の、懐かしくて楽しくて胸の奥で何か弾むような音。どこから聞こえてくるのか、目を閉じたまま耳を頼りに音の出所を探る。近い。僕の左後方から、すぐ近くから聞こえてくる。集中が途切れてしまい、その音が気になって仕方が無くなって目を開ける。音のする方へと顔だけを動かし何が起きているのかを確認する。

そこにはギターを弾く美香さんの姿があった。僕を真直ぐに見据えながら、ゆっくりと語りかけるようにギターを鳴らす美香さんが立っていたのだった。美香さんの向こう側には投げ捨てられたかのように、ギターケースが無造作に転がっている。美香さんはいつものダウンジャケットにジーンズのスタイルだったが、ニット帽を被っておらず、肩まで伸びた茶髪が乱れていた。美香さんは僕と眼が合うと、ギターを弾くのをやめて落ち着いた口調で話しかけてきた。「森黒君、何やってるの？ そんなところに立ったら危ないよ。早く降りなきゃ」

「……………」

「もし降りれないんなら、後ろに倒れたらいいよ。私が支えてあげるから怪我の心配もしなくていいから」

「……………いいんです」

「良くないよ。もしバランスを崩して前に倒れちゃったら落ちちゃうんだよ？　こんな高い所から落ちたら怪我だけじゃ済まないんだよ？」

「わかってます。だからここにいます」

「どうしたの？　何があつたの？　教えてよ。事情がわかれば、私でも力になれるかもしれない。まずは話してみてよ。そんなことしたって何も……」

「いいんですよ……！」

美香さんの言葉を遮る。

聞きたくない。そんな、言葉だけの心配なんて聞きたくない。

「……もういいんです。僕の話は気にしないで帰って下さい。いいんです、もう……」

「そんな……」

僕にはわかっていた。たぶん美香さんもわかっていただろう。たとえ何があつたかを僕が話して、美香さんがその話を聞いたとしても、何も解決しないということ。僕にもどうすることも出来ないし、当然美香さんにもどうすることも出来ない。それは僕の家庭の事情で、僕自身がもう諦めてしまっていることだから、知り合いでしかない美香さんには立ち入ることなどできない話なんだ。だからこそ、そんな安っぽい言葉なんて聞きたくなかった。そんなありきたりな台詞なんて言つて欲しくなかった。僕には美香さんを拒絶することしか出来なかった。

美香さんは黙り込んでその場に立ち尽くしていた。僕に拒絶されたのがショックだったのか、美香さんがその場を離れる様子はなかった。僕は視線を前へと戻し、先程と同じように目を閉じる。今度こそ僕はこの夜に溶け込むんだ。

「わかった。森黒君の気持ちはわかったよ」

美香さんが不意に話し出す。その言葉に僕は少し苛立ちを覚えた。わかった？　何をわかったって言うんだ。僕の気持ちは僕にしかわからない。美香さんのような力でもない限り、僕の気持ちは理解す

ることなんて誰にも出来ないんだ。美香さんも、あの二人も、僕の気持ちを理解できる訳がない。僕は聞こえない振りをした。もう美香さんの言葉に耳を傾ける気になれなかった。

「それなら、一つだけお願いがあるの。私の新曲、聞いてもらえないかな？」

「……」

「本当なら、いつもの場所で聞いてもらおうと思ってただけけど、今日は歌わなかった。この曲はどうしても森黒君に聞いてもらいたかったから。もし私のお願いを聞いてくれるなら、もう森黒君に関わったりしない。約束する。だから、それは私の曲を聞いてからにしてくれないかな？」

僕は返事をしなかった。返事をする気などなかった。でも、意識していないのに僕の体は動かなくなっていた。僕は心のどこかで美香さんの新曲を聞きたいと思っっているのだろうか？ こんな状況でこんな気持ちなのに、美香さんの歌を求めているというのだろうか？

美香さんは一切の反応を示さない僕を確認すると、再びゆっくりとギターを弾き歌い始める。その歌は本当に新曲だった。美香さんと出会ってから一度も聞いた事のないメロディー、一度も聞いたことのない歌詞が聴こえてきた。もちろん、他の誰かが歌っているのも聴いたことがない。真正銘、美香さんが作り出した美香さんだけの歌だった。

テンポはスロー。曲の主題をコードで大胆にかき鳴らす冒頭から綺麗な水が湧き出るように自然と始まるAメロ。心に迫ってくるように盛り上げるBメロ。感情が一気に爆発するサビ。心の叫びをそのまま書き記した、荒削りで飾り気のない歌詞。寂しさの中に力強さがある印象的なメロディー。それを精一杯歌う美香さん。

これは本当にアコースティックギターだけで演奏されている歌なんだろうか？ 僕はいつのまにか美香さんの歌を夢中で聴き入っていた。自分が、今歩道橋の手すりの上に立っていて、このまま飛び降りてしまおうと思っただけのこと忘れ、聞惚れてしまっていた。

感情が溢れ出てくる。苦しみや悲しみ、辛い思い出が次々に浮かび上がっては消えてゆく。

いわれのない疑いを掛けられた。暴力を受けた。誰も助けてはくれなかった。絶望した。諦めた。死のうとした。死ねなかった。無視すらされなくなった。探偵ごっこに付き合わされた。首を絞められた。追いかけられた。プライベートを覗かれた。付き纏われた。美香さんと出会った。歌に出会った。涙が出た。音楽を教えてもらった。お喋りをした。褒めてもらった。毎日が楽しくなった。コロツケを食べた。仲直りをした。元気を貰った。笑顔を貰った。たくさん、たくさん貰った。

頭の中で自動再生される思い出は、いつのまにか辛い思い出から美香さんの楽しかった思い出に移り変わっていた。たわいのない会話で盛り上がったこと、二人で曲を覚えたこと、予定のないライブの計画を話し合ったこと、辛い思い出の何倍にも勝る美香さんの思い出が終わることなく再生され続ける。楽しかった。本当に楽しい時間を過ごしていた。こんな僕でも楽しい時間を過ごすことができていたんだ。涙が止まらない。初めて美香さんの歌を聴いたときの、それ以上の涙が溢れ出てきた。僕はそのままじつと美香さんの歌を聴いていた。

歌が終わる。美香さんは何も言わずに僕を見つめる。視線で僕に訴えかけている。諦めちゃ駄目。絶対に何とかなる。何とか出来る。だからそんなことはやめて。

僕の心には微かな希望が芽生えていた。美香さんの歌が、美香さんの声が、僕に勇気と冷静さを与えてくれた。そうだ。僕はまた逃げようとしている。辛いことばかりに気を取られ、楽しいことだつてあるはずの現実を投げ出そうとしている。前を向いて歩いていけば、必ず良いことがある。美香さんの歌からそう学んだはずだ。情けない。二度も同じことを繰り返し、二度も美香さんに勇気付けられるなんて。もう、止めにしよう。美香さんに話を聞いてもらおう。

「森黒君……」

美香さんはまだ僕を見つめている。僕は手すりから降りようと、美香さんのいる左方向に九十度体を回転させ、慎重に体勢を変える。「美香さ……!!」

「危ない!!」

手すりが広いと言う認識からの油断。美香さんしか見えていなかったと言う注意力のなさ。僕は体を回転させる際に右足を踏み外した。体勢が崩れバランスを失い、僕の体は右足から何も無い空間に沈んでゆく。美香さんと歩道橋が視界から消え、星達が輝く夜空が目の前に広がる。

落ちる!

僕は必死に手を伸ばし、歩道橋の手すりに? まろうともがく。なんとか両手で抱えるようにして手すりにすがりついたが、足が宙に浮いたままで踏ん張りがきかず上がることが出来ない。普段運動など全くしない僕にとって、腕の力で自分の体を引き上げることがは無理に等しい。上半身と腕がじわじわと手すりの上を滑り始める。

突然体が引つ張られる。見ると、美香さんが両手で僕の上着を掴み、必死に引き上げようとしていた。

「何やってるの!? 早く上がった!!」

美香さんの助けを借りてようやく手すりを登り、転がり落ちるように歩道橋の足場に体を預ける。美香さんも僕も必死だった所為か息を切らしてその場にへたり込む。しばらくして呼吸が整った美香さんがこちらを見つめながら、少し強めの口調で話し始める。

「だから、危ないって言ったじゃない。あのまま落ちてたら今頃どうなってたか!」

「……ごめんなさい」

美香さんはまったく、と短いため息をついて不機嫌そうに黙る。僕は申し訳なさでいっぱいになり、まともに美香さんを見ることが出来なかった。

美香さんは立ち上がると、転がっているギターとギターケースを拾い上げる。ギターは僕を引っ張り上げるために駆け寄った時、肩

から外して投げ捨てたようだった。全ての弦が切れ、ボディにも傷が入っていてネックも少し曲がっているように見える。ぼろぼろになったギターをケースに押し込んで、いつものように背負う。

「ほら、もう落ち込むのは止め！ とにかく場所を変えよう」

地面に崩れ落ちている僕の前まで来て、手を差し出しながら続ける。

「聞かせてくれるよね？ 今日、何があったのか」

「……はい」

僕は美香さんの手を握り、支えられながら立ち上がる。涙は治まっていたが、全身が脱力感で支配されていて歩くことすら億劫になっていた。美香さんはそんな僕の手をしっかりと握り、僕の進むべき方向を導くように歩き始める。二人で誰もいない歩道橋をスーパ―や精肉店のある商店通りに向けて進む。

歩道橋の階段を降りている途中で、最下段あたりに人だかりが出来ていることに気が付いた。皆、何やら辺りを見回して忙しなくしている。ほとんど人通りがないはずの歩道橋付近にしては珍しい光景だ。

「何だろう。何かあったのかな？」

美香さんも普段とは違う状況に疑問を抱いているようだった。二人で気にしながらも、階段を一段一段下がり、その集団に近づいて行く。階段を降りきった所で、集団の中から友人同士と思われる二人組みの女の子がこちらに気付いて話しかけてきた。私服ではあるが僕と同じ高校生ぐらいだろう。

「すみません。あの、もしかしてさっきのってお姉さんですか？」

「えっ？ さっきの？」

二人組みは近づいてくるなり美香さんだけを見つめて訳のわからないことを言い始めた。僕などには目もくれず、期待に胸を膨らませた雰囲気ですら少し興奮した話し方だった。美香さんも二人の言っている意味がわからず困惑している。

「違うんですか？ ギター持ってるから、そうだと思ったんだけど」

「何？ どう言うこと？」

「さつきここら辺から歌が聴こえたんですよ。私達、駅から歩いて帰る途中だったんですけど、その歌が聴こえてきたから走って聴こえてくる場所探したんです。そうしたら他にも色んな人がこの近くをうろろして探してて。それで私達もこの近くを探してたんですねえ？」

「そうそう。すごいいい歌だったんですよ？ やっぱり歌ってたのお姉さんなんでしょ？ ギター持ってるし、他にそんな感じのいないもん」

美香さんと女の子二人組みが話している間に、その姿を見つけた他の人達もそろそろと周りに集まってきていた。皆、ギターを持った美香さんに注目している。いつのまにか僕らは歩道橋の階段下で、何十人もの人達に取り囲まれていた。

「さつきのつてあの人？」

「ギター持ってるし間違いないでしょ」

「お前ちよつと聞いて来いよ」

「やだよ、恥ずかしいじゃん」

「あの子が歌ってたって本当？」

「なになに？ どうしたの？」

「あら、何の集まりですかこれ？」

「あら奥さん。いや、さつきね歩道橋の上からすつこくいい歌が聴こえてきたのよ」

「え？ プロの歌手なの？」

「すげー芸能人だつて」

「ゲリラライブつてやつ？」

「やばい、ちよー好み。かわいいじゃん」

僕達を取り囲む集団の数はどんどん増えてゆく。それぞれが勝手な話をして、中途半端な情報が無秩序に拡散して行き人々の視線が美香さん目掛けて突き刺さって行く。次第に噂話が期待の声に変わり、この場にいる全員が美香さんに歌うように求めるような空気に

なつてしまっていた。

「み……美香さん？」

「……森黒君。手、離さないでね」

美香さんは僕にだけ聴こえるように、小さく話しかけてきた。僕も周りの人に悟られないように、頷く代わりに美香さんの手を握り締める。

「さっきの歌もう一回聴かせて！」

どこからか声上がる。それを気に、一斉に歓声と拍手が沸き起こる。さながら、ライブハウスのような盛り上がりだ。しばらく拍手が続き、少ししてから皆歌を聴くために拍手を止めてじつと美香さんを見つめ始める。美香さんは僕の手をぎゅっと握り締めた。

「ごめんなさい！」

同時に美香さんは僕の手を引つ張りながら集まった人達の壁を掻き分けて走り始める。僕は美香さんに引かれながら後をついて一緒に走った。人ごみを抜けて方向的には精肉店方面に向けて走っていた。振り返ってみると期待を裏切られ呆然と立ち尽くす人達の群れが見える。何人かは僕達を追いかけてきたが、入り組んだ住宅街の道を何度も曲がることで撒くことができた。この時点で歩道橋からはだいぶ離れていたが美香さんは止まらなかった。振り返ることなく、ただ前だけを見て無言で走り続けていた。

心？

その後、僕と美香さんは夜中の住宅街を歩き続けた。手を繋ぎながらお互いに無言で灯りも疎らな薄暗い道を彷徨っていた。しばらくして美香さんが「お腹空いたね」と言い出し、僕達は来た道に戻って、駅前にある二十四時間営業のファミリーストランに入った。そこで僕はエビフライとコロツケのセットを頼み美香さんはドリアを頼んだ。全国展開しているファミリーストランの安っぽい味が口に広がり、ふるかわ精肉店で作られているコロツケのおいしさを改めて認識した。美香さんは色々としりぞき障りのない会話をしながらドリアを食べ終わると、今日僕に何があったのかを聞いてきた。僕は全てを話した。あの時の場面を思い浮かべながら、あの二人が僕に何を話したのかを出来るだけ詳しく美香さんに話した。美香さんは僕が話し終えるまで何も言わずに黙って聞いていたが、僕の話が終わると水を一口飲んだ。

「そっか。そんなことがあったんだね」

穏やかに話す美香さんを見て、僕はいつものように慰めてくれるのかと思っていたが、美香さんは持っていた水の入ったコップをテーブルに置くと厳しい表情になる。

「でも、あんなことしちゃ駄目だよ。あんなことしたって何の解決にもならない」

そこからはほとんど説教だった。僕が言葉を挟む余地など一切ないほど、美香さんは息継ぎさえ忘れるように次から次へと僕の行動に対して駄目だしを入れてきた。美香さんでなければ、また怒って店を飛び出していたことだろう。ただ、本気で僕のことを心配してくれている美香さんだからこそ、説得力もあり優しさもある説教だった。そのことが嬉しい反面、やっぱり誰かから非難されるのは辛くて苦しい。朝の六時までそれが続いたのなら尚更だ。最後は僕の説教ではなく、美香さんの人生経験を振り返る道德の時間になっ

ていた。日が昇り、店内に眩しい光が差し込んだことで、ようやく美香さんの話は終わった。

「ごめんね。結局こんな時間になっちゃった。帰ろっか」

二人でファミリーレストランを出る。爽やかな秋晴れの朝は冷え切っていて、吐く息が白くなっている。美香さんは一度伸びをした後、僕の方を向いて両手を握り締める。

「森黒君。約束して。もう絶対あんなことはしないって」

徹夜明けだというのに、美香さんの目は輝きながらしっかりと僕を見つめてくる。僕は黙って頷いた。

「よし！ じゃあ指きりね！」

お互いに小指を出し、第一関節で曲げて指と指とを組み合わせる。美香さんは大きな声で指きりの掛け声を言い、言い終わると同時に勢い良く組んでいた指を解いた。

「これでOKだね。この誓いは絶対だよ？ 破るなんてことは認められないからね？」

「……はい」

「よし！ 後、今日の路上は止めにしよう。疲れたでしょ？ 私もへとへと。今日は家でゆっくり休もう」

「わかりました」

「じゃあ、またね！ ちゃんと学校行くんだよ！」

美香さんは駅の改札口へと歩いて行った。僕も帰ろう。本当ならあの二人がいる可能性のある家になど帰りたくもなかったが、他に行く場所がない。この時間ならあの二人も家を出ているはずだ。もし、まだ家にいたら、その時に考えよう。今はただ眠い。早く帰って眠りたい。

目の前には夜にも見たスーツ姿の社会人が日の光を浴びて、眠そうなに顔をしかめながら歩いている。その流れに逆らって僕は自分の家を目指す。いつものスーパーを通り過ぎ、昨日の歩道橋を渡り、マンションへと辿り着いた。

エレベーターに乗って五階に上がる。廊下を進み玄関前で立ち止

まる。まだあの二人はいるだろうか。激しく打つ鼓動を感じながら、鍵を差込み開錠する。ゆっくり扉を開け、玄関に並んでいる靴を確認する。

靴は一つもなかった。

よかった。あの二人はもう家を出ていた。安心して家に入り、静まり返った居間に進むとキッチン横にあるテーブルに置手紙があるのを見つけた。その手紙にはたらたらと遠まわしによくわからない文面が書き記されていたが、要は今日からあの二人は長期の出張がありしばらく帰らないからテーブルに置いてあるお金で何とかしろ、という内容だった。

置手紙をびりびりに破いてゴミ箱に捨て、部屋のベッドに倒れこんだ。今日は平日だけど学校に行くと言う考えは頭に浮かんでこなかった。僕は初めて学校を無断欠席した。

翌日。初めての無断欠席に流石の担任教師も僕を呼び出して事情を聞いてきた。親が長期出張で家におらず、僕は調子が悪くて学校に連絡を入れることが出来なかった、ということにしておいた。明らかに嘘だが、担任も特に突っ込むこともせず注意だけで終わった。教師としてこのやる気のなさはどうなんだろうと思っただが、その分あの二人に連絡を取るつもりがないということだから、それはそれでよしとしよう。生徒の間でも特に噂になっていない様子ではなかった。やはり僕のことに関して徹底的に関わらないようにしているんだろう。昔の僕ならショックを受けていたかもしれないが、今は違う。どんなに無視されようと、どんなに避けられようと、何とも思わなくなった。勝手にすればいい。僕は僕、他は他だ。僕には放課後に待っている自分の場所がある。楽しくて嬉しくて幸せな時間が待っているんだ。その時間のためならば、こんなことに耐えるなど屁でもない。一日間を置いているから、今日は楽しみで仕方がない。早く時間が過ぎないかとそわそわするばかりだった。

放課後のチャイムが鳴る。僕は急いで鞆に教科書やノートを詰め

込み、誰よりも先に教室を出る。走って玄関を出て校門を通り過ぎる。今日はホームルームが少し長かった。バスに間に合うかぎりぎりだ。急がなければ乗り遅れてしまう。

「ちよ……ちよつと！ 森黒君！」

「はい！」

バス停に向かうのに必死で、突然の呼びかけにハイテンションのまま返事をしてしまった。恥ずかしい。とりあえず、返事をしたからには呼びかけてきた人物を無視することは出来ない。ただ時間もない。誰なのかを確認して、特に用事がないのであれば急いでいることを伝えて早く切り上げてしまおう。振り返り、声を掛けてきた人物を確認する。

「何だか最近の森黒君は元気だねえ。何かあったのかい？」

僕は体を前方へと戻し、力いっぱい駆け出した。

「え！？ ちよつと！！！」

その人物は驚きながら僕の後を追ってくる。別に撒くつもりはないが、構っている時間もない。とにかく早くしなければバスが行ってしまふ。後ろでは追いかけてながら何か叫ぶ声が聞こえてくるが、全て無視した。

間に合わなかった。

ちよつと停留所が見えたところでバスは発車してしまい、乗ることができなかった。あんなに走ったのに走り損だ。仕方なく次にやってくるバスをベンチに座って待つことにした。息が上がって体中が熱い。しばらく休んで体力を回復しないと、夜までに疲れて寝てしまいそうだ。

「はあ。全く、どうしたんだい」

僕を追っていた人物がようやく追いついて、息を切らしながら横に腰を下ろした。バスに間に合わなかった原因はホームルームが長引いた所為もあるが、こいつが話しかけてきた所為もある。こいつが姿を現すと、ろくなことにならない。今日は何を言い始めるのか。

僕は背もたれに体を預けているブローカーと目線を合わせないように反対側の道路の先を見てバスが来ないか確認することにした。

「森黒君。さつき、絶対僕のこと見て走っただろ？ 僕のことを確認した上で走ってたろ？」

ブローカーは不機嫌そうに話す。その通りだと言ってるやうだったが、言わなくてもブローカーなら理解しているだろう。

「まあいいよ。君がぼくのことをどう思おうが、君の勝手だ。僕は自分の役目さえ果たせばそれでいいからね。はい、これ」

ブローカーは僕に一枚の茶封筒を差し出してきた。僕はよくわからずに、その茶封筒を見つめた。

「なに、変なものじゃないよ。ある人から君に渡してくれて頼まれてさ。僕を配達員に使うなんて。度胸があると言うか、世間知らずと言うか。まあ、引き受けた僕も僕なんだけどね」

差し出された茶封筒には宛名も差出人も何も記されておらず、誰が僕に向けて書いた物なのかそれだけでは判断できない状態だった。僕はとりあえずその封筒を受け取る。

「はあ。じゃ、確かに渡したからね。僕はもう行くよ。君を追いかけた所為で疲れたし、やらなきゃいけないことが貯まってるんでね。それじゃ」

そう言うと、ブローカーは立ち上がって歩いて行ってしまった。本当にあいつは何がしたいのか良くわからない。しつこく話しかけてくる時もあるが、今回みたいにあっさり帰ってしまう時もある。何もないのならそれでいいが、一々何か引つかかるのが嫌でしよ。うがない。それに、その引っ掛かりが何なのかを考えても何一つわからないと言うのも気分が悪い。ブローカーに関しては深く詮索しないのが一番だ。僕はブローカーの後姿を目で追うことを止めて、手元に残った茶封筒を開封する。中には丁寧に織り込まれたA4の紙が二枚入っていた。広げてみると、二枚ともびっしり文字が書き込まれている。僕宛の手紙だった。少し丸文字に近い特徴的な文字が連なっている。

森黒 正人様

突然の手紙で驚いていると思います。ごめんなさい。出来れば直接会って話したかったんだけど、携帯の番号とかメールアドレス聞いたことなかったもんね。ちょっと古臭いけど時間がなかったので手紙にしました。

私と森黒君が初めて会った時、私が森黒君は強いねって言ったこと覚えてる？ この前のことで私は、やっぱり森黒君は強いなって改めて思ったんだ。確かに一度は自殺を考えていたのかもしれない。歩道橋の手すりに登って、今にも飛び降りてしまいそうな、思いつめた顔の森黒君を見た時、もう私の声は届かないのかもってすごく不安になった。でも、私の歌を聴いてくれた。私の言葉に耳を傾けてくれた。考え直してくれた。あんなに嫌なことがあって苦しんで悩んだ末に自殺を考えたのに、また生きようって思ってくれた。それってやっぱりすごく勇気のいることだと思う。森黒君は強い。そう思った。でも、私は駄目。あの後、下の道路で色んな人に囲まれて拍手を浴びた時、急に怖くなっちゃった。ライブが終わった後、疲れ切った顔で私を褒めてくれるたくさんのファンのことを思い出したんだ。私の力で体力を消耗して、精神をすり減らして、それでもすごい良かったって褒めてくれるファンとあの時の人達が重なって見えて、まるで私のことを攻めているように見えたんだ。たぶん、皆そんなことはこれっぽっちも考えていなかったと思う。それはわかってる。でも、頭でわかっていても体が拒否しちゃったんだ。また自分の力の所為で皆に迷惑をかけてしまうんじゃないか。また暴れだしてしまう人が出てきてしまうんじゃないか。だから逃げ出した。力があつた時のことがトラウマになっていて、歌うことに未練があつても、大勢の人を目の前にして歌うことが出来なくなっているみたい。だから、私はもう歌うのを辞めます。地元に戻って、彼と一緒に彼の家業を継ごうかと思ってるの。彼は私がおこに来てから私の歌手活動をずっと見守ってくれていて、支えてくれていたか

ら、今度は私が彼の支えになってあげようと思うの。急な話で本当にごめんなさい。でも、森黒君なら大丈夫。私よりずっと年下なのに、ずっと大人でずっと強い森黒君ならどんなことが起きても乗り切ってくれると信じています。森黒君がこの手紙を読んでいる頃には、もう私は新幹線に乗っていると思います。さよならは言いません。いつの日かどこかで、お互いにもっと成長した姿で会えたら、また一緒にあの歌を歌おう。

成澤 美香より

一枚目の紙にはこう書かれていた。二枚目に目を移すと、そこには一昨日の夜、歩道橋の上で美香さんが歌っていた曲の歌詞が書かれていた。曲のタイトルは「心友」と記されていた。

僕は一枚目の手紙を読み直した。何度も何度も、何度も読み直した。目の前をバスが通り過ぎてゆく。バスに乗る人、バスから降りてくる人、停留所を通過する人、皆僕のことを不思議そうな目で眺めてゆく。一体どれだけの人が通り過ぎ、何台のバスが通り過ぎたか覚えていない。右側から眩しいオレンジが刺して来る。なんだ、もう夕方か。夕食の弁当を買いに行かなきゃ。早く食べて部屋に籠らないと、帰ってきたあの二人と顔を合わせることになる。あれ？ そうか。そう言えば、しばらく帰ってこないんだっけ。なんだか頭がよく働かない。

帰ろう。

久しぶりに、歩いて帰ろうかな。

過ち？

日に日に寒さが厳しくなる秋。木々の緑は黄色や茶色に移り変わり、吐く息も一瞬白くなつては空中を漂い溶けるように消えてゆく。朝方の冷え切つた空気は刺すようにむき出しになつた肌を刺激する。昨日から突然やつて来た寒波が、間近に迫る冬の気配を感じさせていた。この影響で、当然のことながら行き交う人々の装いも変わってきた。皆、防寒用の厚手な服装で全身を包み、身を縮めながら歩いている。通学路には、いつも以上のしかめっ面で先を急ぐ人達ばかりだ。僕の高校に通う生徒も同じように着込んで登校しているが、何を考えているのか、一部の生徒は制服の下にカーディガン一枚だけだったり、女子は女子で素足のままスカートをギリギリまで短くして寒さに震えながら玄関に駆け込んでいる。震えるぐらい寒いのならそんな格好しなればいいのと思うが、ファッションに重きを置いている人間は体よりも見た目が大事なんだろう。特に高校生と言う年代はそういった意識が強いのかもしれない。オシャレよりも実用性を重視して、しっかりと保温できるダウンジャケットにマフラーを装備した僕には、どんなに歳を重ねても理解できないんだろう。理解しようとも思わないし、理解する必要もない。ああいった女子と関わりあうことは絶対にならないのだから。女子に限らず、僕と関わるうとする人間がいけないこの学校において、そう考えること自体が無意味だ。今日もどうでもいい時間が始まる。くだらないクラスメイトと同じ空間を共有し、やる気のない教師達の授業を聞き流す苦痛な時間。もう、あらゆることに関して深く考えないことが僕の逃げ道になっていた。

楽しそうに挨拶を交わしながら通り過ぎる他の生徒達に混じつて、僕も校門を通り抜ける。憂鬱な体を引き摺りながら歩いていると、突然頭に重い物があたつたような激しい衝撃があり、遅れて硬く角の立つた何かが後頭部に刺さる。

「いつ……!!」

思わず声が出た。鈍い痛みが上から下へとじつくり広がって行き、接触した部分に脈打つような痛みが続く。久しぶりに直接的ないじめでも始まったのかとため息をつき、頭を摩りながら相手を刺激しないようにゆっくりと振り向く。

「随分辛気臭い顔してるわね。変わってなくて安心したわ」

僕に振りかざしたであろう鞆を両手で持ち直しながら、生温い目でこちらを見ている黒髪の女子が立っていた。ライトブラウンの高級そうなコートで身を包み、いかにもお嬢様と言った感じだ。僕はその親しげに話しかけてくる女子を見て、自分がどう言う状況に立たされているのか理解出来ずにいた。誰だ？ 僕にこんな風に話しかけてくるような生徒など、この学校にいただろうか？ しばらく考えたが、全くわからなかった。反応の無い僕を見て察したのか、その女子は呆れ顔で悪態をつきはじめた。

「もしかして、私のこと忘れたんじゃないでしょうね？ 全く、有り得ないにもほどがあるわ。その様子じゃ、私がメールを送ったことにも気付いてないんでしょ？ どうりで返信がないと思った。そのデリカシーの無さは変わって欲しかったわ。そんなんじゃこの社会で生きていけないわよ」

呆れ返った口調で僕のことをけなし続ける目の前の女子生徒。僕はこの子とアドレスを交換した仲らしい。でも、まだわからない。誰だよ、本当に。

「まだわからないの？ 頭でも強く打つたりした？ しつかりしてよ、クロ」

彼女が言ったクロの一言で不意に記憶が蘇った。鼓動が早くなる。彼女が誰なのかと言う記憶と一緒に、忘れようとしていた、思い出したくない記憶が蘇った。

母親が失声ウィルスの被害に会った生徒。

田本を犯人と見抜き騒ぎを起こした張本人。

その後、治療のために母親に付き添って海外に行っていたはずの

女子。

寺尾藍。

腰まで伸びた黒くて長い髪を靡かせて、僕に失望の眼差しを向けていたのはその人だった。

「何？ 急に目を見開いたりして。まさか、本当に忘れていて今思いついたとか？」

頭を抱えてため息をつく寺尾。その大げさすぎるリアクションを見て不愉快な気分になったが意見はしなかった。名前と一緒に、こいつの性格も思い出したからだ。一度言い出したら他の意見など全く聞こうとしない、自信家で、わがままで、プライドの高い奴だ。意見したところで僕の話など聞きもしないだろう。口で勝てる自信もない。

「まあ、いいわ。とりあえず歩きましょう」

寺尾はそう言うのと僕の横を抜けて偉そうに歩き始めた。仕方なく僕も寺尾の後について歩く。

「二日前に帰ってきたばかりなの。時差ぼけが酷くて、さすがにすぐ学校へは来れなかったから、今日が久しぶりの学校だわ。クロもだけど、この学校も何一つ変わってないわね」

学校が何も変わっていないのは当たり前だ。寺尾が日本を発つて、大よそ三ヶ月が過ぎただけだ。元々新しい校舎や施設が売りの学校なんだから、これ以上目に見えて何かが変わる訳が無い。

「本当に変わってなくて嫌な気分だわ。覚悟はしてたけど、吐き気がするわね」

寺尾は辺りを見回しながら眉をひそめた。その顔を見て、僕はさらに忘れていたことを思い出す。そうだった。寺尾も他の生徒からいじめられているのだ。母親がウイルスに感染したという話が広まった翌日から、仲の良かった友達ですら彼女を避けるようになったとブローカーから聞かされていた。この学校の生徒は真実を知らず、噂に踊らされたばかりに寺尾もウイルスを持っていると勘違いをして、彼女のことを最低な呼び名で呼んでいる。ウイルス。吐き気が

するのも当然だ。その気持ちはよくわかる。

だからこそ、寺尾は僕を見つけて話しかけてきたんだろう。寺尾にはこの学校でまともに話ができる人間がないのだ。孤独というのは想像以上に辛い。これは言葉では言い表せない。経験した者じゃないと理解できないものだ。その孤独を回避するには同じ境遇にいる人間と寄り添うのが一番簡単だ。お互いの気持ちをある程度理解できるし、お互いに傷つけるようなこともしない。傷の舐め合いと言われるかもしれないが、実際に傷ついている人間にはそれが一番安心できるのだ。

「結局、お母さんの原因はわからなかったわ」

寺尾は前を向いて歩きながら思い出したように話題を変えた。

「ウイルスの研究で有名な先生に診てもらったのに、どうにもならなかった。たくさん検査を受けて、たくさん時間をかけたのに、その先生はウイルスと思われるものは検出されなかったって得意げに言ったわ。しかもその後、声帯を破壊した後自身も何らかの形で消失する特質を持った新種のウイルスかもしれない、もっと検査をしなければ詳しくわからないって言ったのよ。私、医学の知識とか全く無いけど、呆れちゃったわ。たぶんもう誰にも解明できないだろうって思った。そうしたら、何だかその先生が自分の研究のために私のお母さんを材料にしようとしている気がして、頭にきたわ。お父さんもお母さんも同じように思ったみたいで、三人で話し合っ

て帰ってくることにしたの」

寺尾の声には感情と呼べるものが含まれていなかった。前を見て、機械的に経過を報告しているような感じだった。

「お父さんも仕事を休みつぱなだったし、お母さんもなんとなく心の整理が出来たみたいだから、まるでいい方向には行ってないけど、とりあえず決着はついたって所かしらね。悪い中でも出来るだけ良い方向を見つけ出して進んでいくしかないって言う考えが家族間で共有できたから、そこは良かったけどね」

家族に関する話題は反応に困る。特に仲の良いところを聞かされ

るのは、正直言つてあまり気分が良くない。僕は返事をせずに黙つて寺尾の後ろを歩き続けた。

「ねえ、クロは田本の話、本当だったと思つ？」

「え？」

「だから、田本が言っていた話のことよ。ウィルスなんてのは作り話で、声を奪つたのは自分だつて言つてたこと。クロはどう思つてるの？」

「……さあ」

「さあつて、クロは何とも思つてないの？」

そんなことはない。でも僕の思っていることを素直に話したところで寺尾が信じるとも思えないし、その話をして興味を持たれても困る。この世に欲望者と呼ばれる特殊な力を持った人間が存在し、田本もその一人であったこと。田本は自らの力を利用して、自分の気に入らない人間の声を片っ端から奪い、さらにはその事実を隠すために無関係な人々まで襲つたこと。そんな田本を僕が欲望者の力で吹き飛ばしたこと。全て本当のことだ。ブローカーが裏を取っているという折紙つき。ただ、それを何も知らない一般人に話しても僕の頭がおかしいと笑い者にされるのがオチだ。世の中には知らないほうが良いこともある。特に寺尾は前向きに進もうと考えているんだ。余計なことを知つて考えが揺らぐようなら、知らないほうが幸せだろう。

「よく……わかんないよ」

寺尾は振り返つて立ち止まり、僕の顔を覗き込むようにじつと睨み付ける。僕の心の奥底を穿り返すように、いぶかしげな視線をこちらに向けていた。絶対に怪しいと思つているんだろう。本当に勘だけは恐ろしく良い奴だ。

寺尾はそうして数秒僕を睨んでから、「まあ、いいわ」と言つて再び前を向いて歩き始めた。僕はほつと胸を撫で下ろし、また同じようにして寺尾の後について足を進めた。

学校の正面玄関に入ったところで寺尾と別れた。クラスが別だか

ら靴箱も離れているため、別々の方向へと進む。僕は自分の靴箱から上靴を取り出し履き替える。外靴を靴箱に押し込み、玄関ホールに目を向けると、先に靴を履き終えた寺尾がこちらを見ていた。早くしろと急かしてくると思っただが、眼が合うと寺尾は何も言わずに階段を上って行った。何なんだ。何か言いたいことでもあったんだろうか。よくわからない。

予鈴が鳴る。憂鬱な学校の始まりだ。

昼休み。やっと今日の半分が終わった。お腹も悲鳴を上げている。残りの時間を耐えるにはエネルギー補給が必要だ。いつものように登校中にコンビニで買った弁当を取り出し、机の上に広げる。透明なプラスチックで出来た蓋を取ると、冷え切った弁当が放つ独特の匂いが立ち込める。周りには楽しそうにお喋りをしながら食事をするクラスメイト達。僕はその中で見えない壁で区切られた自分の机から、一歩も出ることなく昼食を取る。

ここの生徒の昼食は大きく二つに分けられる。母親が作った手作り弁当を教室や部室で食べるか、栄養面に配慮された豊富なメニューのある学食で食べるかのどちらかだ。僕みたいに冷え切った安物の弁当を惨めに食べる人間など一人もいない。皆にとっては楽しい食事の時間でも、僕にとってはただのエネルギー補給の時間でしかないのだ。僕にもあいつらみたいに笑って食事を取れる日が来るんだろうか。

そんなことを考えながら冷えて固まったご飯に箸を入れる。賑やかな教室で、一人米粒の粘着力と格闘しながら一口サイズに塊をほぐす。今日はいつもより強敵だ。やっとの思いでほぐしたご飯を口に運ぼうとした時、教室が静かになったことに気が付いた。さっきまでうるさいくらいに話し込んでいたクラスメイトが全員黙っている。僕を残して世界の時間が止まってしまったんじゃないかと思えるほどに教室内は静まり返っていた。何が起きたのか不思議に思い、黙っているクラスメイトの様子を見ると、皆固まって同じ方向

を見ている。僕も同じ方向を見る。真後ろだ。

視界に入ってきたのは、小さな手提げバッグを持ってこちらに向かってくる寺尾だった。違うクラスだと言つのに我が物顔で教室内を突き進んでくる。クラスメイトの視線は寺尾から離れず、寺尾が自分達の近くに來ると後ずさりをして距離を取っていた。まるでモ―ゼの十戒だ。寺尾はそんなクラスメイト達を無視するように一直線に僕の元へとやって來た。

「ちよつと顔貸してくれる？」

突然の訪問者の言っていることが理解出来ずに、僕は箸でご飯を持ち上げたままクラスメイトと同じように固まって寺尾を見つめていた。

「ほら！ 行くわよ！」

寺尾は僕が固まってしまうことをわかっていたのか、すぐに僕の弁当を奪い取り廊下に向けて歩き始めた。

「え！？ な！？」

予想外の展開に、柄にもなく甲高い声を上げてしまった。僕は寺尾について行くというよりも、奪われた弁当を追うために、ご飯が乗った箸を持ったまま廊下に飛び出した。こんな状態で校内をうるついたのは初めての経験だった。たぶん、こんなことは二度とないだろう。あつてもらつちや困る。

寺尾は恥ずかしい状態の僕など気にかけることなく校内をずんずん進む。二年の教室が連なる廊下を真直ぐ進み、突き当りを曲がって階段を上る。寺尾が足を止めたのは階段の一番上、屋上へと続く扉の前だった。立ち止まった寺尾は持っていた手提げバッグを漁り始める。バッグの中からは小さな金属がぶつかり合う音が聞こえてきた。また、嫌な記憶が蘇ってくる。同時に嫌な予感も込み上げてくる。寺尾が取り出したのは、やはり鍵だった。黄色い長方形のタグが付いた銀色の鍵は、目の前にある扉の鍵穴に導かれるように吸い込まれて行き、乾いた音が階段に鳴り響いた。寺尾は何も言わずに扉を開けて屋上へと進んで行く。僕は扉の向こう側に行くのを躊

踏した。こいつ、また同じことをやったのか。あの時と同じことを。「早く来なさいよ。休み時間は有限なんだから」

扉を体で押さえながら、寺尾が涼しい顔で言う。それでも僕は動かなかつた。前回に引き続き、共犯者になるのはごめんだ。

「ク口。あなた何か勘違いしてない？ 鍵のことならちゃんと説明するから、早くこつち来なさいよ。意外とこの扉重いんだから」

ちゃんと説明するという言葉を聞いて、渋谷屋上の扉をくぐる。

寺尾は僕が扉を抜けると、ゆっくり静かに扉を閉めて鍵をかけた。鍵をかけたことに驚いて振り向いたが、寺尾は「景色が良い所がいいわ」と言つて場所を決めて座り込んだ。そしてピクニツク気分です提げバッグから弁当箱を取り出して目の前に広げる。奪われた僕のコンビニ弁当は寺尾のすぐ近くに置かれた。この場所に座るようにと指定されているようだ。僕はこの後何が起きるのか不安でしようがなかつたが、ここで尻込みしていてもまた文句を言われてしまうのがオチだ。それに、いまだに持っている箸の上のご飯も乾燥しておいしさが半減してしまう。僕は渋谷寺尾の近くに行き、置いてあるコンビニ弁当を少しずらして距離を置いてから座った。

その場所は学校のグラウンドとすぐ先にある街を構成するビル群が一望できた。グラウンドでは食事を終えた男子生徒がサッカーに興じる声が響いている。近くの道路や工事現場から聞こえてくる騒音に混じつて、生徒達の歓声が屋上にまで届いてきていた。朝方に冷え込んでいた気温も、薄手の上着を羽織ればなんともないぐらいにまで上昇している。雲一つない青空には気持ち良さそうに鳥の群れが飛んでいた。

「午後からは気温が上がるって言ってたから屋上に見てみたけど、大正解ね。天気予報って意外に役立つのね」

寺尾は自分の弁当箱の蓋を開け、天気の話をしながら空を見上げていた。気持ち良さそうに目を細めていたが、僕が聞きたいことはそんなことじゃない。僕は寺尾を怒らせない程度に睨みつけた。僕の視線に気付いた寺尾は、一度ため息をつくと持っていた箸で僕を

指しながら不機嫌そうに話し始める。

「いい？ 屋上の鍵はちゃんと許可を貰って借りてきてるの。高岡先生に事情を話してOKを貰ってるんだから」

ちつとも信用できない説明だった。この学校では基本的に屋上は立ち入り禁止だ。何故なのか理由はわからないが、生徒が立ち入らないように扉にはいつも鍵が掛けられている。そしてその鍵はしっかりと教師が管理している。僕が入学して今までに、屋上に生徒が入り込んだことなど聞いたことがない。そんな場所であるにもかかわらず、教師が、ましてや学年主任の高岡が簡単に鍵を貸すだろうか？ そんな事が出来る事情とは何だ？ そんなもの無いに決まっている。少なくとも僕には考え付かない。

疑いの眼差しを送る僕を見て、寺尾はまたため息をつく。ため息をつきたいのはこちらの方だと思っただが、そうもいかなかった。寺尾の不機嫌な顔がため息の後、悲しげな表情に変わったからだ。

「席が、変わったの」

寺尾は箸を弁当箱の上に置いた。少し俯いて話を続ける。

「私が向こうに行っている間に席替えがあっただんですって。今まで私の座っていた席に別の子が座っていて、他の子の席も変わっていたからすぐにわかったわ。自分の席がどこなのか探してみたら、廊下側の一番後ろに列からあぶれたみたいの一つだけ机と椅子が置いてあった。まさかとは思っただけど、後から教室に入ってきた担任が私の席がそこだって親切に教えてくれたからクラスの状況が掴めたわ。考えられる？ あいつらわざとそうなるように席替えをしたのよ。人数的にそうなるような状況に無いのに、わざわざ席の配置を変えてまでそうしたのよ。あのクラスに私の居場所なんて無いの。クラスと言うよりこの学校に、私がいて良い場所なんて存在しないのよ」

寺尾は自分を落ち着かせるように少し間を空けてから話を続ける。「だから四時間目に授業を受けないで高岡先生のところに行って相談してみたの。でも高岡先生がその状況を解決できるとは思ってな

かったから、昼休みに屋上を使わせてもらえるように頼んだの。昼休みに私が教室にいたら皆が嫌がるのは予想できたから、私がどこかに行けば良いと思ったのよ。周りに気を使わせるのも癪だしね。駄目元だったからあんまり期待してなかったんだけど、意外とすんなり鍵を貸してくれたわ。先生達も私のことをどう対処しようか悩んでるんでしょね。他の生徒の親御さんからも色々言われてるんだと思うわ」

聞いている僕の気分が悪くなるような話だった。以前ブローカーが言っていた「似た物同士、仲良くやんなよ」という言葉が頭に浮かぶ。寺尾は本当に僕と同じ状況にあるようだ。皆から忌み嫌われ、遠ざけられ、否定されている。助けも無ければ逃げ道も無い。高岡が鍵を簡単に貸したという行動が皆の心の内を如実に現していた。寺尾は顔を上げると、真直ぐに僕を見据えて訴えるように宣言した。

「と言う訳だから、この鍵は田本の時みたいに騙したりして取ったものじゃないわ。誰にも迷惑をかけない、ちゃんとした理由と方法で選んだ私なりの解決策よ。命を賭けたって良いわ」

その宣言を聞いて、今度は僕が視線を落とすとした。どうしようもないほどの罪悪感に苛まれ、寺尾をまともに見ることが出来なかった。この学校で同じ状況にあるのだから、僕が一番寺尾のことをわかってあげられるはずだった。わかってあげなければいけないかったのだ。なのに僕はまた寺尾を疑った。僕は最低な人間だ。

「……ごめん」

「謝る必要は無いわ。理解してもらえればそれでいいから。さあ、もうこの話はお終い」

寺尾はそう言うのと再び箸を持って、いただきますを言ってから弁当を食べ始めた。僕は込み上げる罪悪感からしばらく弁当に手をつけられずにいたが、寺尾に「早く食べなさいよ」と言われてようやく弁当を食べ始めた。

食事の間中、寺尾はずっと話し続けていた。聞いてもいないのに、

この三ヶ月間に起きた色々なことを事細かに教えてくれた。自分の母親が受けた検査のこと。寺尾と父親も、母親と同じような扱いを受け、特別病棟にしばらく隔離されたこと。向こうでの食生活が合わなかったこと。ほとんどが文句だった。寺尾にとつて気に食わないことが相当あったんだろう。延々と繰り返られる愚痴の嵐は止まることが無く、僕はその間に弁当を食べ終えてしまった。寺尾は喋りながらなので、まだ半分も食べ終えていない。休み時間も半分が終わっている。自分で休み時間は有限なんだからというくらいなら、まず優先すべきは食事なんじゃないだろうか、と思つてはみたものの本人に伝える勇氣は無い。僕は黙つて寺尾の話聞く置物になつていた。

一通り話したいことを言い終えたのか、寺尾は喋るよりも弁当を食べる時間のほうが長くなつていた。休み時間も残り二十分ぐらいだ。僕のクラスは次の時間、美術の授業で教室を移動しなければいけない。そろそろ戻つて準備をしないと遅れてしまう。

「あつ。そう言えば、クロに聞きたいことがあるんだけど」

「……何？」

「水津野先生つてまだ戻つてないの？ 今日見た限りでは姿が見当たらなかったけど」

言われてみると僕も水津野先生を見ていない。田本の事件の後も色々なことがありすぎて、すっかり忘れてしまつていた。一年の国語を担当していた人気教師。産休に入ったのがウイルス騒ぎが起きる少し前の話なので、学校には三ヶ月以上来ていないことになる。

「戻つてないの？ おかしいわね。産休つて長くても三ヶ月ぐらいのはずだから、もう復帰していてもおかしくないはずなんだけど。何も聞いてないの？」

考えてみれば、今までに学校側から水津野先生に関する話を聞いたことがなかった。無事に赤ちゃんが生まれたという話しもない。学校中の誰もが水津野先生のことを忘れてしまつているようでさえある。一体、今どこ

で何をしているんだろうか。

「まあ、もしかしたらクロが聞いてないだけかもしれないわね。クロって色々鈍いから可能性は十分にあるわ。しょうがない、鍵を返すついでだから後で高岡先生にでも聞いてみようかしら」

「に……鈍いって」

「何よ。本当のことでしょ？ それとも自分が鈍くないって証明できるエピソードでもあるの？」

「……」

少し考えてみたが、何も出てこなかった。

「ほら、やっぱり何もないんじゃない。文句を言う前に、自分の鈍さを認識して改善する努力でもしたら？」

自分はいいだけ文句を言っているくせに、僕が文句を言うと何かしらの理由をこじつけて否定しようとする。どうあっても、僕を自分より下の位置に置きたいらしい。こいつの性格上仕方ないことか。この辺りは僕が我慢しなければいけないだろう。今の状況では、しばらく寺尾と行動を共にすることになるのは避けられない。僕は何事もなく平和に時間が過ぎればそれでいい。変に反発したりして些細な争いを起こすのも面倒臭い。寺尾が満足するように付き従っていれば問題ないだろう。寺尾が僕のことをどう思っているかが、僕には関係のない話だ。

「はあ、どうして休み時間ってこんなにすぐ終わるのかしら。後一時間ぐらいあっても良いと思わない？」

そんなことをすれば、学校は毎日が午前授業だ。休日も授業をしなければ必要な授業日数に届かなくなってしまう。一日の時間が短い代わりに毎日学校があるなんて、それこそ地獄のような日々だ。

「気が進まないけど戻りましょう。私、鍵を返してから戻るからクロは先に戻って良いわよ」

寺尾は弁当箱が入った手提げバッグを持って立ち上がると、鍵を掛けていた屋上の扉を開錠した。この時ばかりは、僕も寺尾の意見に喜んで賛同し、寺尾を残して足早に屋上を後にした。

その日の昼休みで寺尾からは解放されたと安心していたが、甘かった。放課後、寺尾はまた現れた。僕の教室へと何食わぬ顔で入り込み近づいてくる。昼休みと全く同じ状況が繰り広げられ、クラスメイト達は、一人また一人と逃げるように教室を出て行った。僕にはこの光景がある種のコントに見えて仕方が無かった。これは寺尾が教室に来る度引き起こされるんだろうか。こんなことを毎回続けられては、いつの日か僕は笑い転げてしまいかもしれない。教室に進撃する寺尾、怯えて逃げ惑うクラスメイト達、それを見て爆笑する僕。カオスだ。

「何ちよつとニヤけてるのよ。それ、気持ち悪いわよ」

気付けば寺尾が不愉快そうな顔をして目の前に立っていた。朝も着ていたライトブラウンの高級そうなコートと学生靴を持っている。ホームルームが終わると同時に荷物をまとめて出てきたんだろう。一時期の僕と全く同じだ。

「少し時間を潰してから帰りましょう。場所はもう確保してあるから」

そう言っつて制服のポケットから取り出したのは、またしても鍵だった。取り付けられたタグを人差し指と親指でつまむようにして持ち、誇らしげに僕へと見せ付けてくる。僕はまた屋上に連れ出されるのかと思っただが、良く見ると鍵についているタグの色が違う。屋上の鍵に付いていたのは黄色のタグだったが、今寺尾が持っているのは赤いタグだ。

「ほら、行くわよ。早く準備してよ」

寺尾は鍵を手のひらで握り締めて、僕に帰り支度をするように命令する。わかっつてはいるが、一々言い方が癪に障る奴だ。僕は小さいため息をついてから、鞆に教科書を詰めて帰る準備をする。鞆を背負って、椅子にかけていたダウンジャケットを持ち立ち上がると、教室内にいたはずの生徒が僕と寺尾を残して姿を消していたことに気が付いた。ここの生徒は噂話を広めるのも早い、逃げ足も早い

らしい。

寺尾は僕の準備が整ったのを確認すると教室の扉を勢い良く開け放った。廊下には教室にいたはずの生徒が、壁側に沿って綺麗に並び耳打ちをしている最中だった。突然開いた扉に驚き、全員がこちらに注目している。寺尾と僕はその視線を浴びながら教室を後にする。廊下にいた生徒達は僕達がいなくなると、また教室内へと戻っていった。僕はその姿を少し振り返って確認する。わかりやすいやつらだ。どうせ、教室では有りもしない噂話が飛び交い、汚らしい言葉を撒き散らしているんだろう。勝手にしたらいい。あいつらが何を噂したところで、今の状況が変わることはないのだから。

寺尾がどこに向かうのか言わないので、僕はまた首輪でつながれたペットのように寺尾の少し後ろを付いて歩いた。廊下を突き当りまで進んで角を曲がり、階段を通り過ぎて、同じ階にある職員室の近くで止まった。ポケットから鍵を取り出して目の前にある扉の鍵穴に差し込む。そこは職員室の真横にある部屋で普段あまり使われることが無い教室だ。この教室のことはよく覚えている。忘れるわけが無い。今では完全に開かずの間となっている呪われた教室だ。生徒指導室。田本が寺尾の母親から声を奪った現場だ。世間的にはウイルス感染の現場と疑われている場所。あの事件からしばらく経つが、学校側は未だにこの教室を使おうとしていない。

「この鍵もすんなり貸してくれたわ。意外と今の状況、便利かもね」

皮肉を言う寺尾と一緒に生徒指導室の中に入る。指導室の中は、失声ウイルス騒ぎの時に見たままで、何も変わっていないかった。本当にあれから誰もここを使っていないんだろう。一つだけ置かれている机や窓際にある本棚には薄っすらホコリが貯まっている。

寺尾は扉を閉めて鍵を掛けると、窓を全開にして空気の入れ替えをした。窓から流れ込んできた外気が教室中を嘗め回し、至るところからホコリが舞い上がる。僕と寺尾はそのほこりで咽てしまい、二人でその場にあったノートや本を使ってホコリを外に出すように、

窓に向かつて扇ぎ始めた。なんだか無意味なことをしているような気もしたが、これより良い方法が思いつかず、無心で窓の外にホコリを送り続けた。

舞い上がったホコリがようやく治まり、寺尾は椅子に腰かけた。「疲れたあ。使わないのは勝手だけど、掃除もしないなんて有り得ないわ。こんなホコリっぽい空間にいたの何年ぶりかしら」

鞆から取り出したペットボトルのお茶を飲む寺尾。僕も寺尾の向かいにある椅子に腰かける。急激に動かした所為か、右腕が痛い。日頃の運動不足が祟ってしまったようだ。

「ところで、昼休みの続きなんだけど、水津野先生のこと聞いてみたのよ」

寺尾は飲んでいたお茶を鞆にしまいながら目を輝かせ始めた。何か興味のある情報でも仕入れてきたんだろう。どうでもいい内容であれば聞く耳を持たないところだが、水津野先生の話となると別だ。「高岡先生も事情は知らないみたいなんだけど、水津野先生辞めちゃったんですって」

「辞めた!? 学校を!？」

「学校って言うか、教師自体辞めちゃったみたいよ」

水津野先生が教師を辞めた。あんなにわかりやすい授業をするのに、生徒のことを一番に考える熱心な人なのに、水津野先生はもう先生ではなくなってしまった。産休の間に何があっただらうか。

「どうして?!」

「だから、それがわからないのよ。高岡先生も校長から詳しい話を聞いていないみたいだし。連絡を取ってる先生もいないみたいなのよね。でもね……」

「でも?」

「私、水津野先生見た気がするのよね」

「どこで!？」

僕は気付かないうちに立ち上がって寺尾に詰め寄っていた。

「ちょっと、そんなに興奮しないでよ。見た気がするってただけだか

ら違つかもしれないのよ。遠目で見ただけだし、なんか雰囲気も違う感じだったから確証はないんだけど」

「どこ!?!」

「……家の近くにあるスーパーよ」

興奮した僕を見て眉をひそめる寺尾。僕は寺尾が嫌そうにしていることよりも、水津野先生のことと頭がいつぱいだった。教師を辞めてスーパー? どうしてそんなところで働いているんだ? 教師を辞めてまでそんなことがしたかったのだろうか? それとも、そうならざるを得なかったんだろうか? 全くわからない。僕は全身から力が抜けて椅子に体を投げ落とした。

「そんなに心配なら、会いに行ってみる?」

「えっ?」

「元々この話をするつもりでいたのよ。私もなんで先生が辞めたのが気になるし、お礼も言いたいから」

「……お礼?」

「そうよ。水津野先生はウイルス騒動の時、唯一私の事を心配して電話を掛けてきてくれた先生なのよ。クラスの担任ですらそんなこととしてこなかったのに、水津野先生は私の事を気遣ってくれたの。でもその時、私の方がいつぱいいつぱいで色々と混乱していたから、ちゃんとお礼を言えてないのよ。だからそれも含めて一度会いたかったの。もしかしたら、辞めた理由もその時に聞けるかもしれないでしょ? 一石二鳥じゃない。決まりね! じゃあすぐに行きましょうー!」

「い……今から?」

「当たり前じゃない。善は急げ。私が見かけたのも丁度このぐらいの時間だったから、行けば会えるでしょ」

寺尾は立ち上がると教室の窓を閉めて、鞆を持って教室を出る。

僕も慌てて自分の荷物を拾い上げ寺尾の後に続く。

「鍵返してくるから、玄関で待っててよ。すぐに行くから」

こうして僕はまた、寺尾の思いつきに付き合わされることになっ

た。でも僕も水津野先生がどうして辞めてしまったのか、水津野先生に何が起きたのか、出来ることなら知りたい。この部分に関しては寺尾と意見が一致していた。後は水津野先生がその疑問に答えてくれるかが問題だ。とにかく寺尾が言っていた人物が本当に水津野先生かどうか確認してからだ。

過ち？

僕が帰りに使っているバス停から普段は絶対に乗ることのない、別方向へと経路を取るバスに乗り込み、聞いたことのない停留所を二、三箇所通り過ぎる。寺尾が席を立ち下車したのは大きな公園が目の前に広がる停留所だった。学校を出てから見慣れない景色が続いていたが、この場所は見覚えがあった。小奇麗に整えられた公園から道路を挟んだ向かい側にはオシャレな外観が目を引き大型ショッピングモールが身構えている。時間帯の所為か、ショッピングモールの通路はたくさんのお買い物客で賑わっていた。田本が逮捕された翌日、現場検証後に警察の車で送ってもらった公園だった。

公園はショッピングモールの賑わいと反比例するかのように入影が疎らだった。学校のグラウンドと同じぐらいの大きさがある広場はその空間を持て余している。広場の先にある地下鉄の入り口を指して公園内を歩きながら辺りを見回しても、周囲に点在するベンチに携帯ゲーム機を持って輪を描く学校帰りの小学生や、誰も乗っていないベビーカーを取り囲んで夢中で話し込むママさん集団がいるだけだった。唯一、この広い空間を楽しんでいるのは、覚束ない足取りで駆け回りながら、一人きりではしゃぐ幼い子供だけだった。恐らく話し込んでいるママさん集団の子供だろう。自分の子供から目を離しておしゃべりに現を抜かしている母親達を見て、あの二人のことを思い出した。子供のことをちゃんと理解しているから少し目を離しても大丈夫だ、という幻想に陥り重大な変化を見落としている無責任な人間。ああ言う連中を見ると、無性に腹が立って気分が悪くなる。

「何やってるのよ。何か気になるものでもあるの？」

自分でも気付かないうちに足を止めて、遊んでいるその子を眺めていた。ついてこない僕に気付いた寺尾が不思議そうに僕の視線の先を探っている。

「あの赤ちゃんがどうしたの？」

「別に……なんでもないよ」

「そう？ その割には不機嫌そうだけど？」

勘が良いと言つのも考え物だ。自分の思考をあつさりと言い当てられるのは、あまり良い気分ではない。寺尾も悪気があつて言っているのではないだろうが、僕としても触れて欲しくない部分はある。僕はその質問に答える代わりに寺尾の近くまで早足で近づいて行き、そのまま横を通り過ぎて地下鉄の入り口目掛けて寺尾を追い越した。寺尾も慌てて僕の後を追ってくる。さっきまでの状況とはまるで逆の、僕が前を歩きその後ろから寺尾がついて来るような形になった。

「ちよつと！ 待ちなさいよ！」

寺尾の言葉を無視して歩き続けた。寺尾も歩く速度を速めながら後ろで一人騒いでいる。そんなことをしている内に広い公園を通り抜けて、地下鉄入り口の目の前までやって来た。

「ク口。どうでもいいけど、どっちの乗り場に行けば良いのか知ってるの!？」

地下へと流れているエスカレーターに乗り込もうとしたところで足が止まった。感情のままに突進していたが、確かに僕はどこ行き
の乗り場に行けば良いのかわからない。

「全く、子供なんだから。何が気に障ったのか知らないけど、こんなことで一々手間取らせないでよ。ほら、こつちよ」

寺尾は僕に一瞥をくれると、僕を追い抜いて動いているエスカレーターの流れに乗り、地下へと降りて行った。

僕は何をしているんだろう。感情に身を任せてみたものの、結局寺尾に恥ずかしい姿を見せただけになってしまった。やっぱり、慣れないことはするべきじゃない。

「早くしてよ！ すぐに地下鉄来るわよ！」

階下から寺尾の怒った声が聞こえてくる。僕は寺尾に追いつくため、エスカレーターを駆け下りた。寺尾は先に改札を通っていて、

ホーム側からこちらを見て僕の到着を待っていた。普段地下鉄は一切使わないので、切符を買うために券売機へと向かう。そういえば、どこまで行くんだらう。降りる駅がわからなければ切符が買えない。「何やってるの!? モタモタしないで!」

僕が券売機前でもたついている間に、ホームでは車両到着前のアナウンスが流れ始めていた。

「ど……どこまで行くの?」

「終点!」

急いで終点までの切符を買って改札を通る。ホーム内は学校帰りの生徒や大きく膨れ上がったエコバッグを持った主婦でごった返していた。寺尾は意識的に、一番端の車両が止まる位置に立っていた。僕が寺尾の所へ到着すると同時に車両がホームへと入ってくる。大きく光る二つのヘッドライトが近づいてきて、地下の線路全域に響き渡りそうな中低音のクラクションが全ての音を掻き消した。車両はゆっくりと所定の位置に停車し、車両がホームに入ってきた衝撃で起きた風が、少し遅れて待っている乗客達を激しくなぞる。線路内への落下事故防止のために設置された真新しい自動式のホーム柵が開き、綺麗な白にオレンジのラインが映える乗降扉が開く。車両から降りてくる乗客はほとんどおらず、乗り込む人間が雪崩のように扉へと押しかけてゆく。僕と寺尾が選んだ一番端の乗り口は、乗り換えの効率性や他の駅にある改札口の位置的に不便なのか、巾着袋を持ったおばあちゃんが一人座っているだけだった。中央付近の車両はかなりの人数が乗り込んでいるのに、まるで僕と寺尾を避けるかのように、この車両だけ閑散としていた。寺尾は何も言わずに座席の一番端を陣取った。僕も寺尾から少し距離を取って横に座る。

「私ちよつと疲れたから、終点に着いたら起こしてね」

寺尾はそう言うつと背もたれに身を預けて眠ってしまった。ここでの僕の役目は目覚まし時計か。

小刻みにビブラートを入れたような発車ベルが鳴り、扉が閉まる。

ゆっくりと車両が動き出し、窓の外に見えていた向かい側のホームがあつと言つ間に薄暗い景色へと変わった。僕は窓ガラスに広告と一緒に貼られている路線図を見ながら、あと何個の駅を過ぎるのかを数えて時間を潰すことにした。

終点で寺尾を起こし、改札を通過して駅から外に出ると初めて目にする風景が夕日のオレンジに染まっていた。目の前にはバスやタクシーが止まる大きなロータリーがあり、その周りには歩道を挟んで葉が落ち始めて寂しくなりかけている植木が建ち並んでいる。ロータリーに向かって右方向にはレンガ造りの花壇で囲われた駐輪所が設けられていて、反対側には車が五十台ほど停まれそうな駐車場が広がっている。ロータリーの先に続いている道路は、両脇をいかにも高級そうな住宅が固めていた。僕の住んでいるマンション周辺では見られない光景だった。まるで異国の風景だ。どこの住宅も敷地の面積が広くて、建物自体もそれに見合った大きさだ。あんな広い家に、一体何人の人間が生活をしているんだろうか。ここはそんな大家族ばかりが集まった場所なんだろうか。

「暖かくなつたつて言つても、やっぱり一時的なことで秋が近いのね。この時間なのにもう日が陰つてるなんて」

寺尾は伸びをしながら空を眺めていた。青とオレンジが混ざり合つて鮮やかなグラデーションを描く大きなキャンパスに、堂々と建つ高級住宅は当たり前のように溶け込んでいる。一枚の綺麗な風景画を見ている気分だった。

「昼間と比べるとやっぱり寒いわ。早く行きましょう。先生がいるかもしれないスーパーはこの裏だから」

振り返つてみると、そこには地下鉄入口の何倍もある建物がそびえ立っていた。ガラス張りの大きな窓が多く、スーパーと呼ぶには相応しくない外観だった。

「すごく便利なんだけど、地下鉄より後に出来たから直結じゃないのよ。そこだけが唯一の不満ね。そこを改善してくれればパーフェ

クトなんだけど」

寺尾の話聞きながら、スーパーの入り口に回りこんで店内に入る。入った瞬間に僕のスーパーと言う概念が音を立って崩壊して行くのがわかった。縦長に造られた建物は、入り口を入れてすぐに三階まで吹き抜けの広場になっていて、中央にライトアップされた噴水が清々しい音を立てて水しぶきを上げていた。間接照明が多く、高級ホテルのロビーのような雰囲気漂う。入り口横にあったフロア案内を見ると、このスーパーは四フロアから構成されているようだった。地下一階が食品・生活用品売場、一階と二階が服飾関係の売場、三階がレストランになっている。これはスーパーじゃなくてデパートじゃないだろうか。しかも、街中にあるデパートより格段に上質な。心なしが、フロアを歩いている人達にも気品が感じられる。

「確か水津野先生を見たのは食品売場だった気がするのよ」

寺尾はこの場所に慣れているようで、臆することなく食品売場に向けて歩き出す。僕もその後をついて歩く。ベルトコンベアのような段差のないエスカレーターにのって地下一階に下りると、入り口とは違った雰囲気のフロアが広がっていた。食品売場と生活用品売場は中央にある大きな通路を境にして左右に分かれていて、右が食品売場、左が生活用品売場になっていた。食品売場のフロアは一階とは雰囲気がガラリと変わり、一面白の壁と床で埋め尽くされていた。天井からは幾つもの蛍光灯が降り注いでいて、長時間ここにいたら目が悪くなってしまふほどの眩しい売場だった。しかし、ほとんどが白い所為で、野菜の緑や果物の赤、黄色、オレンジ、魚の青白さや肉のピンクなど、食材が魅力的に輝いている。どれも新鮮で活き活きしているように見え、オシャレで活気のある売場だった。「この前は野菜を並べてたところを見たのよ。たぶん今日もどこかで商品を並べてるはずよ。私はこっち側から見て回るから、ク口は反対側から回って。お互いに一周してレジの所で合流しましょう。もし水津野先生を見つけてもすぐに声をかけちゃ駄目よ」

「……何で？」

「こつ言つのは、見つけてから一旦様子を窺うのが一般的でしょ？」
「……」

まず一般的な人はこんなことをしないんじゃないだろうか。何をもってして一般的なのか、僕には全くわからなかった。ただ、僕が水津野先生を見つけたとしても、どうやって話しかけて良いのかわからないのも事実だ。ここは寺尾の意見に合わせて、二人で一緒に水津野先生に会った方が良さそうだ。

「それじゃあ反対側よろしくね！」

寺尾は張り切って目の前に広がる野菜コーナーに突き進んで行った。僕も言われたとおりレジの横を通って反対側に周り、食品売場を一周することにした。

夕食前の時間だけあって売場には多くの買い物客がカートを押して歩いていて。ほとんどが女性で、スーツ姿の人や子供連れの人が多かった。オシャレで綺麗な人が多く、やっぱりここはお金持ちの人が使う場所なんだなと改めて感じた。そうやって周りの人を観察しながら水津野先生らしき人物を探す。途中で寺尾とすれ違ったが寺尾もまだ見つけていないようだった。無言ですれ違い、お互いに残りのフロアを探る。僕の側からは惣菜、魚介、精肉、野菜の順だった。外側のコーナーを周りながら、中央に棚で陳列されているコーナーにも目を光らせる。店員は皆、茶色のエプロンを着て仕事をしているから、見落としが無いように茶色のエプロンにだけ注目して歩いた。

レジ付近にて寺尾と合流。お互いに収穫はゼロだった。

「もしかして今日は休みなのかしら」

寺尾は地下一階中央通路に設置されたベンチに座り、ため息をついた。寺尾の方もそれらしい人物は見当たらなかったらしい。もしかしたら、寺尾が見たのは全くの別人だったんじゃないだろうか。見たのは一瞬だったようだし、その可能性は十分に考えられる。

「私、もう一回周ってくるわ！」

そう言つて寺尾は再び食品売場に向けて歩き出した。僕は完全に諦めて寺尾が座つていたベンチに座り込んだ。寺尾の見間違ひという可能性を考え始めてから、なんだか真剣に探していた自分が馬鹿らしく思えてきた。ほとんど女性しかいない売場の中、目を皿にして辺りを見回す見知らぬ男子高校生は、よくよく考えれば怪しい人物だ。警備員に目をつけられていてもおかしくないことをやっていたかもしれない。何をやってんだか。

自分自身に呆れて背もたれに寄りかかっていると、視界にこちらへ走り寄つてくる寺尾の姿が映つた。やけに表情が輝いている。

「クロ！ クロ！ いた！ いたわ！」

興奮しすぎだ。今までの工程から考えて何があつたのかはわかつたが、もう少しわかりやすい文章で言つて欲しいところだ。

「こつちよ！ こつち！ 早く！」

ベンチから立ち上がつて駆け足で寺尾の後を追う。寺尾が向かつたのは惣菜コーナーだった。寺尾も確認しているはずだが、ここにはまず店員がいなかった。どこに水津野先生がいるんだ。

「ほら！ さつきは見落としたのよ！ あそこ！ カウンターの奥！」

少し離れた場所から惣菜コーナーを眺める。プラスチック容器に入れられて並んでいる惣菜。それらが並べられているカウンターの奥には確かに何人かの人が作業をしていた。マスクに白いエプロンを付けて、髪の毛が落ちないように白くて薄い帽子のようなものを被っている。その中に一人だけ茶色のエプロンを着用している人がいた。その人は、調理が終わり容器に納められた惣菜をカウンター奥の厨房から持つてきて店頭に並べてはまたカウンターの奥に戻る、という仕事を繰り返していた。

「さつきはたぶんあの中に入つてたから見つけられなかったのよ。ほら良く見て！ あの人絶対に水津野先生よ！」

忙しなく出入りを繰り返す店員を良く見る。確かに顔は水津野先生に似ているが、あんなに細かつただろうか。なんとなく覇気がな

くてやつれているようにも見える。

「どっ？」

「……ここからじゃ、よくわかんないよ」

「何よ、役立たずね」

「そ……そんな言い方しなくても」

「いいわ。じゃあ確かめに行きましょう」

「えっ……」

一旦様子を窺うと言う、一般的行動はどこにいったんだ。

寺尾はこれから戦場に赴く戦士のように、力強く惣菜コーナーに近づいて行く。僕は慌ててその後を追いかけた。止めるつもりは無かった。僕が言ったところで寺尾は自分の意見を曲げないことくらいわかつている。もうこうなってしまうては流れに身を任せるしかないんだ。寺尾が惣菜コーナー前に到着した頃に、丁度頻繁に出入りを繰り返していたその店員もカウンターから出てきたところだった。店員と寺尾の眼が合う。寺尾はすかさずその店員に話しかけた。「あの、お忙しい中お邪魔してしまって申し訳ないんですけど、水津野先生ですよな？」

店員は眼が合っていたはずなのに、話しかけられてやっと気付いたようなリアクションを取っていた。寺尾と僕をゆっくりと眺めて、ようやく状況を理解したのかさらに驚いた口調で話し始める。

「あ……あなた達、もしかして……」

「はい。私達、幡ノ橋高校の生徒です」

「……どうしてこんなところに？」

「私、家がこの近くなんです。先日買い物に来た時先生の姿が見えたので、もしかしたらと思っ」

「そう。この近くのね……」

その店員は、やはり水津野先生だった。でも僕の知っている先生とは少し違っていた。明らかに疲れた表情で顔色も悪い。目には輝きが無く、寺尾と話している時も少し俯き加減で喋っている。見つけたいのに見つけれなかった、というような雰囲気だった。

た。

「私、先生にお話したいことがあったんです。それで迷惑を承知で探しに来たんですけど、やっぱりお邪魔でしたか？ もしそうならもう帰りますから」

「ううん、大丈夫よ。わざわざ会いに来てくれたのね。でもまだ仕事だから、あなた達がよければ少し待っててもらえる？ 後十分で終わるから」

「わかりました。じゃあ向かいの本屋さんにいます」

「ごめんね。私も終わったらそっちに行くから」

「はい。じゃあ待ってます」

そう言っただけで僕と寺尾は先生と別れた。寺尾と一緒に時間を潰すため、食品売場から通路を挟んで向かい側にある大きな本屋に入った。寺尾は何も言わずに一人でファッション雑誌が山積みになっているコーナーへと向かって行き、僕も漫画のコーナーを一通り回ってから、最終的に文庫のコーナーで立ち読みをすることにした。

三十分後。ぴったりの時間に水津野先生はやってきた。軽く挨拶を交わし、三人で本屋を後にする。この後どうするかを全く決めていなかったが、寺尾と先生が一階の出入り口に向かって歩き始めたので僕もその後を追った。

「先生。どこか喫茶店にでも入りますか？ 出来ればゆっくりお話ししたいので」

「それなら私の家に行きましょう。この近くだと知り合いも多くて落ち着かないし、私の家ここからすぐだから」

「えっ、いいんですか？ その、旦那さんとかは……」

「そうね。そのことも話さなきゃね……」

先生はまた辛そうな表情になる。僕と寺尾は顔を見合わせた。

「……あの、先生。やっぱりやめましようか。なんだか先生疲れてるみたいだし」

「ごめんね、大丈夫よ。いつかはこんなことがあるって覚悟はして

たのよ。ただ実際にそうなってみると緊張しちゃって……」

先生が何のことを言っているのか、僕にはよくわからなかった。何故先生が学校を辞めたのか。何故教師を辞めてスーパーの店員をやっているのか。そして、僕らと会ったことで何故緊張しなければいけないのか。寺尾もわかっていないのか、不安な表情で先生のことを見つめている。

三人でスーパーから出ると、外はもう真っ暗になっていた。夕方からさらに下がった気温が夜風と共に押し寄せてくる。その所為もあってか、道路には車がたくさん走っていたが、道を歩いている人はほとんど見当たらなかった。近くの店も既に閉店の準備に取り掛かっていて、時間が経つにつれて灯りが減ってゆく。街灯と車のヘッドライトと月明かりだけがこの一体を照らしていた。そんな夜道を先生に案内されながら三人で歩いた。しばらくは誰も話さなかったが、先生が突然思い出したように話し始める。

「そうそう。確か一組の寺尾さんと五組の森黒君よね？」

「覚えててくれたんですか？ 私、てつきり幡ノ橋の生徒ってことでしかわかってもらえてないと思ってたのに」

「ふふ、驚いた？ 今でも受け持った生徒の顔と名前は全部覚えているわ。それが唯一の取り柄だったからね」

「そんなことないですよ。私、先生の授業が一番わかりやすくて大好きだったんですから。先生の取り柄はそれだけじゃないです」

「ありがとう。そう言ってもらえると嬉しいわ」

「先生つて前からここに住んでたんですか？」

「ううん。最近こっちに引っ越してきたの」

「やっぱりそうですか。私、小学生の頃からここに住んでますけど、先生のこと見たことなかったから不思議だったんです」

「そう。そんなに前からここなのね。じゃあ登校時間が長くて大変でしょう？」

「最初にここへ来た時は大変でしたけど、もう慣れました。中学も街中であっただんで」

「そう。森黒君もこの近くなの？」

「いえ、僕は……」

「ク口は全く逆方向なんですけど、先生にどうしても会いたいって言うので連れて来たんです」

答えようと思ったのに寺尾に遮られてしまった。しかも微妙に事実と異なっている。そこで嘘をつく必要もないと思うが。

その後も、寺尾は僕のことを置き去りにして先生とずっと話していた。僕はそんな二人を見ながら少し後ろをついて歩いた。なんだから不当な扱いを受けている気がしてならなかったが、文句を言うことも二人の話に割って入ることも出来なかったので、黙って歩くことにした。

過ち？

「ここですか？ 先生の家」

「そうよ、意外に良い所でしょ？」

三階建ての大きなマンションだった。地下駐車場があり玄関はオートロック。エントランスの床は大理石で埋め尽くされ、ホコリ一つない清潔さが見ただけで伝わってきた。先生がロックを解除して三人でエントランスに入る。

「結構新しいですね。家賃高いんじゃないですか？」

「まあ、そこそこね」

先生は答えを濁しながらエレベーターのボタンを押した。三階に止まっていたエレベーターが動き出し、エレベーター上部に灯つている階表示がカウントダウンを始める。音も無く降りてきたエレベーターに乗り込むと、先生は数字の三が表記されている四角いボタンを押した。先生の部屋は最上階らしい。三階に到着しエレベーターを降りると、先生は通路を歩いて一番端にある扉の前で立ち止まった。鍵を開けて先が上がってから、僕らにも中に入るように薦める。

「お邪魔します」

寺尾と一緒に挨拶をしながら部屋へと上がる。案内された居間は、さすが高そうなマンションだけあってかなりの広さがあった。1DKだが居間と寝室を隔てる仕切り扉を全開にして一つの空間にしていることと、余計なものがない所為もあるのかもしれないが、それでも十分過ぎる。これだけの広さで、住んでいるのが先生だけと言うことはないだろう。一人暮らしにしてはあまりにも広い。しかし、家具も必要最低限のものしかなく、寝室のエリアにはベッドのみ。居間にはテレビ、二人掛けのソファ、背の低いテーブル、キッチン近くにテーブルと椅子が二つあるだけ。シンプルというよりは寂しいという言葉の方が似合いそうな部屋だった。

「とりあえずソファにでも座って。今、飲み物用意するから」

「そんな、いいですよ先生！」

「遠慮しないでいいのよ。紅茶しかないけどいい？」

先生は部屋に入るなり、荷物を椅子に置いてからキッチンで紅茶を入れ始めた。白いカップを三つ並べてトレイに乗せ、透明なガラスで出来たポットに紅茶の葉を入れる。キッチンから微かに臭ってくる心地良い香りを感じながらその姿を見てみると、銀色の電気ポットの口から湯気が立ち上る。先生はそのポットから茶葉の入ったガラスのポットへお湯を注ぎ、しばらく置いてからそれぞれのカップに茶こしを使いながら紅茶を満たしてゆく。メイプルシロップのような艶のある透き通った茶色が爽やかな音と香りを放ってカップに収まってゆく。三つのカップ全てに紅茶を入れ終えた先生は、僕らにそれぞれ紅茶を出してくれた。

「何だかすみません。突然お邪魔した上に紅茶まで頂いて……」

「いいのよ、気にしないで。二人とも、お砂糖はいる？」

「私はストレートの方が好きなので、このままでいいです」

「そう。森黒君は？」

返答に困ってしまった。今まで生きてきた中で、飲んだ紅茶といえばペットボトルで売られている紅茶だけだ。目の前で茶葉から入れられた紅茶なんて初めての経験だ。どうやって飲んで良いのかすらわからない。でも、ここで砂糖を入れてしまったら、寺尾に「やっぱりク口はまだ子供ね」なんてことを言われてしまうかもしれない。それは、正直言って腹立たしい。

「僕も、このままでいいです」

「ふふ。二人とも大人なのね」

優しく笑いながら先生も自分の紅茶を飲み始めた。僕も初めて経験する紅茶に緊張しながらカップに手を伸ばすと、真横から嫌な視線を感じた。見ると寺尾が探るような目でこちらを見ていた。

「ク口、紅茶飲んだことあるの？」

「あ………あるよ！」

「ペットボトルでコンビニとかに置いてあるのは無しよ」

「あ……あるよ……」

「……嘘くさ」

完全に見透かされていた。しかし、見栄を張った以上ここで負ける訳にはいかない。僕は無言で寺尾を睨みつけた。寺尾は紅茶を飲みながら、呆れたように横目で僕を見てくるだけだった。その態度は僕の怒りをさらに増幅させた。

「ほらほら、二人とも喧嘩しないで。折角の紅茶がおいしくなくなるでしょ？」

先生の仲裁が入り、僕と寺尾の睨みあいは一瞬休戦となった。寺尾は「ふんっ」と鼻を鳴らしてそっぽを向き紅茶を飲み始める。僕も寺尾から目を逸らし、自分のカップを手に取った。恐る恐る飲んでみると、ほのかな苦味はあるものの思っていた以上に爽やかな味わいに驚いてしまった。あの甘ったるい味しかないペットボトルの紅茶とは段違いだ。これが本物の紅茶というものか。

「これ本当においしいですね。何て名前の茶葉ですか？」

「これはね、キーマンって言うの。渋みが少なくて飲みやすいですよ？」

「あつ！ その名前聞いたことがあります！ 家ではお母さんのお気に入りですが、それがアールグレイなので、そればかりなんですけど、今度これも薦めてみます。どこで買ってるんですか？」

「あのスーパーに売ってるのよ。紅茶のコーナーは結構豊富に種類を揃えてるからいつも迷うんだけど、今はこれが一番かな」

「いいですね。私も色々飲んでみようかな」

寺尾と先生はしばらく紅茶の話で盛り上がっていた。僕はその二人の話を聞き流しながら黙々と紅茶を楽しんだ。こんなにおいしい飲み物を知らなかったなんて。ペットボトルの紅茶を飲んで、紅茶と言うものを知った気でいた自分が恥ずかしくなった。キーマンか。いつも使うあのスーパーにも置いてあるだろうか。

「先生。私、今日は先生にお礼を言おうと思って来たんです」

一通り紅茶の話をし終えたのか、改まった寺尾がカップをテーブルに置いて真面目な声で話し始めた。先生もそれを受けて自分の力ツプを置いてかしこまった。

「お礼？」

「はい。その……私の母がウイルスに感染した時の事です。先生、電話くれましたよね？ 私、それがすごく嬉しかったんです。他の人は私達の心配よりもウイルスをうつされたくないって本音が見え、口だけの同情だったんですけど、先生だけは本当に心から心配してくれているのが伝わってきたんです。でも、あの時の私、色々と余裕が無くてすっかりとしたお礼が言えなくて。それがずっと心残りだったんです。だから改めてお礼を言いたくて」

「そんな、お礼だなんて。何の力にもなってあげられなかったのに……」

「それでも私は救われました。先生みたいに、私達の立場になって心配してくれる人がいるってわかっただけでも随分楽になりました。先生、本当にありがとうございました」

寺尾は深々と頭を下げた。

「そう。大したことではなかったけど、あなたの力になれたのなら良かったわ。その後、お母様はどう？」

「はい。やっぱり声は出ませんが、今のところ会話は筆談で何とかなってますし、家族で手話を習い始めたので、なるべく今まで通りの生活が出来るように心がけています」

「そう。こんなこと言うのは失礼かもしれないけど、少し安心したわ。あなたは繊細なところがあるから、心配だったのよ」

「繊細……ですか」

「ええ。一年生の時の印象でしかないけど、字の書き方とか文章の構成とかみてるわかるのよ。あなたの書く字は本当に一字一字丁寧に書かれていたから良く覚えてるわ」

「字だけでわかるんですか？」

「大まかなところはね。だから、あんな衝撃的なことがあって、立

ち直れるのかすごく心配だったの。でも、もう大丈夫みたいね」

「はい。ありがとうございます」

寺尾はまた深々と頭を下げる。先生は話の経緯から安心したのか、手の平を温めるように紅茶が入ったカップを両手で包んで、肘をテーブルに乗せる。表情も少し明るくなりリラックスした感じだった。「学校の様子はどう？ 皆は元気かしら？」

「……はい。いつも通りです」

学校の話になって、寺尾の声のトーンが落ちる。悟られないように気をつけたつもりなのだろうが、明らかにマイナスの気持ちが見えてしまっている。もちろん教師としてたくさんの生徒を見てきた先生なら一目瞭然のはずだ。先生はそんな寺尾に気付いたのか、自然と話題を変えた。

「森黒君も元気そうで良かったわ。一年の時はいつも緊張した顔で毎日を過ごしていた印象があっただけど、ずいぶん柔らかくなったわね。寺尾さんの影響かしら？」

「いや……その……」

返答に困っていると横から視線を感じた。寺尾がまた嫌な視線をこちらに送っていた。変なことを言ったら承知しない、とでも言いたげな顔だった。全く、どうすりゃいいんだよ。

「ふふ、仲が良さそうね。一年のころが嘘みたいだわ」

「クロってそんなに酷かったんですか？」

落ち込んでいた寺尾が水を得た魚のように、話に食いついてきた。「酷くはなかったわ。とても真面目で一生懸命。ただ、それが過度になりすぎていたみたいで、いつも顔が強張っていたわね」

「へえ。クロの一年時代って、そんなだったのね」

思い出したくもない一年時代。周りについて行くのがやっとで、常に必死だった。同級生や教師達、あの二人から感じる見えないプレッシャー。毎日、何かしらの圧力を感じていた。寺尾はその時の僕のことを知らないようで、詳しく話を聞きたそうにしていたが、紅茶を飲むことで意思表示をして見せた。話すつもりなどある訳が

ない。もちろん、その時のことを知っている先生もその話を続けることはなかった。

「早いわね。もう、その頃から一年以上も経つんだから」

先生はため息をつきながら物憂げな表情になっていた。先生の手の内にあるカップから、優しげに立ち上っていた湯気は消えていた。「あの、私達そろそろ帰りますね。時間も遅いし、旦那さん帰ってきちゃうとお邪魔になっちゃうので」

壁に掛けられている時計を見ると、時刻は六時四十七分を示していた。大体の家庭では夕飯時。会社勤めの社会人も家に到着するぐらいの時間だろう。

「……そうね。まずはその話からしましょうか」

寺尾がコートを手に取り、立ち上がるうとしたところで先生がため息混じりにそう言った。

「いつかは皆に知れ渡ることだと思っていたわ。いつまでも隠しておくことは出来ないし、逃げ続けることは出来ないものね。それに、本当はあなた達のような年代にこそ話しておくべきことなのかもしれないわね」

先生は僕達に話しかけているはずなのに、決意を固めるために自分自身を説き伏せているようだった。カップに添えていた手を自分の膝の上に移動させ、拳を強く握り締めている。寺尾は持っていたコートを置き、ソファに座り直した。

「彼とは離婚したの」

ためらいながらも、やっとの思いで搾り出した言葉は悲しい色をしていた。僕も寺尾も予想はしていた。今までの先生の態度や雰囲気を見て、少なくとも良い話ではないなと思っていたが、その中でも最悪の結果だった。僕たちはその話に反応すら出来ず、ただ沈黙を保つだけだった。先生もそこで言葉が詰まったのか、話が途切れる。数秒の沈黙。僕にはその数秒がやけに長く感じられた。

「……原因は何だったんですか？」

意を決して寺尾が質問をぶつけた。先生は依然として俯いたまま

話し続ける。

「……彼、自分の高校にいる生徒と関係を持つてしまっていたの」

「関係つて……」

「教師と生徒という関係じゃなく、男女としての関係を持った、の方が正しいかしら」

「そんな！　じゃあ、その人はそれを隠したまま先生と結婚したつてことですか！？」

「いいえ。関係が始まったのは、私が産休に入つてすぐのことらしいの。打ち明けられたのはそれから一週間後」

「一週間も隠してたんですか！？」

「ええ。彼も悩んでいたみたい。打ち明けられた時は、彼も頭を抱えながら、どうしてこんなことをしてしまったのか、自分でも良くわからないつて言つてたわ」

「そんな！　無責任じゃないですか！」

「そうね。教師として大人として、良くないことよね。だから彼も、勇気を出して打ち明けたんだと思うわ。その生徒ともなんとか話をつけるつもりでいたみたいだから」

「それは、なんとかなつたんですか？」

「ううん。結局どうにもならなかつたわ。相手生徒の証言と彼の証言が食い違つたの。彼は自分から強要したことはないつて言つていたんだけど、生徒の方は先生から一方的に求められたとしか言わないの。親御さんも子供の言い分を全面的に肯定してて、学校に乗り込んで来たみたい」

「まさか、裁判とかになつたんですか？」

「いいえ。私も詳しい部分は教えてもらつていないから、どう言う話し合いがあつたのかはわからないけど、何故か裁判とか警察沙汰にはならなかつたわ。でも、学校側としても生徒の言い分を優先せざるを得ないから、彼の主張は誰にも受け入れられなかつたみたい」

「そんな……」

「どちらにしても、彼の軽率な行動が招いた結果なのよ。彼もそこ

は十分に理解していたわ。だから、彼は教師を辞めるということで責任の一部を取ることにして、私との離婚を決めたの」

「旦那さんからですか？」

「そう。自分の撒いた種で私を巻き込みたくはなかったみたい。彼の気持ちはわかっていたし、その結論に至るのは自然の流れだと思っただけだけど、その時の私は離婚を考えていなかったの。二人でなら乗り越えていけると思っていたから。でも世間の目は私達を離してはくれなかった」

「世間の目……ですか」

「ええ。インターネットの掲示板ってあるでしょ？ そこにね、彼の起こしたことが全部、詳細に書かれてしまったの。実名に始まり、住所や電話番号まで全部ね。その所為で、当時住んでいたマンションでは住んでいる人に迷惑をかけてしまったわ。いたずら電話がひっきりなしに鳴って、インターホンを何度も鳴らされたりすることもあったわ。酷いときには郵便受いっぱい誹謗中傷が書かれた紙が詰め込まれてることなんかもね」

「……」

「それでね、私……赤ちゃんを死なせてしまったの」

「えっ!？」

「……はつきりとした原因はわかっていないんだけど、たぶんそう言うのが続いて過度なストレスが溜まっていたんだと思うわ。流産だったの」

流産。聞き慣れない言葉だ。聞き慣れないだけで、聞いたことはあったし意味も理解していた。でも、まさか自分の知っている人がこんなことを経験するなんて考えたこともなかった。現実味なんて湧くはずもない。しかし、先生は実際に苦しんで悲しんでいる。これは現実なんだ。

「それで初めて、もう駄目だと思ったの。彼に、私はここでは生きて行くことが出来ないって伝えて、正式に離婚したわ。それが二ヶ月前ぐらいの話よ。一旦実家に戻って、最近ここに引っ越してきた

の

お昼にやっているドラマのあらすじを聞いているような気分だった。自分の結婚した相手が教え子と浮気。繰り返される誹謗中傷。我が子の死。もう、僕の頭で理解できる範囲を超えている。その場面に出くわしていないから当然だが、実際に起きた出来事とは思えず、ただ漠然と悲しんでいる先生が可哀相だという感想しか出てこなかった。

「……すみません。私、余計なこと聞いちゃって」

「いいのよ。さっきも言ったけど、色んなことを柔軟に吸収できる年代のあなた達だからこそ、こういう話は聞いておいたほうがいいのかもれない。今は理解できなくても良い。ただ、世の中にはこんなことも実際に起こるっていうことを頭に入れておけば、自分の立場になった時に良い解決策がみつかるかもしれない。例えばつからなくても、そういう経験をしている人が他にもいるっていう事実が、救いになる場合もあるんだから」

先生の言葉は力強かった。自分の身に起きた出来事を僕達に話すことで、先生の中でも一つの区切りをつけようとしているのかもしれない。

「私も最初は自暴自棄になっていたの。何にもやる気がおきなくて、何をしても生きていく実感がなかった。でもね、ある日私宛に手紙が届いたの。差出人を見たら私の生徒第一号からだったわ。私が大学生の頃近くに住んでいて、教師を目指すきっかけを与えてくれた子でね。当時は小学校五年生で、中学受験に向けて勉強に力を入れたいからって家庭教師を頼まれたの。親同士も仲が良くてね。その子が、どこかで私が産休に入ったことを聞いて手紙を送ってきてくれたの。昔話やら近況報告、色々書いてあったわ。高校に入っただばかりって書いてあったから、年齢的にはあなた達の後輩ね。それで、その手紙を読んでいる内に教師を目指していた頃の自分を思い出したの。そうしたら、まだ少しやっていけそうな気がしてね。とにかくまず行動を起こそうと思って、一人暮らしをしながら、あ

のスーパーで働き始めたの。あれからしばらく経っているし、この生活にもだいぶ慣れてきたから、心の方もだいぶ落ち着いてきたわ」

先生はそう言いながら僕と寺尾のカップをトレーに乗せて下げた。僕のカップはとうの昔に空になっていたが、寺尾のカップも空になっていた。

「おかわりはどう？」

先生は僕らの方を見ながら、電気ポットのスイッチを入れて再びお湯を沸かし始めた。先生がいる台所からはまだ紅茶の香りが漂っている。

「いえ。折角ですけど、私達この辺で帰ります。母も家で待っているので」

「そう。そうね、ごめんなさい気が付かなくて」

「いえ、元々いきなりお邪魔したのは私達のほうですから、謝らないてください」

寺尾は立ち上がると、僕に「帰るわよ」と指示するような視線を送ってきた。仕方なく、自分のジャケットを羽織り、鞆を持って立ち上がった。

「先生、今日はありがとうございました。紅茶、とってもおいしかったです」

「ええ。暗いから気をつけてね」

「大丈夫です。護衛がいますから」

寺尾が僕の肩を軽く叩く。寺尾にとって僕のポジションは部下から護衛まで、なんでもありのようだ。この労働環境なら、特別手当を支給してもらってもいいんじゃないだろうか。

「あ！先生、もし先生がよければ、また会ってもらえますか？」

「ええ、もちろん。いつでもいらっしゃい」

「ありがとうございます！それじゃあ、アドレス教えて頂けませんか？」

寺尾のアドレス交換が終わるのを待って、二人で先生の家を出た。

先生は下の入り口まで降りてきて、僕らの姿が見えなくなるまでずっと見送ってくれていた。

帰り道。寺尾と二人で来た道に戻る。寺尾の家は先生の家とは逆方向にあるようで、一旦駅まで戻ることになった。寺尾の先導というのがどうにも気に食わなかったが、初めての土地を一回歩いただけで覚えられるほど僕の頭は良く出来ていない。寺尾が駅まで戻ると言い出したときには少しほっとしている自分がいた。

「ねえ、クロ。私やっぱり許せないわ」

しばらく黙って考え込みながら歩いていた寺尾がぽつりと呟いた。嫌な予感しかしない。

「……何が？」

「先生の元旦那さんがした浮気のことよ」

「……でも、もう離婚したんだし」

「そうじゃなくて、浮気相手の生徒が許せないの！」

「……何で？」

「だって、その生徒は結婚の事実を知っているのに、関係を持つたってことでしょ！？有り得ないじゃない。もしかしたら、好きな気持ちを抑えられなくて暴走しちゃったのかもしれないけど、それにしても常識がなさすぎるわ」

寺尾の声からは静かな怒りが感じられた。これは悪いパターンだ。僕が寺尾と出会った時に良く似ている。

「調査の必要があるわ」

やっぱり。こんなことを言い出すんじゃないかと予想していたが、その通りだった。寺尾の顔がやる気で満ち溢れて行く。

「決めたわ。私達でその生徒を探し出しましょう。そして、先生の目の前で謝罪させるの。そうでもしないと、先生が可哀相だわ」

「……それはちょっと」

「何！？クロは先生が可哀相だと思わないの！？」

「いや……そうじゃないけど」

「じゃあ決まりね！ 明日の放課後から調査開始よ！ わかった？」
寺尾の勢いに押し切られそうになったが、少し冷静になって考え
てみた。状況は田本の時と同じだ。少ない情報と確証のない話から
寺尾は自分の想像で足りない部分を補い、ストーリーを作り上げて
いる。田本の時はたまたまそれが的を射ていたから良かったが、も
しそれが事実と全く異なっていたらどうなっていただろうか。今回
も寺尾の予想が当たっているということが有り得るだろうか。寺尾
にブレーキを掛けられるのは僕だけだ。田本の時は僕の勇気がなく
て寺尾を止めることが出来ず、振り回されるだけだった。あのこと
を僕は後悔していたはずだ。あそこで止めていれば別の解決方法が
あったかもしれない。身を危険に晒すこともなかったかもしれない。
このまま今回も流されるままであれば、僕はあの時から何も成長し
ていないことになる。寺尾のためにも、僕自身のためにも、ここは
やめさせるべきじゃないだろうか。
「でも、それは大きなお世話じゃ……」
「じゃあ、私先に帰って色々下調べするから！ あそこに見えるの
が駅だから、もう大丈夫でしょ？ また明日ね！」
意を決して発言したものの、既に寺尾は僕の数メートル先まで駆
け出していた。僕の声が届くはずもなく、寺尾はそう言い残して走
り去ってしまった。

過ち？

翌日の放課後。僕は自分の席に座り、昨日言えなかったことを伝える覚悟で寺尾を待っていた。教科書を鞆に詰めて、自分の席から一歩も動かず寺尾を待ち構える。時計の秒針が時を刻むことに僕の緊張も増していった。教室内はいつもと変わらない。楽しいげな声で構成されたざわめきが充満している。秒針が文字盤を一周し、分針が重い腰を上げて時間を押し進めたところで、楽しいげなざわめきが恐怖の静寂へと変わった。開け放たれる扉の音。静かになる教室。逃げ出すクラスメイト。予告どおりやって来たようだ。

「まずは場所を変えましょ」

頭の後ろから聞こえてくる声に反応して、すぐに鞆を手に取り立ち上がる。振り向くと、教室を出ようとする寺尾の後姿が目に入った。案の定、教室にいたクラスメイト達は廊下に避難して、僕と寺尾がいなくなるのを待ちわびている。僕も寺尾の後を追って教室を出た。どこに行くのかは廊下を進む寺尾の姿を見て理解できた。開かずの間、生徒指導室へと向かう。

「教室に行くたびにあんなことされるのは面倒臭いわね。今度からここで待ち合わせましょ」

椅子に座るなりため息をつきながら寺尾が言う。昨日換気をしたはずの生徒指導室はまだ埃っぽさが残っていて、僕は教室に入るとまず窓を全開にした。今日も天気は快晴。その所為か気温もまだ暖かい。開け放った窓からは心地良い風が入ってくる。僕は外を眺めながら決意を固める。言うなら今しかない。

「あ……あのさ。調査のことなんだけど」

「……」

返事がない。珍しく僕から話し掛けているのだから、確実に何かしらの反応があると思っていたが、完全に無視されている。不思議

に思い振り返ってみると、寺尾は机に頬杖をついて、目の前にある壁をじっと見つめていた。心ここにあらずと言った感じだった。

「あつ、ごめん。聞いてなかった。何？」

無視したと言うよりは、本当に聞いていなかったようだ。寺尾は眠そうな目で、頬杖をやめて机に体を投げ出した。全体的にだるそうだ。

「ネットを使って徹夜で色々調べてみたんだけど、ほとんど何にもわからなかったのよ。元旦那さんについての酷い噂や書き込みはほとんど出てくるのに、相手である生徒に関する情報はさっぱり。そんなんだから、探している間に疲れてきちゃって。あんまり寝てないのよ」

両腕を伸ばして机に突っ伏したまま話す寺尾の声はこもっていて聞き取りづらかった。寝不足で声もあまり張れないのだろう。でも、これはチャンスだ。このまま情報が少なすぎて調査に入れない状況に持って行ければ、寺尾を止めることができる。水津野先生もやっとな波風を起こしてしまつては、過ぎってしまったことを掘り返して余計な波風を起こしてしまつては、先生の努力が無駄になってしまう。ここは何としても諦めさせなければいけない。これは僕の役目だ。

「やっぱり調査はやめよう。何もわかつてないんじゃない？」

「そうよね。ネットでの調査には限界があるわ。そもそも私、あんまりパソコンとか使わないからよくわかんないし。自分達の足を使つて地道に情報を集めるしかなさそうね」

「いや、そう言うことじゃなくて……」

「何よ。じゃあ、どう言うこと？」

体制を変えた寺尾は脱力するように机から両腕を下ろし、横顔で机を受け止めながらこちらを見ている。疲れている上に僕が何を言いたいのかわからず苛立っているみたいだ。

「その、だから……」

「もう！ 言いたいことがあるならはっきり言ってよ！」

ここで怖気づいちゃいけない。言わなきゃ。言うんだ！

「余計なお世話だ……と思う」

言葉が詰まりかけたけれど、なんとか最後まで言い切った。寺尾の目を見て言うことは出来なかったが、それでも僕の意見を主張できたはずだ。しかし、言い終わった後になって、自分の無計画ぶりに気が付いた。寺尾のことだ、どうせまた僕の意見には難癖つけて否定するに決まっている。そうなった場合、どうやってそこから寺尾が諦めざるを得ない展開に持っていかうか、全く考えていなかった。たぶん、考えている間に話が進められて止められなくなるだろう。余計なことをしたのは僕じゃないか。まずい。

「……そうかもね」

意外な答えが返ってきた。寺尾は机から身を起こし、髪の毛を整えながら淡々とそう言った。「そんなことはわかっている、当然でしょ?」と言われたような気がした。

「先生はもう落ち着いているって言っていたし、今更その生徒に謝らせたってどうにもならない。それはわかってるけど、クロは納得できるの?」

「……何が?」

「元旦那さんと生徒の意見が食い違っていたって先生も言っていたじゃない。結局、先生はその真相を知らないまま、この事を忘れようとしているのよ。二人で乗り越えようとまで考えていた相手が嘘つきのまま終わるなんて……悲しすぎるわ」

寺尾は今にも泣き出してしまいそうな顔をしていた。俯いて視線を床に落としている。窓から吹き込んできたそよ風が、寺尾の長い髪をなびかせていった。

「昨日はちよつと興奮してたから、謝罪させるなんて言っただけど、まず私はその真相を確かめたい。もし、それで元旦那さんが悪いのなら、それ以上調査するつもりはないわ」

「……逆だったら?」

「そうね……それは、その時になったら考えましょ」

なんとなく不安の残る回答だったが、寺尾の言っていることにも

賛同できる部分がある。僕もできることなら先生の悲しい顔は見たくない。

「どう？ 協力してもらえる？」

「……わかった」

「決まりね。まあ、拒否したところで強制的に調査には参加してもらう予定だったけど」

「……何だよ、それ」

「ふふ、冗談よ。早速出掛けましょ。街に行けばその高校の生徒がいるだろうから、片っ端から聞き込みよ！」

「……何て高校？」

「えっと、確か……東幡高校ね」

街中に向かうバス車内で今ある情報の整理と今後の予定を話し合った。と言っても、僕は何の情報も持っていないので、寺尾の話を聞いているだけだった。寺尾の調べでわかったのは、東幡と言う高校で起きた事件だと言うこと、生徒は僕らと同じ二年生だということ、水津野先生の元旦那さんは巖元と言う名前であると言うこと、巖元は地理の教師であったと言うことだけだった。

東幡高校。名前は聞いたことがあった。開発の対象に入っていない街外れに校舎を構えていて、僕や寺尾が通っている幡ノ橋よりラックは下。僕の知っている限りでは、滑り止めとして受験するか、中学で成績の良くない生徒が行くような高校だったはずだ。聞こえてくる噂もあまり良いものではない。警察に補導された少年が通う高校が東幡だったりすることは多く、学校においても窓ガラスが割られたり、放火未遂があったり、と物騒なものばかりだ。そんなこともあって、寺尾は極力ネットで得られる情報を優先したのかもしれない。寺尾のようなお金持ちの家とは縁のない高校だろう。聞き込みのためとは言え、話しかけるのも怖いはずだ。僕だって出来れば関わりたくない。

「手分けするのも面倒だから一緒に聞き込みをしましょう。相手も

二人組みの方が警戒しないと思うから」

「どうやって見つけるの？」

「制服で見つけるに決まってるじゃない」

確かに、良く考えればそれしかないだろう。一番確実に手っ取り早い方法だ。他校の制服に一切の興味がなかった僕は東幡の制服がどんなデザインなのか知らなかったが、寺尾が詳しく教えてくれた。男子は紺の学ラン、女子はセーラー服、と言ったオーソドックスなものを採用しているらしい。特に女子のセーラー服は白地に水色の細いラインが入ったもので、制服の人気としては高いそうだ。この学区内で学ランとセーラー服を採用しているのは東幡だけなので、見つけるのは簡単だそうだ。

「闇雲に探しても仕方がないから、駅前に張り込みましょう。歩き回るより効率が良いわ」

乗っているバスの終点であるJR幡ノ橋駅前で聞き込みをするようになった。街中心部にある一番大きな駅。常に混雑していて、学生の利用者も多い。東幡の生徒がいる確率も高いはずだ。

駅に到着すると、寺尾はまず腰を落ち着けられる場所を探し始めた。幡ノ橋駅前は街の中心部でありながら大きな広場を設けている。駅ホームのある建物入り口を正面にして、右にはバスが二十台は停まれそうなバスターミナルがあり、左には高級そうなホテルが天高くそびえ立っている。入り口前にはタクシー乗り場が設けられているが、そこを除いても、フットサルが四試合同時に出来そうなほどの広場が続いている。広場中央にはよくわからないモニUMENTが設置されていて、待ち合わせの目印としてこの街の人間に活用されている。叫び声を上げている人間の顔のように見えることから「絶叫像」とよばれているらしい。正式なタイトルは誰も知らないんだろう。

駅建物内には地下鉄の駅も併設されているため、広場には地下へと下りる連絡通路の入り口も数箇所出来ている。その地下連絡通路

入り口の中でも一番大きなものは、外観が円形をしていて、その円の縁がベンチになっているため一番人気の入り口となっている。寺尾も最初からそこを狙っていたようで、真直ぐにベンチを目指す。なかなかの人気スポットなのか、ベンチに腰かけている人は多く、広々と使うことは出来ないが、広場を見渡すには丁度良い場所が空いていた。地下連絡通路の全てを見る事は出来ないが、JR入り口正面を余すことなく視界に納められる。まずはここに座って東幡の生徒を探すことにした。

駅前で聞き込みを開始してから三時間が経過した。いまだに有力な情報は得られていない。東幡の生徒を見つけては声を掛け、以前に起きた教師と生徒の不倫について聞いているが、聞く度に皆嫌そうな顔をして何も知らないと答えるだけだった。情報を持っていそうで、こちらの問いにもしつかりと答えてくれそうな真面目タイプの生徒を選んで声をかけているのに、当たりは一つもなし。ただ時間だけが虚しく過ぎて行くだけだった。

「どうして皆ちゃんと答えてくれないのかしら。あの態度は絶対知っているはずなのに……」

僕と寺尾は疲れ果ててベンチに座り込んだ。寺尾は文句を言いながら携帯の画面をずっと眺めている。僕は特にすることもないので通り過ぎてゆく通行人を何となしに眺めていた。こうやって見ていると、学校の制服にも色々あるものなんだなと、そのデザインの多様さに驚いてしまった。色合いもさることながら、ブレザー一つにとっても学校によって微妙な違いがあり、それぞれの着こなし方がある。そんな中でも唯一学ランとセーラー服の東幡高の制服は、寺尾に言われた通りよく目立った。どんなにたくさんの人が歩いていても、あの制服だけは簡単に見つけることが出来る。シンプルな配色とデザインがカラフル過ぎる他の制服たちの中では引き立って見えるのだらう。今、こちらに向かって来ている女子高生二人も東幡の制服だ。

「ねえ、あんたらさつきからうちの学校の人間にばかり声掛けるけど、何してんの？」

気付けばその女子高生の一人がすぐ目の前にまで来ていて、こちらに話しかけてきた。見ると、二人とも完全に僕と寺尾が避けて通っていた部類の生徒だった。全国统一の標準鞆のようになっていた紺の細長い学生鞆を左肩にかけて、右手にはもう何のストラップが付いているのかわからない程ぐちゃぐちゃになった携帯電話を持っている。スカートはぎりぎりまで短く、僕と寺尾を少し馬鹿にしたような表情で眺めている。右側にいる方は前髪を七三で分けて、まとめた後ろ髪を右肩から垂らしていて、左側にいる僕達に話し掛けてきた方は、茶髪にパーマを掛けた髪がトルネードしていた。同じような化粧に、同じような制服の着こなし方で、髪型でしか区別が出来ない。ギャルというジャンルで一周りにしてしまっても問題ないであろう二人組みだった。

寺尾もその声に気付いて顔を上げたが、二人を見た瞬間に嫌そうな顔をしたのは言うまでもない。どうやらこの二人は僕達のことをしばらく見ていたようで、自校の生徒にしつこく話しかける僕らに興味を持って理由を聴きに来たようだった。

「えっ、何？ 無視？ あり得ねえ」

「返事ぐらいしろよ」

二人は反応のない僕らを見て、汚い言葉遣いで笑っている。その嫌みっつたらしい笑いは、僕を蔑む寺尾より何百倍以上の破壊力を持っていた。寺尾も同じように苛立ったのか、怒った声で返答する。

「何か御用ですか？」

「だから、さつき言ったじゃん。うちの生徒に話しかけて何やってんのって聞いてんの」

「……別に、何でもいいじゃないですか」

「うちらには教えられないっての？ マジそれ差別じゃね？」

「その制服幡ノ橋っしょ？ マジ幡ノ橋ってお高くとまってんだ。

最悪」

寺尾の怒りがこもった返答に気分を悪くしたのか、東幡の二人も怒り始めた。張り詰めた空気が両者の間に流れる。駄目だ。ここで問題を起こしてしまつたら、調査どころではなくなつてしまつ。そんな僕の焦りとは裏腹に寺尾は二人を挑発するように続ける。

「じゃあ、あなた達に話したら私の疑問は解決するんですか？」

「はあつ？ 何むきになつてんの？ 馬鹿みたい」

「むきになつている訳ではないです。私はあなた達が私の疑問に答えられるのかどうか聞いているだけですから。勘違いしないで下さい」

「何？ そんなの聞いてみないとわかんないから！」

「じゃあお教えします。私達は三ヶ月ぐらい前にあなた達の高校で起きた教師と生徒の不倫について調べているんです。今まで聴いた方は全員何も知らないそうなんですけど、あなた達は知っていますか？」

東幡の二人は寺尾の質問を聞くと、顔を見合わせて大爆笑し始めた。一々腹の立つことをする奴らだと思つたが、良く見るとこの爆笑は僕らを馬鹿にすると言うよりは本当におかしくて笑っているように見えた。

「あんたら、そんなことをあんな冴えない奴らにずっと聞いてたわけ？」

「マジうける！ お腹痛い！」

二人の爆笑は止まらない。流石の寺尾も恥ずかしくなつたのか、立ち上がり大きな声で文句を言い始めた。

「何なのよ！ 何がそんなにかしいのか説明しなさいよ！」

寺尾の必死な姿を見てやっと二人も笑いを抑え始めた。先に笑いが治まつたトルネードパーマの方が呆れた顔で話し始める。

「あんたら聞く相手間違つてるから。そついう話ならうちらみたいなのに聞かなきゃ」

「知つてるの！？」

「館花のことでしょ？ うちの学校なら誰でも知つてるよ。皆関わ

りたくないから話さないだけだから」

「関わりたくない？ どうして？」

「あいつさあ、先生と不倫した後も街で色んな男と遊んでんのよ。なんかやばい人達とも付き合いあるらしくって、今じゃ教師ですら関わろうとしないんだから」

「お願い！ 詳しく教えて！」

「あはは、あんたら変なやつらだね。んじゃ、マックでも行く？」

館花凜。それが僕たちが探していた生徒の名前だった。

市立東幡高等学校二年三組。巖元はこのクラスで地理を教えていた。わかりやすい授業と端正な顔立ちで女子生徒からは絶大な人気があつたそうだ。館花もそんなファンの一人だったらしい。館花が巖元と関係を持ち始めたのは、時期的にも水津野先生が産休に入つたところで間違いない。どちらから声を掛けたのかは二人にもわからないらしいが、館花から言い寄つたに違いないと力説していた。それから一週間、毎日のように二人で街中を歩いている姿を目撃しているらしい。そんなことで、校内にも噂は広まり立場の悪くなった巖元から全てを告白したのが、事の発端だったようだ。

「館花さあ、巖元先生に相当惚れてたみたいだから、かなり強引なことしたと思うよ」

僕たち四人組みはそれぞれの注文した物を手に駅前のマック二階、禁煙席を陣取つた。店内は夕方の時間帯だけあつて混雑していて、ほとんどが学生だった。僕らもその中に混じつて、壁際に一つだけ空いていた席を確保し、フライドポテトやハンバーガーをつまみながら、二人の話を聞いていた。

「強引なことつて、例えば？」

「そこまではわかんないよ。でも、巖元先生つて生徒に手を出すような軽い人じゃないから、やっぱり館花が押し切つたんだと思う」

「だよねえ。逆に巖元先生そついうの苦手っばいし」

「ふうん。その館花さんつて今はどうしてるの？」

「今？ どうもしてないよ。相変わらず学校来てもサボるか早退の繰り返し。暇さえあれば街で男釣ってんでしょ？」

「そう言えばうち、この前五十代くらいのおっさんと歩いてるとこ見たよ」

「マジ！？ どれだけ守備範囲広いの」

トルネードと七三は大いに盛り上がっていたが、寺尾は真剣な顔で考え事をしているようだった。話の中に何か引っかかることがあるんだろう。突っ込みどころは多々あるのは間違いない。

「その館花つて子は、相当可愛いよね」

寺尾は悩んだ顔のままポツリと呟いた。それを聞いたトルネードは目を輝かせてさらに風力を増した。

「それがさ！ 全っ然可愛いくないの！！」

「えっ、だって毎日のように色んな男の人といるんでしょ？」

「そう！ だから不思議なんだって！ 何であんな奴に男は群がるんだろうねえ」

「ちよつとブスな方が好きなんでしょ？ うちの彼氏もそんなこと言ってたし」

「え？ それじゃあ、あんたのことブスって言われてるようなもんじゃん」

「ホントだ！ 気付かなかった！ 何か今になってムカついてきた」

「ははは！ 遅いから！」

何だか話をするたびに、一々別の方向へとずれていってしまふ。

もうこの二人から聞きだせる情報はないかもしれない。この二人も結局のところはどちらから誘ったのか、確実なところはわからないのだから、これ以上話を聞いていても無駄だろう。

「他には何か知らない？ どんな些細なことでもいいから、教えて欲しいの」

「ううん。あんなんか知ってる？」

「うちもそれぐらいしか知らない」

「だよねえ。あんたらもつと知りたいんだったら、いつそのこと本

人に聞いてみたら？」

「え！？ 連絡取れるの！？」

「連絡取らなくても、このぐらいの時間なら夜の男捕まえるので絶叫像のところにいると思うけど」

「そうそう。男との待ち合わせいっつもあそこだかね」

「うちの制服着て一人で携帯いじってる奴いたら、百パーあいつだと思つよ」

「本当！？ 本当なのね！？」

「嘘だと思っんなら言ってみなよ。まあ、どうなってもうちらは知らないけどね」

「止めといた方が身のためじゃない？」

二人の面白半分の忠告が耳に届く前に寺尾は席を立っていた。鞆を持って駆け足で階段を降りている。

「クロ！ 早く！」

全く、少しは落ち着いて行動できないものだろうか。自分のトレイぐらい下げたってバチは当たらないだろうに。僕は寺尾と自分のトレイを一まとめにして、自分の鞆を背負ってから席を立つ。急いで寺尾の後を追うつもりだったが、忘れちゃいけないことを思い出して少し立ち止まる。

「あの、あ……ありがとう」

「いいよ、気にしないで。こっちも良い暇潰しになったし」

「早く行かないと、彼女に置いてかれるよ？」

彼女なんかじゃないと否定しようと思ったが、急がなければ本当に寺尾を見失ってしまいそうだったので、軽く会釈をしてからトレイを下げて僕も店を後にした。外に出ると寺尾は丁度良く店の前にある信号で捕まっていた。そわそわしながら信号を待つ寺尾の先には、数え切れないほどの車と人だかりが流れていて、それを見下ろすようにライトアップされたJR幡ノ橋駅が堂々と身構えていた。ほっとして寺尾の傍に近づこうとした時に運悪く信号が青へと変わる。F1に出場するマシンのようにスタートダッシュを決めた寺

尾はすぐに人ごみの中へと消えていった。向かう場所はわかっているとは言え、遅れたらまた文句を言われるに決まっている。嫌々ながら、僕も人ごみの波に向けて駆け出した。

過ち？

僕が絶叫像に辿り着いた時には、寺尾はそれらしい人物に声を掛けていた。ベンチの代わりには丁度良い高さである絶叫像の台座に座って、必死に携帯電話を操作している水色のラインが入ったセーラー服。トルネードと七三が行っていた通り、東幡の制服を着た人物は彼女だけだった。毎日違う男性と歩いているとは到底思えない、どこにでもいそうな、地味で目立たない女子高生だった。僕は寺尾の少し後ろに付いて二人の会話を見守った。

「あなたが館花さん？」

「……だったら何よ？」

「ちよつと聞きたいことがあるんだけど、良いかしら？」

「うち、今忙しいの。あんたみたいな相手のしてる暇ないから」

取り付く島もないと言った感じた。館花は僕らを見ようとせせず携帯に噛り付いている。何をしているのかわからないが、親指が目にも留まらぬ速さでダイヤルキーを叩いていた。

「そんなに時間は取らせないわ。いくつか質問に答えてもらいたいだけだから」

「ああ、もう！ うるさい！ ウザいから！」

館花はようやく携帯から目を離し、こちらに顔を向けたと思えば、話し続ける寺尾を睨みつけ怒鳴り始めた。顔を歪ませて不快感を露にしている。軽いヒステリーを起こしているような感じだった。

「頭悪いんじゃないの！？ 忙しいって言ってんじゃん！ あんまりしつこいと彼氏に言ってあんたのこと回させるからね！」

館花はそう言い放つと立ち上がり、駅に向かって歩き始めた。僕はこの時点でもう諦めていた。こいつとは完全に住んでいる世界が違う。例え脅しにしたって「回す」という言葉を平気な顔で口にする人間と仲良く情報交換ができる訳がない。しかも、話の内容は館花を責め立てるようなものばかりだ。話しかけただけでこんなこと

になるんだから、本題に入れば何をしでかすかわかったものではない。関わりたくない。関わってはいけない人間なんだと内心怯えていた。寺尾も同じだろうと横顔を覗いて見たが、怯えている様子はなかった。むしろ冷静に相手を観察し、どうやって攻め落とそうかと考えている策士の顔に見えた。

館花が僕たちの横を通り抜けたところで、タイミングを計っていたかのように寺尾が言葉をぶつける。

「巖元先生の奥さんの話、聞きたくないの？」

館花の足が止まる。ゆっくりと振り返り、不安と不思議と好奇心が入り交ざった、複雑な表情を送りつけてきた。

「……何言ってるの、あんた」

「頭悪いんじゃないの？ 言ったじゃない、巖元先生の奥さんの話、聞きたくないのって」

異様な雰囲気と見慣れない光景に頭が麻痺してしまったのか、二人の間に火花が散っているのがはつきりと見えた。静かではあるが相手を刺すような鋭い火花が一筋、お互いから放たれて中間地点で衝突し激しく煌いている。さっきの仕返しのもりだろうか。寺尾の口調には傲慢さがこれでもかと言うぐらいに詰まっていた。

「マジうざい。調子乗りすぎだから」

「でも、立ち止まったってことは興味があるってことでしょ？」

館花は答えない。ひたすらにこちらを睨んでいるだけだ。寺尾もそんな館花から目を離さずに睨み返している。しばらく睨み合いが続いたが、終止符を打ったのは館花だった。

「いいよ。ついて来て」

館花は再び駅に向かって歩き始める。寺尾はその後を躊躇いもなく追い始める。僕は慌てて寺尾の横に付き、館花には聞こえない音量で話しかけた。

「……まずいよ」

「何が？」

「だって、さっき彼氏がどうとかって……」

「ああ、あれね。あんなの単なる脅しじゃない。色んな男の人と関係を持つているって言う時点で彼氏なんているわけないし、本人が彼氏って勘違いしてるパターンよ。出来るわけないんだから、怖がる必要なんてないわ」

寺尾は自信満々にそう言い放ったが、僕はまいち信用できなかった。本当にただの脅しなのだろうか。ついて行った先には、実は彼氏が待ち受けていて酷い目に合わされるなんてこともあるんじゃないだろうか。相変わらず、悪い想像ばかりが頭の中を駆け巡る。でも、僕には今の寺尾を止めることができない。僕は覚悟を決めて、逃げ道だけは確保できるように周辺の道路構造を入念にチェックしながら歩くことにした。

館花は駅のホームがある建物の中に入ったが、立ち止まらずにそのまま建物内を通過し、広場とは反対側にある出入り口から外に出た。建物の丁度裏側に当たるその場所は、すぐ近くに幾つものビルが建っていて、道も細く先程まで話していた広場とは正反対の景色が広がっていた。まさか、この無数にあるビルの一つに連れて行かれるんじゃないかと不安になったが、館花は出入り口を出てすぐの歩道を右に曲がり、JRの線路に沿って歩き始めた。そして、しばらくもしない内にまた右に曲がり、高架下にあるやけに広い空間へと歩いて行った。近くに大きな看板が掲げられていて、そこに書かれていたのは三十分で百五十円と言う文字だった。近くには黄色で染め上げられた長いポールも設置されている。こんなところにコインパーキングがあるのは知らなかった。館花は薄暗いコインパーキングの中を奥へと進み、一番隅の方にあつたベンチに座った。何故こんなところにベンチがあるのか不思議でしようがなかったが、そのベンチは薄気味悪い高架下に異様なほど馴染んでいた。僕と寺尾はベンチに座らずに、館花の前に少し距離を取って立ちながら話をすることにした。

「んで？ 巖元先生の奥さんがどうしたっての？」

館花が足を組んで偉そうに問いかけてくる。自分のことを女王様

か何かと勘違いしているような態度だ。

「それはあなたが私の質問に答えてくれたら教えるわ」

「はあ？ あんたがその話をするって言い始めたんでしょ?!」

「違うわよ。私たちの目的はあくまであなたが質問に答えてくれること。その交換条件として奥さんの話をすると言ったに過ぎないわ。勝手な解釈で話を進めるのはやめて」

「はあ？ マジ意味わかんねえし。あんた何様？」

「何様でもなんでもないわ。私ただ質問に答えて欲しいだけ。それ以上でもそれ以下でもないわ。まあ、あなたが質問に答えたくなくて奥さんの話も聞きたくないと言うのなら強制はしないわ」

館花としては、先に仕掛けることでうまいこと自分の聞きたいことだけ聞いてしまおうと思ったのかもしれないが、寺尾には通じなかったようだ。勢いで押し通そうとする館花を冷静に受け流す寺尾後が続かない館花は黙りこくってしまった。寺尾はそんな館花を真直ぐに見据える。

「……何が聞きたいのよ」

「答えてくれるのね？」

「いいからさっさとしてよ！ 何なの!？」

寺尾は間を空けて、一つ一つの言葉をしっかりとぶつけるように館花へと問いかけた。

「巖元先生との関係を持った日、誘ったのはあなたの方？ それとも巖元先生が無理矢理誘ってきたの？」

館花は質問を聞いて一瞬動きが止まった。寺尾と僕を交互に見てきよとんとしている。

「それだけ？ そんなことが聞きたかったっての？」

「そうよ。正直に答えて」

突然、館花は大げさに噴出して笑い始めた。まるで漫画のキャラクタ―がやるように、口から唾と一緒に空気を吐き出し、汚い音を響かせながらげらげらと笑い始めた。夕方に会ったトルネードや七三もそうだったが、この学校の生徒達は人の質問にはまず笑って答

えるように教育されているのだろうか。失礼かつ下品極まりない。
「あんたらそれ知ってどうすんの？ 何も得しないじゃん。意味わかんねえ」

「そうね、得はしないと思う。でも、私は真実が知りたいの。それだけよ」

「真実が知りたい？ うわあ。あんた偽善者つてやつ？ 正義感ぶつててうざいから、それ」

「あなたに何と思われても構わないわ。それよりいい加減、質問の答えを聞かせてもらえろ？」

「さあねえ。忘れちゃった、そんな昔のこと」

館花は明後日の方向を見ながら足を組みなおし、僕たちを小馬鹿にするようにふざけた口調で答えた。

「……そう。じゃあ、あなたから誘ったってことでいいのね」

「はあ！？ 何でそうなの！？」

「もし巖元先生から強引に求められたのなら、そんな風にはぐらかさないでしょ？ それは、私から誘いましたって答えてるようなものじゃない」

「ち………違うし！ 何言ってるの！」

「じゃあどう違うの？ 納得のいく答えを聞かせてよ」

館花はまた黙る。怒りを顔に滲ませているが、言い返すことが出ずずにいららしていた。この勝負は寺尾の完全勝利と見ていいだろう。何の考えもなく適当に答えた館花は墓穴を掘ってしまった。

もうこの後はどんなに話を続けても嘘の上塗りにしかならない。館花がどういった態度に出るか見ものだ。

「はあ、ったく。そうよ、うちから誘ったのよ」

あっさりと開き直った。しかもふてぶてしく。

「どうして、どうしてそんなことを………」

「どうして？ そんなのやりたかったからに決まってるじゃん」

「やりたかった！？ それだけの理由で！」

「だってさあ、あいつ背は高いし、金持ちだし、教師の中ではイケ

メンだから、うち以外にも狙ってる奴多くて大変だったんだから」
「先生には奥さんがいて、妊娠もしてたのよ！？ 知ってたでしょ！？」

「当たり前じゃん。でも、そんなのうちに関係ないし」
「関係ないことないでしょ！？」

「うるせえな。どっちにしたってうちの魅力に負けて最後までやっちゃったあっちにも責任あるし。うちばっかり非難されるのおかしくない？」

「馬鹿なこと言わないで！ あなたのどこに魅力があるって言うのよ！ ふざけて誤魔化すのはやめて！」

「ふざけてないし。あんたみたいな芋女にはわかんないから。うちがマジになったらどんな男でも見つめるだけで落とせるんだから」

館花はそう言うのと立ち上がり、僕の真横までやってくると、肩に手を回して体重を預けてきた。右手で僕の髪の毛をいじりながら挑発するように寺尾に話しかける。

「なんなら、あんたの彼氏で試してみようか？ それでうちの魅力も証明できるし」

「やればいいじゃない。クロはそんなはったりにはひっかかるような男じゃないわ。後、彼氏でもないし」

「そう」

館花はにやりと笑うと、僕の目の前に回りこんで両手を握ったまま僕の眼球の奥に侵入してくるかのように真直ぐ見つめてきた。僕は恥ずかしさから目を逸らそうとしたが、視線が合った瞬間に不思議と目を逸らすことができなくなっていった。釘付けになるところはこう言うことなのだろう。さっきまで何の興味も覚えていなかったのに、館花の顔に引き込まれて行く。

なんだか眩暈もしてきた。思考が鈍って行くのを感じる。何も考えられない。頭からつま先まで力が抜けて、ふわふわと飛んでいきそう。体温が上がっている。手の平が少し汗ばんできた。脈と呼吸が早くなる。急にどうしたんだ？ 僕の体はどうなっているんだ

？ 何も考えられない。

「馬鹿馬鹿しい！ 何が証明よ！」

寺尾の怒号と共に意識が戻って来た。靄がかかったような視界はクリアになり、歪んでいた周りの情景がはっきりと見て取れる。寺尾が僕と館花の間に割って入って来ていた。目の前には寺尾の後頭部越しに館花の勝ち誇った顔が映っていた。

「何ムキになつてんの？ 彼氏じゃないんでしょ？」

「そうよ。でもそれとこれとは話が別よ。これのどこが証明だつて言うの？」

「見りゃわかんじやん？ そいつ息荒くして、汗流して、めっちゃ発情してるし。マジキモいから」

寺尾は振り返って僕のことを睨みつける。説明を求めるような視線だったが、残念ながら僕にもよくわからない。自分の体が何故こんなことになつてしまったのか、全く理解できなかった。館花が言っていたように、僕は彼女の魅力にやられてしまったんだろうか。呼吸や脈は落ち着いてきたが、手の平に残った汗はまだじんわりと皮膚を濡らしている。

「もういいっしょ？ さつきも言ったけど、うち忙しいから。もう二度とうちの前に現れないでね」

館花はそう言うと、来た道に戻るためコインパーキングの出入り口に向けて歩き出したが、寺尾がその行く手を阻む。案の定、館花は寺尾を怒鳴りつけた。

「なんだつての！？ うぜえよ！」

「まだ話は終わってないわ！」

「はあ？！ てか、元々こっちはお前に話しなんてないんだけど！」

「あなたになくても私にはあるのよ！」

「マジで意味わかんないし！ うちにどうしろつての！？」

「謝って」

「はあ！？ なんであなたに謝んなきゃいけないわけ！？」

「私じゃないわ。巖元先生の奥さんに謝って」

「マジ、本気で意味わかんないんだけど。あんた頭いかれてんじゃないの？　なんでうちがそいつに謝んなきゃいけないの!？」

「あなたがその人の人生を滅茶苦茶にしたからよ」

「そんなの知ったこっちゃないんですけど!」

「じゃあ教えてあげるから座んなさいよ」

館花は一瞬不満げな顔をしたが、体を九十度回転させて勢い良くベンチに座り直した。勢いが良すぎた所為か、みしりとベンチが悲鳴を上げる音が聞こえた。

寺尾は館花が座ってからゆっくりと話し始めた。僕と寺尾が水津野先生から直接聞いた話しを一つ一つ、丁寧にわかりやすく、脚色なしに有りのままを話した。寺尾の演技力は相変わらず大したもの、水津野先生がどれほど苦しんだか、どれだけ悩んだか、どんなに悲しんだか、それら全てが伝わるように感情を込めて話し続けた。気を緩めたら聞いているこつちが泣いてしまいそうだ。先生のやつれきった顔が頭に浮かぶ。僕達に心配をかけないようにと、懸命に笑顔を作って気丈に振舞っていた先生のことを考えると胸が痛んだ。そんな僕とは対照的に館花は寺尾の話を不機嫌そうに聞いていた。まるでつまらない授業を無理矢理聞かされている不良生徒だ。それから寺尾の話が終わるまでずっと、館花の態度は変わらなかった。

「奥さんの話は以上よ」

「ふうん、そう。で、何でうちが謝んなきゃいけないわけ？」

これには流石の僕も頭にきた。寺尾の話を聞いていたなら自分が取った行動がどんな結果を生み出したのかわかるはずだ。なのにこいつは何も理解していない。

「あなたは自分の無責任な行為に対して何にも思っていないの？」

「てか、無責任なのはうちじゃないしょ？　うちはいつのが好きだったから誘っただけで、誘いに乗ったのも、その後離婚したのも、全部あつちの責任だし。流産とか、うち全く関係ないじゃん」

「……」
「だから謝る必要なしじゃね？　あんたらがうちのこと悪者にした

いだけじゃん。逆にこっちが謝って欲しいんだけど」

もう駄目だ。怒りが抑えられない。こいつは何もわかつちやいな。先生の悲しみも苦しみも、何一つ伝わっていない。こんなに頭が悪くて自己中心的な人間が好き勝手に行動して、水津野先生みたいな真面目な人が傷つくなんて、そんなことがあって良いんだろうか。僕は耐えられずに一步前へ踏み出した。しかし、その前足が寺尾の足にぶつかる。寺尾が僕の進路を阻んだのだ。館花に気付かないように右手で僕を制しているのがわかった。

「怖いんですよ？」

「はあ？ 何が？」

「先生の奥さんに面と向かって会うのが怖いんですよ？ だからそうやって逃げようとしてるんですよ？」

「何言ってるの？ んなわけないじゃん。馬鹿にしてんの？」

「じゃあ、奥さんの目の前で同じことを言えるの？ 自分から誘ったけど、それに乗ってきた相手に責任がある。だから自分は悪くないって自信を持って言えるの？」

「当たり前じゃん。うちは悪くないんだし、いつでも言えるけど」

「そう、じゃあ決まりね。明日同じ時間にここで待ち合わせしましょう？ 奥さんを連れてくるわ」

「は……はあ！？ 明日！？」

「いつでも言えるんですよ？ 早いほうがいいわ。それともまた逃げる？」

「逃げる逃げるってうるせえから！ 明日会えばいいんですよ！？」

二人のやり取りを聞いて、僕は開いた口が塞がらなかつた。挑発に乗りやすいのをいいことに、寺尾は半ば強引に館花と水津野先生を引き合わせる約束を取り付けてしまった。当然、水津野先生の明日の予定など知らないだろう。そんなことをして大丈夫だろうか。館花への怒りで支配されていた僕の心は瞬く間に不安で埋め尽くされた。

「それじゃあ、私達はこれで失礼するわ。明日、忘れないでね」

「ふん！ そつちこそ、ドタキャンしたらうちの彼氏が黙ってないからね」

憤慨する館花をコインパーキングに残して、僕と寺尾は駅前の広場まで戻った。その間中、寺尾はずつと携帯を打っていた。恐らく水津野先生に連絡を取っているんだろう。もしこれで先生の都合が付かなかつたらどううつるつもりだ。冷静に相手を手玉に取ったと思えば、暴走にも等しい大胆な行動もする。これが全て計算された行動なのであれば、こいつはとてつもない天才だろう。

「じゃあ、準備は私が整えておくから。また明日学校でね」

過ち？

僕と寺尾は放課後になると早々に学校を後にして駅前広場へとやって来た。寺尾は館花が言っていた「彼氏が黙っていない」という言葉をやはり単なる脅しだと考えているようだが、それなりに気にも留めているらしく、約束の場所であるコインパーキング付近を一通り見て周ることになった。

「ク口は護衛なんだから最悪の場合を想定して、周囲の状況とか逃走経路をしっかりと把握しておいてね」

だそうだ。周囲の状況を把握したところで迅速に動ける自信もなければ、逃走経路を頭の中にイメージしてもうまく逃げられるとは思えない。まず相手が何人で来るのか、どういったやつらが来るのか、そもそも本当に館花以外の人間が来るのか、何もわからないんだ。そんな条件下で僕の頭が出来ることなんてたかが知れている。こんな難しい注文をこなせるようには出来ていない。それでも、今回は水津野先生がいる。先生を危険に晒すようなことはあってはならない。出来なくなったらやるしかないんだ。

僕と寺尾はコンビニで駅一帯が詳しく書かれている地図を買い、二人で入念にチェックをして歩いてから、近くのファストフード店で真剣に打ち合わせをした。寺尾とこんなに言葉を交わしたのは初めてだ。いつもはほとんど喋らない僕がこんなに喋っているなんて自分でも不思議だった。熱心な打ち合わせは、結局約束の時間ぎりぎりまでかかった。周囲の状況も逃走経路も寺尾と相談して最善と思われるものを頭に入れた。後はこのデータを使わないで済むように願うだけだ。こちらの準備は整った。だが一番重要なことが未確認だ。

「そういえば、水津野先生はちゃんと来るの？」

「当たり前じゃない。ここまで準備しておいて来てくれなかったら話にならないでしょ？ ちゃんと時間ぴったりにコインパーキング

でつて連絡を入れて、返事を貰ってあるから大丈夫よ」

「用件は伝えてあるの？」

「ある程度はね」

「……ある程度？」

「そう。お話したいことがあるから指定の時間に高架下のコインパーキングに来て下さいって言ってあるわ」

「それだけ？」

「ええ、それだけ」

「……」

ある程度も何も、それじゃあ何も伝えてないのと一緒にないか。水津野先生を騙して館花に会わせるようなものだ。こんな少ない情報のみで約束をした先生も先生だが。大丈夫だろうか。

「そろそろ行きましょ。私達が到着する前に先生とあの子が会ってしまったら、今までの苦労が水の泡になるわ」

広げていた地図を鞆に押し込み、トレーを下げて店を出る。濁流のような人ごみに紛れて駅前通りの歩き、駅を通り抜けて昨日と同じ高架下のコインパーキングを目指した。

「何？ あんたらだけ？」

コインパーキングに入るとすぐに奥から声が聞こえてきた。見ると、例のベンチにセーラー服姿の館花が足を組んで座っていた。今日は昨日より停まっている車も少なく入り口からベンチまでの間に視界を遮るようなものが一つもないため、僕達が来たことをすぐに確認できたようだ。

「約束の時間にはまだ早いでしょ？」

寺尾はそう言いながらベンチへと近づいて行く。僕も周囲に気を配りながら後についてベンチまで近づいて行く。ぱっと見た限りでは館花以外の人間はいないようだ。身を潜めて隠れられるような場所も見当たらない。とりあえず一安心と言ったところか。

「ったく。こっちは早く終わらせたいんですけど」

「何イライラしてるの？ 子供じゃないんだから、少しぐらい待てるでしょ？」

冷静に反論する寺尾の言葉に館花は「ふん！」と大げさに鼻を鳴らして答えていた。僕達と館花の会話はそれが最後だった。とりあえず約束の時間まではもう数分もない。このまま館花と睨めっこをしてもしょうがないので、僕と寺尾はコインパーキングを囲っている金網のフェンスにもたれかかって先生を待つことにした。横目で館花のことを気にしながらパーキング入り口とその先を眺めて先生の到着をひたすら待った。

「ちよつと！ マジでいつになったら来んの！？」

あれから五分ほど経過したが、まだ先生は到着していない。約束の時間も過ぎてしまっている。流石に待ちくたびれたのか館花がドスの利いた声で怒り始めた。涼しい顔でそんな館花を無視している寺尾だったが、少し焦ってきたのかさつきから携帯を確認する回数が増えている。僕も段々不安になってきた。水津野先生に何かあったんだろうか？ 先生は昔からしつかりと時間を守る教師だった。授業が始まる五分前には必ず教室に入ってきて準備をするぐらいの性格なのだ。そんな先生が約束の時間に遅れるなんて、あまりにも考えにくい。

「うち帰るから！！」

痺れを切らした館花が学生鞆を肩にかけて立ち上がり、こちらを一睨みしてから駅に向けて歩き出した。それを見て慌てた寺尾が焦って声を掛ける。

「待ってよ！ そうやって逃げるの！？」

「はあ？ 約束破ってんのはそつちじゃん！ もう付き合ってられないから！」

早足で立ち去ろうとする館花を逃がさないために、今までに見たことのない瞬発力で駆け出した寺尾があつと言つ間に館花の進路を遮る。

「どげよ!!」

「どかない! 何よ、まだ五分しか経ってないじゃない! それぐらい待てないの!？」

「五分も経ってんじゃない! むしろここまで待ってやったんだから感謝して欲しくないんだけど!」

館花は寺尾の肩に手を掛けてどかさうとしたが、逆に寺尾がその手を掴んでベンチまで押し戻そうとする。二人は激しく言い合いながら取っ組み合いを始めてしまった。

これじゃあ単なる子供の喧嘩だ。どうしたらいいんだ。とりあえず、間に入って治めたほうがいいだろうか。先生はまだ来ないのか。動揺のあまり、何も出来ずに先生を探して周りを見回すだけだった僕の視界に人影が写り込んだ。穏やかな晴れの日にゆったりと流れる雲のような速さでこちらに近づいてくる。

「来た!」

思わず声を上げた。間違いない。あれは水津野先生だ。僕のを聞いた二人も反射的に僕と同じ方向を見る。少しの間があつたが、水津野先生がこちらに向かって来ているのを確認した寺尾が押さえつけていた館花の手を解く。館花も状況を理解したのかこの場を立ち去ることなく、じつと近づいてくる先生を眺めていた。

先生がコインパーキングに到着するまで、かなりの時間を要した。しかも僕達のことには気づいていなかったのか、寺尾が声をかけていなければそのまま通り過ぎてしまふそうだった。顔色は悪く、視線も定まっていない。久しぶりに会った時も調子が悪そうだったが、今日は特別体調が悪そうだった。意識が朦朧としているようでさえあつた。

寺尾はそんな先生の体を支えながら館花の目の前まで誘導した。加害者と被害者の初対面。まるで対照的な二人だ。毎日男と遊び歩いている女子高生。どん底に落ちた人生をやり直すため必死に働く元教師。二人を見ていると、改めてこの社会の不平等さに腹が立った。

少し緊張しているのか強張った表情の館花を正面に見据えて、寺尾が話を切り出した。

「この人が巖元先生の奥さんよ。さあ、言うこと言ったらどう？」
「……」

館花は唇を噛み締めて黙っている。複雑な表情をしていたが、見る限りでは大半が怒りの感情なのはよくわかった。眉を顰めて寺尾と水津野先生を睨み、敵意を剥き出しにしている。

「どうしたの！ いつでも言えるんでしょ！？ さっさと言いなさいよ！」

「うるせえ！ 大体、そいつがあいつの嫁だつて証拠あんの！？ どうせ別人なんでしょ！」

「この後に及んでまだそんなことを！ 見たらわかるでしょ！」

「わかんねえから。今まで会ったことないし。つてかそんなに必死になつてんのつて、やっぱりそいつ偽者つてことでしょ？ マジ有り得ねえ」

「いい加減にして！ いいわ。先生、こいつに教えてやってください。先生がどんなに悲しんで、苦しんで来たのか。今もどんな苦勞をしているのか！」

「……もう、いいのよ」

先生が弱弱しく呟いた。興奮した寺尾の大声で危うく聞き逃してしまうところだった。寺尾もその言葉に話が途切れる。

「……えっ？」

「もういいのよ、寺尾さん。もう大丈夫だから」

「何言ってるんですか先生！ 本当のことが聞けるチャンスなんですよ！？ 先生の旦那さんは悪くなかったんですよ！？」

「いいのよ。もう……彼はいないから」

先生の声は擦れていて、話をするたびにどんどん音量が小さくなっていった。まるで気力が感じられない、心も体も、言葉さえもからっぽになっているようだった。

「ほら、本人が言い言って言ってたから良いじゃん。離婚して相方

いないんだから、もう関係ないんでしょ？　うちの話聞いたって今更じゃん」

「……先生？」

先生は元々俯き加減だった顔をさらに下げて、ほとんど真下を向いていた。その状態のまま、消えてしまいそうな声でぼつりぼつりと話し始める。

「……ついさつき、彼のご両親から連絡があったの。彼が……遺体で発見されたって」

誰もが言葉を失った。先生が言っていた「彼はもういない」というのは、家族ではなくなつてそばにいないという意味ではなく、この世からいなくなったという意味だった。僕も寺尾も、恐らく館花さえもどうしていいかわからず、ただ頭上を通過する電車の音だけが空気を震わせて響いていた。

「……だから、もういいのよ」

先生はその場に泣き崩れた。大粒の涙を流して、声を上げて泣いていた。今まで我慢していたものが溢れ出て抑えることが出来ず、永遠に続く悲しみがやってきたようだった。

「う……うちは関係ないから！　用事あるし、帰るから！」

「ちよつ……ちよつと！」

館花は急に震えた声を上げ、走って行ってしまった。寺尾は止めようとしたが、泣き続ける先生を見て追いかけるのをやめた。僕と寺尾は泣いている先生を見守ることしか出来なかった。また電車が通過する。それでも、先生の鳴き声は掻き消されることはなかった。

その後、先生が落ち着くのを待って、寺尾と二人で先生をマンションまで送り届けてから解散した。移動中も先生は一言も話さず、僕達もどう話しかけて良いかわからなかった。先生はマンションに到着してエントランスに入る時「ありがとう、ごめんなさいね」と弱弱しく笑っていた。

長かった一日が終わり、今日も平凡な一日が始まる。一人の人間

が亡くなったというのに、道路には先を急ぐ車が列を成し、不機嫌そうな顔をした人々が行き交っている。変わらぬ日常。大嫌いな日常。でも、僕にはどうすることもできない。傷ついて悲しみにくれる女性一人慰めることが出来ない僕には、他の人と同じようにいつもの一日を過ごすことしかできない。そんな自分が嫌でしょうがない。こんな風に考えるのも、何回目だろう。

バスを降りて歩いていると聞きなれた声が後ろから聞こえてきた。僕の乗っていたバスのすぐ後ろを走っていた、もう一台のバスから降りてきた寺尾だった。

「おはよう。やっぱりクロも学校に直接行くバスには乗っていないのね」

寺尾は今日も高級感溢れるライトブラウンのコートを着て登校して来た。昨日の出来事が影響しているのか、あまり元気がない。

「昨日のニュース見た？」

「……ニュース？」

「ええ。今日の朝も少しやってたみたいだけど、水津野先生の旦那さんのこと、夜にはもうニュースになってたわ」

「……そうなんだ」

「遺書が近くにあつたらしいから、警察は自殺ってことで捜査しているみたい。結構詳しく紹介されてたわ。学校のこととか生徒との不倫のこととか」

「……」

思い出すだけで気分が落ち込む。もう館花のことなど、どうでも良くなっていた。後味の悪い結果だけが残り、僕と寺尾が取った行動も余計なことだったように思える。

「……私達、余計なことしたのかな？」

寺尾も同じ気持ちだったようだ。無理もない。自分の身勝手な気持ちだけで館花と水津野先生を引き合わせてしまったようなものだ。昔の寺尾なら責任など微塵も感じていなかったかもしれないが、田本の件で騒ぎを起こし、色々な人を巻き込んだ過去のある今なら、

自分が取った行動で先生に迷惑を掛けてしまったんだと責任を感じているだろう。

「……どうなんだろう。よく、わかんないよ」

「そうよね。私もよくわからないわ」

寺尾は俯いていた。そんな寺尾を見ても、僕には掛ける言葉が浮かばなかった。水津野先生の時も、寺尾の時も、僕はただ近くにいるだけ。気の利いた一言も言えない。本当に情けない。

「でもね、私、館花に先生を会わせたことは後悔してないの」

「……どうして？」

「私の推測でしかないけど、館花も先生と会ったことで自分がどんなことをしたのか少しは理解できたと思うの。昨日、焦って逃げたのはその所為だと思う」

確かに、出会ったときから怒ってばかりいた館花が焦っていたのはあれが初めてだ。どんなに寺尾が先生のことを話してもまるで信用せず、こちらを馬鹿にするようでさえあった。その館花が先生の泣き崩れる姿を見て、自分が誘惑した人物が死んだと聞いて、初めて怯えたのだ。どこまで理解しているかはわからないが、寺尾の言うように少しは自分の責任というものを感じてくれているはずだ。「これも私の自己満足なのかもしれないけどね。ただ、タイミングを見計らって水津野先生には全てを話してみるつもり。事前に先生の同意をもらった上でね」

「……じゃあ、コインパーキングの約束は同意をもらってなかったの？」

「正直に言うとそうなるわね。どういう用件なのか全て話してしまうと、先生に咎められる気がしたから。もちろん、そのことも反省してるわ」

反省していることをどことなく自慢げに言う寺尾が信用できなかったが、強がっているんだろうと思うことにして、深く突っ込むのはやめておいた。僕より頭の良い寺尾なら、言われなかったってわかっているはずだ。むしろ、僕が突っ込んだら怒るかもしれない。それ

はそれで面倒臭い。

そんな話をしている間に、学校が近づいてきた。道には僕達以外の生徒も増えてきて、挨拶を交わしたり、楽しそうに話をしたり、次から次へと校門へ入って行く。

「はあ。本当に嫌な気分だわ」

寺尾の歩く速度が落ちる。僕もそれに合わせて立ち止まり、寺尾が僕の横に来るのを待ってから同じ歩幅で歩く。同じ歩幅ではあるが、寺尾が半歩分前に行くような距離感を保つように調整した。しばらく一緒に行動して見出した、ベストな距離感だ。僕は寺尾と一緒に歩く場合、自然とこの距離感を維持するようになっていた。これに気付いた時、ペットを引き連れているお嬢様という構図が浮かんで嫌だったが、学校では誰も僕らのことを気にしていないし、街に出てもそこまで考える人はいないだろうから、それで一々気分を悪くするのも面倒だという考えに至った。こう言う考えが出てくる時点で、だいぶ寺尾に洗脳されてしまっているのかもしれないが、今更な気もする。

そうこうしている間に校舎から予鈴が響く。ホームルーム十分前を知らせる予鈴だ。歩いていた他の生徒達も一斉に走り出す。

「しょうがない、行きましよう。遅刻して教師に説教される方がもっと気分が悪いわ」

寺尾の長く伸びた黒髪を後ろから眺めながら、二人で学校に向けて駆け出した。

放課後、バス停で寺尾と分かれた後、僕はJR幡ノ橋駅前に向かった。駅前にはいつものように多くの人が溢れていて、絶叫像の周りにも多くの人々がたむろしている。僕は円形の形を模した地下鉄入口にあるベンチに座り、館花の姿を探した。水色のラインが入ったセーラー服は目に留まるものの、館花らしき人物は見当たらない。やはり昨日の出来事で少しは反省してくれたんだろうか。

しばらく辺りを眺め、諦めてベンチを離れて駅に向かおうと立ち

上がった時に、大柄な男性とぶつかりそうになった。ぎりぎりのところで男性を避けてその後姿を見ると、真っ黒なスーツを着た男性に腕を絡めてしがみつくように寄り添い歩く女性の姿があった。猫なで声で喋りかける女性と、素っ気ない返事で返すスーツの男性。その女性が男性を見上げながら話しかけた瞬間、女性の横顔が目に飛び込んできた。

私服姿の館花だった。

僕は二人の後を目で追い続けた。館花とその男性はそのまま駅前広場の信号まで進むと、近くに停まっていた黒塗りの車に乗り込んだ。相手はお金持ちなのか、遠目からでもわかる高級車だ。男は後部座席の扉を開け館花をエスコートすると、自身は助手席に乗り込んだ。

そして、その車は混雑する駅前通の車列に紛れて、街中へと消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8684o/>

欲望者

2011年7月16日03時35分発行